

西原大塚遺跡 第239地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2024

埼玉県志木市教育委員会

西原大塚遺跡 第 239 地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 2 4

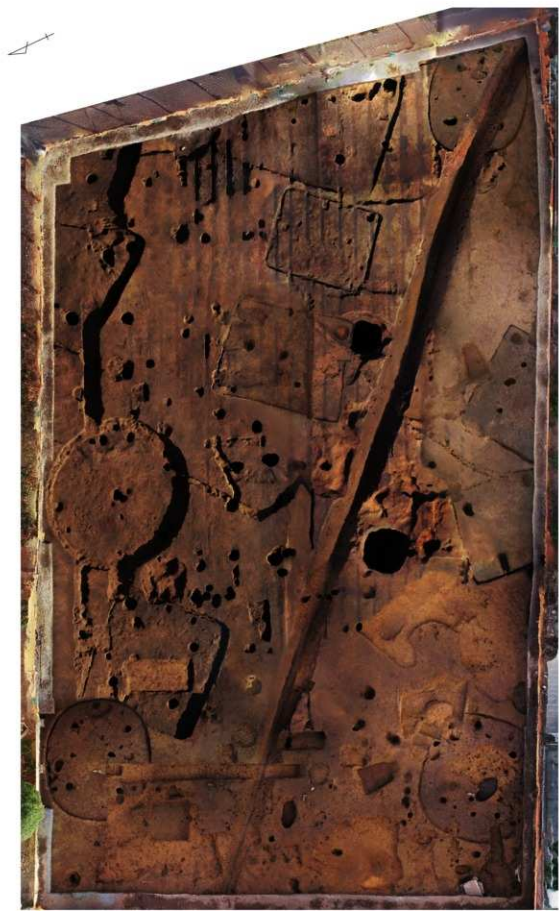
埼玉県志木市教育委員会



1. 調査地点遠景[柳瀬川・新河岸川・荒川を望む] (南西から)



2. 調査地点遠景[西原大塚遺跡を望む] (北から)



調査区全景(合成空中写真)



1. 659号住居跡出土遺物



2. 660号住居跡出土遺物



3. 666号住居跡出土遺物



58号溝跡出土遺物

はじめに

志木市教育委員会
教育長 柚木 博

ここに刊行する『西原大塚遺跡第239地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』は、教育委員会が令和4・5年度に受託事業として実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

西原大塚遺跡については、これまでの調査成果から、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世・近世までの幅広い時期にわたる複合遺跡であることが判明しています。

今回報告する西原大塚遺跡第239地点では、旧石器時代～近代にかけての遺構・遺物が発見されました。特に、弥生時代後期～古墳時代前期では、13軒の住居跡が見つかるとともに、環濠と思われる溝跡が検出され、当時の集落像を検討する上での貴重な成果となりました。

このように、今回の調査においても本市の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な資料を得ることができました。この成果が郷土史研究をはじめ、多くの人々に幅広く活用されることを切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別の御理解と御協力を頂いた事業主体者、そして深い御理解と御協力を賜りました地元の方々並びに関係者の皆様に対し、心から感謝申し上げます。

例 言

1. 本書は、令和4・5年度に発掘作業を実施した、埼玉県志木市に所在する西原大塚遺跡第239地点の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、分譲住宅建設及び道路新設工事に伴う記録保存のための発掘調査として、文化財保護法第99条に基づき、志木市教育委員会が調査主体者として実施したものである。
3. 本調査の実施にあたり、土木工事主体者（株式会社マイタウン 代表取締役 内田隆成）・志木市教育委員会・大成エンジニアリング株式会社（代表取締役 岩崎信治）の三者による協定を締結した上で、大成エンジニアリング株式会社が発掘調査支援業務を行った。
4. 発掘作業は、令和5年1月4日から令和5年4月28日まで行い、整理作業・報告書刊行作業を令和6年4月30日まで行った。
5. 本書は、大久保聡・尾形則敏・木村結香が監修し、編集は青池紀子の指示の下、尾崎愛斗が行った。執筆は下記のとおりである。なお、第4章第1節では鈴木伸哉氏（東京都埋蔵文化財センター）に玉璣を譲り、第2節では黒沼保子氏（株式会社パレオ・ラボ）に委託した。
尾形 則敏 第1章/木村 結香 第2章第1節/尾崎 愛斗 第2章第2・3節、第3章/
鈴木 伸哉（東京都埋蔵文化センター） 第4章第1節/
黒沼 保子・伊藤 茂・加藤和浩・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadize
（株式会社パレオ・ラボ AMS年代測定グループ） 第4章第2節/青池 紀子 第5章
6. 本書に掲載した獣骨は植月 学氏（帝京大学文化財研究所）に、石製勾玉は齋藤あや氏（大田区立郷土博物館）に同定及び所見をご教示いただいた。
7. 本書に掲載した石器は、文化財整理こうけん（代表 山崎芳春）に実測・トレース・観察を委託し、観察は山崎芳春氏が行った。土器の一部は、有限会社アルケリサーチ（取締役 藤波啓容）と特定非営利活動法人井草文化財研究所（理事長 宮下数史）に実測・トレースを、久世考古（代表 横田深雪）に実測を委託した。
8. 遺物の補強・復元にあたっては、パイサム（有限会社新成田総合社）を用い、脆弱な遺物についてはエポキシ接着剤のクイックミックス（ロックタイト製品）を使用し接合・補強を行った。
9. 発掘作業における表土剥ぎ作業については、合同会社久松（代表社員 久松洋次郎）に、小型無人航空機（ドローン）による航空写真撮影は、有限会社天田安平商店（代表取締役 戸部孝一）に委託した。
10. 本報告に係る出土品及び記録図面・写真等は、志木市立埋蔵文化財保管センターで一括して保管している。
11. 調査組織は以下のとおりである。

【志木市教育委員会組織】（令和4・5年度）

調査主体者	志木市教育委員会
教育長	柚木 博
教育政策部長	今野美香
生涯学習課長	土崎健太

生涯学習課副課長	吉成和重
生涯学習課主幹	浅見千穂（～令和4年度）
生涯学習課主査	徳留彰紀
〃	大久保 聡
生涯学習課主任	尾形則敏
〃	石川千尋
〃	塚原会理（令和5年4～6月）
生涯学習課主事	塚原会理（～令和4年度）
〃	木村結香（令和5年度～）
生涯学習課主事補	木村結香（～令和4年度）
〃	吉田優奈（令和5年8月～）
志木市文化財保護審議会	井上國夫（会長）
〃	深瀬 克（委員）
〃	上野守嘉（委員）
〃	新田泰男（委員）
〃	金子博一（委員）（～令和4年度）
〃	大木雄平（委員）（令和5年度～）
調査担当者	徳留彰紀・大久保 聡・尾形則敏・木村結香

【株式会社大成エンジニアリング】

○発掘調査

調査員	青池紀子
現場代理人	榎原良宏
調査補助員	尾崎愛斗・神作碩美・山中菊乃
作業員	新木邦義・石井加代・石田智幸・遠藤啓輔・小野寺 信・川口沙織 神田康一・佐久間正崇・舎川史矩・鈴木勝弘・瀬戸宏征・高橋慶多 田原 浩・為石 篤・土川和真・手塚哲也・並木智子・二宮俊洋 晝間喜博・松田美幸・宮澤洋美・吉岡秀雄・和田聖子

○整理作業

調査員	青池紀子
調査補助員	尾崎愛斗・神作碩美・宇田武史・山崎裕子
作業員	大平宏典・岡崎千津子・可知直子・栗山結花・小真頼直己・三枝あや 澤田和賀子・志塚翔磨・末松 宏・菅沼晶子・竹内千晴・竹鼻保美 西川英里・平野聡志・藤瀬和枝・堀田 勉・吉岡明子・渡邊幹子

12. 発掘作業及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（順不同・敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課・（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館

秋山大海・尾崎沙羅・鬼塚知典・小林陽子・齊藤 純・清水理史・鈴木一郎
高橋美希・照林敏郎・中國貴裕・ナフビ矢麻・藤野一之・安田脩一・山田尚友
山本良太・若狭 徹

13. 本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については、下記のとおりである。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）

令和4年12月19日付け 教文資第4-1677号

○埋蔵物の文化財認定について（通知）

令和5年8月15日付け 教文資第7-66号

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製

第2図 1：5,000 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成27年4月発行
株式会社ゼンリン

2. 本書の国家座標、緯度、経度は、世界測地系に則している。

3. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

4. 遺物写真図版の縮尺は挿図版の縮尺に準じた。写真のみ掲載の縮尺は下記のとおりである。

1/2：炭化種子・穿孔貝果穴痕跡軟質泥岩

1/3：土器・陶磁器（破片）・鉄製品

1/4：土器（個体）・石製品・ガラス製品

なお、挿図版の遺物番号は写真図版の遺物番号と同じである。

5. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。

6. ビット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるビットでも、おそらく後世のビットと思われるものには、数値を省略した。

7. 遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個別にドットマークを換えて表示した。ドットを結ぶ実線は遺物の接合及び同一個体を示す。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

8. 挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内に内容を示した。

9. 遺物拓影図は断面図左側に外面を右側に内面を、口唇部は上に底面は下に示した。

10. 土器一覧表「法量」項中にある表記については、以下のとおりである。また、現存値は〔 〕、推定値は（ ）を付した。

高：器高 口：口径 底：底径 脚：脚部径 台：台部径 厚：器厚

11. 遺構などの略記号は、以下のとおりである。

T P = 旧石器時代の試掘坑 J = 縄文時代の住居跡 F P = 縄文時代の炉穴

Y = 弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡 方 = 方形周溝墓 T = 掘立柱建築遺構

D = 土坑 M = 溝跡 P = ビット

目 次

巻頭図版／はじめに

例 言／凡 例／目 次／挿図目次／表 目 次／図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
第2節 遺跡の概要	8
第2章 発掘調査の概要	10
第1節 調査に至る経緯	10
第2節 発掘調査の経過	12
第3節 基本層序と地形	15
第3章 検出された遺構と遺物	18
第1節 旧石器時代の遺物	18
第2節 縄文時代の遺構・遺物	19
第3節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物	32
第4節 中世以降の遺構・遺物	102
第5節 遺構外出土遺物	116
第4章 自然科学分析	123
第1節 西原大塚遺跡第239地点から出土した炭化材の樹種と年輪構造	123
第2節 西原大塚遺跡第239地点の放射性炭素年代測定	125
第5章 調査のまとめ	128
第1節 縄文時代	128
第2節 弥生時代後期～古墳時代前期	131
第3節 近代以降	157

図 版

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図 地域の地形と道跡分布 (1/20,000) ———— 2	第 38 図 660 A 号住居跡 2 (1/60・1/30) ———— 49
第 2 図 西原大塚遺跡の調査地点 (1/5,000) ———— 9	第 39 図 660 B 号住居跡 1 (1/60) ———— 50
第 3 図 確認調査時の遺構分布 (1/200) ———— 11	第 40 図 660 B 号住居跡 2 (1/30) ———— 51
第 4 図 調査区配置図 (1/600) ———— 12	第 41 図 660 A・B 号住居跡掘り方 (1/60) ———— 51
第 5 図 試掘坑配置図 (1/300) ———— 15	第 42 図 660 A・B 号住居跡遺物出土状態 1 (1/60) ———— 52
第 6 図 基本層序 (1/60) ———— 16	第 43 図 660 号住居跡出土遺物 1 (1/4) ———— 52
第 7 図 遺構分布図 (1/200) ———— 17	第 44 図 660 A・B 号住居跡遺物出土状態 2 (1/60) ———— 53
第 8 図 5 号旧石器試掘坑遺物出土状態 (1/60) ———— 18	第 45 図 660 号住居跡出土遺物 2 (1/4) ———— 53
第 9 図 5 号試掘坑出土遺物 (4/5) ———— 19	第 46 図 661 号住居跡 1 (1/60) ———— 55
第 10 図 縄文時代遺構分布図 (1/200) ———— 20	第 47 図 661 号住居跡 2・掘り方 (1/60・1/30) ———— 56
第 11 図 23 号炉穴 1 (1/60) ———— 21	第 48 図 661 号住居跡遺物出土状態 (1/60) ———— 57
第 12 図 23 号炉穴 2 (1/30) ———— 22	第 49 図 661 号住居跡出土遺物 (1/4・1/3・1/2) ———— 57
第 13 図 23 号炉穴出土遺物 (1/3) ———— 22	第 50 図 662 号住居跡 1 (1/60) ———— 59
第 14 図 982・983・989・991・994・996・ 997 号土坑 (1/60) ———— 25	第 51 図 662 号住居跡 2・掘り方 (1/60・1/30) ———— 60
第 15 図 994 号土坑出土遺物 (1/3) ———— 26	第 52 図 662 号住居跡 3・遺物出土状態 1 (1/60・1/30) ———— 61
第 16 図 999・1000 号土坑 (1/60) ———— 27	第 53 図 662 号住居跡遺物出土状態 2 (1/60) ———— 62
第 17 図 999 号土坑出土遺物 (1/3) ———— 28	第 54 図 662 号住居跡出土遺物 (1/4) ———— 62
第 18 図 1000 号土坑出土遺物 (1/4・1/3・1/2) ———— 28	第 55 図 663 号住居跡 1 (1/60・1/30) ———— 64
第 19 図 縄文時代のピット (1/60) ———— 30	第 56 図 663 号住居跡 2 (1/60) ———— 65
第 20 図 倒木痕遺物出土状態 (1/600・1/30) ———— 31	第 57 図 663 号住居跡掘り方 (1/60) ———— 65
第 21 図 倒木痕出土遺物 (1/4) ———— 31	第 58 図 663 号住居跡出土遺物 (1/4) ———— 65
第 22 図 弥生時代後期～古墳時代前期遺構分布図 (1/200) ———— 33	第 59 図 664 号住居跡 1 (1/60) ———— 66
第 23 図 656 号住居跡 1 (1/60) ———— 34	第 60 図 664 号住居跡 2 (1/60・1/30) ———— 67
第 24 図 656 号住居跡 2 (1/30) ———— 35	第 61 図 664 号住居跡掘り方 (1/60) ———— 68
第 25 図 656 号住居跡掘り方 (1/60) ———— 35	第 62 図 664 号住居跡遺物出土状態 1 (1/60) ———— 68
第 26 図 656 号住居跡遺物出土状態 (1/60) ———— 36	第 63 図 664 号住居跡遺物出土状態 2 (1/60) ———— 69
第 27 図 656 号住居跡出土遺物 (1/4・1/3) ———— 37	第 64 図 664 号住居跡出土遺物 (1/4・1/3) ———— 69
第 28 図 657 号住居跡 (1/60・1/30) ———— 39	第 65 図 665 号住居跡 1 (1/60) ———— 71
第 29 図 658 号住居跡 (1/60) ———— 40	第 66 図 665 号住居跡 2・掘り方 (1/60・1/30) ———— 72
第 30 図 658 号住居跡遺物出土状態 (1/60) ———— 41	第 67 図 665 号住居跡出土遺物 (1/4・2/3) ———— 72
第 31 図 658 号住居跡出土遺物 (1/4) ———— 41	第 68 図 666 号住居跡 1 (1/60) ———— 74
第 32 図 659 号住居跡 1 (1/60) ———— 42	第 69 図 666 号住居跡 2 (1/30) ———— 75
第 33 図 659 号住居跡 2 (1/60・1/30) ———— 43	第 70 図 666 号住居跡掘り方 (1/60) ———— 75
第 34 図 659 号住居跡掘り方 (1/60) ———— 43	第 71 図 666 号住居跡遺物出土状態 (1/60) ———— 76
第 35 図 659 号住居跡遺物出土状態 (1/60) ———— 44	第 72 図 666 号住居跡出土遺物 (1/4・1/3) ———— 77
第 36 図 659 号住居跡出土遺物 (1/4・1/2) ———— 45	第 73 図 667 号住居跡 1 (1/60) ———— 79
第 37 図 660 A 号住居跡 1 (1/60) ———— 48	第 74 図 667 号住居跡 2・掘り方 (1/60・1/30) ———— 80

第75図	667号住居跡出土遺物(1/4)	80	第110図	後期の遺構分布図(1/2,500)	130
第76図	668号住居跡1(1/60)	81	第111図	999・1000号土坑土層断面(1/60)	131
第77図	668号住居跡2・掘り方(1/60・1/30)	82	第112図	本地点における同一個体を含む遺構間接合関係図(1/300)	134
第78図	668号住居跡遺物出土状態(1/60)	83	第113図	本遺跡の地形と弥生時代後期後半の環濠分布図(1/10,000・1/2,500)	136
第79図	668号住居跡出土遺物(1/4・1/3)	83	第114図	焼失住居分布図(1/3,000)	143
第80図	6号掘立柱建築遺構(1/60)	85	第115図	住居跡出土遺物1(1/10)	144
第81図	58号溝跡・遺物出土状態(1/80)	87	第116図	住居跡出土遺物2(1/10)	145
第82図	58号溝跡遺物出土状態 分割図1(1/40)	89	第117図	住居跡出土遺物3(1/10)	146
第83図	58号溝跡遺物出土状態 分割図2(1/40)	90	第118図	住居跡出土遺物4(1/10・1/5)	147
第84図	58号溝跡遺物出土状態 分割図3(1/40)	91	第119図	住居跡出土遺物5(1/10)	148
第85図	58号溝跡遺物出土状態 分割図4(1/40)	92	第120図	住居跡出土遺物6(1/10)	149
第86図	58号溝跡遺物出土状態 分割図5(1/40)	93	第121図	住居跡出土遺物7(1/10)	150
第87図	58号溝跡遺物出土状態 分割図6(1/40)	94	第122図	住居跡出土遺物8(1/10)	151
第88図	58号溝跡出土遺物1(1/4)	95	第123図	住居跡出土遺物9(1/10)	152
第89図	58号溝跡出土遺物2(1/4・1/3)	96	第124図	住居跡出土遺物10(1/10・1/5)	153
第90図	58号溝跡出土遺物3(1/4・1/3)	97	第125図	住居跡出土遺物11(1/10・1/5)	154
第91図	58号溝跡出土遺物4(1/4・1/3・1/2)	98	第126図	方形周溝墓出土遺物(1/10・1/5)	155
第92図	弥生時代後期～古墳時代前期のピット(1/60)	101	第127図	溝跡(環濠)出土遺物(1/10・1/5)	156
第93図	中世以降の遺構分布図(1/200)	103	第128図	『明治前期・昭和前期 東京都市地図2(東京北部)』1881(明治14)年	157
第94図	土坑 A群(984号土坑)(1/60)	104	第129図	『明治前期・昭和前期 東京都市地図2(東京北部)』1932(昭和7)年	157
第95図	土坑 B群1類(980・986・987号土坑)(1/60)	106	第130図	『明治前期・昭和前期 東京都市地図2(東京北部)』1966(昭和41)年	157
第96図	土坑 B群2類(978・979・985号土坑)(1/60)	108	第131図	最も簡単な防空壕・988号土坑	158
第97図	土坑 C群(993・995号土坑)(1/60)	109	第132図	長溝式貯蔵	159
第98図	土坑 D群(981・990・992号土坑)(1/60)	110			
第99図	土坑 E群1類(988号土坑)・E群3類(998号土坑)(1/60)	111			
第100図	57号溝跡(1/60)	113			
第101図	中世以降のピット1(1/60)	114			
第102図	中世以降のピット2(1/60)	115			
第103図	遺構外出土縄文時代遺物1(1/3)	116			
第104図	遺構外出土縄文時代遺物2(1/3)	117			
第105図	遺構外出土縄文時代遺物3(1/4・1/3)	118			
第106図	遺構外出土縄文時代遺物4(1/4・1/3・2/3)	119			
第107図	遺構外出土弥生時代後期～古墳時代前期遺物(1/4)	121			
第108図	ウィグルマッピング結果	126			
第109図	早期の遺構分布図(1/2,500・1/1,000)	129			

目 次

第 1 表 志本市埋蔵文化財包蔵地一覧……………1	第 27 表 987 号土坑出土遺物一覧……………107
第 2 表 西原大塚遺跡第 239 地点の発掘調査工程表……………14	第 28 表 985 号土坑出土遺物一覧……………108
第 3 表 5 号試掘坑出土石器一覧……………19	第 29 表 中世以降のピット一覧……………115
第 4 表 23 号炉穴出土遺物一覧……………22	第 30 表 遺構外出土縄文時代遺物一覧(1)……………119
第 5 表 994 号土坑出土遺物一覧……………26	遺構外出土縄文時代遺物一覧(2)……………120
第 6 表 999 号土坑出土遺物一覧……………28	遺構外出土縄文時代遺物一覧(3)……………121
第 7 表 1000 号土坑出土遺物一覧(1)……………28	第 31 表 遺構外出土弥生時代後期～古墳時代前期
1000 号土坑出土遺物一覧(2)……………29	遺物一覧……………121
第 8 表 縄文時代のピット一覧……………30	第 32 表 遺構外出土中世以降遺物一覧……………122
第 9 表 倒木痕出土遺物一覧……………31	第 33 表 樹種同定結果……………124
第 10 表 656 号住居跡出土遺物一覧……………38	第 34 表 年輪計測結果……………124
第 11 表 658 号住居跡出土遺物一覧……………41	第 35 表 ウィグルマッチング測定試料及び処理……………125
第 12 表 659 号住居跡出土遺物一覧……………46	第 36 表 放射性炭素年代測定、暦年較正、
第 13 表 660 号住居跡出土遺物一覧……………54	ウィグルマッチングの結果……………126
第 14 表 661 号住居跡出土遺物一覧……………58	第 37 表 早期の遺構一覧……………129
第 15 表 662 号住居跡出土遺物一覧……………63	第 38 表 後期の遺構一覧……………130
第 16 表 663 号住居跡出土遺物一覧……………65	第 39 表 弥生時代後期後半～古墳時代前期 編年(案)……………132
第 17 表 664 号住居跡出土遺物一覧……………70	第 40 表 本地点における各遺構の時期変遷……………136
第 18 表 665 号住居跡出土遺物一覧……………72	第 41 表 弥生時代後期後半～古墳時代前期
第 19 表 666 号住居跡出土遺物一覧……………78	遺構一覧表(1)……………138
第 20 表 667 号住居跡出土遺物一覧……………80	弥生時代後期後半～古墳時代前期
第 21 表 668 号住居跡出土遺物一覧……………84	遺構一覧表(2)……………139
第 22 表 58 号溝跡出土遺物一覧(1)……………99	弥生時代後期後半～古墳時代前期
58 号溝跡出土遺物一覧(2)……………100	遺構一覧表(3)……………140
58 号溝跡出土遺物一覧(3)……………101	弥生時代後期後半～古墳時代前期
第 23 表 弥生時代後期～古墳時代前期のピット一覧……………101	遺構一覧表(4)……………141
第 24 表 984 号土坑出土遺物一覧……………104	弥生時代後期後半～古墳時代前期
第 25 表 980 号土坑出土遺物一覧……………105	遺構一覧表(5)……………142
第 26 表 986 号土坑出土遺物一覧……………105	

図 版 目 次

巻頭図版 1	1. 調査地点遠景[柳瀬川・新河岸川・荒川を望む](南西から)
	2. 調査地点遠景[西原大塚遺跡を望む](北から)
巻頭図版 2	調査区全景(合成空中写真)
巻頭図版 3	1. 659号住居跡出土遺物 2. 660号住居跡出土遺物 3. 666号住居跡出土遺物
巻頭図版 4	58号溝跡出土遺物

- 図版1 1. 2区全景(東から) 2. 1区全景(東から) 3. 3区全景(西から)
- 図版2 1. 4号試掘坑断面[北壁](南から) 2. 3号試掘坑断面[北壁](南から)
3. 2号試掘坑断面[南壁](北から) 4. 1号試掘坑断面[南壁](北から) 5. 5号試掘坑断面[北壁](南から)
6. 8号試掘坑断面[南壁](北から) 7. 6号試掘坑断面[南壁](北から) 8. 7号試掘坑断面[北壁](南から)
- 図版3 1. 5号試掘坑遺物出土状態(南から) 2. 23号炉穴(南から) 3. 23号炉穴A炉穴・B炉穴断面1(東から)
4. 23号炉穴A炉穴・B炉穴断面2(南から)
- 図版4 1. 23号炉穴A炉穴断面(南から) 2. 23号炉穴A炉穴(南から) 3. 23号炉穴B炉穴断面(南から)
4. 23号炉穴B炉穴(東から) 5. 23号炉穴C炉穴断面(南から) 6. 23号炉穴C炉穴(南から)
7. 982号土坑(西から) 8. 983号土坑(東から)
- 図版5 1. 989号土坑(東から) 2. 991号土坑(南から) 3. 994号土坑(東から) 4. 996号土坑(東から)
5. 997号土坑断面(北から) 6. 997号土坑(西から) 7. 倒木痕遺物出土状態(北から)
8. 倒木痕遺物出土状態(南から)
- 図版6 1. 999号土坑1(南から) 2. 999号土坑断面(南から) 3. 999号土坑2(南西から)
4. 999号土坑P1断面(南から) 5. 999号土坑P1(南から)
- 図版7 1. 1000号土坑1(南から) 2. 1000号土坑断面(南から) 3. 1000号土坑2(西から)
4. 1000号土坑小土坑断面(南から) 5. 1000号土坑小土坑(南から)
- 図版8 1. 656号住居跡遺物出土状態[1区](南から) 2. 656号住居跡遺物出土状態[3区](南から)
3. 656号住居跡[1区](西から) 4. 656号住居跡[3区](北から) 5. 656号住居跡炉A[3区](西から)
6. 656号住居跡炉B[1区](北から) 7. 656号住居跡貯蔵穴遺物出土状態[3区](西から)
8. 657号住居跡(南から)
- 図版9 1. 658号住居跡遺物出土状態(南西から) 2. 658号住居跡(西から) 3. 659号住居跡遺物出土状態(東から)
4. 659号住居跡遺物出土状態近景1(西から) 5. 659号住居跡遺物出土状態近景2(西から)
6. 659号住居跡遺物出土状態近景3(西から)
7. 上/659号住居跡粘土断面(南から) 下/659号住居跡粘土・ロームブロック断面(西から)
8. 659号住居跡(東から)
- 図版10 1. 660号住居跡遺物出土状態(北西から) 2. 660号住居跡遺物出土状態近景1
3. 660号住居跡遺物出土状態近景2 4. 660号住居跡遺物出土状態近景3 5. 660号住居跡遺物出土状態近景4
- 図版11 1. 660号住居跡断面(南から) 2. 660A号住居跡(南東から) 3. 660A号住居跡炉(南から)
4. 660B号住居跡(北西から) 5. 660B号住居跡炉(東から) 6. 660B号住居跡貯蔵穴(南東から)
7. 660A号住居跡P4・660B号住居跡P3(南東から) 8. 660B号住居跡掘り方(南東から)
- 図版12 1. 661号住居跡遺物出土状態(南東から) 2. 661号住居跡(北から) 3. 661号住居跡貯蔵穴断面(東から)
4. 661号住居跡貯蔵穴(東から) 5. 662号住居跡遺物出土状態(北東から)
6. 662号住居跡遺物出土状態近景(北から) 7. 662号住居跡(東から) 8. 662号住居跡炉(南から)
- 図版13 1. 662号住居跡貯蔵穴(東から) 2. 662号住居跡赤色砂利層断面(西から)
3. 662号住居跡焼土範囲断面(南から) 4. 662号住居跡掘り方(北東から) 5. 663号住居跡[3区](東から)
6. 663号住居跡[1区](東から) 7. 663号住居跡貯蔵穴断面[3区](東から)
8. 663号住居跡貯蔵穴遺物出土状態[3区](東から)
- 図版14 1. 664号住居跡遺物出土状態1(北から) 2. 664号住居跡遺物出土状態2(北東から)
3. 664号住居跡(東から) 4. 664号住居跡炉断面(北から) 5. 664号住居跡貯蔵穴(南から)
- 図版15 1. 665号住居跡(南から) 2. 665号住居跡貯蔵穴遺物出土状態(北から)
3. 666号住居跡遺物出土状態1(北から) 4. 666号住居跡遺物出土状態2(東から) 5. 666号住居跡(北から)
- 図版16 1. 666号住居跡炉(北から) 2. 666号住居跡貯蔵穴断面(南から) 3. 666号住居跡貯蔵穴遺物出土状態(南から)
4. 666号住居跡掘り方(北から) 5. 667号住居跡(西から) 6. 667号住居跡貯蔵穴断面(北から)
7. 667号住居跡貯蔵穴(北から) 8. 667号住居跡掘り方(北から)

- 図版17 1. 668号住居跡遺物出土状態(東から) 2. 668号住居跡(東から) 3. 668号住居跡炉(北から)
4. 668号住居跡掘り方(東から) 5. 6号掘立柱建築遺構(上から) 6. 6号掘立柱建築遺構 P 1断面1(南から)
7. 6号掘立柱建築遺構 P 1断面2(南から) 8. 6号掘立柱建築遺構 P 2断面(南から)
9. 6号掘立柱建築遺構 P 3柱座検出状態(北から) 10. 6号掘立柱建築遺構 P 3柱座断面(北から)
- 図版18 58号溝跡遺物出土状態1[3区上層]
- 図版19 58号溝跡遺物出土状態2[3区上層]
- 図版20 58号溝跡遺物出土状態3[3区]
- 図版21 58号溝跡遺物出土状態4[3区]
- 図版22 58号溝跡遺物出土状態5[2・3区]
- 図版23 1. 58号溝跡断面A[2区](東から) 2. 58号溝跡断面C[2区](東から) 3. 58号溝跡断面E[2区](西から)
4. 58号溝跡断面G[3区坵土範圍](西から) 5. 58号溝跡断面H[3区](西から)
6. 58号溝跡断面J[3区](北から) 7. 58号溝跡 P 1断面[2区](東から) 8. 58号溝跡 P 1[2区](東から)
- 図版24 1. 58号溝跡[2・3区](東から) 2. 58号溝跡[3区](西から)
- 図版25 1. 980号土坑(西から) 2. 986号土坑(北から) 3. 978号土坑・979号土坑(北から) 4. 987号土坑(東から)
5. 985号土坑(南から) 6. 992号土坑(東から)
- 図版26 1. 984号土坑(東から) 2. 993号土坑(東から) 3. 995号土坑(東から) 4. 981号土坑(北東から)
5. 990号土坑獣骨出土状態(東から) 6. 988号土坑断面(東から) 7. 988号土坑(北から)
8. 988号土坑付属施設(北から)
- 図版27 1. 988号土坑遺景(東から) 2. 998号土坑(北から) 3. 998号土坑南東壁凹み部分(北から)
4. 57号溝跡(東から)
- 図版28 1. 5号試掘坑出土遺物 2. 23号竪穴出土遺物 3. 994号土坑出土遺物 4. 999号土坑出土遺物
5. 1000号土坑出土遺物 6. 倒木痕出土遺物
- 図版29 1. 656号住居跡出土遺物 2. 658号住居跡出土遺物
- 図版30 659号住居跡出土遺物1
- 図版31 1. 659号住居跡出土遺物2 2. 660号住居跡出土遺物1
- 図版32 1. 660号住居跡出土遺物2 2. 661号住居跡出土遺物 3. 662号住居跡出土遺物
- 図版33 1. 663号住居跡出土遺物 2. 664号住居跡出土遺物 3. 665号住居跡出土遺物
- 図版34 666号住居跡出土遺物
- 図版35 1. 667号住居跡出土遺物 2. 668号住居跡出土遺物 3. 58号溝跡出土遺物1
- 図版36 58号溝跡出土遺物2
- 図版37 58号溝跡出土遺物3
- 図版38 58号溝跡出土遺物4
- 図版39 1. 58号溝跡出土遺物5 2. 中世以降の土坑出土遺物
- 図版40 遺構外出土縄文時代遺物1
- 図版41 遺構外出土縄文時代遺物2
- 図版42 1. 遺構外出土縄文時代遺物3 2. 遺構外出土弥生時代～古墳時代前期遺物
3. 遺構外出土中世以降遺物
- 図版43 西原大塚遺跡から出土した炭化材の走査型電子顕微鏡画像(1)
- 図版44 西原大塚遺跡から出土した炭化材の走査型電子顕微鏡画像(2)・CT画像
- 図版45 試料写真と年輪計測結果

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 地域の地形と遺跡

(1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.05km²、人口約7万6千人の自然と文化の調和する都市である。

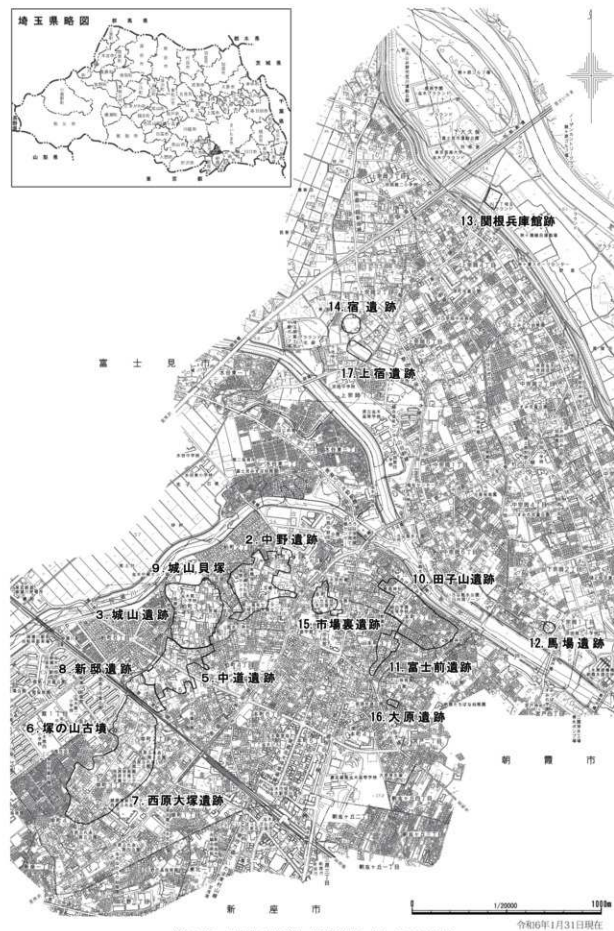
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（7）、新邸遺跡（8）、中道遺跡（5）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）が認められる。最新では、平成30年12月、新たに新河岸川左岸流域で上宿遺跡（17）が発見され、自然堤防上に位置する遺跡の存在も明らかにされつつある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した13遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた15遺跡である（第1図・第1表）。

№	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	71,220㎡	畑・宅地	集落跡 集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、地下式坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	82,520㎡	畑・宅地	貝塚 城館跡 集落跡 墓跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（中・後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鋳造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、鋳造関連遺物等
5	中道	55,600㎡	畑・宅地	集落跡 墓跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚の山古墳	800㎡	林	古墳?	古墳?	古墳?	なし
7	西原大塚	164,960㎡	畑・宅地	集落跡 墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、地下式坑、井戸跡、溝跡、段切状遺構等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	18,900㎡	畑・宅地	貝塚 集落跡 墓跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900㎡	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	74,030㎡	畑・宅地	集落跡 墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	14,830㎡	宅地	集落跡	縄文、弥（後）～古（前）、平安、近世以降	住居跡、土坑?、溝跡?	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800㎡	畑	集落跡	古（前）	住居跡?	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900㎡	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700㎡	水田	館跡	中世	溝跡、井桁状構造物	水・石製品
15	市場裏	15,120㎡	宅地	集落跡 墓跡	縄文、弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡、方形周溝墓、土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16	大原	1,700㎡	宅地	集落跡	近世以降?	溝跡	なし
17	上宿	8,600㎡	水田・宅地	集落跡 墓跡	平安、中・近世	住居跡、土坑、溝跡、井戸跡	土師器、須恵器、陶磁器、板碑等
合 計		524,580㎡					

令和6年1月31日現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 地域の地形と遺跡分布 (1/20,000)

(2) 歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62(1987)年の富士見・大原線(現ユリノキ通り)の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層の第IV層上部・第VI層・第VII層で、礫群や石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6(1994)年度には2か所、平成7(1995)年度には1か所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。令和元(2019)年に第224地点で立川ローム層の第IV層下部～第V層上部・第VII層から石器集中地点と礫群が検出されている。

平成11～14(1999～2002)年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点では、立川ローム層の第IV層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。平成28(2016)年に発掘調査された中野遺跡第91㊦地点からは、礫群1基が検出された。令和元～2(2019～2020)年にかけて発掘調査された中野遺跡第109地点では、立川ローム層第IV層下部～第V層を中心とする石器集中地点が検出されており、石核調整剥片の良好な接合資料が出土している。

また、城山遺跡では、平成13(2001)年に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層の第IV層上部と第VII層の2か所で石器集中地点が検出されている。平成20・21(2008・2009)年に調査が実施された第62地点(道路・駐車場部分)でも1か所の石器集中地点が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。平成23(2011)年に発掘調査が実施された第71地点では、立川ローム層の第IV層下部～第V層上部で石器集中地点2か所、礫群9基が検出された。令和元(2019)年には第96地点で立川ローム層の第IV層下部～第V層上部・第VI層・第VII層で石器集中地点や礫群が検出されている。

2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉(諸磯式期)の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4(1992)年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点、平成6(1994)年に発掘調査が実施された城山遺跡第21地点から多縄文系土器3点、第22地点から爪形文系土器1点、平成10(1998)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡としては、令和4(2022)年に田子山遺跡第172地点で市内初となる燃糸文期の住居跡が1軒検出された。また、平成18(2006)年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点では、早期末葉(条痕文系)の10号住居跡が検出されている。土器としては、田子山遺跡で燃糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。平成23(2011)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から燃糸文系土器・石器がまとまって出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が埴穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で前期中葉の黒浜式期の住居跡が検出され、新邸遺跡のものは貝層をも

つ住居跡である。令和元（2019）年度に発掘調査が実施された城山遺跡第96地点、令和3～4（2021～2022）年に実施された中野遺跡第116①地点では、前期後葉の諸磯a式期の住居跡が検出されている。そのうち、城山遺跡第96地点では貝層を持つ住居跡が3軒検出された。住居内貝層からヤマトシジミ・マガキが検出されている。平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で200軒以上の住居跡が環状に分布していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡1軒が確認されているが、平成28（2016）年に発掘調査された中道遺跡第76地点からは、加曾利EⅣ式の両耳壺を出土する住居跡1軒が検出された。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡2軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1か所、平成25（2013）年度に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点からは、称名寺式期の市内初の柄鏡形住居（敷石住居）1軒が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、称名寺式期の土器が出土している。その他、平成26（2014）年に発掘調査された西原大塚遺跡第204地点や平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された中野遺跡第91地点から、包含層出土遺物として、縄文時代後期（称名寺式～堀之内式期）の遺物が比較的まとまって出土している。最新資料として、平成30（2018）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第216地点で、堀之内1式期の住居跡が1軒検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されている。また、令和3（2021）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第234地点で、遺構外出土ではあるが、縄文時代晩期～弥生時代初頭に位置づけられる土器片が1点発見されている。以降、市内では弥生時代中期まで空白の時代となる。

3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、前期の遺跡は検出されていないが、中期については令和元（2019）年に発掘調査された城山遺跡第96地点で市内初となる宮ノ台式期の住居跡1軒、方形周溝墓1基が検出された。住居跡からは壺、甕、高坏、挟入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁が良好な状態で出土している。なお、これらの資料のうち、土器、石器、土製品計44点の城山遺跡10号住居跡出土遺物は、考古資料として、市指定文化財（令和3年7月1日付け）に指定されている。

弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる遺跡は数多く検出されている。中でも、平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された中野遺跡第91地点からは、弥生時代後期前葉に比定される久ヶ原式土器を出土する住居跡が発見されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、龍目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では弥生時代後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が670軒以上確認されてお

り、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。平成24(2012)年に発掘調査が実施された第179地点からは、遺存状態は良好ではないが、市内初の銅鏝が出土している。

昭和62(1987)年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、平成15(2003)年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18(2006)年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ1基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位的なまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高環が出土していることに注目される。また、平成11(1999)年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の有段口緑壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺形土器が出土している。なお、鳥形土製品1点と壺形土器4点の計5点は、考古資料として、市指定文化財(平成25年3月1日付け)に指定されている。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15(2003)年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7(1995)年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後葉から7世紀後葉にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後葉以降、周辺地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期(7世紀中葉)の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後葉から7世紀後葉にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で270軒、次いで中野遺跡で67軒、中道遺跡で20軒、田子山遺跡で18軒、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5(1993)年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後葉以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整形円で2か所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14(2002)年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではな

いかと考えられ、今後この一帯での古墳の発見に期待されている。

5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山・富士前遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「富」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。平成20・21（2008・2009）年の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶が2枚とその近くからは鉄鎌1点と土錘1点が出土しており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例として、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡、そして100基を超える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸軛が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群と南比企窯跡群の製品という生産地の異なる須恵器坏が共存して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

最新では、令和元（2019）年と令和3（2021）年に一般国道254号和光富士見バイパス事業に伴い発掘調査が実施された上宿遺跡により、平安時代の住居跡・土壇・溝跡などが検出され、宗岡地区における自然堤防上に立地する遺跡の存在が明らかになりつつある。

なお、以上のうち、城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか9点の遺物と城山遺跡第241号住居跡出土の富壽神寶ほか2点の遺物は、考古資料として、市指定文化財（平成25年3月1日付け）に指定されている。

6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と大塚千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『館村旧記』（註1）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。近年では、『廻国雑記』（註2）に登場する「大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、「大塚千手坊」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山 1978・2002）。

また、平成7（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板磚と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成8（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点から、鑄造関連の遺構が検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鋳型、三叉状土製品、砥石などが出土している。最新資料では、平成27・28（2015・2016）年に発掘調査された第89地点の調査により、第35地点の鑄造関連の捨て場が明らかになった。

この調査により、鍋本体の大型鋳型、鍋の耳部分の小型鋳型、三叉状・四叉状土製品・トリベ・砥石などの道具類や鉄滓（スラッグ）などの大量の遺物が斜面に流れ込むように出土した。

平成13（2001）年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成6（1994）年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、鎧の札である鉄製品1点と鉄鎌1点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、段切状遺構の坑底面から頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑、その他、ビット列・土坑・井戸跡・溝跡などが検出された。その後、平成27（2015）年度に第49地点の北側に隣接する第95地点の調査が実施され、段切状遺構の坑底面より、新たに土坑45基・井戸跡2基・溝跡1本・ビット231本などが検出された。特に、土坑のうち、市内で初めて「T字形」の火葬土坑5基が検出されたことは特筆すべきである。こうした墓域的な様相が僅かながら判明しつつある中、この一帯が『館村日記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する遺構ではないかとの見方がある。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7（1995）年の第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村日記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院」関連遺構と考えられる。その後、平成25（2013）年には、中道遺跡第74地点の発掘調査が実施され、段切状遺構の平場から多数のビットや溝跡などが検出され、上記を裏付ける追加資料となった。

最新資料としては、令和2・3年度に発掘調査を実施した西原大塚遺跡第234地点の地下式坑（912号土坑）から、人骨（女性2体）と完形品の播鉢が共存する良好な資料が発見された。人骨は「通常とは異なる状況」で埋葬されたと考えられ（田中 2022）、播鉢は古瀬戸後期IV古～新段階（藤澤 2008）に比定されることから、時期は中世（15世紀中葉～後葉）のものと考えられる。

また、令和元（2019）年と令和3（2021）年に一般国道254号和光富士見バイパス事業に伴い発掘調査が実施された上宿遺跡により、中・近世の土坑・井戸跡・溝跡などの多くの遺構が検出され、中世における『宗岡宿』の様相や近世における千光寺に関連する墓域群などを知ることができる貴重な成果につながった。

7. 近代以降

近代以降の遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鎌などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成 15（2003）年の新邸遺跡第 8 地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第 2 節 遺跡の概要

西原大塚遺跡は、志木市の南西端部にある幸町 2～4 丁目一帯に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の西方約 1 km に位置している。北東－南西方向に約 700 m、北西－南東方向に約 150 m の広がりを持ち、遺跡面積 164,960㎡の市内最大規模の遺跡である。

本遺跡は、柳瀬川を北西に望む武蔵野台地北東端の台地の縁辺に形成されている。標高は 10～18 m と遺跡内で 8 m の比高差があるが、遺跡範囲の大部分は標高 14～16 m に位置しており、概ね緩やかな傾斜をもち台地から低地に移行している。遺跡北西部分の台地下では、今でも小規模な湧水点が確認されている。

昭和 48（1973）年に最初の調査が実施されて以降、志木市教育委員会、志木市遺跡調査会、志木市史編さん室による度重なる調査が実施されてきた。平成元（1989）年から平成 19（2007）年までは、西原特定土地区画整理事業に伴い、道路新設部分を中心に公園予定地・保留地を対象とした発掘調査が継続的に実施された。近年では区画整理事業の完了に伴い、共同住宅や分譲住宅、個人住宅の建設などの各種土木工事が盛期を迎え、それらに伴う発掘調査も増加傾向にある。

本遺跡は、これまでに 245 回の調査（令和 6 年 1 月 31 日現在）が実施され、旧石器時代から近世までの複合遺跡であることが判明している。特に、縄文時代中期では住居跡約 200 軒以上からなる大規模な環状集落が形成され、また、弥生時代後期～古墳時代前期では、住居跡 670 軒以上、方形周溝墓 38 基が調査され、さらに環濠の存在が確認されている。

特に本遺跡から発見された資料として、以下の 2 件が、平成 24 年度に市指定文化財に指定され、大きな成果を上げることができた。

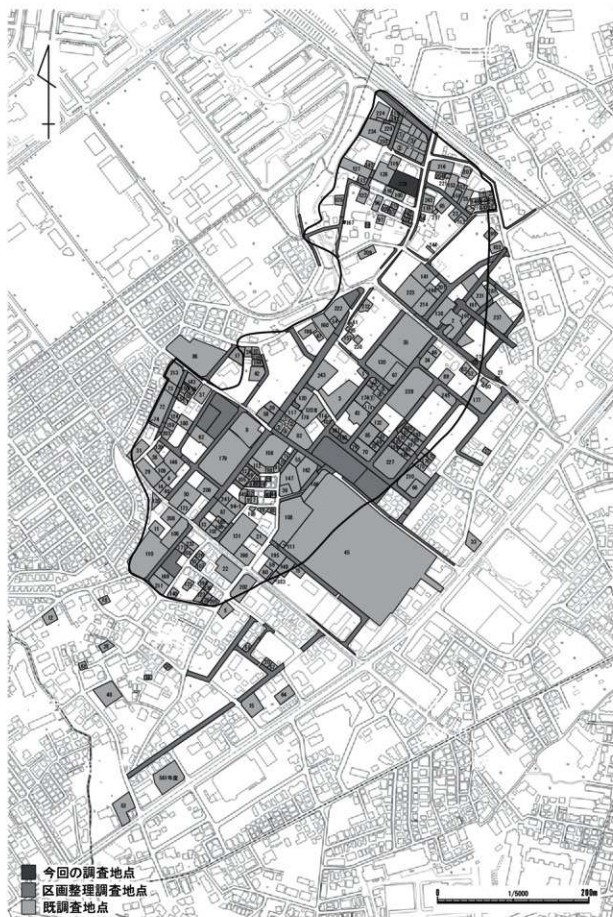
- ①西原大塚遺跡出土の動物形土製品
- ②西原大塚遺跡 17 号方形周溝墓出土遺物

〔註〕

- 註 1 『館村日記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）^{ウラヤスウキノミヤノ}の名主宮原仲右衛門仲恒が、享保 12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。
- 註 2 『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明 18（1486）年 6 月から 10 か月間、北陸路から関東各地をめぐる、駿河甲斐にも足をのぼし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

〔引用文献〕

- 神山健吉 1978 「『廻回雑記』に現れる 大石信濃守の館と十五坊の所在についての一考察」『郷土志木』第 7 号 志木市郷土史研究会
- 2002 「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第 31 号 志木市郷土史研究会
- 田中 信 2022 「第 4 章 調査のまとめ 第 3 節 中世以降について」『西原大塚遺跡第 234 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第 86 集 埼玉県志木市教育委員会
- 藤澤良祐 2008 『中世瀬戸原の研究』高志書院



第2図 西原大塚遺跡の調査地点 (1/5,000)

令和6年1月31日現在

第2章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経緯

本地点は、令和4年8月、土木工事主体者兼施工責任者である株式会社マイタウン（以下、工事主体者）から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市幸町2丁目6230番2、6231番2（面積756.22㎡）地に分譲住宅建設（6棟）及び道路新設工事を行うというものである。

これに対し、教育委員会は、当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である西原大塚遺跡（コード11228-09-007）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
2. 上記1の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず埋蔵文化財に影響を与える工事を実施する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

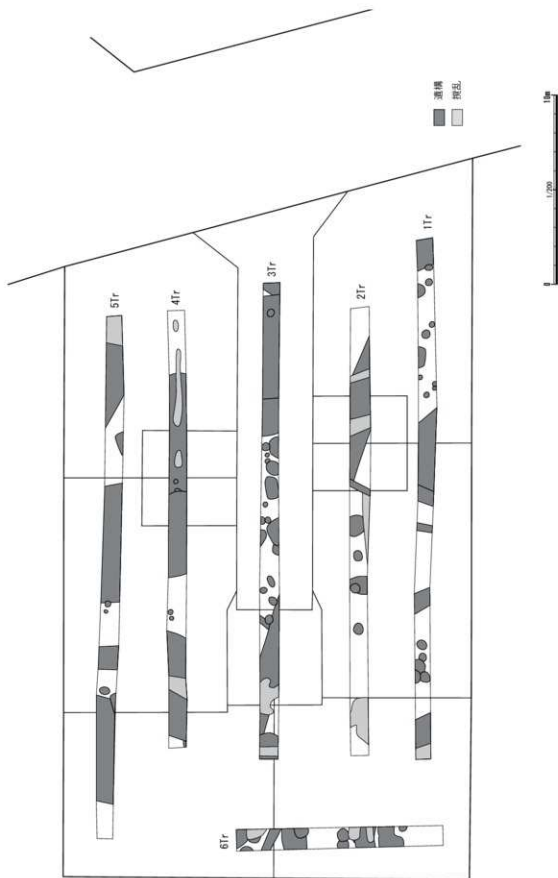
令和4年8月8日、教育委員会は工事主体者より確認調査依頼書を受理し、西原大塚遺跡第239地点として、9月5～7日に確認調査を実施した。確認調査は、第3図に示すように調査区の長軸方向に5本（1～5Tr）、短軸方向に1本（6Tr）、計6本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、縄文時代の土坑8基・柱穴2本、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡13軒、中世以降の土坑8基・溝跡7本・柱穴41本を確認した。教育委員会は、この結果をただちに工事主体者に報告し、保存措置について検討を依頼した。

9月28日に保存措置についての事前打合せを実施した。その後も打合せを重ねた結果、道路部分は「埼玉県埋蔵文化財発掘調査等取り扱い基準」に基づき、分譲住宅部分については6区画全て十分な文化財保護層が確保できないことから、工事面積全体（756.22㎡）の発掘調査を実施することに決定した。

10月26日、教育委員会は、工事主体者より埋蔵文化財発掘調査依頼書が提出されたため、11月4日に発掘調査の実施に向けた事前協議を実施した。

12月21日、工事主体者・教育委員会・民間調査組織である大成エンジニアリング株式会社において三者協議を実施し、令和5年1月4日付けで、西原大塚遺跡第239地点埋蔵文化財保存事業に係る三者による協定を締結した。

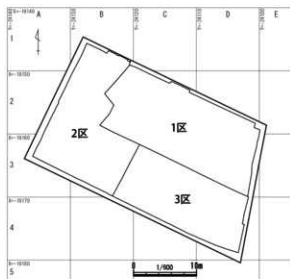
教育委員会は、12月19日付けで埋蔵文化財発掘の届出及び発掘調査通知を埼玉県教育委員会に提出した。以上より、教育委員会を調査主体に令和5年1月4日から発掘調査を実施した。



第3図 確認調査時の遺構分布 (1/200)

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は令和5年1月4日に開始し、同年4月28日に終了した。調査は排土処理の関係上、調査区を3分割して行った。1区は東部北側、2区は西部、3区は東部南側（第4図）とし、1区→2区→3区の順で調査を進めた。ここでは、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査については、第2表の発掘調査工程表に示した。



第4図 調査区配置図（1／600）

- 1月4日 調査区北側にある街区多角点から基準点・水準点の移動や資器材の搬入などの準備工を開始する。
- 5日 防護ネットによる仮囲いの設営作業などの調査区整備と、重機（0.25m³バックホー）・仮設ハウス・トイレ・倉庫の搬入作業を開始する。
- 10日 重機による1区の表土剥ぎ作業を開始し、12日に終了する。遺構確認作業は表土剥ぎ作業と併行して行う。
- 13日 1区の検出全景写真を撮影する。撮影後、1区の南東部から調査を開始し、切り合い関係のある遺構は遺構確認作業で新しいと判断した遺構から精査を進める。中世以降の溝跡（57 M）・土坑（978・979 D）、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡（656 Y）などの精査を開始する。
- 17～19日 新たに中世以降の土坑（980 D）、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡（658・660 Y）などの精査を開始する。
- 27日 656・658 Yそれぞれに切られる住居跡2軒（657・659 Y）の精査を行う。
- 2月7日 659・660 Yの精査に併行し、新たに弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡（661 Y）の精査を開始する。
- 8～9日 弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡（663 Y）、中世以降の土坑（981 D）などの精査を開始する。
- 14日 新たに中世以降の土坑（982 D）、弥生時代後期～古墳時代前期の掘立柱建築遺構（6 T）などの精査を行う。
- 15日 ドローンを用いて1区の完全面積全景写真撮影を行う。
- 16日 656～660 Yの掘り方調査を開始する。

- 20日 661・663 Yの掘り方調査を開始する。
- 21日 旧石器確認調査の試掘坑（T P 1～3）の設定を行い、精査を開始する。
- 24日 1区中央南部のⅡ層残存範囲を掘り下げ、縄文時代の遺構・遺物の確認作業を行う。当該期の遺構（983 Dなど）の精査を行う。併行して、重機による1区の埋め戻し作業を開始する。
- 27日 1区の遺構調査を全て終了した。重機による1区の埋め戻し作業と併行して、2区の表土剥ぎ作業、遺構確認作業を開始する。
- 3月1日 2区の表土剥ぎ作業を終了し、2区の検出全景写真を撮影する。撮影後、中世以降の土坑（984・985・988 D）などの精査を開始する。
- 2日 新たに中世以降の土坑（986・987 D）、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡1軒（664 Y）の精査を開始する。
- 7日 664 Yの精査と併行して、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡1軒（662 Y）の精査を行う。
- 9日 662・664 Yの精査と併行して、縄文時代早期の炉穴（23 F P）、弥生時代後期～古墳時代前期の溝跡（58 M）の精査を行う。
- 15日 ドローンを用いて2区の完掘全景写真撮影を行う。
- 16日 662・664 Yの掘り方調査と58 M付帯ピットの精査を行う。併行した2区南東部のⅡ層残存範囲を掘り下げ、縄文時代の遺構・遺物の確認作業を行う。当該期の遺構（991・996 D）を精査する。
- 17日 旧石器確認調査の試掘坑（T P 4・5）を設定し、精査を開始する。
- 20日 T P 5から石器が出土したため、北側を1 m拡張して精査を続行する。
- 22日 2区の遺構調査を全て終了し、重機による2区の埋め戻し作業を開始する。重機は0.25 m³バックホーから0.45 m³バックホーに入れ替え、仮設ハウス・トイレ・倉庫などの場内移動を行う。
- 23日 重機による2区の埋め戻し作業と併行して、3区の表土剥ぎ作業を開始する。
- 27～28日 3区の表土剥ぎ作業を終了する。その後、3区の遺構確認作業を行い、3区の検出全景写真を撮影する。撮影後、中世以降の溝跡（57 M）、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡2軒（665・666 Y）などの精査を行う。
- 29日 665・666 Yの精査と併行して、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡3軒（656・663・667 Y）の精査を開始する。
- 31日 656・666 Yの精査と併行して、58 Mの精査を開始する。58 Mは、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡（668 Y）と重複するため、サブトレンチを入れて切り合い関係を確認する。結果、58 Mが668 Yを切って構築されていると判断した。
- 4月 7日 58 Mの精査を終了し、668 Yの精査を開始する。併行して、663 Yの掘り方調査を開始する。
- 12日 668 Yの精査と併行して、縄文時代の土坑（999・1000 D）の精査を行う。
- 13日 999・1000 Dは遺構深度が深く、安全面を考慮して深度180cmで掘削を一時中断し、ドローンを用いて3区の完掘全景写真撮影を行う。

第2章 発掘調査の概要

- 14日 656・665～667 Yの掘り方調査を行う。
- 18日 668 Yの掘り方調査、999・1000 Dの断ち割り調査を開始する。併行して、旧石器確認調査の試掘坑（T P 6）の設定を行い、精査を開始する。
- 19日 新たに旧石器確認調査の試掘坑（T P 7）の設定を行い、精査を開始する。
- 20日 999 Dの精査を終え、999 D南側に隣接して旧石器確認調査の試掘坑（T P 8）を設定し、精査を開始する。
- 21日 3区の遺構調査を全て終了し、重機による3区の埋め戻し作業を開始する。
- 24日 3区の埋め戻し作業を終了後、防塵ネットの撤去作業と資器材の撤収作業を開始する。
- 26日 資器材の撤収と併行して、仮設ハウス・トイレ・倉庫の撤出作業を開始する。
- 27日 仮設物など撤出作業終了後、現場の整地作業を行う。
- 28日 重機撤出後、土木工事主体者による現場終了確認と引き渡しの立ち合いを行った。撤収工含め、全ての現場作業を完了する。

	令和5年1月					2月					3月					4月									
	5D	10D	15D	20D	25D	3D	5D	10D	15D	20D	25D	20D	5E	10E	15E	20E	25E	31D	5E	10E	15E	20E	30E		
表土剥ぎ作業	1.10	12-1区										227	31-2区				3.23	327-3区							
656 Y	1.13	124						2.16	2.20									3.29	4.4	4.13	4.19				
657 Y			1.27	1.31					2.17																
658 Y		1.18	1.26				2.16	2.20																	
659 Y			1.27	2.6			2.16	2.20																	
660AY		1.19	2.6			2.16	2.20																		
660BY		1.19	2.6			2.16	2.20																		
661 Y						2.7	2.10	2.20			2.21														
662 Y												3.7	3.16			3.17									
663 Y						2.8	2.9	2.20								3.24	3.30	4.7	4.10						
664 Y											3.2	3.9		3.16											
665 Y																3.27	3.30	4.14							
666 Y																3.27	4.3	4.10	4.17						
667 Y																3.29	4.14	4.17							
668 Y																	4.7	4.13	4.18						
23FP													3.19	3.17											
6T						2.14	2.16																		
57M	1.13	1.17															3.27	3.29							
58M												3.10	3.20		3.31	4.10									
978D	1.13	1.17																							
979D	1.13	1.17																							
980D		1.17	1.19																						
981D						2.9	2.14																		
982D						2.14	2.15																		
983D											2.24														
984D											3	3.2													
985D											3	3.2													
986D											3.2	3.3													
987D											3.2	3.2													
988D											3	3.3													
989D											3.3	3.6													
990D																		4.12	4.20						
1000D																		4.12	4.21						
基本順序						2.22	2.24					3.17	3.22				4.18	4.21							
空堀作業						2.15							3.15							4.13					
埋戻し作業								2.24	2.26					3.22	3.23				4.21	4.24					

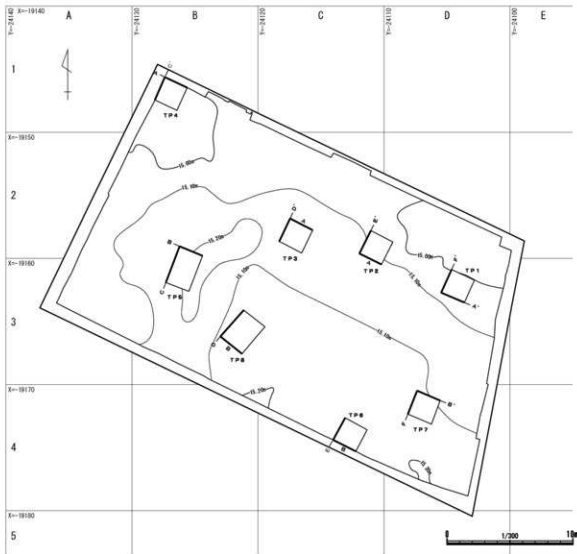
第2表 西原大塚遺跡第239地点の発掘調査工程表

第3節 基本層序と地形

基本層序の確認と旧石器時代の調査を兼ねて1～8号試掘坑の8か所（TP1～8）を設定した。設定範囲は2m×2mを基本とし、TP8以外は立川ローム第X層が、TP8は立川ローム第XI層が確認されるまで掘削を行った。第III層～第XI層は立川ローム第III層～第XI層に対応する。第II層は黒ボク土とローム層との間の漸移層で、TP6では局所的に第IIa・IIb層が確認できた。TP8の第X層は第Xa・Xb層に分けられる。

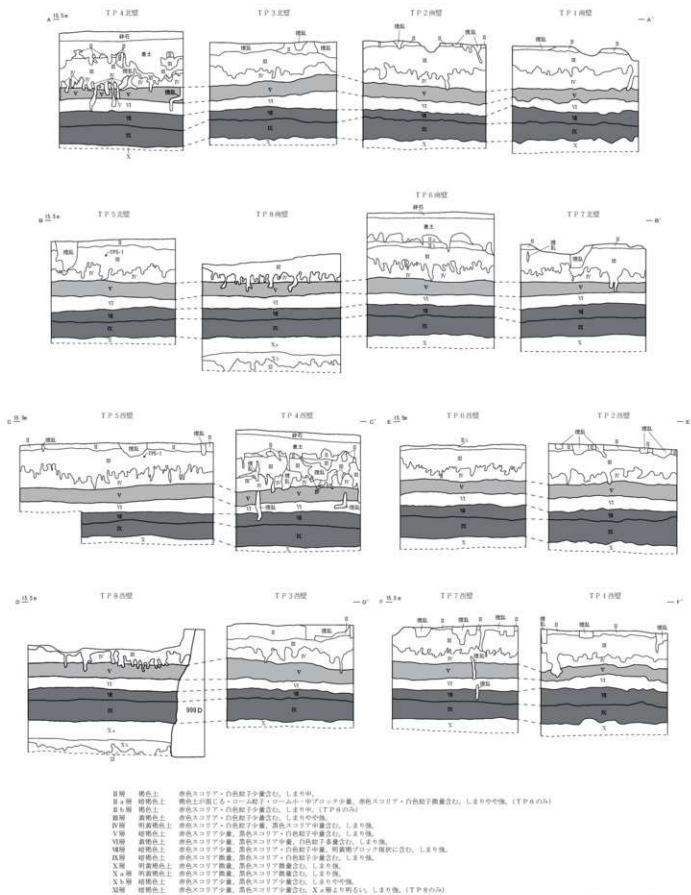
遺構確認面は概ね立川ローム第III層上面で行い、第II層下部でも遺構確認を行った。

本調査地点の地形は第X層上面の土層堆積をみると、東西方向は北西部がやや低くそのほかは概ね水平に堆積する。南北方向は中央部が概ね水平に堆積するものの、全体的に北側がやや低くなる。このことから本調査地点の自然地形は、東部から中央部にかけては北側に向かって緩やかな勾配を有し、中央部から西部では北側に向かって僅かに傾斜する。



第5図 試掘坑配置図 (1/300)

第2章 発掘調査の概要



第6図 基本層序 (1/60)



第7図 遺構分布図(1/200)

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 旧石器時代の遺物

(1) 概要

旧石器時代の調査のため2m×2mを基本とした試掘坑8か所(TP1～8)を設定し調査を行った。その結果、TP5から石器が1点出土した。

(2) 試掘坑出土石器

5号試掘坑(第8図)

【位置】(B-2・3)グリッド。

【検出状況】北壁中央部から石器1点が出土した。このため北側1mを拡張し、2m×3mの範囲で調査を行ったが、そのほかの石器は出土しなかった。

【平面分布】試掘坑中央部からやや北側に石器1点が確認された。

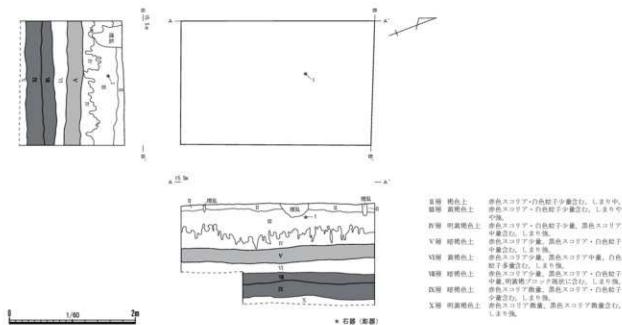
【出土層位】石器は、標高14.9mから出土し、立川ローム第Ⅲ層に相当する。

【出土石器】彫器1点が出土した。

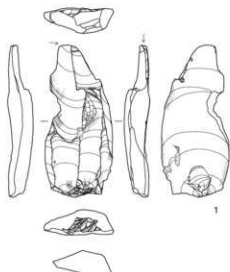
【遺物】(第9図、図版28-1、第3表)

【石器】(第9図1、図版28-1-1、第3表)

1は彫刀面状の剥離が施されていることから黒曜石製の彫器と考えられる。



第8図 5号旧石器試掘坑遺物出土状態(1/60)



第9図 5号試掘坑出土遺物(4/5)



発掘番号 図版番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土層位
第9図1 図版29-1-1	彫器	黒曜石	5.0	2.2	0.8	7.4	定形ノ素材は縦長割片ノ彫刀面が先端から右側縁にかけて作刃される	立川ローム 第III層

第3表 5号試掘坑出土石器一覧

第2節 縄文時代の遺構・遺物

(1) 概要

縄文時代の遺構は、炉穴1基(23 F P)、土坑9基(982・983・989・991・994・996・997・999・1000 D)、ピット11本(14・17・18・23～29・32 P)が確認された(第10図)。遺構の分布は、概ね調査区中央部から南西側にかけて検出された。大半は、該期の遺物を確認することができなかったが、覆土の観察から縄文時代であると判断した。

南壁付近の倒木痕からは中期初頭の五領ヶ台式の深鉢形土器が良好な状態で検出された。このほかの倒木痕や植物の根痕など(以下、縄文時代の根痕)が調査区中央部と西・南側の一部で確認された。これらを含めた攪乱や表土及び後世の遺構覆土中から出土した遺物は、遺構外出土遺物として扱い、土器は早期～晩期の土器が出土した。遺構外出土遺物の詳細は第3章第5節を参照されたい。

(2) 炉穴

23号炉穴

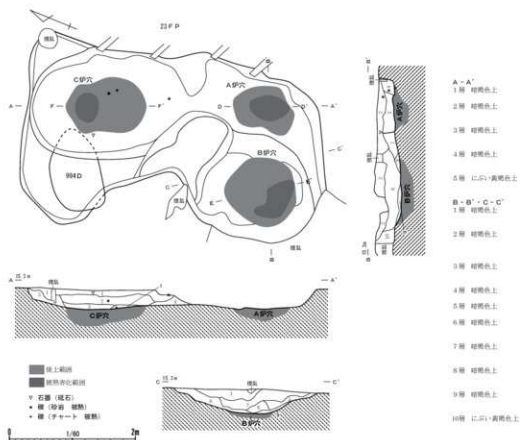
遺構 (第11・12図)

[位置] (B-3)グリッド。

[検出状況] 本遺構は3基の炉穴(A～C)からなる複合形態である。上部は南西側に縄文時代の根痕などが広がり、北西側が994 D、東側は東西方向に走る現代の耕作痕(トレンチャー)により削平される。検出面で確認できたA炉穴・B炉穴の調査を進めたところ、途中でC炉穴の存在が確認された。こ



第10図 縄文時代遺構分布図(1/200)



第11図 23号炉穴1 (1/60)

のため、覆土の堆積状況からA炉穴はB炉穴より新しいが、B炉穴とC炉穴、A炉穴とC炉穴の新旧関係は不明である。

〔構造〕 平面形：不整形、中場はアメーバ状を呈する。規模：長軸4.8m/短軸2.9m/確認面から燃焼部までの深さ0.3～0.4m。壁：北壁が約65°の角度で、南壁が45°の角度、東壁は約75°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-16°-W。

A炉穴 平面形：不整形。規模：長軸1.0m/短軸0.7m/確認面からの深さ0.5m。壁：北壁が約15°の角度で、南壁は約30°の角度で立ち上がる。長軸方位：N-12°-W。

B炉穴 平面形：楕円形。規模：長軸1.3m/短軸1.1m/確認面からの深さ0.6m。壁：約50°の角度で立ち上がり、底面は西側に約15°の角度でなだらかに傾斜する。長軸方位：N-34°-W。

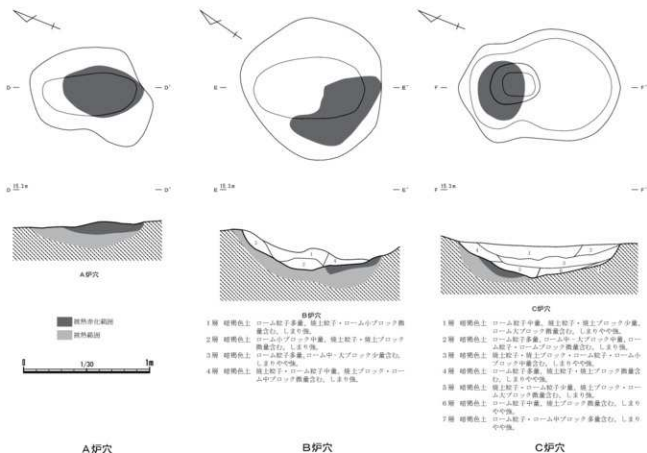
C炉穴 平面形：楕円形。規模：長軸1.3m/短軸0.9m/確認面からの深さ0.6m。壁：約60～70°の角度で立ち上がり、底面は南側に約10°の角度でなだらかに傾斜する。長軸方位：N-25°-W。

〔覆土〕 A炉穴とB炉穴では、B炉穴の埋没過程(5～10層)でA炉穴を構築(3・4層)、A炉穴廃絶後に上層の覆土(1・2層)が堆積したものと考えられる。

〔遺物〕 覆土上層から中層にかけて深鉢形土器2点、砥石1点、礫4点が出土した。全ての炉穴燃焼部から遺物は出土しなかった。ここでは深鉢形土器1点を図示する。

〔時期〕 早期後葉(条痕文期)。

〔所見〕 A炉穴は南東部に燃焼部を有し、北西部では底面が燃焼部から緩やかに上がっていくことが



第12図 23号炉穴2 (1/30)



第13図 23号炉穴出土遺物 (1/30)



検出番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法 量 (mm)	形状・形態	文様・特徴	土 質	時期 型式等	出土位置
第13図1 図版28-2-1	深鉢	胴部 破片	高 [2.5] 厚 1.1	外縁する	外面：目形複雑文	にぶい赤褐色/砂粒 中量、褐色和子微量	早期後葉 須賀文系	炉土中

第4表 23号炉穴出土遺物一覧

ら足場と考えられる。C炉穴は北西部に燃焼部を有し、南東部では燃焼部から底面が緩やかに上がっていくことから足場と考えられる。このことから、A炉穴とC炉穴の新旧関係は不明であるが、炉部が互いに対になり、足場が重複する位置関係が想定される。

遺物 (第13図、図版28-2、第4表)

[土器] (第13図1、図版28-2-1、第4表)

1は外面に条痕文が施された深鉢形土器である。

(3) 土 坑

982 号土坑

遺 構 (第14図)

[位 置] (C-3) グリッド。

[検出状況] 上部は東西方向に走る現代の耕作痕(トレンチャー)に削平される。また、北側は縄文時代の根痕と重複するが、本遺構が攪乱より深く、覆土の堆積状況が良好のため土坑であると判断した。

[構 造] 平面形:不整形。規模:長軸 2.1 m/短軸 0.7 m/深さ 0.5 m。断面形:西壁は約 70°の角度で、東壁は約 50°の角度で緩やかに立ち上がる。底面は凸凹の形状を呈し、北へ傾斜する。長軸方位: N-24°-W。

[覆 土] 5層に分層される。1・2層は黒褐色土主体で、4・5層は褐色土を主体にロームブロックを多量に含む。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から縄文時代と考えられる。

983 号土坑

遺 構 (第14図)

[位 置] (C・D-2・3) グリッド。

[検出状況] 上部は東西方向に走る現代の耕作痕(トレンチャー)により削平される。

[構 造] 平面形:楕円形。規模:長軸 1.4 m/短軸 1.2 m/深さ 0.3 m。断面形:約 40~50°の角度で緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。長軸方位: N-80°-W。

[覆 土] 3層に分層され、暗褐色土を主体とする。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から縄文時代と考えられる。

989 号土坑

遺 構 (第14図)

[位 置] (B-2) グリッド。

[検出状況] 切り合い関係はなく、単独で検出された。

[構 造] 平面形:不整形。規模:長軸 1.0 m/短軸 0.9 m/深さ 0.2 m。断面形:約 50°の角度で緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。長軸方位: N-66°-E。

[覆 土] 2層に分層され、褐色土とにぶい黄褐色土からなる。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から縄文時代と考えられる。

991 号土坑

遺 構 (第14図)

[位 置] (B-3) グリッド。

[検出状況] 南側の一部は攪乱される。

[構 造] 平面形：略円形。規模：長軸 1.2 m／短軸 1.1 m／深さ 0.2 m。断面形：西壁は約 60°の角度でやや緩やかに立ち上がり、東壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。長軸方位：N-36°-W。

[覆 土] 2層に分層される。1層は暗褐色土を主体にロームブロックを多量に含む。2層はロームブロック主体の黄褐色土である。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から縄文時代と考えられる。

994号土坑

遺 構 (第14図)

[位 置] (B-3) グリッド。

[検出状況] 23 F P 上部で検出された。23 F P に含まれる可能性はあるが、検出面での確認と断面から 23 F P より新しいと判断した。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸 1.3 m／短軸 0.8 m／深さ 0.2 m。断面形：約 40°の角度で緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。長軸方位：N-58°-E。

[覆 土] 3層に分層され、暗褐色土主体である。

[遺 物] 深鉢形土器が1点出土した。

[時 期] 早期後葉(条痕文期)。

遺 物 (第15図、図版 28-3、第5表)

[土 器] (第15図1、図版 28-3-1、第5表)

1は内外面に条痕文が施された深鉢形土器である。

996号土坑

遺 構 (第14図)

[位 置] (B-3) グリッド。

[検出状況] 上部は東西方向に走る現代の耕作痕(トレンチャー)により削平される。

[構 造] 平面形：不整形。規模：長軸 0.6 m／短軸 0.6 m／深さ 0.3 m。断面形：南壁は約 70°の角度で立ち上がり、北壁は約 40°の角度で緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。長軸方位：N-36°-W。

[覆 土] 3層に分層され、暗褐色土主体である。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から縄文時代と考えられる。

997号土坑

遺 構 (第14図)

[位 置] (A-3) グリッド。

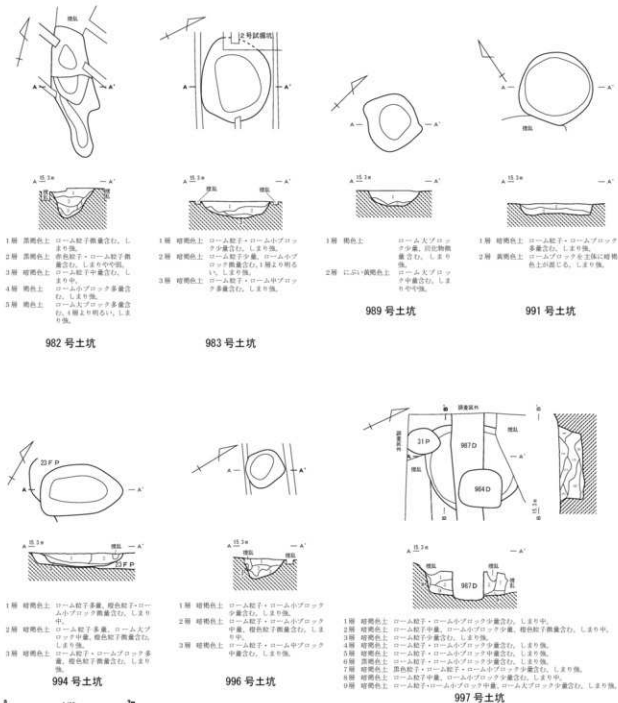
[検出状況] 中央部は 984 D と 987 D に、北・南側は 31 P と攪乱により大半が壊されるため、遺存状態は良好でない。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸 1.4 m / 短軸 1.2 m / 深さ 0.4 m。断面形：東壁はほぼ垂直に立ち上がり、西壁と南壁は約 70° の角度で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。長軸方位：N - 29° - E。

[覆 土] 9層に分層される。暗褐色土を主体にローム粒子・ロームブロックを含む。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 覆土の観察から縄文時代と考えられる。



第14図 982・983・989・991・994・996・997号土坑 (1/500)



第15図 994号土坑出土遺物(1/3)

調査番号 図版番号	層 種	部 位 遺存状態	法 量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎 土	時 期 型式等	出土位置
第15図1 図版28-3-1	深鉢	胴部 破片	高[60] 厚1.3	外縁する	内外面：貝殻残文	褐色/砂粒や中多量、 層状中黒、白色粘土 散在	早期後葉 深鉢文系	覆土中

第5表 994号土坑出土遺物一覧

999号土坑

遺 構 (第16図)

[位 置] (B・C-3) グリッド。

[検出状況] 上部は35・36 Pと縄文時代の根痕に切られる。また、東西方向に走る現代の耕作痕(トレンチャー)により削平される。

[構 造] 平面形：略円形を呈し、底面中央部に円形のピット(P1)を伴う。規模：長軸2.1m/短軸2.0m/深さ2.1m。P1規模：径0.7m/深さ0.3m。断面形：西壁はほぼ垂直に立ち上がり、そのほかの壁は中層から底面にかけて広がり、袋状を呈する。底面はほぼ平坦である。長軸方位：N-47°-W。

[覆 土] 26層に分層される。底面壁際付近はロームブロックが多量に、17・25層は灰褐色土が含まれる。西壁際や下層には炭化物が、2層の中央部からやや南側には径5~6cmの焼土の混入が認められた。土坑下層からP1の覆土(18~25層)は、黒褐色土主体の層とロームを含む層が互層に堆積していることから、一連に埋め戻された可能性が考えられる。

[遺 物] 深鉢形土器30点、礫30点が出土した。遺物は覆土上層から中層に多く、土器はいずれも小片のため、深鉢形土器3点を図示した。

[時 期] 土坑の形態が大型の袋状を呈し、堀之内1式の深鉢形土器の出土から、後期前葉(堀之内1式期)と考えられる。なお、五領ヶ台式、阿玉台式、加曾利E式に比定される中期の深鉢形土器が大半を占めるが、これらは混入したものと考えられる。

遺 物 (第17図、図版28-4、第6表)

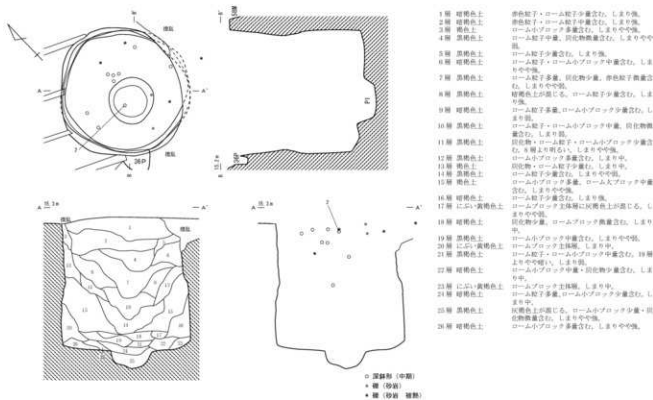
[土 器] (第17図1~3、図版28-4-1~3、第6表)

1~3はいずれも上層からの出土で、1は五領ヶ台式、2は加曾利EⅢ式、3は堀之内1式の深鉢形土器である。

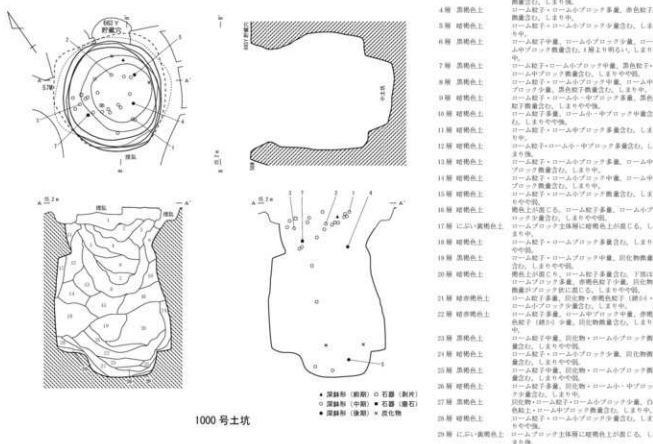
1000号土坑

遺 構 (第16図)

[位 置] (C-3) グリッド。



999号土坑



1000号土坑

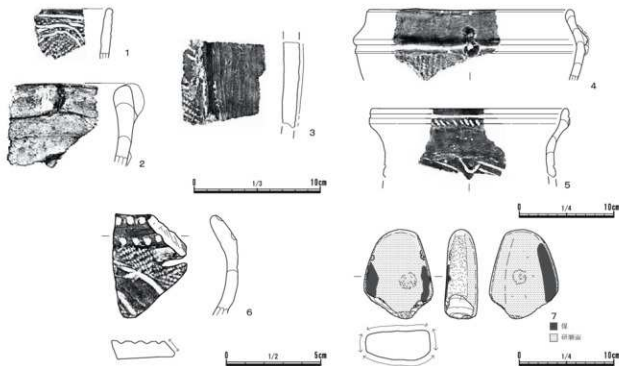
第16図 999・1000号土坑 (1/60)



第17図 999号土坑出土遺物(1/3)

検出番号 図版番号	部 種	部位 遺存状態	法 量 (m)	器形・形態	文様・特徴	胎 土	時 期 型式等	出土位置
第17図1 図版28-4-1	深鉢	胴部 破片	高 [5.0] 厚 1.1	内湾する	集合比類による縦線文	褐色/石英・砂粒中量	中期前期 五瀬Ⅱ式	上層
第17図2 図版28-4-2	深鉢	胴部 破片	高 [3.2] 厚 0.9	やや内湾する	縦・横文地文、磨消懸垂文・U字状の区画文	にぶい黄褐色/砂粒中量、石英・赤色粒子・褐色粒子微量	中期後葉 加賀利Ⅴ式	中央上層
第17図3 図版28-4-3	深鉢	胴部 破片	高 [4.6] 厚 1.1	外縁する	沈線文を横位施文後、円形刺突文	にぶい黄褐色/砂粒中量、石英・赤色粒子少量、石英・白色粒子微量	後期前期 堀之内Ⅰ式	上層

第6表 999号土坑出土遺物一覧



第18図 1000号土坑出土遺物(1/4・1/3・1/2)

検出番号 図版番号	部 種	部位 遺存状態	法 量 (m)	器形・形態	文様・特徴	胎 土	時 期 型式等	出土位置
第18図1 図版28-5-1	深鉢	口縁部 破片	高 [4.0] 厚 0.7	外縁する	1区横文地文、2本1単位の横位・弧状の沈線文	にぶい黄褐色/砂粒中量、褐色粒子微量	中期後葉 遊孤文系Ⅰ式	中央南上層
第18図2 図版28-5-2	深鉢	口縁部 破片	高 [6.5] 厚 1.0	やや内湾する	楕円形の微隆起帯刺付	にぶい黄褐色/砂粒中量、黄褐色粒子・褐色粒子少量	中期後葉 加賀利Ⅴ式	中央北上層
第18図3 図版28-5-3	深鉢	胴部 破片	高 [6.7] 厚 1.2	外縁する	1区横文地文、微隆起帯刺付・磨消懸垂文	灰黄褐色/砂粒中量、白色粒子微量	中期後葉 加賀利Ⅴ式	中央西上層
第18図4 図版28-5-4	深鉢	口縁部 15%	口 [21.0] 高 [7.5]	内湾し、口縁端部は上方に向く	口縁部は無文/口縁部と胴部は微隆起帯と沈線文により横位に区画後「8」字形の刺付文/胴部は多量の1区横文、弧状の沈線文	にぶい黄褐色/砂粒中量、黄褐色少量、石英・角閃石・褐色粒子微量	後期前期 堀之内Ⅰ式	中央南上層
第18図5 図版28-5-5	深鉢	口縁部 胴部 20%	口 [21.4] 高 [7.3]	口縁部は外縁し、胴部は上方に向く/括弧部は緩く折曲し胴部は内湾する	口縁部は横位沈線文・斜み目刺/胴部は複数の沈線による弧状文・斜行文	灰色/砂粒中量、石英・褐色粒子微量	後期前期 堀之内Ⅰ式	小土坑内上層

第7表 1000号土坑出土遺物一覧(1)

検出番号 図版番号	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第18図6 図版28-5-6	土製品	転用砥石	5.5	4.1	0.8	17.8	口縁部破片・横断面を使用/口縁部は円形突起、胴部は1本縄文・地文、弧状の磨痕/色調は褐色/中期後葉・加曾利EIV式	上層
検出番号 図版番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第18図7 図版28-5-7	磨石	閃緑岩	9.4	7.3	3.4	351.1	表面は粗平磨/保が付着/左右両縁は敲打によって平坦面となる/表面に磨面があり、それぞれにわずかな敲打による凹痕が残る/下層の敲打と剥離面には保の付着がない	中央西上層

第7表 1000号土坑出土遺物一覧(2)

[検出状況] 上部は57 M・663 Yと縄文時代の根痕に切られる。また、東西方向に走る現代の耕作痕(トレンチャー)により削平される。

[構造] 平面形:円形を呈し、底面中央部に円形の小土坑を伴う。規模:径1.9 m/深さ2.3 m。小土坑規模:径1.2 m/深さ0.4 m。断面形:壁は中層から底面にかけて広がり、袋状を呈する。底面はほぼ平坦である。

[覆土] 29層に分層される。上層は中央部と壁際付近にロームブロックが多量に含まれる。中層から下層にかけてはロームブロックやローム粒子を多量に含み、炭化物が混じる。炭化物の含有量は上層より下層の方が多く、下層壁際付近や27層には白色粘土が部分的に混入する。土坑下層から小土坑にかけての覆土(22・23・25～29層)は、黒褐色主体の層とロームを含む層が互層になっていることから、一連に埋め戻された可能性が考えられる。

[遺物] 深鉢形土器70点、石器2点、礫8点が出土した。遺物は覆土上層が最も多く、中層から下層にかけては疎らな出土状態である。土器は大半が破片のため、深鉢形土器6点、石器1点を図示した。

[時期] 下層から堀之内1式の深鉢形土器が出土し、土坑の形態が大型の袋状を呈することから、時期は後期前葉(堀之内1式期)と考えられる。上層から中層には早期～中期の土器が多く散見されるが、これらは混入したものと考えられる。

遺物 (第18図、図版28-5、第7表)

[土器] (第18図1～5、図版28-5-1～5、第7表)

1～3は中期の深鉢形土器で、1は連弧文系1段階、2・3は加曾利EIV式に比定される。4・5は後期堀之内1式の深鉢形土器である。

[土製品] (第18図6、図版28-5-6、第7表)

6は右側縁部に擦痕が認められ、加曾利EIV式の深鉢形土器を転用した研具である。

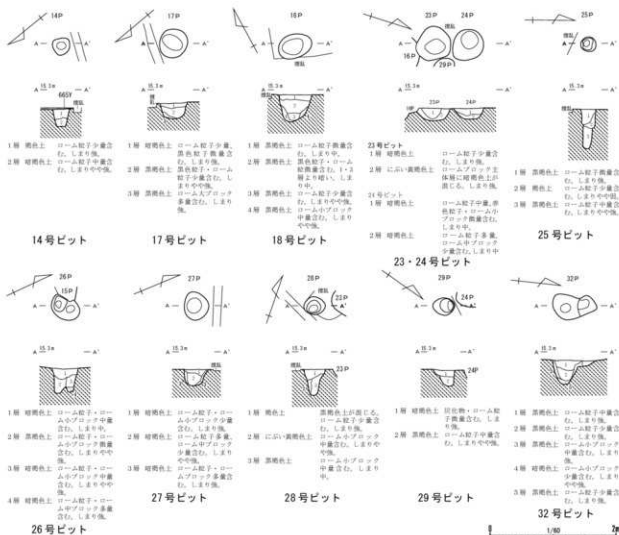
[石器] (第18図7、図版28-5-7、第7表)

7は閃緑岩製の磨石である。

(4) ビット (第19図)

本調査区では11本のビット(14・17・18・23～29・32 P)を検出した。これらのビットは、調査区中央部を中心に確認された。また、出土遺物は確認することができなかったが、覆土の観察から縄文時代であると考えられる。ビットの基本構造については、第8表を参照されたい。

第3章 検出された遺構と遺物



第19図 縄文時代のピット (1/60)

遺構番号	グリッド	平面形	規模 (m)			方位	出土遺物	重複関係
			長軸	短軸	深さ			
14P	D-3	円形	0.3	0.3	0.3	N-39°-E	なし	665Y に切られる
17P	D-3	楕円形	0.5	0.4	0.3	N-26°-W	なし	
18P	C-3	楕円形	0.5	0.4	0.4	N-78°-W	なし	
23P	C-3	不整形	0.6	0.5	0.2	N-46°-W	なし	16P に切られる
24P	C-3	楕円形	0.5	0.5	0.2	N-61°-W	なし	
25P	C-2	円形	0.2	0.2	0.6	N-3°-W	なし	985・986・992D, 57M に切られる
26P	C-2	不整形	0.5	0.3	0.4	N-48°-E	なし	15P に切られる
27P	C-3	楕円形	0.5	0.4	0.3	N-74°-W	なし	
28P	C-3	円形	0.3	0.3	0.4	N-40°-E	なし	
29P	C-3	楕円形	0.4	0.3	0.3	N-41°-W	なし	
32P	B-3	不整形	0.7	0.4	0.4	N-15°-W	なし	

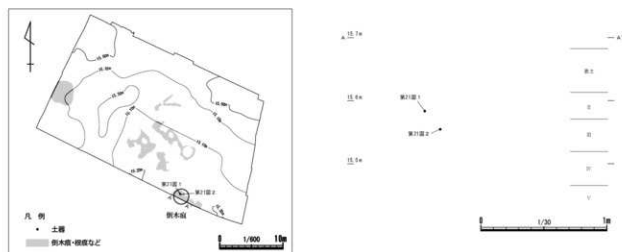
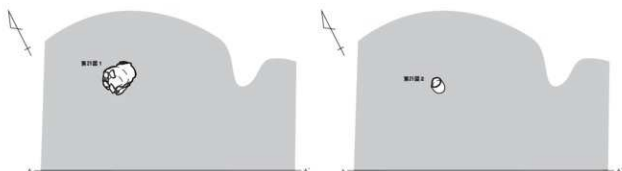
第8表 縄文時代のピット一覧

(5) 倒木痕 (第20図)

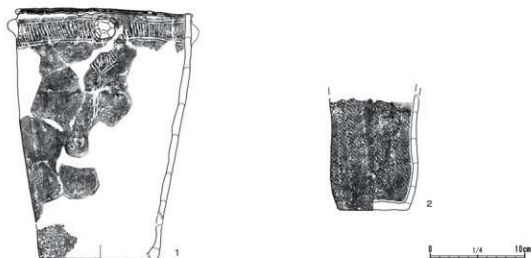
調査区南東部 666 Y 東側に位置する縄文時代の倒木痕からは中期初頭の五領ケ台式土器の深鉢形土器 (1・2) が出土した。1は横倒しの状態で、その下から2が出土した。

[土 器] (第21図 1・2、図版 28-6-1・2、第9表)

1・2は中期初頭の五領ケ台式の深鉢形土器である。1の胎土に含まれる桃赤色の片岩は、紅藤赤片岩ないしは片岩が焼けて変色した可能性がある。



第20図 倒木痕遺物出土状態 (1/600・1/30)



第21図 倒木痕出土遺物 (1/4)

探検番号 図版番号	種類	部位 遺存状態	法 量 (cm)	形状・形態	文様・特徴	胎 土	時 期 型式等	出土位置 出土遺構
第21図1 図版 28-6-1	深鉢	口縁部～ 底部 30%	□ (17.6) 高 (26.4) 底 (12.4)	中々円筒形を呈する	無文地に半截竹管状工具による條文、 口縁部は平行波線状圏内に集合状條文 を充填・4単位の輪状突起が付く。胴部 は垂下するY字状・単次輪の意匠文	赤褐色/片割(桃赤 色)中盤、砂粒少量、 石炭・麻石微量	中前期遺 五福ヶ台B式	(C-4)G Ⅱ層・ (C-3)G 表土
第21図2 図版 28-6-2	深鉢	胴部～ 底部 殆ど形	高 [12.1] 底 6.8	全体は筒状を呈し、下 半は内溝、上半は縁が に外縁する	胴部が結節された無文1縄文地文。縦方 向10単位での條文か/部分的に瘤輪状 新産が著しい	に深い黄褐色/砂粒 やや多量、白色粘土少 量、褐色粘土微量	中前期遺 五福ヶ台式	(C-4)G Ⅱ層

第9表 倒木痕出土遺物一覽

第3節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物

(1) 概要

弥生時代後期～古墳時代前期の遺構は、住居跡 13 軒 (656～668 Y)、掘立柱建築遺構 1 棟 (6 T)、溝跡 1 本 (58 M)、ピット 4 本 (4・5・21・22 P) が確認された。

住居跡は、656～659・661・662 Y でそれぞれに新旧関係がみられた。遺構密度は調査区南西から北東方向に向かうにつれ、濃くなっていく傾向が認められた。住居跡の平面形は、主に楕円形、(長) 方形の二形態が多く、660 Y のみ平面形はほぼ円形を呈する。660 Y は、床面が 2 枚確認されたことや、炉・赤色砂利層がそれぞれ 2 つ認められたことから住居の建て替えと考えられる (660 Y-A・B)。664・666 Y は、焼土や炭化材が床面直上から散見して検出されたことから、焼失住居と考えられる。

掘立柱建築遺構 (6 T) は、本調査区北東側に位置し 3 本の柱穴から構成され、調査区外へ延びる。

溝跡 (58 M) は、調査区北西から南東方向に構築され、調査区南東隅部で南方向に曲がる。出土遺物は弥生時代後期後葉～末葉にまとまりがみられる。

ピット (4・5・21・22 P) は、それぞれ出土遺物が確認できなかったが、覆土の観察から時期は弥生時代後期～古墳時代前期であると考えられる。

(2) 住居跡

656 号住居跡

遺 構 (第 23～26 図)

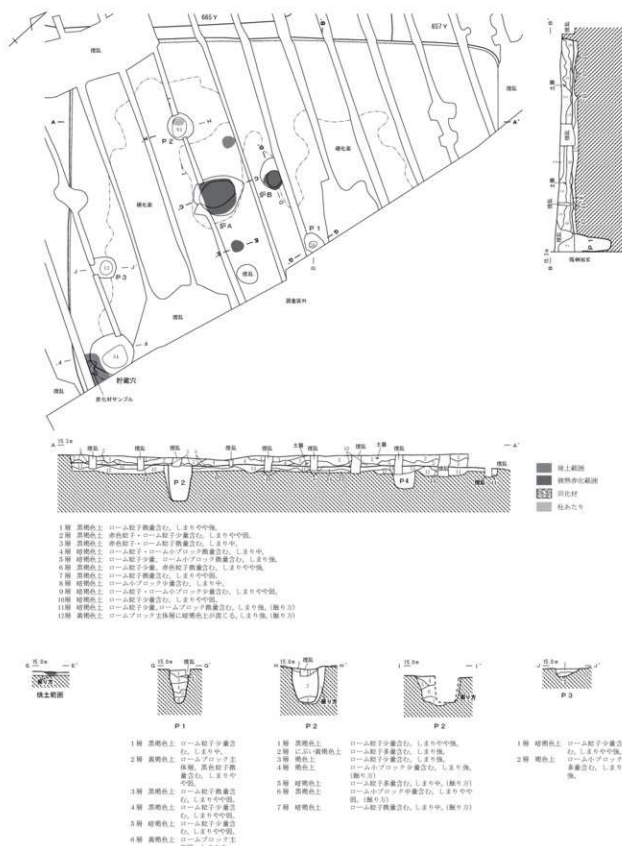
[位 置] (D-3・4) グリッド。

[検出状況] 北側で 657 Y を切り、全体を東西方向に走る現代の耕作痕 (トレンチャー) により削平され、南東側は調査区外へ延びる。

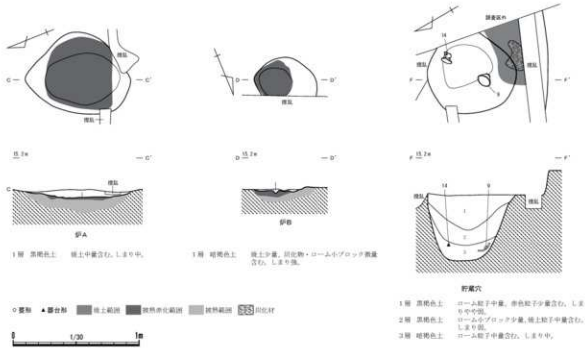
[構 造] 平面形: 長方形か。規模: 長軸 6.8 m 以上/短軸 4.3 m 以上/確認面からの深さ 0.2 m。壁: ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位: N-50°-W。壁溝: 確認できなかった。床面: 硬化面は壁際を除いた住居中央部に広がり、硬く締まる。床面直上からは炉 A の東側と西側で径 20cm 程度の焼土範囲が 2 か所確認された。炉: 住居中央部と中央部南側から 2 基 (炉 A・炉 B) 検出された。平面形はいずれも楕円形が推定される。炉 A の規模は長軸 84cm/短軸 64cm/深さ 18cm、炉 B の規模は長軸 40cm/短軸 40cm 以上/深さ 12cm。いずれも地床炉で焼土の赤化や被熱による硬化は炉 A の方が顕著である。貯蔵穴: 住居南東側に位置し、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸 68cm/短軸 60cm 以上/床面からの深さ 54cm。南側の床面直上からは焼土範囲と炭化材が検出され、中層には焼土を含む。炭化材の樹種はコナラ亜属クヌギ節で、分析結果は第 4 章第 1 節を参照されたい。下層からは器台形土器 (第 27 図 14) が横位に、甕形土器の台部 (第 27 図 9) が逆位の状態で出土した。柱穴: 床面で 3 本のピット (P 1～3) が確認された。深さは P 1 が 56cm、P 2 が 61cm、P 3 が 13cm で、P 1・2 が主柱穴と考えられる。掘り方で 2 本のピット (P 4・5) が確認された。赤色砂利層: 確認できなかった。入口施設: 確認できなかった。掘り方: 住居全体に深さ 6～16cm 程度の掘り込みを有する。

[覆 土] 12 層に分層される。

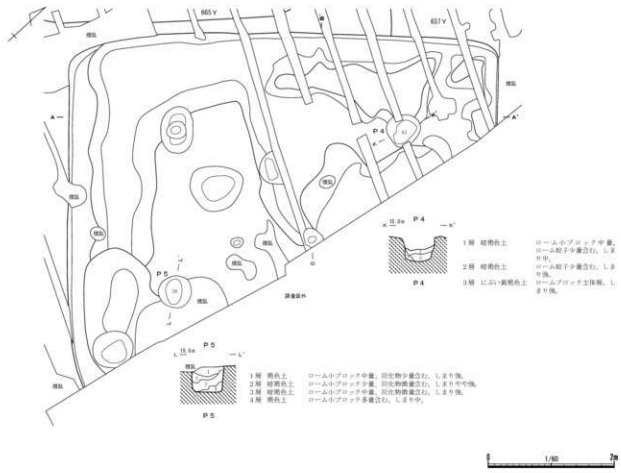
[遺 物] 主に覆土の中層から下層にかけて出土し、壺・甕形土器が大半を占める。そのほか、高坏・



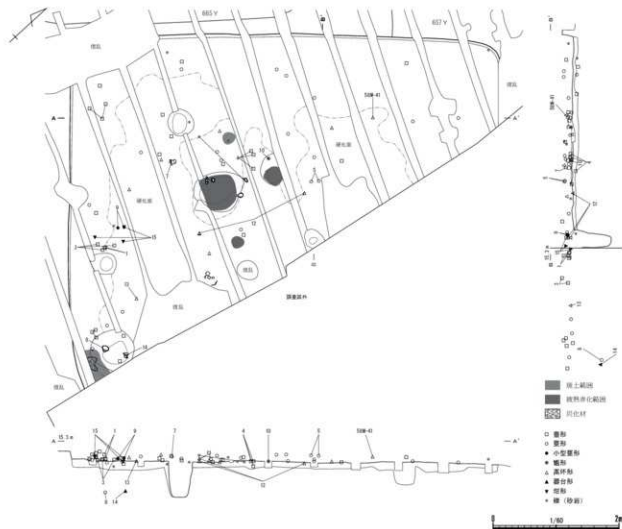
第23図 656号住居跡1 (1/60)



第24図 656号住居跡2 (1/30)



第25図 656号住居跡掘り方 (1/60)



第26図 656号住居跡遺物出土状態(1/60)

器台・埴形土器なども出土した。遺物は住居全体に満遍なくみられるが、炉A周辺から南側にかけて多く分布する。北側の高環形土器の破片(第90図58M-41)は659Y・58Mと遺構間接合し、本遺構の時期と遺物の残存状況から58Mに帰属するものと判断した。

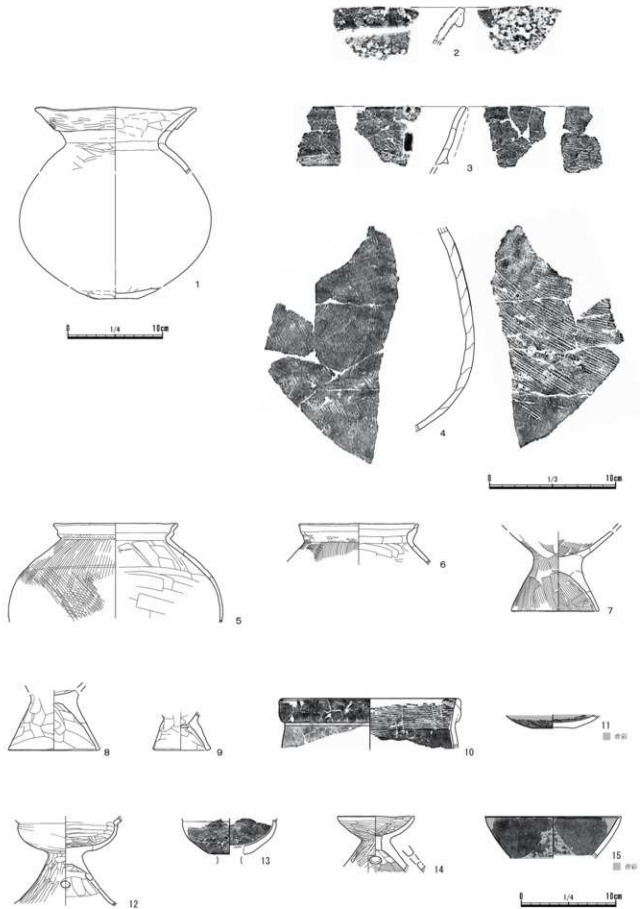
〔時期〕古墳時代前期前葉。

〔所見〕炉が2基検出されたが、建て替えの様相は確認できなかった。炉A東側の焼土範囲は床面に僅かな被熱の痕跡が確認できたことから、一時的な利用が考えられる。貯蔵穴直上からは炭化材が確認され、土層には焼土が含まれ、P3周辺の土器には被熱の痕跡がみられることから、焼失住居の可能性がある。

〔遺物〕(第27図、図版29-1、第10表)

〔土器〕(第27図1~15、図版29-1-1~15、第10表)

1~4は逆形土器、5~8は甕形土器で5・6はS字状口縁甕である。9は小型の甕形土器、10は甕形土器である。11は鉢形土器、12・13は高環形土器でいずれも坏部は塊状を呈する。14は器台形土器で、15は埴形土器である。



第27図 656号住居跡出土遺物（1/4・1/3）

探検番号 図版番号	図様	部位 遺存状態	法 測 (cm)	形状・形態	文様・調整等	附 土	出土位置
第27図1 図版 29-1-1	竈	口縁部→ 胴部・底部 30%	口 (16.8) 高 (20.3) 底 4.4	楕圓の複合口縁部/ 胴部はくの字に開く。 胴部は欠損する	被熱による電痕状剥離が著しい/内面:口縁部は縦方向 のヘラナデ、底部は斜方向のヘラナデ/外面:口縁部は 横方向のミガキ、胴部は斜方向のヘラナデ後、斜方向 のミガキ、底部は横方向のヘラナデ	褐色/砂粒少量、石 灰・土塵屑・赤色 粘土・褐色粘土・赤 色粘土・小石微量	南側中層・ 掘り方
第27図2 図版 29-1-2	竈	口縁部 破片	厚 (3.0) 厚 0.5	楕圓の複合口縁部/ 外方向に開く	内外面:電痕状の剥離が著しいため調整は不明確	灰色/褐色粘土・褐色 粘土中量、褐色粘土 少量、赤色粘土	覆土中
第27図3 図版 29-1-3	竈	口縁部 破片	高 [4.8] 厚 0.5	二重口縁部並/下端 部は横方向に張り出し 外上方に開く	内面:横方向のミガキ/外面:下部は斜方向のハケメ後、 上部・凸部部はヨコナデ後、前面円形の條状浮文	にぶい褐色/砂粒中 量、褐色粘土少量、 赤色粘土・小石微量	P3付近床上
第27図4 図版 29-1-4	竈	胴部 破片	高 [15.3] 厚 0.5	下半で折曲する	内面:斜方向のハケメ後、上部は縦方向、下部は横方向 のヘラナデ/外面:斜方向のハケメ後、横・斜方向の丁 字状ヘラナデ、下部は横・斜方向のミガキ	にぶい褐色/砂粒中 量、石灰・白色粘土 ・赤色粘土・褐色粘土 微量	中央床上
第27図5 図版 29-1-5	竈	口縁部→ 胴部 20%	口 (12.8) 高 (10.4)	S字状口縁部/胴部 はくの字に開出し、胴 部は縦	内面:胴部上半は縦方向のヘラナデ後、下半は横方向の ヘラナデ後、口縁部はヨコナデ/外面:胴部に2条の横 線文並文後、胴部下半は斜方向のハケメ後、上半は横 方向のハケメ後、口縁部はヨコナデ	灰黄褐色/砂粒中量、 石灰・角閃石・白色粘 土・赤色粘土・褐色粘 土微量	中央上層・覆土 中・遺構内掘孔
第27図6 図版 29-1-6	竈	口縁部→ 胴部 30%	口 (12.3) 高 (4.4)	S字状口縁部/胴部 はくの字に開出し、胴 部は縦	内面:横・斜方向のヘラナデ後、口縁部はヨコナデ/外 面:縦方向のハケメ後、口縁部はヨコナデ	灰黄色/砂粒少量、石 灰・角閃石・白色粘 土・赤色粘土・褐色粘 土微量	貯蔵穴
第27図7 図版 29-1-7	竈	胴部→ 台部 90%	高 [8.4] 台 9.2	台付壁/僅かに内湾 する	内面:斜方向のハケメ/外面:縦・斜方向のハケメ、部 分的に斜方向のヘラナデ	明赤褐色/土塵屑・ 砂粒中量、石灰・小石 微量	中央東側中層
第27図8 図版 29-1-8	竈	台部 完形	高 [6.3] 台 9.5	台付壁/ハの字に開 く	内外面:縦・斜方向のヘラナデ	明赤褐色/砂粒中量、 赤色粘土・褐色粘土 微量	貯蔵穴下層
第27図9 図版 29-1-9	小竈	台部 30%	高 (4.0) 台 (5.3)	台付壁/ハの字に開 く	内面:縦・斜方向のヘラナデ/外面:複合部は縦方向、 胴部は横方向のヘラナデ/胴部は別に成形、胴部 は赤色粘土	褐色/砂粒・褐色粘土 少量、赤色粘土	南側下層
第27図10 図版 29-1-10	竈	口縁部 一部部	口 (18.4) 高 [5.3]	複合口縁部/胴部は ゆるやかに開く	口縁部:前面による斜方向のねじれ/内面:口縁部は横方 向のハケメ、胴部は斜方向のヘラナデ/外面:口縁部は ヨコナデ・胴部は縦方向のヘラナデ、胴部は斜方向のヘラナ デ	にぶい褐色/砂粒中 量、褐色粘土少量、石 灰・赤色粘土	伊8直上・覆 土中・掘削坑
第27図11 図版 29-1-11	鉢	底部 80%	高 [1.4] 底 4.3	外底面は器底状を 呈する	内外面:斜方向のミガキ後、赤彩	にぶい褐色/褐色粘 土・砂粒少量、赤色 粘土・小石微量	掘り方・遺 構内掘土
第27図12 図版 29-1-12	高坪	環部→ 胴部 70%	高 [9.5]	環部は塊状を呈し、口 縁部は外方向に、胴部 はハの字に開く	内面:括れ部ヨコナデ、環部は横方向のミガキ、胴部は 縦方向のヘラナデ/外面:横方向のヘラナデ、接合部→ 胴部は縦方向ミガキ	にぶい赤褐色/砂粒 少量、白色粘土微量	中央床上・ 覆土中
第27図13 図版 29-1-13	高坪	環部 20%	高 [3.9]	塊状を呈し、上端部は 傾斜・外反する	内面:ヨコナデ/外面:斜方向のハケメ、上端部はヨコ ナデ	にぶい黄褐色/褐色 粘土・砂粒少量、赤色 粘土・小石微量	南側床上・ 覆土中
第27図14 図版 29-1-14	竈台	接受部→ 一部部 70%	口 8.0 高 [6.0]	口縁部は面取り、接受 部は内湾し、胴部は上 方向に、胴部はハの字 に開く	内面:接受部は縦・横方向のミガキ後、口縁部はヨコ ナデ、胴部はハケメ後、胴上部は斜方向のヘラナデ/外 面:接受部は横・斜方向のミガキ後、口縁部はヨコナ デ、胴部は縦・斜方向のミガキ/3単位の開孔	浅黄褐色/赤色粘 土中量、褐色粘土・砂 粒少量、石灰・白色粘 土・褐色粘土微量	貯蔵穴下層
第27図15 図版 29-1-15	皿	口縁部 20%	口 [14.3] 高 (4.4)	外上方に開き、底部 は僅かに外反する	内外面:電痕状の剥離が著しい/内面:ヨコナデ/外面: 縦方向のミガキ後、底部はヨコナデ/内外面は赤彩	灰黄褐色/砂粒中量、 石灰微量	南側床上・覆 土中・掘り方

第10表 656号住居跡出土遺物一覧

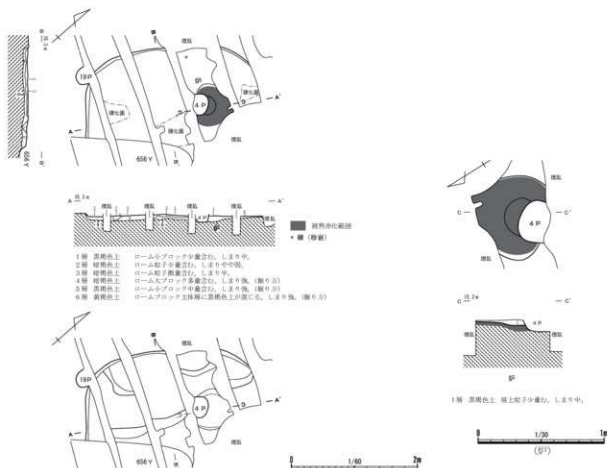
657号住居跡

遺 構 (第28図)

[位 置] (D-3) グリッド。

[検出状況] 南東側を656Yに、中央部を4Pに、東側と西側は攪乱される。また、東西方向に走る現代の耕作痕(トレンチャー)により大半を壊されているため、遺存状態は良好でない。

[構 造] 平面形:不明。規模:長軸2.8m以上/短軸1.5m以上/確認面からの深さ0.05m。壁:約50°の角度で緩やかに立ち上がる。長軸方位:N-54°-W。壁溝:確認できなかった。床面:全体的にやや硬いが、硬化面は住居北側と南側で部分的に確認できた。炉:床床炉で、住居のやや北西寄りに位置する。平面形は、南側と北側を攪乱されるが楕円形が推定され、全面に被熱による赤化が認められる。規模は長軸67cm以上/短軸59cm以上/深さ13cm。貯蔵穴:確認できなかった。柱穴:確認できなかった。赤色砂利層:確認できなかった。入口施設:確認できなかった。掘り方:住居全体に深さ1~8cm程度の掘り込みを有する。



第28図 657号住居跡 (1/60・1/30)

〔覆 土〕 6層に分層される。

〔遺 物〕 覆土中から壺・甕・高環形土器などの破片が僅かに散見される。いずれも小片のため図示できなかった。

〔時 期〕 古墳時代前期初頭。

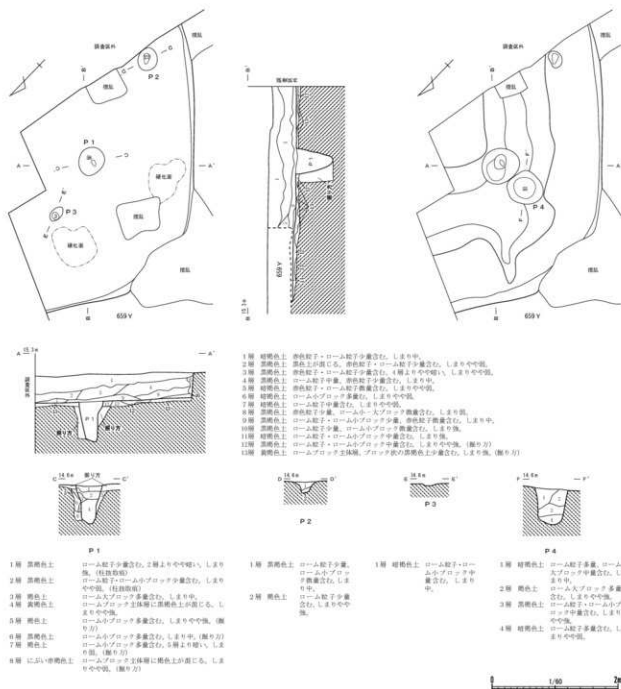
658号住居跡

〔遺 構〕 (第29・30図)

〔位 置〕 (D-2・3) グリッド。

〔検出状況〕 西側を659Yと複数の掘乱に切れ、北東側は調査区外へ延びる。

〔構 造〕 平面形：不明。規模：長軸3.1m以上/短軸3.0m以上/確認面からの深さ0.4m。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位：N-55°-W。壁溝：確認できなかった。床面：全体的にやや硬いが、硬化面は住居西側のみ部分的に確認できた。炉：確認できなかった。貯蔵穴：確認できなかった。柱穴：床面で3本のピット(P1~3)が確認され、深さはP1が58cm、P2が22cm、P3が3cmで、P1が主柱穴と考えられる。P3は床面からごく浅い皿状の凹みであり、用途は不明である。土器などを設置する凹みである可能性も考えられる。掘り方で1本のピット(P4)が確認された。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：確認できなかった。掘り方：住居全体に深さ9~59cm程度の掘り込みを有する。

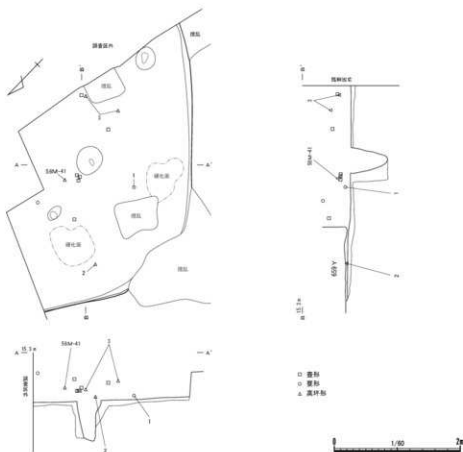


第29図 656号住居跡(1/60)

[覆 土] 13層に分層される。上層は概ね水平に厚く堆積し、下層はローム粒子・ロームブロックを含むことから、人為的に埋め戻されたと考えられる。

[遺 物] 遺物量は少ないものの上層から中層にかけて、住居東側一帯に壺・高坏形土器が散見される。遺構中央部の高坏形土器の破片(第90図58M-41)は656Y・58Mと遺構間接合しなかったものの同一個体であり、南側の甕形土器(第30図1)と西側の高坏形土器(第30図2)の破片は58Mと同一個体と考えられる。おそらく、本遺構廃絶の際に58Mの覆土を利用し、覆土中に含まれていた土器片が本住居跡に混入したものと考えられる。

[時 期] 古墳時代前期初頭。



第30図 658号住居跡遺物出土状態(1/60)



第31図 658号住居跡出土遺物(1/4)

発掘番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	土質	出土位置
第31図1 図版 29-2-1	狭	口縁部 25%	口 [21.2] 高 [3.0]	やや外上方向に開く	内面：横方向のハケメ／外面：斜方向のハケメ後、端部はヨコナデ後、稜状工具による刻み	にじい黄褐色／土源 砂片・砂粒少量、褐色 粒子微量	南西側下層・ 上層・58M
第31図2 図版 29-2-2	高環	環部 15%	口 [24.8] 高 [5.2]	口縁部は平らに整形、 口縁部は内開する	内面：横・斜方向のヘラナデ後、横・斜方向のミガキ／ 外面：横方向のミガキ／内外面は赤彩	にじい黄褐色／砂粒 中量、土路砂片少量、 赤色粒子微量	西側下層・ (D-3)C 溝 内・58M
第31図3 図版 29-2-3	高環	環部 30%	高 [3.4] 厚 [10.1]	直線的に開き、縁部は 広がる	内面：横・斜方向のハケメの後に縁部はヨコナデ／外面： 縁部はヨコナデの後に縁部は縦方向のミガキ／透孔3カ 所あり(4単位か)	褐色／砂粒少量、石 灰・白色粒子・赤色粒 子微量	東側中層

第11表 658号住居跡出土遺物一覧

[所見] 発掘作業時、659 Y との新旧関係は土層観察から難しい状態であったものの、本遺構が新しいと判断して調査を進めた。しかし、整理作業において本遺構と 659 Y 出土土器の様相から本遺構は 659 Y よりやや古い時期であることが判明した。このことから、本遺構と 659 Y の新旧関係は本遺構が

古く、659 Yが新しいと判断した。

遺物 (第31図、図版29-2、第11表)

[土器] (第31図1~3、図版29-2-1~3、第11表)

1は甕形土器、2・3は高環形土器である。

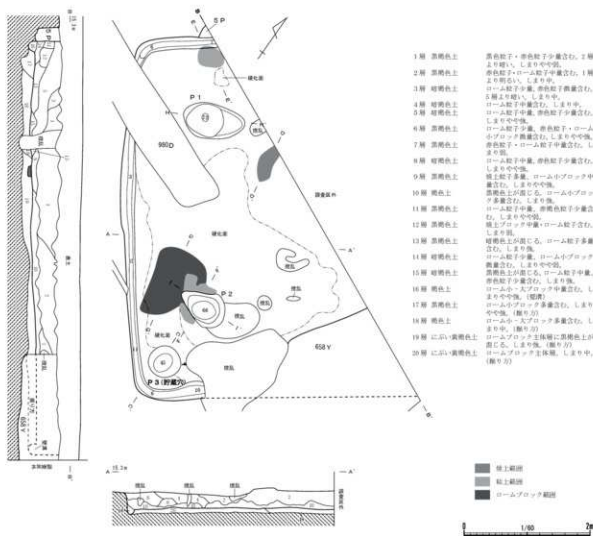
659号住居跡

遺構 (第32~35図)

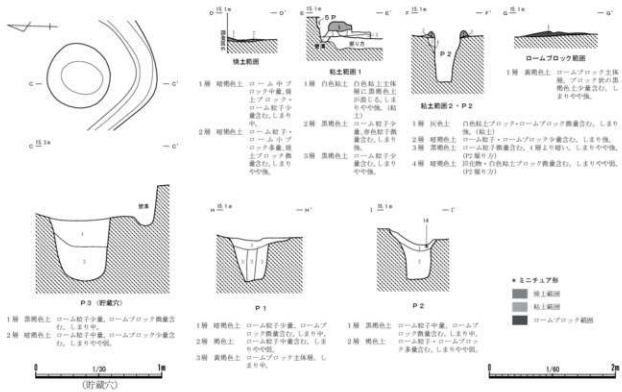
[位置] (D-2・3) グリッド。

[検出状況] 東側で658 Y、北西側で5 Pを切り、西側を980 Dに切られる。北東側は調査区外へ延びる。また、発掘作業時において、本遺構より658 Yが新しいと判断したが、整理作業において、出土土器の様相から、本遺構が658 Yより新しいと判断した。

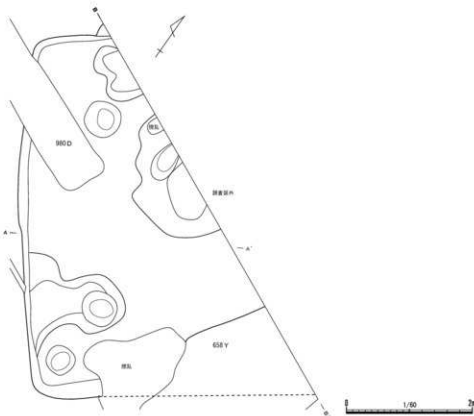
[構造] 平面形：方形か。規模：長軸5.7m/短軸4.2m以上/確認面からの深さ0.4m。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-37°-W。壁溝：確認できた範囲では全周する。上端幅14~27cm/下端幅6~15cm/深さ3~12cm。床面：硬化面は壁際を除いた住居中央部から南西部にかけて広がり、



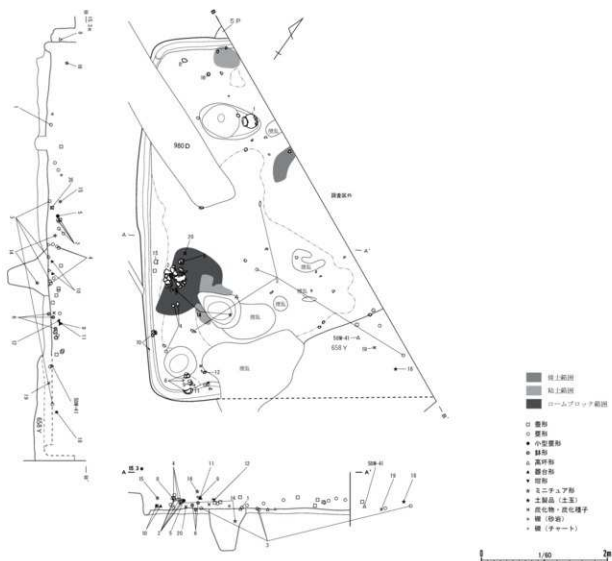
第32図 659号住居跡1 (1/60)



第33図 659号住居跡2 (1/60・1/30)



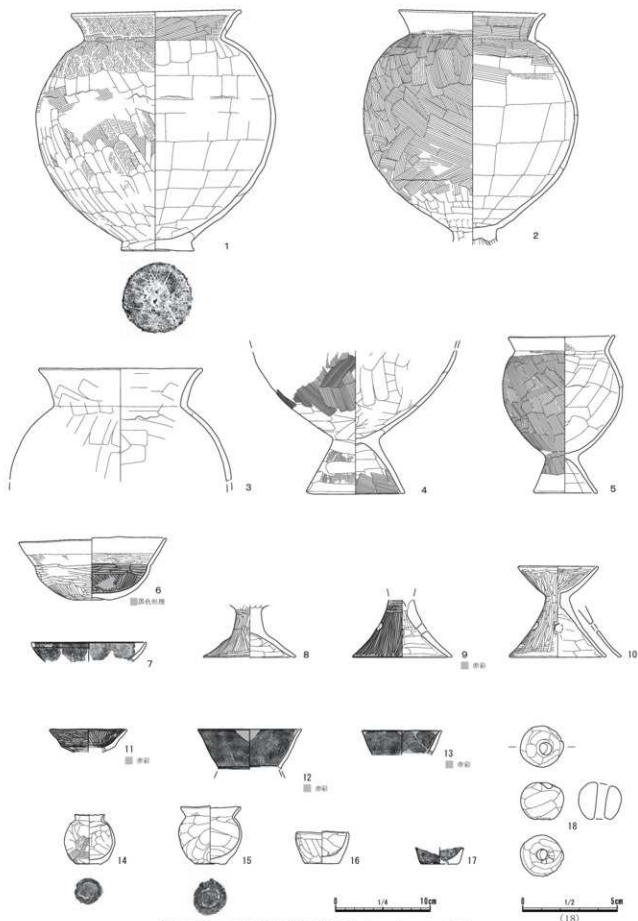
第34図 659号住居跡掘り方 (1/60)



第35図 659号住居跡遺物出土状態（1／60）

硬く締まる。また、住居中央部からやや北側の床面直上で焼土範囲が検出された。炉：確認できなかった。貯蔵穴：住居南隅部のP3にあたる。発掘作業時は、床面内での検出位置や規模などからピットと想定していたが、656 Yや後述する663 Yは住居南隅部に貯蔵穴を有することから本遺構も同様であると考えられる。平面形は円形を呈する。規模は長軸50cm／短軸50cm／床面からの深さ45cm。柱穴：床面で2本のピット（P1・2）が確認された。深さはP1が72cm、P2が66cmで、いずれも主柱穴と考えられる。赤色砂利層：調査区内では確認できなかった。入口施設：確認できなかった。掘り方：住居全体に深さ7～23cm程度の掘り込みを有し、P2付近と住居中央部から北側は一段深く凹む。

〔覆土〕20層に分層される。北西壁付近の下層からは40cm大の白色粘土の塊（粘土範囲1）が、P2周囲からは白色粘土を含む土（粘土範囲2）が検出され、P2北側からはロームブロックを主体とする土（ロームブロック範囲）が部分的に広がる様相がみられた。P2は覆土の堆積や形状から一度掘り返された形跡がみられ、ロームブロック範囲はその掘り返した土である可能性が高い。住居覆土全体はローム粒子やロームブロックを含む層が厚く、下層は凸凹を有しながら概ね水平な堆積がみられる。これらのことから、本遺構は意図的に埋め戻されたものと考えられる。



第36図 659号住居跡出土遺物(1/4・1/2)

第3章 検出された遺構と遺物

探検番号 図版番号	種別	部位 遺存状態	法 量 (cm)	形状・形態	文様・調整等	附 土	出土位置
第36図1 図版30-1	磚	口縁部～ 底部 90%	□18.0 高25.4 底7.8	平直壁／口縁部は外 反、底面はくの字に 凹、胴部は傾斜を呈す	内面：口縁部は横・斜方向のハケム後、胴部はヨコナデ、 胴部は縦方向。胴部は縦方向のヘラナデ／外面：口縁部は 縦方向のハケム後、ヨコナデ、胴部は縦・斜方向のハ ケム、胴部は多方向のハケム後、縦・斜方向のヘラ ナデ／外面：本底面	ぶい黄褐色／砂粒 中量、土器碎片少量、 赤色粘土少量	南側中層・上層
第36図2 図版30-2	磚	口縁部～ 接合部 95%	□15.5 高124.4	台付壁／口縁部は外 反、胴部は直ぐ、 胴部は傾斜を呈する	内面：口縁部～胴部は縦方向のハケム、胴部は縦方向、 接合部は縦・横方向のヘラナデ／外面：口縁部はヨコナ デ、胴部～胴部中位は多方向のハケム、胴部下位～接 合部は多方向のヘラナデ／外面胴部は部分的に帯状に 粘土の附着が著しい	ぶい赤褐色／砂粒 中量、土器碎片少量、 赤色粘土少量	北側下層
第36図3 図版30-3	磚	口縁部～ 胴部 20%	□(16.9) 高111.9	単口縁／口縁部は外 反、胴部はくの字に 凹、底面はゆるやかに 傾斜する	内外面とも磨耗が著しい／内面：斜・縦方向のヘラナデ／ 外面：口縁部～胴部は斜方向、胴部は縦方向のヘラナデ	ぶい褐色／砂粒中 量、石瓦少量	中央～南側上 層・下層・下 層・裏り方 (D-2)G表土
第36図4 図版30-4	磚	胴部～ 台座部 60%	高150.0 台10.0	台付壁／胴部はやや 内傾し、台座はハの字 に開く	内面：胴部は横・斜方向のハケム後、縦・斜方向の丁寧 なヘラナデ、台座は縦方向後、横方向のヘラナデ、胴部 は斜方向のハケム／外面：胴部は横・斜方向のヘラナデ 後、上部は横・斜方向のハケム、台座は縦方向のハケム 後、横方向のヘラナデ／外面胴部上部の一部に、タール付 着、内面台座部は痘瘡状の剝離が認められる	ぶい褐色／土器片 少量、砂粒少量、白色粘 土少量	南側中層・P3・ 上層・裏り方
第36図5 図版30-5	小型 磚	口縁部～ 底部 90%	□11.3 高16.6 底6.8	台付壁／口縁部は外 反、胴部はくの字に 凹、胴部中位に最大径 を有し下部は窄まる、 台座はハの字に開く	内面：口縁部はヨコナデ、胴部～台座部は横・斜方向のヘ ラナデ／外面：口縁部はヨコナデ、胴部～台座部は斜 方向のハケム後、胴部はヨコナデ／外面胴部部分的に 痘瘡状の剝離が認められる	赤色／砂粒中量、土器 碎片少量	南側中層・上層
第36図6 図版30-6	鉢	口縁部～ 底面	□15.5 高6.7 底3.6	口縁部は大きく開き、 底面はゆるやかに内 傾する、外面は整齊 状を呈する	内面：体部～一部は縦・斜方向のミガキ後、括弧内は横 方向のミガキ後、口縁部ヨコナデ／外面：底部下半は斜 方向のミガキ後、体部上半と底面は縦方向のミガキ、口 縁部は斜方向のミガキ後、ヨコナデ／内面体部は灰赤濁 泥による黒色処理	ぶい褐色／赤褐色 粘土・砂粒少量	南側下 層・P3
第36図7 図版30-7	高坪 瓦	坪部 破片	□(12.0) 高12.1	外傾する、器台形の可 能性もある	内面：ヨコナデ／外面：横方向のヘラナデ後、口縁部は ヨコナデ	褐色／白色粘土・砂粒 少量	P2・下層
第36図8 図版30-8	高坪 瓦	脚部 70%	高5.5 脚9.6	脚部は直線的で、断面 は大きく開く	内面：横・斜方向のヘラナデ／外面：縦方向のミガキ後、 接合部と胴部は横方向のミガキ	ぶい褐色／黄褐色 粘土・砂粒少量、石 瓦・赤色粘土少量	北西側上層
第36図9 図版30-9	高坪 瓦	脚部 70%	高6.1 脚10.4	脚部は外反し、断面は 開く	内面：縦方向後、横方向のヘラナデ／外面：胴部はヨコ ナデ後、脚部は縦方向のミガキ後、接合部は横方向のミ ガキ／外面は赤彩／3単位の透孔	ぶい褐色／砂粒中 量、赤色粘土・褐色粘 土少量	南側上層
第36図10 図版30-10	器台	胴受部 80%	□8.3 高9.6 脚10.0	口縁部は直取り、胴 受部は僅かに内傾し、 胴部はハの字に開く	内面：胴受部は縦方向のミガキ後、口縁部はヨコナデ後、 横方向のミガキ、胴部は斜・横方向のヘラナデ／外面： 胴受部は横方向のミガキ後、胴受部は縦方向のミガキ後、 口縁部はヨコナデ後、横方向のミガキ、胴部は横方向の ミガキ後、胴部は横方向のミガキ／3単位の透孔	赤褐色／白色粘土・赤 色粘土少量	南側上層・ 上層・下層
第36図11 図版30-11	器台	坪部 破片	□(8.5) 高2.4	口縁部は外反し、口縁 部上半の縁に僅かに 外反する	内面：横方向のヘラナデ後、縦方向のミガキ／外面：胴部 は横・斜方向のミガキ、下半は横・縦方向のヘラナデ、 内外面とも丁寧に磨かぬ処理／内外面は赤彩	ぶい褐色／砂粒少 量、赤褐色粘土少量	南側上層・ 上層・(C-2) G表土
第36図12 図版30-12	用 瓦	口縁部 破片	□(10.8) 高14.2	外上方向に開く	内外面：縦方向のミガキ後、端部ヨコナデ／外面胴部は 一帯の横紋状沈文／内外面は赤彩	ぶい褐色／石瓦・赤 色粘土少量	南側中層・上 層・G層表
第36図13 図版30-13	用 瓦	口縁部 破片	□(8.2) 高3.0	外上方向に開く	内面：横・斜方向のミガキ後、端部ヨコナデ／外面：横 方向のミガキ／内外面は赤彩	ぶい褐色／小石 瓦少量	P3・上層
第36図14 図版30-14	ミニチュア 磚	口縁部～ 底面 60%	□(3.1) 高5.2 底2.6	口縁部はやや窄まる気 味、筒部は張り胴部は 内傾する／幅状高台	内面：口縁部はヨコナデ、以下横・斜方向のヘラナデ／ 外面：斜方向のヘラナデ後、胴部下位は横・斜方向のハ ケム、底部下位は横方向のヘラナデ	ぶい黄褐色／砂粒 中量、白色粘土・赤色 粘土少量	南西側中層・ P2・横出面
第36図15 図版30-15	ミニチュア 磚	口縁部～ 底面 完全	□6.2 高6.2 底3.3	口縁部は大きく開き、 底面はくの字に凹、 胴部上半に最大径を 有する／幅状高台	内外面：斜方向のヘラナデ、口縁部はヨコナデ	褐色／砂粒中量、黄 褐色粘土少量	西側上層
第36図16 図版30-16	ミニチュア 磚	口縁部～ 底面 3.3	□5.2 高3.4 底3.6	平底の底面から外上 方向に開く、口縁部は 僅かに内傾する	内面：縦・斜方向のヘラナデ／外面：斜方向のヘラナデ 後、口縁部と体部下位は横方向のヘラナデ	明赤褐色／砂粒中量、 黄褐色粘土少量、石 瓦・赤色粘土少量	北西上層
第36図17 図版30-17	ミニチュア 不明	底面 高1.8	高1.8	平底の底面から上 方向に開く	内外面：斜方向のヘラナデ	ぶい赤褐色／石瓦 少量	下層

探検番号 図版番号	種別	種 類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	特 徴	出土位置
第36図18 図版30-18	土製品	土玉	1.9	径2.3	孔径0.7	7.2	手捏ね製形後ヘラナデ／色調はぶい褐色	東側下層
図版31-1-19	炭化種子	-	-	-	-	-	種の残／小孔なし	東側表土
図版31-1-20	炭化種子	-	-	-	-	-	種の残か	南西側下層

探検番号 図版番号	種別	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	特 徴	出土位置
図版31-1-21	磚	浮孔貝殻6面 跡散見瓦片	3.1	2.1	1.3	4.4	未貫透孔2ヵ所／孔径は3.0～3.3mm／色調はぶい褐色	上層
図版31-1-22	磚	浮孔貝殻6面 跡散見瓦片	3.3	1.6	5.8	5.8	孔なし／色調は灰赤色	上層
図版31-1-23	磚	浮孔貝殻6面 跡散見瓦片	1.9	1.1	1.8	1.8	孔なし／色調は灰赤色	下層

第12表 659号住居跡出土遺物一覧

[遺物] 上層から下層にかけて甕形土器を中心に壺・鉢・高環・器台・埴形土器などが出土した。また、住居北西側と、南壁から貯蔵穴（P3）付近にかけては完形・略完形を含む土器がまとめて出土し、住居北東部は破片が散見される。住居北西部で検出された白色粘土の塊付近では上層からミニチュア土器（第36図16）が逆位に、下層から完形の平底甕形土器（第36図1）が横倒しの状態で出土した。一方、南壁付近では床面直上で検出されたロームブロック範囲上部や中層から、完形のミニチュア土器（第36図15）が横位に、甕形土器（第36図2）が横倒しに潰れた状態で出土した。住居南東隅部の壁溝からは器台形土器（第36図10）や鉢形土器（第36図6）が割れた状態で出土した。北東側の高環形土器の破片（第90図58M-41）は656・658 Y、58 Mと遺構間接合し、本遺構の時期や遺物の残存状況から58 Mに帰属するものと判断した。

[時期] 古墳時代前期中葉。

[所見] 住居中央部北側の焼土範囲は、規模や床面の僅かな被熱状況から炉と判断するに至らなかった。本遺構は覆土の堆積や遺物の出土状態、焼土範囲の痕跡などから、意図的な廃絶行為があった可能性を含めておきたい。

[遺物]（第36図、図版30-1・31-1、第12表）

[土器]（第36図1～17、図版30-1-1～17、第12表）

1～5は甕形土器で5は小型を呈する。6は鉢形土器、7～9は高環形土器、10・11は器台形土器、12・13は埴形土器、14～17はミニチュア土器で、器形は壺・甕・鉢形などである。

[土製品]（第36図18、図版30-1-18、第12表）

18は土玉である。

[その他]（図版31-1-19～23、第12表）

19・20は炭化種子でいずれも桃の核と思われる。21～23は製塩関連遺物と考えられる穿孔貝巢穴痕跡軟質泥岩（坂本2015）である。

660号住居跡

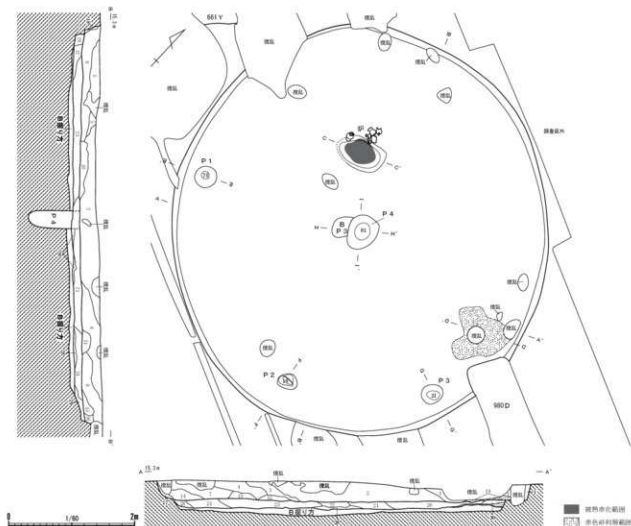
[遺構]（第37～42・44図）

[位置]（C-2）グリッド。

[検出状況] 660 Yは炉と赤色砂利層がほぼ同一位置の上下で検出され、覆土の堆積状況から上下2枚の床面を確認することができた。覆土の観察からは拡張または縮小の痕跡は確認できなかったが、本遺構は南東側にずれて建て替えられたものと考えられる。新旧関係は上部の新住居跡を660 Y-A、下部の旧住居跡を660 Y-Bとした。いずれも東側を980 Dに切れ、上部は東西方向に走る現代の耕作痕（トレンチャー）や畝状の擾乱などに壊される。

（660 A号住居跡）

[構造] 平面形：略円形。規模：長軸6.5 m／短軸6.0 m／確認面からの深さ0.3 m。壁：約70°の角度で立ち上がる。主軸方位：N-38°-W。壁溝：確認できなかった。床面：若干の硬化はあったものの、660 Y-A床面と捉えることができずに掘り進めたため、土層観察のみの確認にとどまった。炉：住居中央からやや北西寄りに位置する。平面形は楕円形を呈する地床炉であり、炉全体は被熱による赤化が著しい。規模は長軸推定80 cm／短軸63 cm／深さ16 cm。炉北側縁辺部には砂岩の自然礫が数個体まとめて置かれ、小型壺形土器が3個体（第43図2～4）横倒しの状態で出土した。貯蔵穴：確認



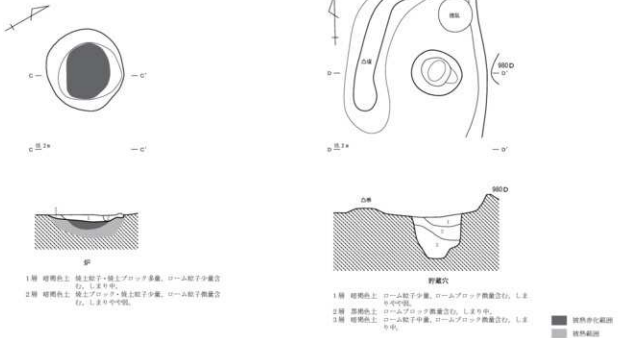
- 1層 暗褐色土 赤色砂子中量、ローム砂子中量含む、しまり中。
2層 黒褐色土 暗褐色土に夾む。赤色砂子・ローム砂子中量、ローム小ブロック少量含む、しまりやや強。
- 3層 暗褐色土 暗褐色土に夾む。ローム砂子中量、赤褐色砂子少量含む、しまりやや強。
4層 暗褐色土 ローム砂子中量、赤褐色砂子少量含む、しまり強。
5層 暗褐色土 暗褐色土に夾む。ローム砂子中量含む、しまりやや強。
6層 黒褐色土 赤褐色砂子・ローム砂子少量含む、しまり中。
7層 暗褐色土 ローム砂子中量含む、しまりやや強。
8層 黒褐色土 ローム砂子少量含む、しまり強。
9層 暗褐色土 ブロック状の暗褐色土に夾む。ローム砂子中量含む、しまり中。
10層 暗褐色土 暗褐色土に夾む。ローム砂子少量、ローム小ブロック少量含む、しまりやや強。
- 11層 暗褐色土 赤色砂子、ローム砂子少量含む、しまり強。
12層 暗褐色土 ローム砂子少量、赤色砂子・ローム小ブロック少量含む、しまり強。
13層 暗褐色土 暗褐色土に夾む。赤褐色砂子・ローム砂子少量含む、しまり中。
14層 暗褐色土 ローム砂子少量、ローム小ブロック少量含む、しまりやや強。
15層 暗褐色土 ローム砂子・ローム小ブロック少量含む、しまりやや強。
16層 褐色土 暗褐色土に夾む。しまり強。

- 17層 黒褐色土 ロームブロック主体層に暗褐色土に夾む。しまり強。
18層 褐色土 ローム砂子少量含む、しまり強。
19層 赤褐色砂質土 ローム砂子少量、黄土砂子中量、赤色砂子少量含む、しまりやや強。(赤褐色砂利層)
- 20層 暗褐色土 ローム砂子・ローム小ブロック少量含む、しまり強。(白濁土)
21層 暗褐色土 ローム砂子中量、赤褐色砂子少量含む、しまり強。(白濁土)
22層 黒褐色土 ローム砂子・ローム小ブロック少量含む、しまりやや強。(白濁土)
23層 黒褐色土 ローム小ブロック中量、ローム砂子少量、赤褐色砂子少量含む、しまり強。(白濁土)
- 24層 黒褐色土 暗褐色土に夾む。ローム小ブロック中量、赤色砂子・ローム砂子少量含む、しまりやや強。(白濁土)
- 25層 暗褐色土 ローム砂子少量、赤褐色砂子少量含む、しまり強。(白濁土)
26層 黒褐色土 ローム小ブロック少量含む、しまり強。(白濁土)
27層 黒褐色土 ローム砂子少量含む、しまり強。(白濁土)
28層 褐色土 暗褐色土に夾む。ローム小ブロック少量含む、しまり強。(白濁土)
29層 暗褐色土 ロームブロック主体層に暗褐色土に夾む。しまり強。(白濁土)
30層 暗褐色土 ローム砂子中量含む、しまりやや強。(白濁土)

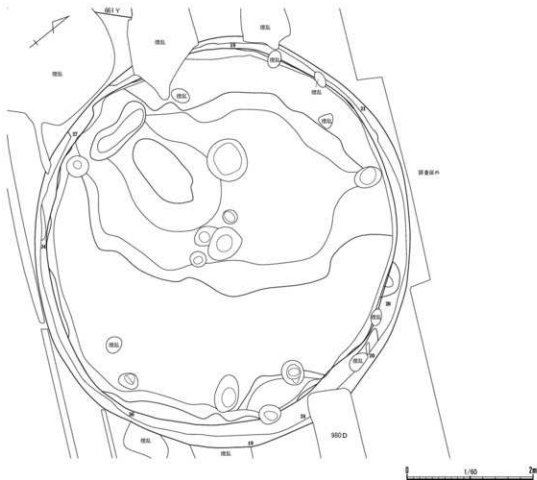
第37図 660 A号住居跡1 (1/60)

できなかった。柱穴：床面で4本のピット(P1~4)が確認された。深さはP1が75cm、P2が18cm、P3が21cm、P4が81cmである。P4は660 Y-B床面で確認されたが、660 Y-BのP3を切り、深さと住居の中心に位置することから660 Y-Aに付属する主柱穴と考えられる。赤色砂利層：南東壁際の床面直上に位置し、長さ約94cm/幅約86cmの範囲で確認された。入口施設：確認できなかった。掘り方：外周部は所々凹凸をなし、壁際から一回り小さい床面下は660 Y-Bを埋め戻して整地したものと考えられる。

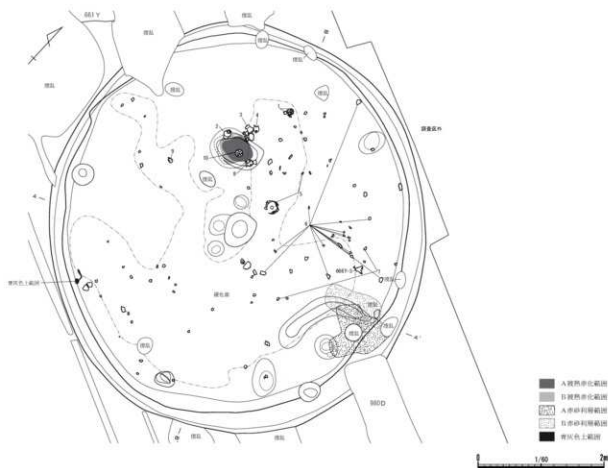
[覆土] 30層に分層され、20~30層は660 Y-Bの床面上部を埋めた土である。覆土は全体的に



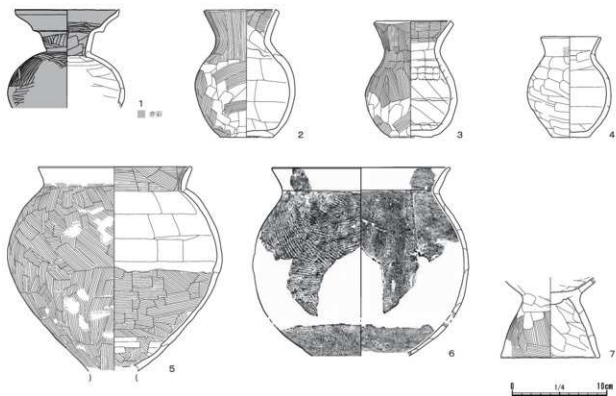
第40図 660 B号住居跡2 (1/30)



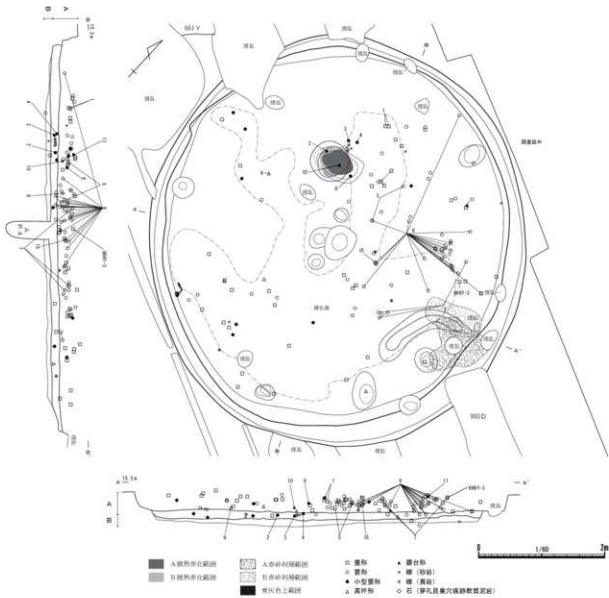
第41図 660 A・B号住居跡掘り方 (1/60)



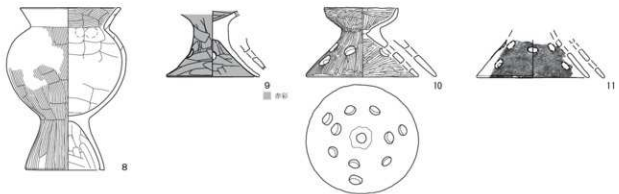
第42図 660 A・B号住居跡遺物出土状態 1 (1/60)



第43図 660号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第44図 660 A・B号住居跡遺物出土状態2 (1/60)



第45図 660号住居跡出土遺物2 (1/4)

小型を呈する。9は高環形土器、10・11は脚部に多孔の透かしがある器台形土器である。

[その他] (図版32-1-12～15, 第13表)

12～15は製塩関連遺物と考えられる穿孔貝穴痕跡軟質泥岩である。

[時期] 古墳時代前期前葉。

[所見] 土器は上層と下層、660 Y-B掘り方など上下間で接合しており、全体の様相から明確な時期差は認められなかった。このことから660 Y-AとBは僅かな期間で建て替えられたものと考えられる。

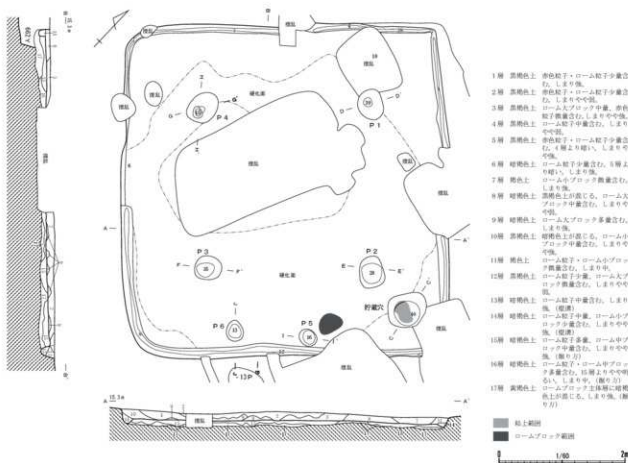
661号住居跡

遺構 (第46～48図)

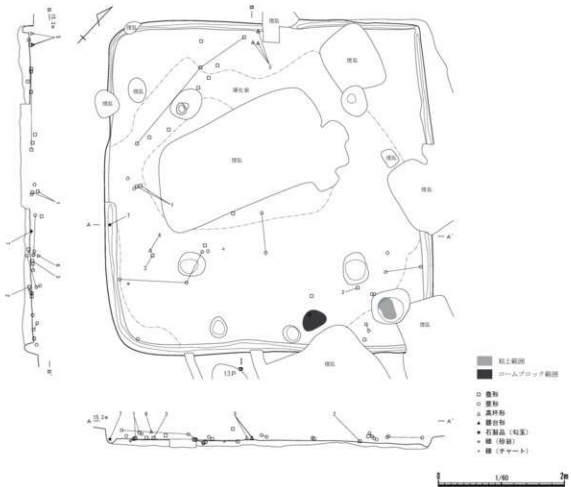
[位置] (B・C-2) グリッド。

[検出状況] 662 Yを切る。住居中央部は大きく攪乱され、住居北側から東側は東西方向に走る現代の耕作痕(トレンチャー)や畝状の攪乱などに壊される。

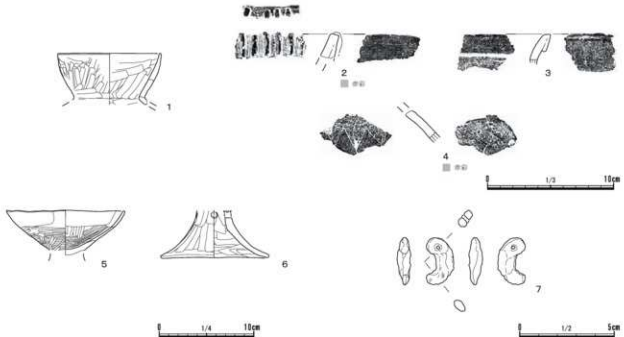
[構造] 平面形: 方形。規模: 長軸 5.2 m / 短軸 5.2 m / 確認面からの深さ 0.1 m。壁: 北・東壁は約 70°の角度で立ち上がり、その他はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位: N-44°-W。壁溝: 南西壁沿いで途切れる。それ以外は部分的に攪乱されるが、全周すると思われる。上端幅 8～20 cm / 下端幅 3～9 cm / 深さ 4～12 cm。床面: 硬化面は壁際を除き住居南東部を中心に広がり、硬く締まる。炉: 確認



第46図 661号住居跡1 (1/60)



第48図 661号住居跡遺物出土状態 (1/60)



第49図 661号住居跡出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

探検番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法 量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	附 土	出土位置	
第49図1 図版32-2-1	壺	口縁部～ 頸部 15%	口 (10.7) 高 (5.4)	瓶形・直線的に開き、 口縁端部は僅かに内 湾する	内面：横・斜方向の丁寧なヘラナデ/外面：口縁部は横・ 斜方向、頸部は横方向の丁寧なヘラナデにより滑沢	にぶい黄褐色/砂粒 少量、石膏・白色粒 子・赤色粒子微量	西側中層 ～床上	
第49図2 図版32-2-2	壺	口縁部 破片	高 [2.1] 厚 [1.2]	複合口縁部/下端部 欠損	内面：横方向のミガキ後、赤彩/外面：6個の棒状浮文	にぶい黄褐色/砂粒 少量、石膏・土質碎 片・黒色粒子微量	P2付近床上	
第49図3 図版32-2-3	壺	口縁部 破片	高 [2.4] 厚 0.6	幅広い複合口縁部	内外面：横方向のヘラナデ/外面複合口縁部は指頭押 痕が残る	褐色色/砂粒少量、白 色粒子・褐色粒子少量	P3付近床上	
第49図4 図版32-2-4	壺	肩部 破片	高 [2.5] 厚 0.6	内縮する	内面：横方向のヘラナデ/外面：1& 網文と2字状網文 2段、網文による区画後、区画内ミガキ・赤彩	にぶい黄褐色/砂粒 少量、石膏・土質碎 片、白色粒子微量	覆土中	
第49図5 図版32-2-5	高杯	杯部 45%	口 (12.3) 高 [4.7]	杯部は直線的に開き、 口縁部は僅かに内湾 する	内面：杯部は横・斜方向のミガキ後、口縁部はヨコナデ/ 外面：杯部は横方向のミガキ後、下半は縦方向のミガキ 後、口縁部はヨコナデ	明褐色/土質砕片・ 赤色粒子・砂粒少量	北西壁面下 層・掘り方	
第49図6 図版32-2-6	高杯	脚部 60%	高 [5.1] 脚 (11.2)	脚部は大きく開く	内面：横・斜方向のヘラナデ/外面：脚部はヨコナデ後、 縦方向の丁寧なヘラナデにより滑沢/透孔2ヵ所あり(4 単位か)	にぶい褐色/砂粒少 量、石膏・土質砕片・ 赤色粒子・小石微量	P3付近上 層・P3	
探検番号 図版番号	種 別	器 種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特 徴	出土位置
第49図7 図版32-2-7	石製品	勾玉	2.5	1.5	0.7	27	石材は蛍石か/形状はC字状/両面から穿孔、部分的に成層の 磨痕あり、表面は風化による凸凹割れが認められる(径1.7 mm/前部幅9.3mm、後部幅9.3mm、尾幅7.7mm/色調は透明な明オ リーブ灰色)	西壁溝上面
探検番号 図版番号	種 別	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特 徴	出土位置
図版32-2-8	遺	穿孔貝第6歯 跡軟質泥岩	2.1	1.7	1.1	2.1	貫透孔1ヵ所/孔径は3.8mm/色調は赤褐色	貯蔵穴

第14表 661号住居跡出土遺物一覧

できなかつた。貯蔵穴：住居南東隅部に位置し、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸61cm/短軸53cm/床面からの深さ40cm。遺物は土器片が数点にとどまり、上層から中層にかけて人頭大の粘土塊が出土した。柱穴：床面で4本のビット(P1～4)が確認された。P1～4は深さ28～45cmで主柱穴と考えられる。P7は掘り方で確認できた。赤色砂利層：確認できなかつた。入口施設：検出位置からP5・6と考えられる。平面形はいずれも楕円形を呈し、深さ13～16cmである。掘り方：住居全体に4～16cm程度の掘り込みを有する。

[覆 土] 17層に分層される。下層はロームブロックを多く含む土が凸凹に堆積し、P5周辺はロームブロック主体土が部分的に広がる。このことから、埋め戻されたものと考えられる。

[遺 物] 壺・甕形土器の破片は西側に多く、東側は疎らに分布する。南西壁際中央部では掘削中に石製の勾玉(第49図7)が出土した。出土位置はおさえることができたが、出土状態は不明である。

[時 期] 古墳時代前期前葉。

遺 物 (第49図、図版32-2、第14表)

[土 器] (第49図1～6、図版32-2-1～6、第14表)

1～4は壺形土器、5・6は高杯形土器である。

[石 製 品] (第49図7、図版32-2-7、第14表)

7はの蛍石製と思われる勾玉である。

[そ の 他] (図版32-2-8、第14表)

8は製塩関連遺物と考えられる穿孔貝第6歯跡軟質泥岩である。

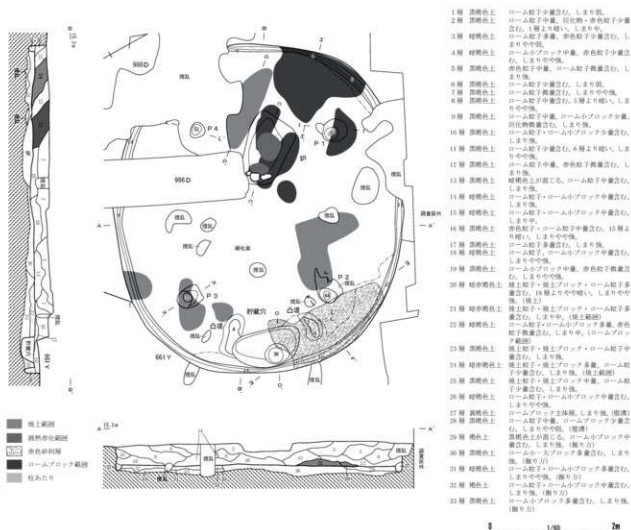
662号住居跡

遺構 (第50～53図)

[位置] (B-1・2) グリッド。

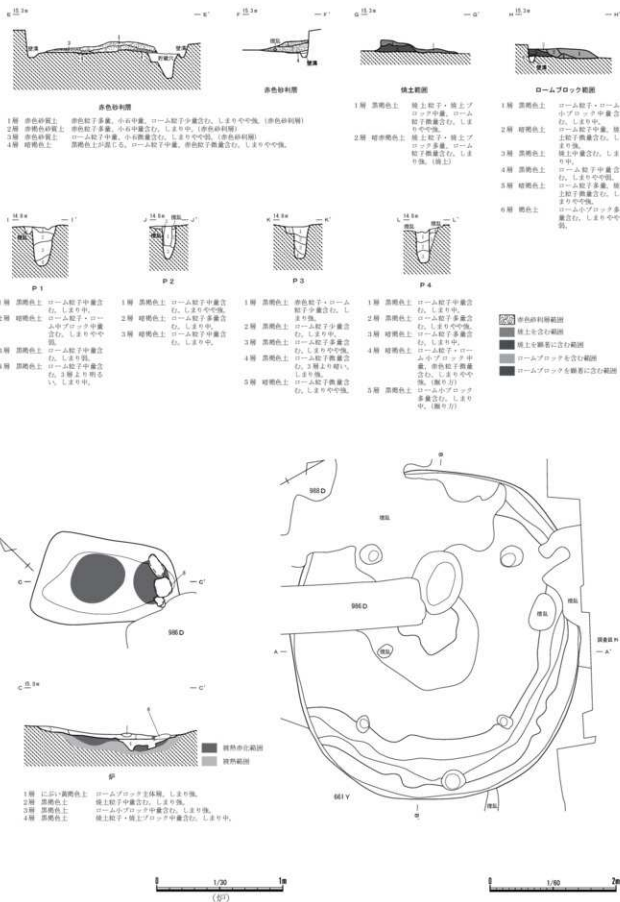
[検出状況] 986 D、661 Yに切れ、根痕による攪乱が著しい。

[構造] 平面形：楕円形。規模：長軸5.2m/短軸4.6m/確認面からの深さ0.3m。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-65°-W。壁溝：部分的に攪乱されるが全周すると思われる。上端幅7～17cm/下端幅3～7cm/深さ4～18cm。床面：硬化面は壁際を除いた住居全体に広がり、硬く締まる。炉：住居中央部からやや北西寄りに位置する。平面形は楕円形を呈する地床炉である。規模は長軸111cm/短軸66cm/床面からの深さ17cm。全体的に被熱により赤化するものの、炉の一部は壊され、掘り返しの痕跡が認められる(4層)。炉南東縁辺部に添え置かれた3点の炉石は、掘り返された覆土上部に設置されていることから、炉をつくり直した可能性がある。石3点のうち、2点は自然礫で、1点は縄文時代の台石(第54図6)を転用したものと思われる。貯蔵穴：住居南東隅部に位置し凸堤を伴う。平面形は楕円形を呈し、上部は浅いテラス状の掘り込みを有する。規模は長軸39cm/短軸33cm/床面からの深さ38cm。凸堤は貯蔵穴の北側と南側で部分的に確認でき、幅20～30cm、高さ1～6cmであ

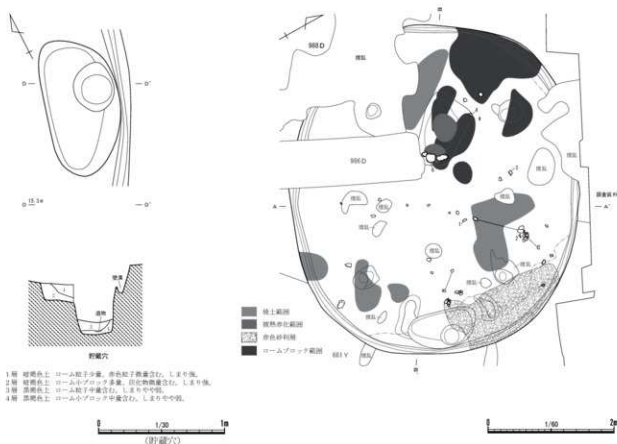


第50図 662号住居跡1 (1/50)

第3章 検出された遺構と遺物



第51図 662号住居跡2・掘り方 (1/60・1/30)



第52図 662号住居跡3・遺物出土状態1(1/60・1/30)

る。柱穴：床面で4本のピット(P1～4)が確認された。P1～4は深さ44～63cmで、支柱穴と考えられる。P1では柱あたりが確認できた。赤色砂利層：北東壁際中層から貯蔵穴上面にかけて、約16cmの厚さで斜状に堆積する。長さ190cm、幅77cmとほかの住居跡に比べて広範囲に及ぶ。入口施設：確認できなかった。掘り方：住居全体に4～17cm程度の掘り込みを有する。住居中央部はやや高く、東側は周溝状に一段低く凹む。

〔覆土〕33層に分層される。ロームブロックを多く含む層が上層から下層にかけて斜状や塊状に堆積する。住居北西部ではローム塊を含む土がブロック状に散見され、北西部壁際から中央部にかけて斜状に堆積する状態がみられることから、意図的に埋め戻されたものと考えられる。住居壁際よりやや内側では焼土を多く含むブロック状の黒褐色土が疎らにみられる。焼土範囲は下層から床面までと厚く堆積しているものの、床面に被熱の痕跡は認められなかった。

〔遺物〕下層から床面にかけて壺・甕・高坏形土器が住居全体に散見される。土器は小片が多く、小型の壺形土器(第54図2)は床面直上から潰れた状態で出土した。

〔時期〕弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭。

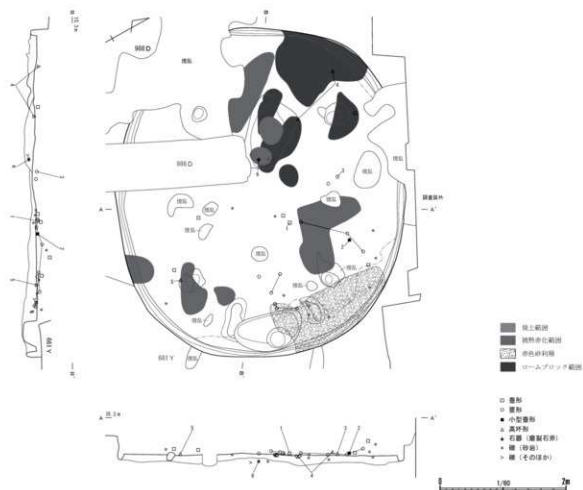
〔遺物〕(第54図、図版32-3、第15表)

〔土器〕(第54図1～5、図版32-3-1～5、第15表)

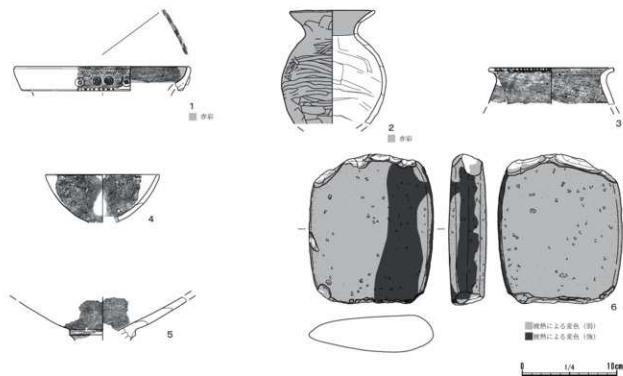
1・2は壺形土器で2が小型を呈する。3は小型甕形土器、4・5は高坏形土器である。

〔石製品〕(第54図6、図版32-3-6、第15表)

6は台石を転用した炉石である。



第53図 662号住居跡遺物出土状態2 (1/60)



第54図 662号住居跡出土遺物 (1/4)

探検番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	附土	出土位置	
第54図1 図版32-3-1	甕	口縁部 15%	□ (18.4) 高 [2.6]	複合口縁部	内面：横方向のミガキ半後、赤彩/外面：口縁部はLR横文、口縁部は短・長の羽状横文を施す。円形序文、口縁部は帆毛状工具による削み	にぶい黄褐色/砂粒中量、褐色粒子少量、石灰・赤色粒子/黄褐色粒子微量	中央下層	
第54図2 図版32-3-2	小型甕	口縁部～胴部 40%	□ (8.8) 高 [12.0]	口縁部は大きく開き、胴部はゆるやかに内曲。胴部はやや長頸形を呈する	内面：口縁部はヨコナデ、胴部は横・斜方向のヘラナデ/外面：口縁部はヨコナデ後、胴部は縦・横方向のヘラナデ/内面口縁部と外面は赤彩	黄灰色/黄褐色粒子/砂粒少量、白色粒子少量	北側下層	
第54図3 図版32-3-3	小型甕	口縁部～胴部 20%	□ (12.0) 高 [3.9]	口縁部は大きく開き、胴部はゆるやかに内曲。胴部はハの字に開く	内外面：横方向のヘラナデ/口縁部：棒状工具による削み	黄灰色土/土層砕片/砂粒少量、黒色粒子微量	北側下層・覆土中	
第54図4 図版32-3-4	高杯	杯部 20%	□ (11.7) 高 [3.0]	壊状を呈する	内面：横方向のヘラナデ/外面：斜方向のハケメ後、下半は横・斜方向の丁寧なヘラナデにより磨削	にぶい黄褐色/砂粒中量、褐色粒子少量、石灰・黒色粒子微量	北西側下層	
第54図5 図版32-3-5	高杯	杯部～接合部 15%	高 [4.6]	杯部は直線的に大きく開く、接合部は凸凹が可く	内面：横・斜方向のミガキ/外面：斜方向のミガキ半後、凸部部はヨコナデ	にぶい黄褐色/砂粒中量、土層砕片少量、石灰・小石微量	P3 付近近土上	
探検番号 図版番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第54図6 図版32-3-6	台石	閃緑岩	15.8	13.2	4.0	1,401.2	素材は扁平薄/両端に加工が施される/磨痕・磨打痕等の使用面跡は両面観察で確認できなかった	662Y 炉直上

第15表 662号住居跡出土遺物一覧

663号住居跡

遺 構 (第55～57図)

[位 置] (C・D-3) グリッド。

[検出状況] 1000 Dを切り、978・979 D、57 Mに切られる。東西方向に走る現代の耕作痕(トレンチャー)や住居北側から南側にかけては大きな攪乱が入り、遺存状態は良好でない。

[構 造] 平面形：長方形。規模：長軸5.1m/短軸4.2m/確認面からの深さ0.05m。壁：確認できなかった。主軸方位：N-52°-W。壁溝：確認できる限り全周する。上端幅10～19cm/下端幅2～10cm/深さ1～9cm。床面：全体的にやや硬いが、硬化面は住居中央部と南西側のみで部分的に確認できた。炉：住居中央部からやや北西寄りに位置する。炉北側から東側は攪乱されるが、平面形は楕円形を呈するものと推定される。規模は長軸56cm以上/短軸41cm以上/床面からの深さ15cm。地床炉で、全体的に被熱による赤化が認められる。炉の西側床面直上には攪乱の影響で攪拌されたためか、焼土が散っている様相がみられた。貯蔵穴：住居南隅部に位置し、平面形は円形を呈する。規模は長軸62cm/短軸58cm/床面からの深さ40cm。上部から幅3cm程度の白色粘土が検出され、中層から完形の埴形土器(第58図2)が2つに割れた状態で出土した。柱穴：床面で2本のピット(P1・P2)が確認された。深さはP1は45cm、P2が28cmで、P1は深さから支柱穴と考えられる。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：確認できなかった。掘り方：住居全体に2～13cm程度の掘り込みを有する。

[覆 土] 13層に分層される。

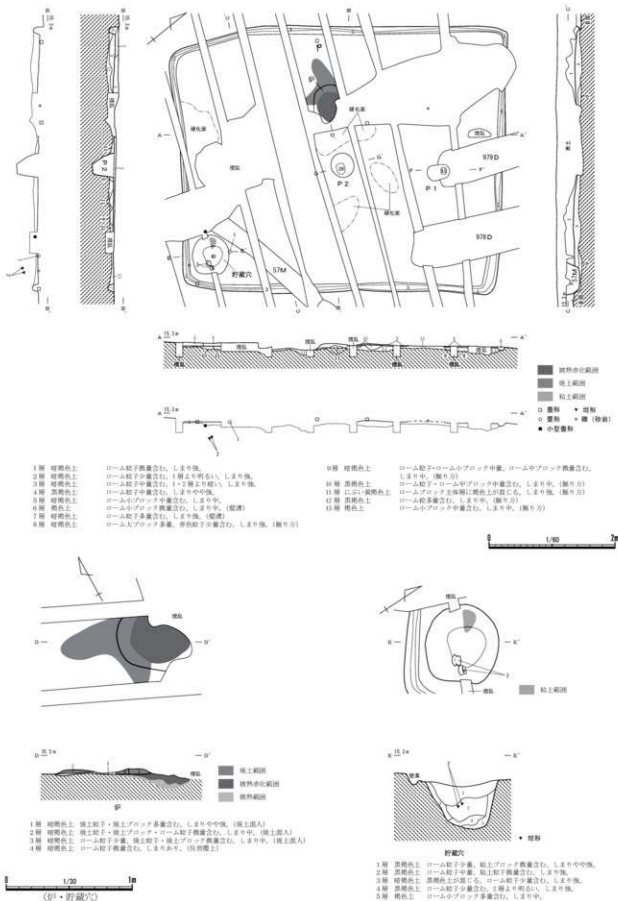
[遺 物] 住居北西側と貯蔵穴付近から壺・甕・埴形土器の破片が出土した。

[時 期] 古墳時代前期中葉～後葉。

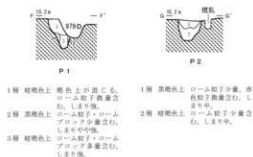
遺 物 (第58図、図版33-1、第16表)

[土 器] (第58図1・2、図版33-1-1・2、第16表)

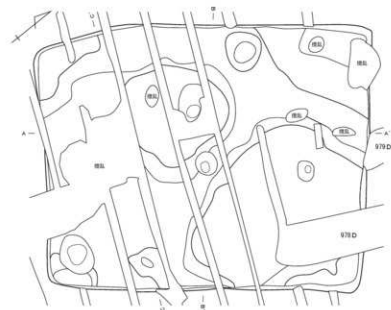
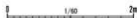
1は甕形土器、2は埴形土器で貯蔵穴からの出土である。



第55図 663号住居跡1 (1/60・1/30)



第56図 663号住居跡2 (1/60)



第57図 663号住居跡掘り方 (1/60)



第58図 663号住居跡出土遺物 (1/4)



発掘番号 採取番号	種類	部位 遺存状態	法 量 (cm)	形状・形態	文様・調整等	胎 土	出土位置
第58図1 図版33-1-1	甕	底部 60%	底 5.4 高 (2.5)	やや丸底を呈する/ 内底面中央部は凸む	内外面：横方向のハケメ	褐色/赤褐色粒子・砂 粒少量、黒色粒子微量	貯蔵穴上面
第58図2 図版33-1-2	甕	口縁部→ 底部 靴底形	口 11.3 高 5.5 底 3.1	口縁部は外方向に大 きく傾き、体面はゆる やかに内傾する。外底 面は僅かに膝筒状を 呈する	内面：口縁部はヨコナ字後、斜方向のミガキ、体部→底 部は横・斜方向のミガキ/外面：口縁部はヨコナ字後、 斜方向のミガキ、括弧部は一条の浅彫文を施した後、体部 →底部は横・斜方向のミガキ/内外面は凸彫	に濃い褐色/黒色粒 子・赤色粒子・褐色粒 子・小石微量	貯蔵穴下 層・貯蔵穴

第16表 663号住居跡出土遺物一覧

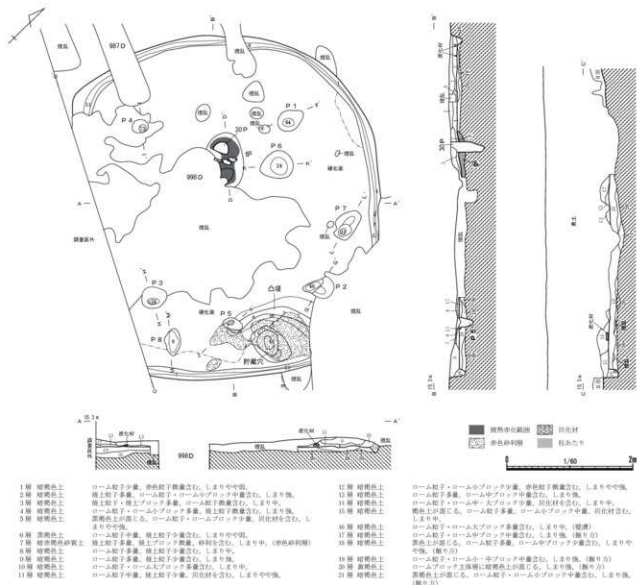
664号住居跡

遺 構 (第59～63図)

[位 置] (A・B-3) グリッド。

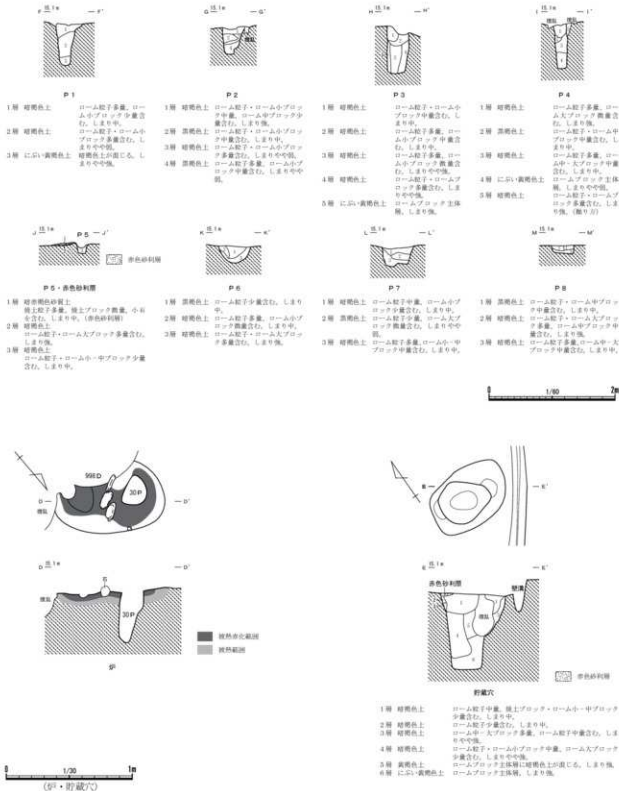
[検出状況] 987・998 D、30 Pに切れられ、住居南西側は調査区外へ延びる。住居中央部と東側は大きく攪乱される。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸 5.4 m / 短軸 4.5 m 以上 / 確認面からの深さ 0.1 m。壁：約 60°の角度でやや緩やかに立ち上がる。主軸方位：N-48°-W。壁溝：確認できた限り全周する。上端幅 11～20 cm / 下端幅 1～6 cm / 深さ 3～10 cm。床面：硬化面は壁際を除き住居全体に広がり、硬く縮まる。下層から床面直上にかけては焼土が住居全体に散見され、炭化材が壁際沿いや壁際から中央部に向かって放射状に検出された。炭化材は 8 点のサンプルを採取し、樹種は全てコナラ垂属クヌギ節であった。分析結果は第 4 章第 1 節を参照されたい。また、炭化材サンプルのうち最も良好な炭化材 (№

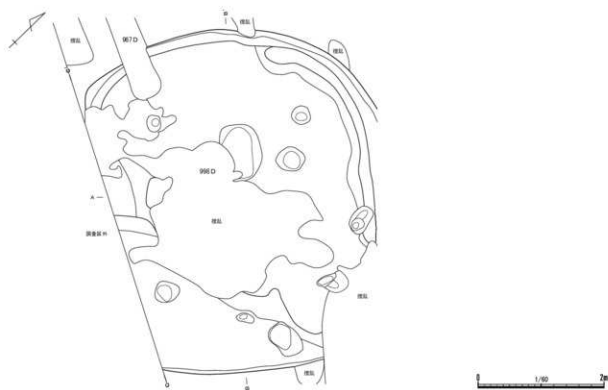


第59図 664号住居跡1 (1/60)

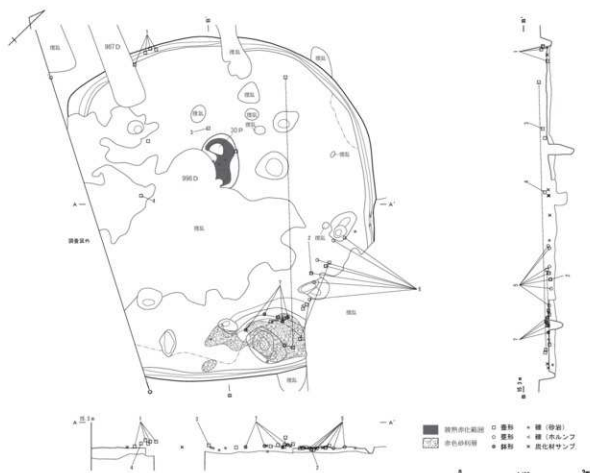
1) のウィグルマッチング法による年代測定を行ったところ、暦年代範囲は 154 ~ 237calAD を示した。詳細は第4章第2節を参照されたい。炉：中央からやや北西寄りに位置する。炉東側から南側は攪乱されるが、平面形は楕円形を呈するものと推定される。地床炉で、全体的に被熱による赤化が認められる。



第60図 664号住居跡2 (1/60・1/30)



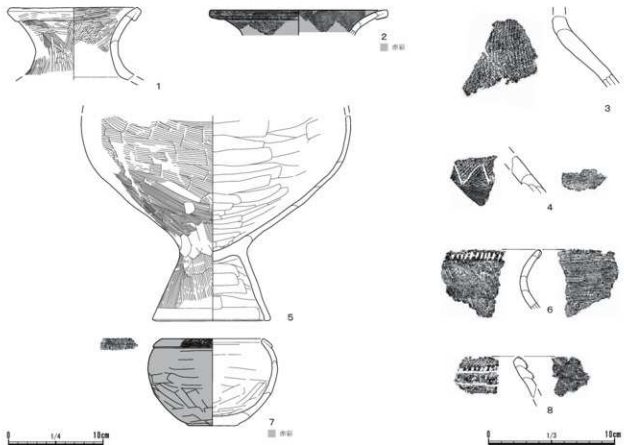
第61図 664号住居跡掘り方(1/60)



第62図 664号住居跡遺物出土状態1(1/60)



第63図 664号住居跡遺物出土状態 2 (1/60)



第64図 664号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

検出番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法 量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	附 土	出土位置
第64図1 図版33-2-1	甌	口縁部～ 腹部 60%	□ 13.5 高 7.7	幅狭の複合口縁部/ 口縁部は筒状、頸部 はゆるやかに屈曲 する	内面：横・斜方向のハケメ後、口縁部は横方向のミガキ、 腹部は縦・斜方向のミガキ/外面：口縁部は横方向のミ ガキ、頸部は斜方向のハケメ後、上段は横・斜方向、下 段は縦方向のミガキ	にぶい黄褐色/灰黄褐 色/砂粒中量、土器 砂片・白色粒子少量、 石炭微塵	西壁際中～下 層・覆土中
第64図2 図版33-2-2	甌	口縁部～ 腹部 20%	□ 18.4 高 2.7	幅狭の複合口縁部/ 口縁部は逆ハの字に 開く	内面：横方向のミガキ/外面：口縁部は横方向のヘラナ デ、首部押仕籠が残る。頸部は斜方向のハケメ後、ミガ キ/内外面は赤彩	にぶい黄褐色/砂粒 中量、土器砂片・土器 砂片少量、白色粒子少 量、白色粒子少量	東側床上
第64図3 図版33-2-3	甌	胴部 破片	高 [6.5] 厚 1.2	内蔵する	内面：横方向のヘラナデ/外面：縦方向のハケメ後、粘 薬による付加条LR・RLの引状縄文	成黄褐色/砂粒中～ 多量、土器砂片・赤色 粒子、赤色粒子少量	付付近下層
第64図4 図版33-2-4	甌	胴部 破片	高 [3.6] 厚 0.6	外蔵する	内面：横方向のヘラナデ/外面：LR・RLの引状縄文、2 条のS字状結節文を施文後、沈線による副文、結節文 以下横方向のミガキ、副文以下は赤彩	にぶい黄褐色/土器 砂片少量、石炭・炭塵	南側下層
第64図5 図版33-2-5	甌	胴部～ 腹部 40%	高 [21.6] 台 [11.7]	台径豊/胴部下半は やや高線状に窄まり、 台部はハの字に開く	内面：横方向のヘラナデ/外面：胴部中心は横・下半は 斜方向のハケメ、接合部は縦方向のヘラナデ、台部は縦 方向のハケメ、基部はココナデ/外面のハケメは浅く、 部分的にヘラナデが認められる/胴部中心は帯状に保存 する	にぶい褐色/土器砂 片中量、砂粒少量	東側床上・ 貯蔵穴・覆 土中・34P・ B-36r表土
第64図6 図版33-2-6	甌	口縁部 破片	高 [4.7] 厚 0.6	ゆるやかに屈曲する	内面：横・斜方向のハケメ/外面：斜方向のハケメ後、 端部は刷毛状工具による削み	にぶい黄褐色/砂粒 中～多量、石炭・赤色 粒子・褐色粒子少量	貯蔵穴
第64図7 図版33-2-7	鉢	胴部～ 底部 40%	□ [10.7] 高 9.2 底 (5.2)	折り返し口縁部/内 蔵する	内面：横・斜方向のヘラナデ/外面：口縁部はLR・RL の引状縄文、体部は横・斜方向ヘラナデ/口縁部と外面 は赤彩	成黄褐色/白色粒子・ 成褐色粒子・砂粒中量	凸堤付近下層 ～床上・覆土中
第64図8 図版33-2-8	鉢	口縁部 破片	高 [3.4] 厚 0.7	折り返し口縁部/僅 かに内蔵する	内面：横方向のミガキ後、赤彩/外面：2段の折り返し、 上段はLR縄文・下段はRL縄文を施文後、上下段下端部 は削み、以下横方向のミガキ	にぶい黄褐色/砂粒 中量、石炭・成褐色粒 子・赤色粒子微量	遺構内段瓦

第17表 664号住居跡出土遺物一覧

規模は長軸 85cm以上/短軸 58cm以上/床面からの深さ 10cm。砂岩の自然礫 3点が中央部に置かれ、礫は被熱により表面は赤化しており、間仕切りの役割を果たしていた可能性がある。貯蔵穴：住居南東部に位置し弧状の凸堤を伴う。平面形は楕円形を呈し、貯蔵穴北東部にはテラス状の凹みを有する。規模は長軸 65cm/短軸 46cm/床面からの深さ 48cm。凸堤は貯蔵穴西側に位置し、幅 28～36cm/高さ 2～6cmでめぐる。柱穴：床面で7本のピット（P1～4、P6～8）が確認された。P1～4は深さ 40～74cmで、支柱穴と考えられる。P3では柱あたりが確認できた。赤色砂利層：貯蔵穴上面に位置し、長さ 152cm/幅 78cmのやや広い範囲で確認できた。入口施設：P5と考えられ、凸堤を切って構築される。平面形は楕円形を呈し、深さ 22cmである。掘り方：住居全体に 5～18cm程度の掘り込みを有し、北西壁際から中央部は一段深く凹む。

〔覆 土〕 21層に分層される。全体的に焼土やローム粒子・ロームブロックが含まれ、下層から床面直上にかけては炭化材が確認できた。

〔遺 物〕 壺・甕形土器の破片が多く、遺物量は少ないものの分布は北東部に集中する。

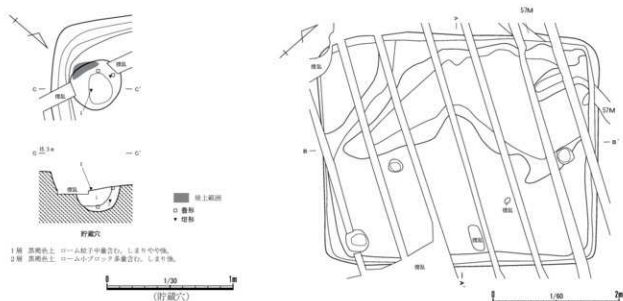
〔時 期〕 弥生時代後期末葉。

〔所 見〕 焼土は床面で被熱の痕跡が確認できた。床面の検出状況や覆土の観察、炭化材や遺物の出土状態から本遺構は焼失住居と考えられる。

〔遺 物〕 (第64図、図版33-2、第17表)

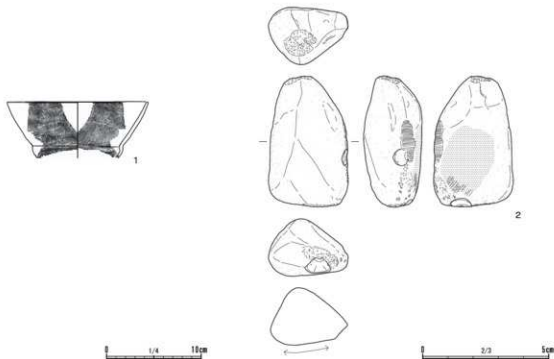
〔土 器〕 (第64図1～8、図版33-2-1～8、第17表)

1～4は壺形土器、5・6は甕形土器、7・8は鉢形土器である。



1層 赤褐色土、ローム粘土中層を含む、しまりや中強。
2層 赤褐色土、ローム小ブロック多量を含む、しまり強。

第66図 665号住居跡2・掘り方(1/60・1/30)



第67図 665号住居跡出土遺物(1/4・2/3)

探検番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	胎土	出土位置	
第67図1 図版33-3-1	埴	口縁部～ 体部 15%	口(14.7) 高(6.0)	口縁部は外方向に大 きく開く	内面：口縁部は横方向のミガキ後、底部はヨコナデ。体 部はヘラナデ/外面：斜方向の丁寧なヘラナデにより滑 沢。口縁部はヨコナデ。括れ部は横方向のミガキ	赤い褐色/黒褐色 粒子・白色粒子少量	貯蔵穴上面	
探検番号 図版番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第67図2 図版33-3-2	観石	砂岩	10.3	6.3	4.6	397.7	素材は横断面三角形状の緑泥質/高層に割打痕、右側縁に鋭角 状の磨痕、裏面に磨痕が見える	南側土層
探検番号 図版番号	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
図版33-3-3	炭化種子	-	-	-	-	-	穂の残か/小孔なしか	南西壁際土層

第18表 665号住居跡出土遺物一覧

〔覆 土〕6層に分層される。

〔遺 物〕壺・甕形土器の破片が多く、高坏・埴形土器のほか、石器1点が出土した。全体的に遺物量は少ないものの、分布は西壁際に集中している。

〔時 期〕古墳時代前期中葉～後葉。

〔所 見〕住居中央部で検出された2か所の焼土範囲は、床面に僅かな被熱の痕跡が確認できたことから一時的な利用があったと考えられる。

〔遺 物〕(第67図、図版33-3、第18表)

〔土 器〕(第67図1、図版33-3-1、第18表)

1は埴形土器である。

〔石 製 品〕(第67図2、図版33-3-2、第18表)

2は砂岩製の敲石である。

〔そ の 他〕(図版33-3-3、第18表)

3は桃の核と思われる炭化種子である。

666号住居跡

〔遺 構〕(第68～71図)

〔位 置〕(C-3・4)グリッド。

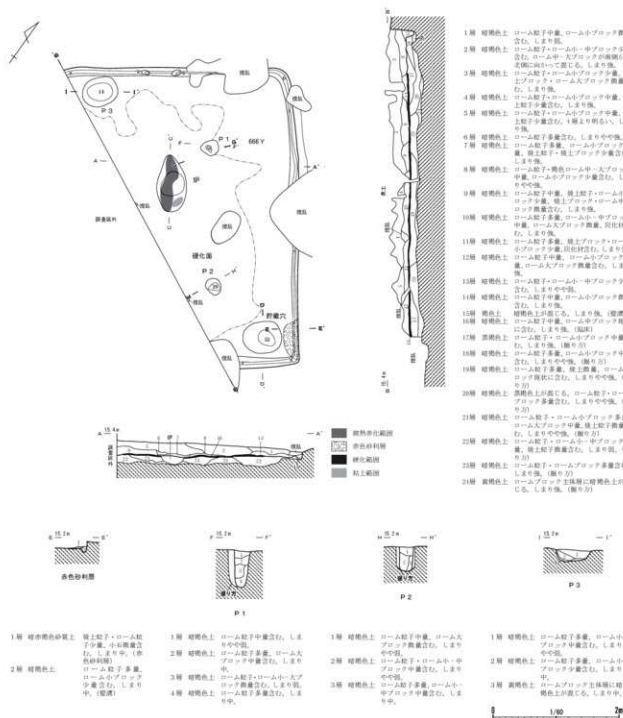
〔検出状況〕北側から南側は部分的に攪乱され、住居南西側は調査区外へ延びる。

〔構 造〕平面形：長方形。規模：長軸4.7m/短軸3.4m以上/確認面からの深さ0.3m。壁：ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-38°-W。壁溝：確認できる限り全周する。上端幅10～18cm/下端幅2～5cm/深さ4～9cm。床面：壁際を除き、ほぼ全面に貼床が2～3cmの厚さで構築される。

炉：住居中央部からやや北西寄りに位置し、楕円形を呈する。規模は長軸91cm/短軸47cm/床面からの深さ14cm。炉南東縁辺の一部に幅4cm程度の白色粘土が検出され、被熱による赤化は部分的に認められる。貯蔵穴：住居南東隅部に位置し、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸61cm/短軸50cm/床面からの深さ53cm。壺形土器の口縁部が横位の状態で出土した。柱穴：床面で3本のピット(P1～3)が確認された。深さはP1が56cm、P2が39cm、P3が14cmで、P1・2は主柱穴と考えられる。赤色砂利層：東壁際の床面直上から長さ約66cm/幅約27cmの範囲で確認できた。入口施設：確認できなかった。掘り方：住居全体に11～24cm程度の深さの掘り込みを有し、壁際沿いに一段深くになるが、北西壁や南壁沿いは北東壁沿いより深く凹む。

〔覆 土〕24層に分層される。締りが強く、ローム粒子・ロームブロックを含む層が厚く堆積し、下層から床面直上にかけては焼土や炭化材を含む。

〔遺 物〕壺・甕形土器が多く、鉢・高坏形土器やミニチュア土器も出土した。分布は住居全体にみられ、下層から床面直上にかけての出土が多い。住居中央部から南東側は下層から床面直上にかけて、焼土や炭化材が検出された。焼土は散見して確認でき、炭化材は住居壁際から中央部に向かってやや放射状に見える。炭化材は3点のサンプルを採取し、樹種はコナラ亜属クヌギ節とコナラ亜属コナラ節の2種類に同定された。P2付近と遺構中央部西壁際の材はクヌギ節、遺構中央部東側の炭化材はコナラ節でいずれも建物の構造材と考えられる。樹種同定の分析結果は第4章第1節を参照されたい。住居内の遺物接合関係は良好で、3の壺形土器(第72図3)は住居内全体での接合と、660Yとの遺構間接合



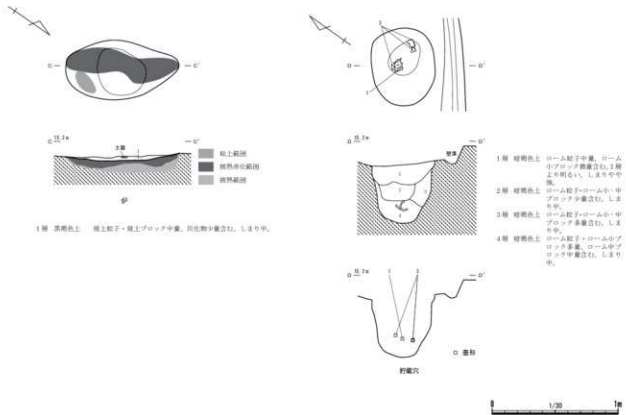
第 68 図 666 号住居跡 1 (1/60)

が特筆される。

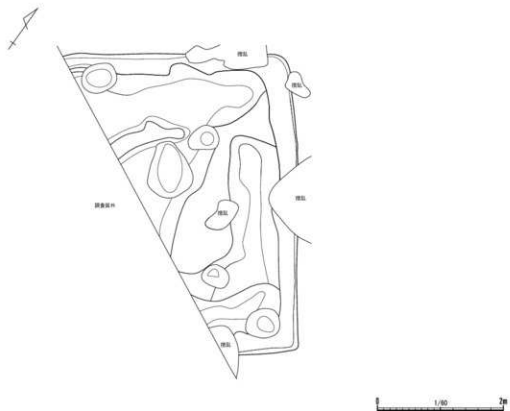
[時期] 古墳時代前期中葉。

[所見] 床面で被熱の痕跡が僅かに確認できた。床面の検出状況や覆土の観察、炭化材や遺物の出土状態から本遺構は焼失住居と考えられる。なお、3の壺形土器は同一個体と思われる破片を含めて住居全体に満遍なくみられることから、意図的な廃絶行為であった可能性も考慮しておきたい。

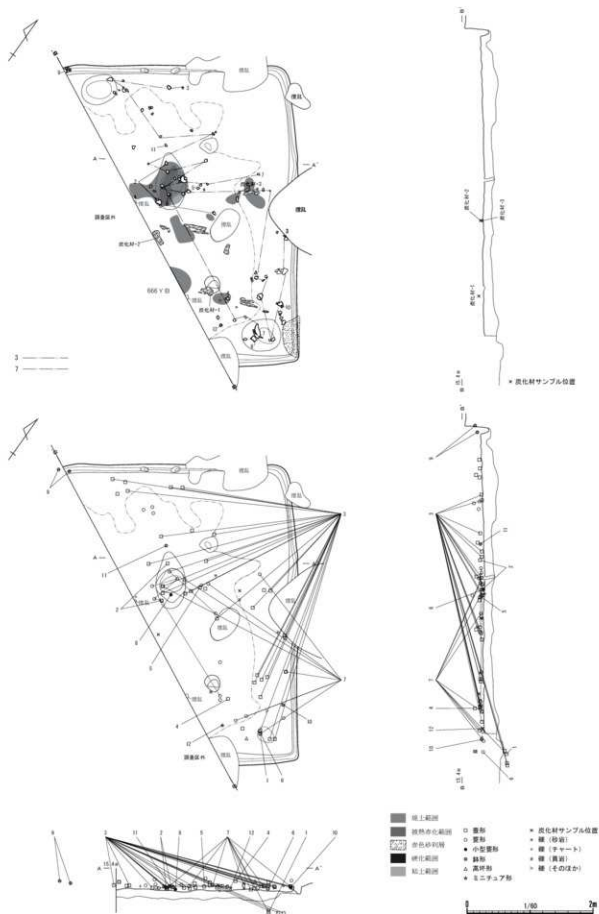
遺物 (第72図、図版34-1、第19表)



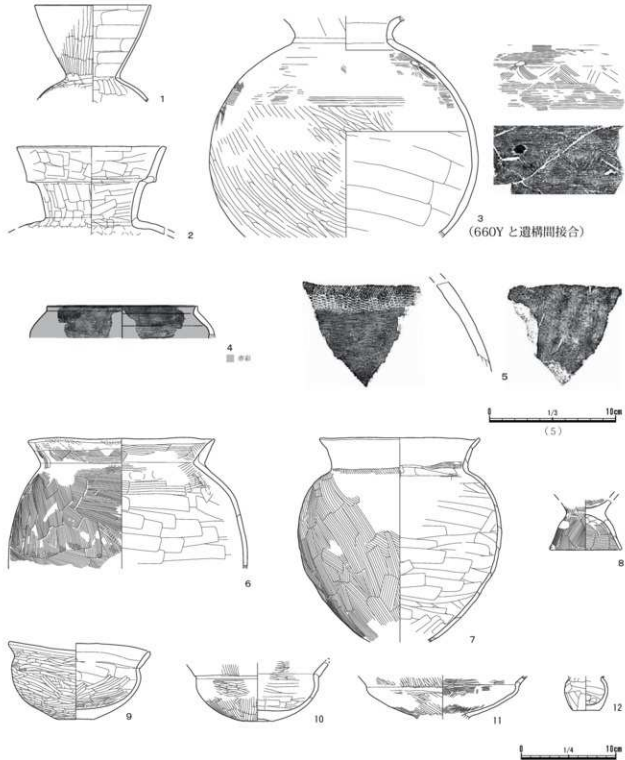
第69図 666号住居跡2 (1/30)



第70図 666号住居跡掘り方 (1/60)



第71図 666号住居跡遺物出土状態 (1 / 60)



第72図 666号住居跡出土遺物(1/4・1/3)

〔土器〕(第72図1～12、図版34-1-1～12、第19表)

1～5は壺形土器で2は二重口縁壺、3はバレス文様が形骸化しており、4の口縁部は広口と思われる。6～8は甕形土器で、8は小型を呈する。9～11は鉢形土器で、9・10は器形が類似しており、10は丁寧なつくりである。11は底部を欠損しており、器形から鉢形とした。12はミニチュア土器で口縁部は欠損するが甕形土器を模倣しているものと思われる。

探検番号 図版番号	跡種	部位 遺存状態	法 測 (cm)	形状・形態	文様・調整等	附 土	出土位置
第72図1 図版34-1	竪	口縁部～ 肩部 60%	□ 122 高 10.3	口縁部は僅かに内湾しながら開く	内面：横方向のヘラナデ。肩部は縦方向のヘラナデ、以下は横・斜方向のヘラナデ/外面：縦方向のミガキ、胴部は横・斜方向のヘラナデ。肩部は斜方向のミガキ	ぶい・褐色/砂粒少量、赤色砂子・褐色粒子少量	貯蔵穴下層
第72図2 図版34-2	竪	口縁部～ 肩部 15%	□ (15.0) 高 9.3	二重口縁部/肩部はやや直立気味に立ち上がり、口縁有段部はくの字に凹曲	内面：横・斜方向のハケメ後、横・斜方向の丁寧なヘラナデ。肩部は縦方向のヘラナデ、指状部は僅かに湾る/外面：口縁部は横方向、胴部は縦方向、肩部は斜方向の丁寧なヘラナデ	褐色/砂粒・白色粒子少量、白色砂子・褐色粒子少量、石灰・白土	伊付近下層・伊・覆土中
第72図3 図版34-3	竪	胴部～ 底部 60%	高 [23.4]	胴部はゆるやかに凹曲、胴部は球形を呈する	内面：横方向のヘラナデ/外面：胴部は縦方向のヘラナデ、胴部上半は数毫米単位の横線文・縦線文・指状付文、胴部下半は斜方向のミガキ/胴部中心は僅かに窪む	褐色/砂粒やや多量、赤土・黒土・黒色粒子少量、白色砂子・褐色粒子少量、石灰・白土	全体下層・伊・貯蔵穴・灰直土・黒り方・覆土中・遺構内層丸
第72図4 図版34-4	広口竪	口縁部～ 肩部 10%	□ (15.8) 高 3.4	口縁部は直立気味に立ち上がり、胴部は張る	内面：胴部は横方向のヘラナデ後、口縁部はヨコナデ/外面：胴部は横方向の丁寧なヘラナデ後、口縁部はヨコナデ/内外面は赤銅	ぶい・褐色/砂粒少量、赤色砂子少量	南東部下層・覆土中
第72図5 図版34-5	竪	胴部 碗片	高 [7.2] 径 0.9	やや内湾する	内面：横・斜方向のヘラナデ/外面：上からLR調整文・指状部調整文、縦方向のミガキ/調整部は3.8mmの円形調整文、調整部は赤銅	褐色/黒色粒子少量、白色砂子・褐色粒子・小石少量	中央東側下層
第72図6 図版34-6	竪	口縁部～ 胴部 50%	□ (19.5) 高 13.8	口縁部は立直気味に開き、胴部はくの字に凹曲、胴部は張る	内面：口縁部～胴部は横、斜方向のハケメ後、口縁部上端はヨコナデ、胴部に指状部調整が見える。胴部は縦方向のヘラナデ/外面：胴部は横・斜方向のハケメ後、口縁部はヨコナデ、胴部は多方向のハケメ	ぶい・赤褐色/砂粒少量、赤褐色/黒色粒子少量、赤色砂子少量、石灰・白色粒状物微量	貯蔵穴付近下層・遺構内層丸
第72図7 図版34-7	竪	口縁部～ 胴部 25%	□ (16.6) 高 12.15	口縁部は開き、胴部はくの字に凹曲、胴部は張り、胴部は窄まる	内面：口縁部は横方向のハケメ後、ヨコナデ、胴部は横・斜方向のヘラナデ/外面：括れ部は横方向のハケメ後、口縁部はヨコナデ、胴部は斜方向のハケメ/外面胴部は部分別に調整する	明赤褐色/砂粒少量、赤色砂子少量	南東部一帯下層・床直土・貯蔵穴
第72図8 図版34-8	小形碗	台部 60%	高 [5.3] 径 7.6	付付内湾し、胴部はやや開く	内面：胴部は斜方向のハケメ、底部は横方向のヘラナデ、胴部は横方向のヘラナデ、胴部は横方向のハケメ後、胴部は斜方向のハケメ	褐色/砂粒やや多量、口縁部・赤色砂子・褐色粒子少量	伊付近下層・伊・覆土中
第72図9 図版34-9	鉢	口縁部～ 底部 碗片半	□ 14.7 高 8.0 底 3.7	口縁部は外傾し、体部はゆるやかに内湾する。外面は僅かに唇部突起を呈する	内面：横方向のヘラナデ後、口縁部はヨコナデ、体部～底部は横・斜方向のミガキ/外面：斜方向のハケメ後、横方向のミガキ、口縁部はヨコナデ/外底部は半分は部分別に調整が見える	褐色/砂粒少量、石灰・白色砂子・褐色粒子・小石少量	西壁遺土直・覆土中
第72図10 図版34-10	鉢	口縁部～ 底部 50%	高 [6.7] 底 3.0	口縁部上端は欠部、口縁部は外傾し、体部はゆるやかに内湾する。外面には唇部突起が見える	内面：体部は横方向のヘラナデ後、口縁部は横方向のミガキ/外面：口縁部は縦方向のミガキ、括れ部は一条の沈線文。体部上半は横方向、下半～底部は縦方向のミガキ	ぶい・赤褐色/石灰・白色砂子・褐色粒子少量	南東部下層・伊・覆土中
第72図11 図版34-11	鉢	杯部 40%	高 [4.7]	口縁部上端は欠部、杯部は浅く、上半は外方向に開き、下半は直線状に窄まる	内面：括れ部は斜方向のハケメ後、口縁部は横方向のミガキ/外面：口縁部は縦方向のミガキ/外面：口縁部は縦方向のミガキ、括れ部は横・斜方向のミガキ	ぶい・赤褐色/白色砂子中量、赤色砂子少量	伊付近下層・籠り方・覆土中・調整文
第72図12 図版34-12	ミニチュア 壺か	胴部～ 底部 碗片	高 [3.6] 底 2.8	平底/胴部は内湾する	内面：横・斜方向のヘラナデ。底部は指状部調整が見える。胴部は横方向のヘラナデ	ぶい・褐色/白砂粒少量、黄褐色粒子・砂粒微量	南東部下層

第19表 666号住居跡出土遺物一覧

667号住居跡

遺 構 (第73・74図)

[位 置] (B・C-3・4) グリッド。

[検出状況] 57 M、33 Pに切られる。住居北側の一部は攪乱され、住居南側は調査区外へ延びる。発掘調査時、西壁際は溝跡と認識していたが、調査の過程で住居の掘り方の可能性が高くなった。周辺の精査を進めたところ、床面が削られた状態であることが判明した。

[構 造] 平面形：長方形。規模：長軸4.1 m/短軸3.3 m以上/壁際の覆土の高さ0.2 m。壁：確認できなかった。主軸方位：N-4°-E。壁溝：確認できる限り全周する。上端幅11～17 cm/下端幅5～8 cm/深さ4～11 cm。床面：遺存状況は良好でない。住居北東部の床面直上から焼土範囲は確認できたが、床面で被熱の痕跡は認められなかった。炉：確認できなかった。貯蔵穴：住居南東隅部に位置し、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸65 cm/短軸48 cm/床面からの深さ46 cm。中層から甕形土器が出土した。調査区南壁面では幅40 cm/高さ13 cm程度の高まりを確認できたことから、貯蔵穴西側に凸堤を伴う可能性がある。柱穴：確認できなかった。赤色砂利層：確認できなかった。入口施設：確認でき

なかった。掘り方：住居全体に5～26cm程度の深さの掘り込みを有し、西壁沿いは溝状に深く凹む。

〔覆土〕16層に分層される。住居の覆土は調査区南壁面の観察にとどまる。

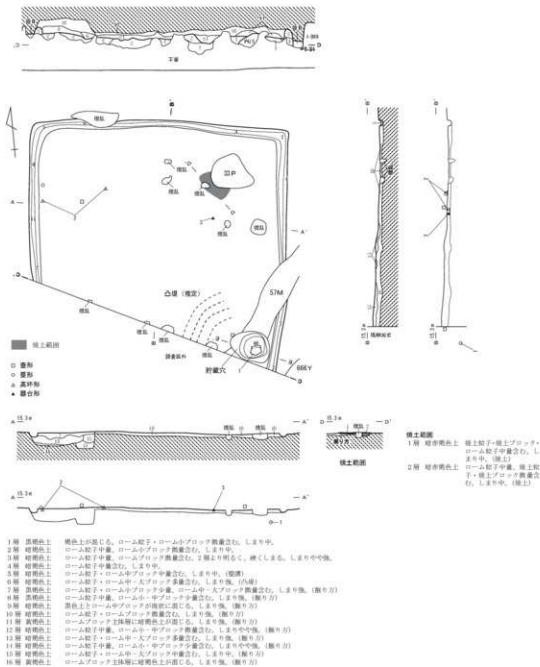
〔遺物〕いずれも破片で、甕形土器のほか、壺・高環・器台形土器が出土している。

〔時期〕古墳時代前期。

〔遺物〕(第75図、図版35-1、第20表)

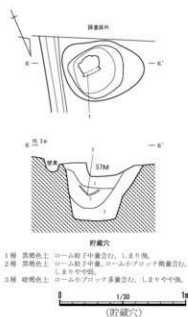
〔土器〕(第75図1～3、図版35-1-1～3、第20表)

1は甕形土器、2は高環形土器、3は器台形土器である。

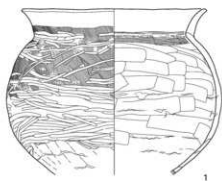
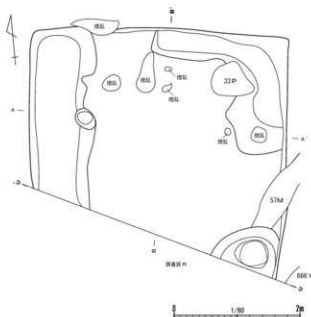


第73図 667号住居跡1 (1/50)

第3章 検出された遺構と遺物



第74図 667号住居跡2・掘り方 (1/60・1/30)



第75図 667号住居跡出土遺物 (1/4)

検出番号 採取番号	器種	部位 保存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	胎土	出土位置
第75図1 図版 35-1-1	甕	口縁部～ 胴部 40%	口 (19.2) 高 [17.5]	口縁部は外反し、胴部はくの字に傾曲、胴部は傾斜を呈する	内面：胴部は横方向のハケメ後、口縁部はヨコナデ、胴部は縦方向のヘラナデ/外面：縦・斜方向のハケメ後、口縁部はヨコナデ、胴部・胴部は横方向のミガキ、胴部下位は顔面が剥離し、縦方向のヘラナデ整形か	赤褐色/土器碎片・砂粒少量、石炭微量	貯蔵穴中層・貯蔵穴
第75図2 図版 35-1-2	高杯	杯部 25%	口 (12.0) 高 (4.2)	内開し、口縁部は外方に開く	内外面：横方向のヘラナデ後、内面一部に縦方向のミガキ、口縁部はヨコナデ	赤褐色/土器碎片・砂粒少量、褐色砂粒少量、赤色砂粒微量	北西部床土層～掘り方
第75図3 図版 35-1-3	甕付	胎受部 40%	口 (6.8) 高 (3.4)	胴部は短く、外方向に開く	内面：胎受部は横・斜方向のハケメ、接合部～胴部は斜方向のヘラナデ・横方向のハケメ/外面：縦方向のハケメ後、斜方向のヘラナデ	明褐色/砂粒中量、赤色砂粒少量、白色砂粒微量	北東部掘り方

第20表 667号住居跡出土遺物一覧

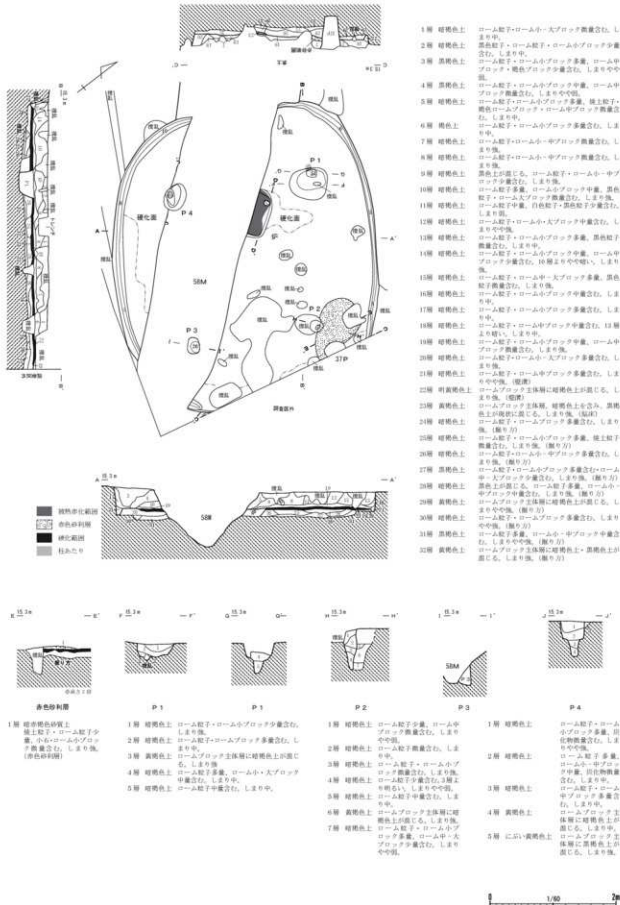
668号住居跡

遺 構 (第76～78図)

[位 置] (D-4) グリッド。

[検出状況] 58 M、37 Pに切れ、住居東側は調査区外へ延びる。根痕などにより複数か所を擾乱される。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸 4.3 m以上/短軸 4.2 m/確認面からの深さ 0.3 m。壁：ほ

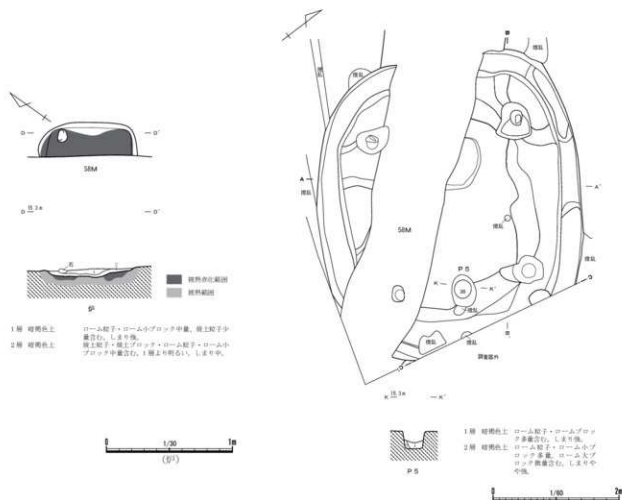


第76図 668号住居跡1 (1/60)

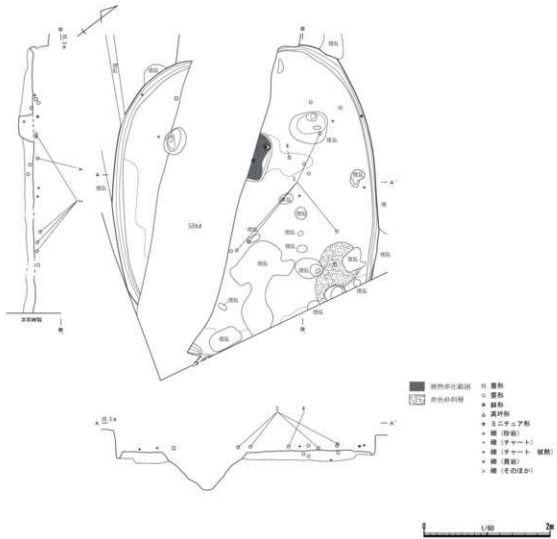
ほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位：N-53°-W。壁溝：南東の一部をのぞきほぼ全周する。上端幅7～18cm/下端幅4～6cm/深4～10cm。床面：壁際を除き、ほぼ全面に貼床が3～4cmの厚さで構築される。炉：住居中央部より北西寄りに位置する。平面形は楕円形を呈する地床炉で、炉北西縁辺に被熱により赤化した砂岩の自然礫が1点置かれていた。規模は長軸78cm/短軸27cm以上/床面からの深さ14cm。焼土による赤化は全体的に確認できるが、被熱による硬化は弱い。貯蔵穴：確認できなかった。柱穴：床面で4本のピット（P1～4）が確認された。P1～4は深さ26～65cmで、主柱穴と考えられる。P3は58Mにより削平され遺存状態は良好でないが、住居内の位置や底面標高から主柱穴と考えられる。掘り方で1本のピット（P5）が確認された。赤色砂利層：住居北東隅部に位置し、長さ約104cm/幅約65cmの範囲で確認できた。入口施設：確認できなかった。掘り方：住居全体に3～16cm程度の深さの掘り込みを有し、壁際沿いは一段高く、住居中央部は深く掘り込まれる。掘り込みの深さは、壁際部分が3～11cm、住居中央部は9～16cmである。

〔覆 土〕32層に分層される。ローム粒子・ロームブロックを含み、下層は凹凸を有しながら概ね水平に、上層から中層は厚く堆積することから、意図的に埋め戻されたものと考えられる。

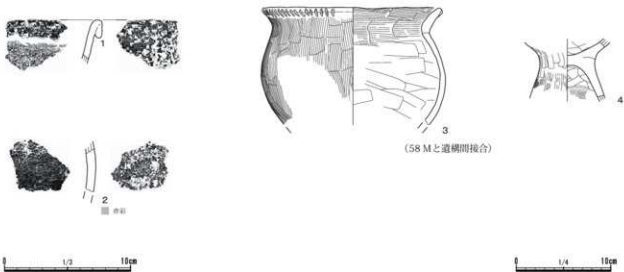
〔遺 物〕壺・甕形土器の破片が多く、住居全体に散見される。3の甕形土器（第79図3）は58Mと遺構間接合し、遺物の残存状況から本遺構に帰属するものと考えられる。



第77図 668号住居跡2・掘り方（1/60・1/30）



第78図 668号住居跡遺物出土状態 (1/60)



第79図 668号住居跡出土遺物 (1/4・1/3)

第3章 検出された遺構と遺物

探検番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法 量 (cm)	器形・形態	文様・調整等	附 土	出土位置
第79図1 図版35-2-1	壺	口縁部 破片	高〔3.5〕 厚0.5	無地の場合口縁部/ 外反する	内面：横・斜方向のヘラナデ/ 複合部はヨコナデ	褐色土・砂粒・褐色粘 土少量、白色粘土少量	覆土中
第79図2 図版35-2-2	壺	胴部 破片	高〔4.1〕 厚0.7	僅かに内湾する	内面：摩耗が著しい、斜方向のヘラナデ/ 外面：L R 網 文・S字状結節文以下、横方向のミガキ線、赤彩	褐色白色土層砂片 多量、砂粒中量、白色 粘土少量	覆土中
第79図3 図版35-2-3	罎	口縁部～ 胴部 80%	口18.6 高〔12.4〕	口縁部は外反し、胴部 はくの字の頭部、胴部 は球形を呈する	内面：口縁部は横方向のハケメ、 胴部は横・斜方向のヘ ラナデ/ 外面：口縁部はヨコナデ後、 刷毛状工具による 筋目、胴部は縦・斜方向のハケメ	褐色土・砂粒・赤 土少量、粘土中量、白色 粘土少量	北～中央下層・ 上層・掘り方 覆土中・58M
第79図4 図版35-2-4	罎	接合部～ 台部 70%	高〔6.6〕	台付壁/外方向に開 く	内面：ヘラナデ後、 底面は横方向のハケメ/ 外面：縦方 向のハケメ・ヘラナデ	褐色土/白色粘土中量、 砂粒少量	伊付近下層

探検番号 図版番号	種 別	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特 徴	出土位置
図版35-2-5	礎	穿孔貝果穴痕 跡軟質泥岩	1.9	1.5	0.7	1.0	孔なし/色調は赤褐色	覆土中
図版35-2-6	礎	穿孔貝果穴痕 跡軟質泥岩	1.4	1.2	0.6	0.6	孔なし/色調は赤褐色	覆土中

第21表 668号住居跡出土遺物一覧

〔時 期〕 弥生時代後期後葉。

〔遺 物〕 (第79図、図版35-2、第21表)

〔土 器〕 (第79図1～4、図版35-2-1～4、第21表)

1・2は壺形土器、3・4は甕形土器である。

〔そ の 他〕 (図版35-2-5・6、第21表)

5・6は製塩関連遺物と考えられる穿孔貝果穴痕跡軟質泥岩である。

(3) 掘立柱建築遺構

6号掘立柱建築遺構

〔遺 構〕 (第80図)

〔位 置〕 (D-2) グリッド。

〔検出状況〕 980 Dに切れ、上部は東西方向に走る現代の耕作痕(トレンチャー)などに攪乱される。なお、P3は攪乱掘削中に確認できた。

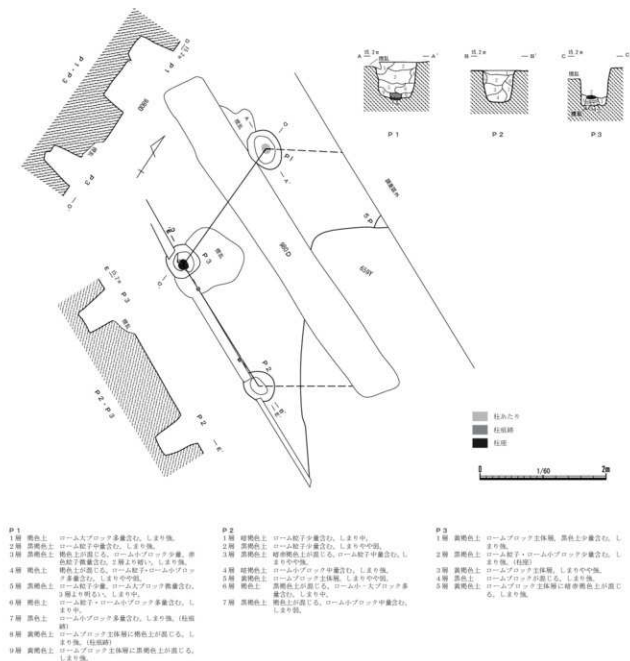
〔構 造〕 平面形：3本の柱穴が該当し、六角形を呈すると推定される。主軸方位：不明。柱穴規模：長軸0.5～0.6m/短軸0.5m/確認面からの深さ0.5～0.6m。柱間間隔：P1-3間・P2-3間2.3m。

〔覆 土〕 P1は褐色土・黒褐色土を主体とし、7・8層は柱痕跡であり、底面の凹みから柱あたりが確認できた。P3は攪乱として掘削していたが、調査中に柱穴と判明した。2層は柱座と考えられ、その下部は締まりが強く、版築状に構築される。

〔遺 物〕 出土しなかった。

〔時 期〕 建物の平面形は南関東では弥生時代後期末葉～古墳時代初頭にかけて特徴的である(及川2009)。弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭。

〔所 見〕 本遺構当該期の掘立柱建築遺構の平面形は、六角形または八角形を呈し、本遺構は検出状況からも六角形が推定される。調査区北側へ延びるが、このうち1本は980 Dに切られるか、659 Yと重複する可能性がある。



第80図 6号掘立柱建築遺構(1/60)

(4) 溝跡

58号溝跡

遺 構 (第81～87図)

[位 置] (A・B-2、B・C-3、C・D-4) グリッド。

[検出状況] 調査区の北西から南東方向に構築され、調査区南東隅部で南方向に曲がる。985・986・992 D、57 Mに切られ、668 Yを切る。本遺構上部は東西方向に走る現代の耕作痕(トレンチャー)などの複数の攪乱に壊される。

[構 造] 断面形：V字形・逆台形。規模：長軸 38 m／短軸 1.0～1.9 m／深さ 0.5～0.9 m。底面標高は南東側に進むにつれ深くなる。壁：約 50°の角度で緩やかに立ち上がる。壁面から径 6～10 cm 程度の小穴が部分的に数か所確認された。走行方位：N-25～45°-W。

[覆 土] 12 層に分層される。上層は 1～4 層、中層は 5～8 層、下層は 9・10 層に当たり、壁際から底面の 11・12 層はローム粒子・ロームブロックを多量に含む。遺構全体では概ね同様の堆積がみられるが、南に曲がる調査区南東部では 9・10 層の堆積がみられない。中央部の 5 層は焼土を多量に含み、10 層は炭化材を含む。西側を除く上層から中層にかけては土器や礫などの遺物が、満遍なく出土しており、上層から下層までは概ね水平な堆積を示す。このことから、本遺構は全体的に北壁→南壁→下層→中層→上層の順に埋め戻されたものと考えられる。

[遺 物] 本遺構西側は上層から下層にかけて疎らに出土している。一方、中央部から東側は上層から中層にかけて満遍なく、中層から下層にかけては散見される程度である。壺・甕形土器が多く、高環・鉢形土器のほか、磨製石斧・砥石・敲石などの石器や礫も出土している。土器は器種による分布の偏りはみられず、礫は土器に混じって多く出土している。礫の石材は砂岩やチャートの自然礫が多く、1/3 程度は被熱が認められたが、被熱の有無による分布の差異は認められない。また、土器製作時とは異なる二次的な被熱により器面が剥離された土器の分布状況は中央部から西側に散見され、焼土範囲との関連性は見出せなかった。

本遺構内の接合関係は良好で、14 の壺形土器は 668 Y と同一個体で、41 の高環形土器は 656・659 Y と遺構間接合し、658 Y とは同一個体である。

土層断面 G-H 間の中層より上から 3 点の炭化材を採取した。粒状化が著しく、状態の良い 1 点の樹種同定を行ったところ、樹種はコナラ亜属コナラ節であった。分析結果は第 4 章第 1 節を参照されたい。

[時 期] 弥生時代後期後葉～末葉。

[所 見] 本遺構は V 字形を基本とする断面形や周辺の調査成果から環濠の一部と考えられる。遺物は上層から中層でまとまって出土しており、668 Y を切って構築し、土層観察などから単一期間使用したのち埋め戻されたものと考えられる。

遺 物 (第 88～91 図、図版 35-3～図版 39-1、第 22 表)

[土 器] (第 88～91 図 1～44、図版 35-3-1～図版 38-1-44、第 22 表)

1～20 は壺形土器で、20 は小型を呈する。21～33 は甕形土器、34～39 は鉢形土器で 38 は形状と器面調整から有孔鉢の可能性がある。40～43 は高環形土器で、37・41 は吉ヶ谷系である。44 はミニチュア土器で口縁部は欠損するが壺形を模していると思われる。

[土 製 品] (第 91 図 45、図版 38-1-45、第 22 表)

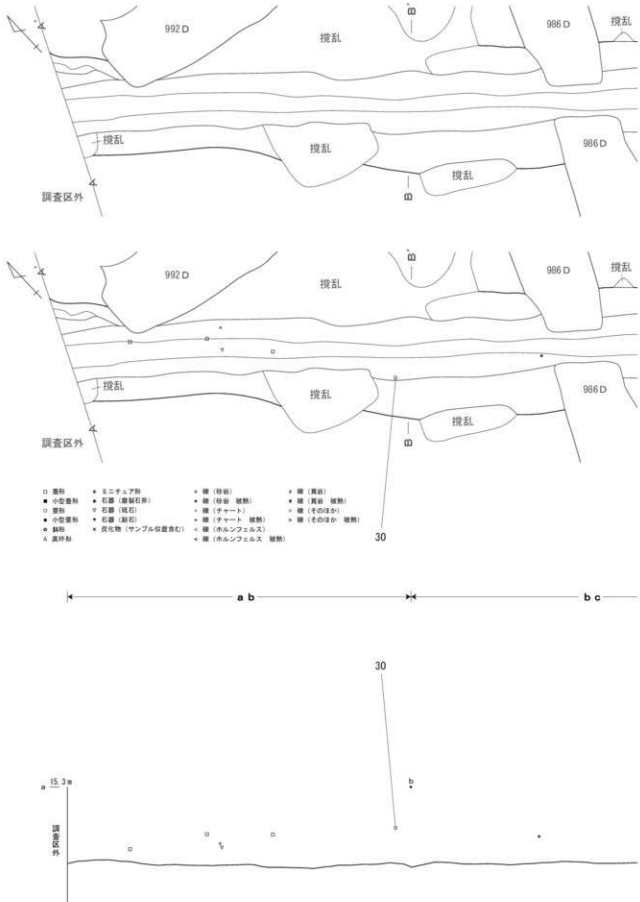
45 は器種不明の土製品である。長さ 1.5 cm／幅 2.0 cm と小さく、下面の欠損部以外は赤彩が施される。

[石 器] (第 91 図 46～48、図版 39-1-46～48、第 22 表)

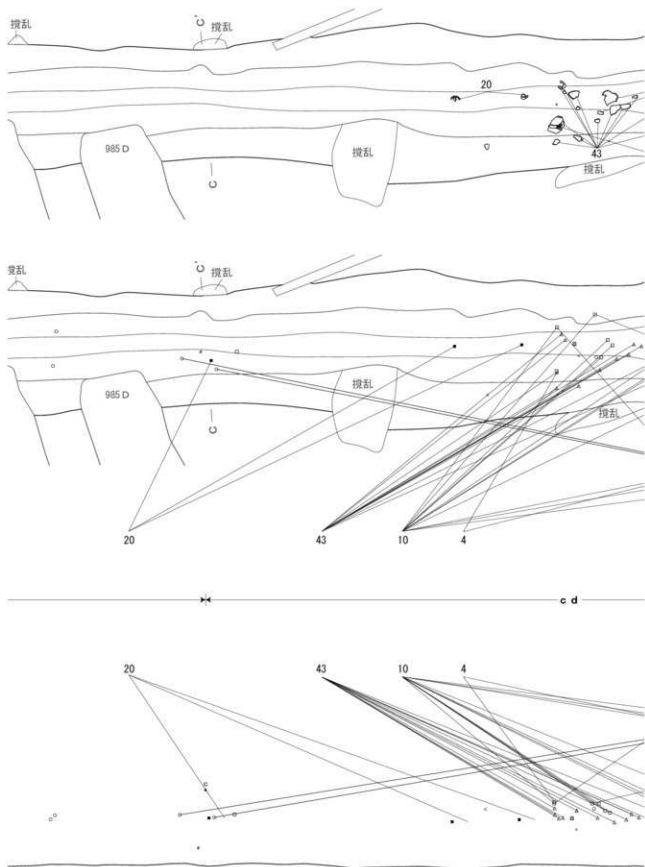
46 は磨製石斧、47 は砥石、48 は敲石である。

[そ の 他] (図版 39-1-49～51、第 22 表)

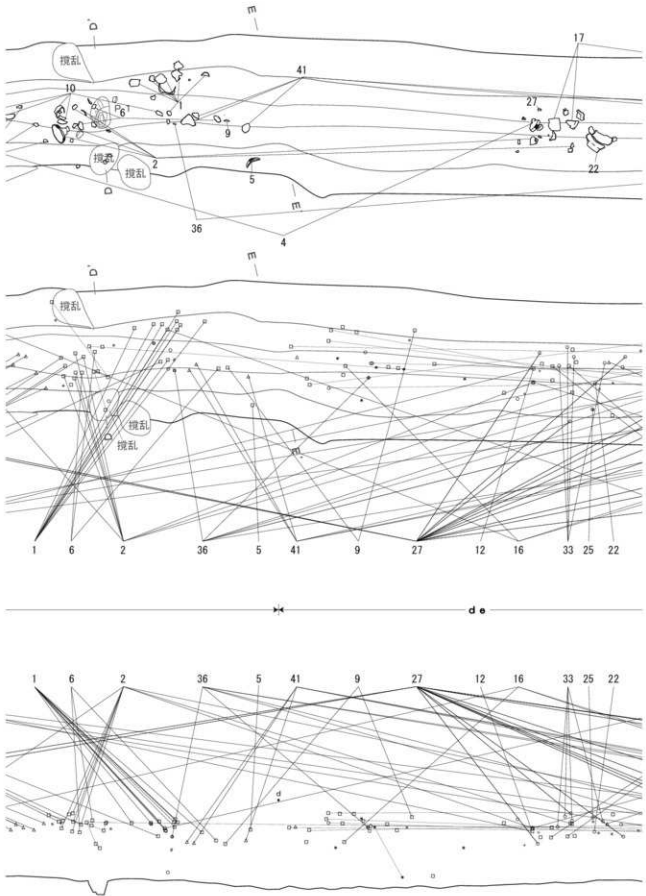
49～51 は製塩関連遺物と考えられる穿孔貝果穴痕跡軟質泥岩である。



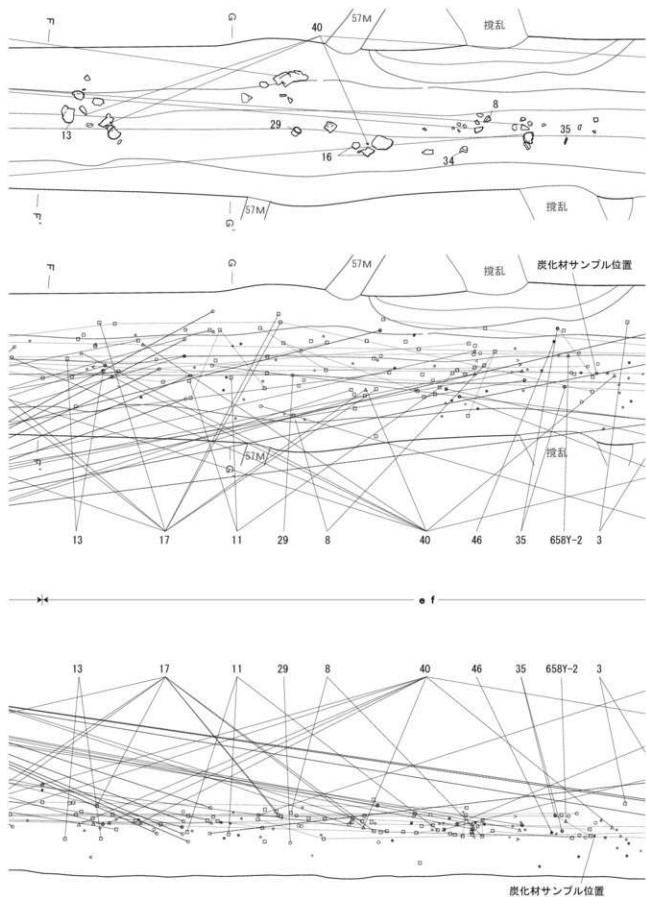
第82図 58号溝跡遺物出土状態 分割図1 (1/40)



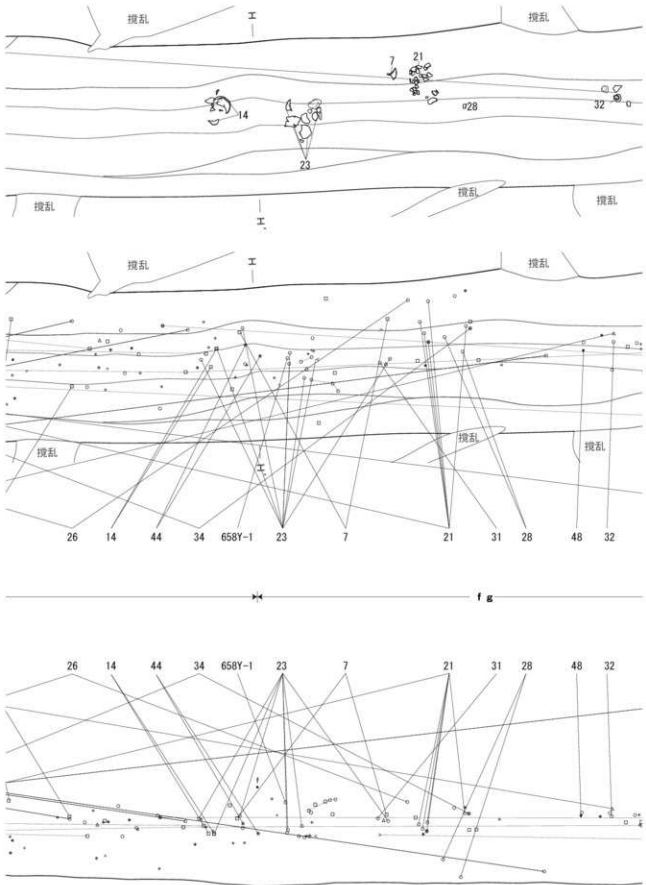
第83图 58号溝跡遺物出土状態分割図2 (1/40)



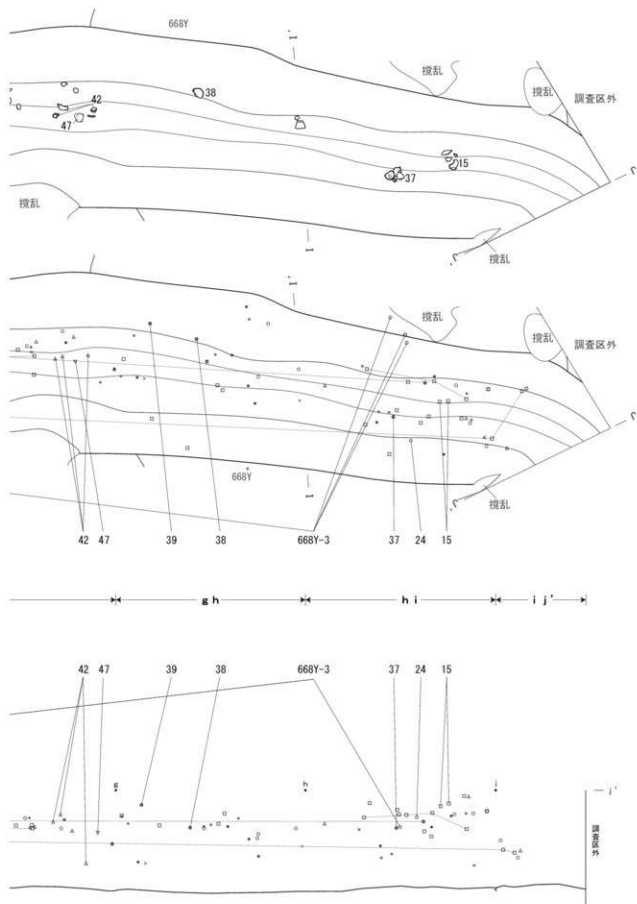
第84图 58号溝跡遺物出土状態分割图3 (1/40)



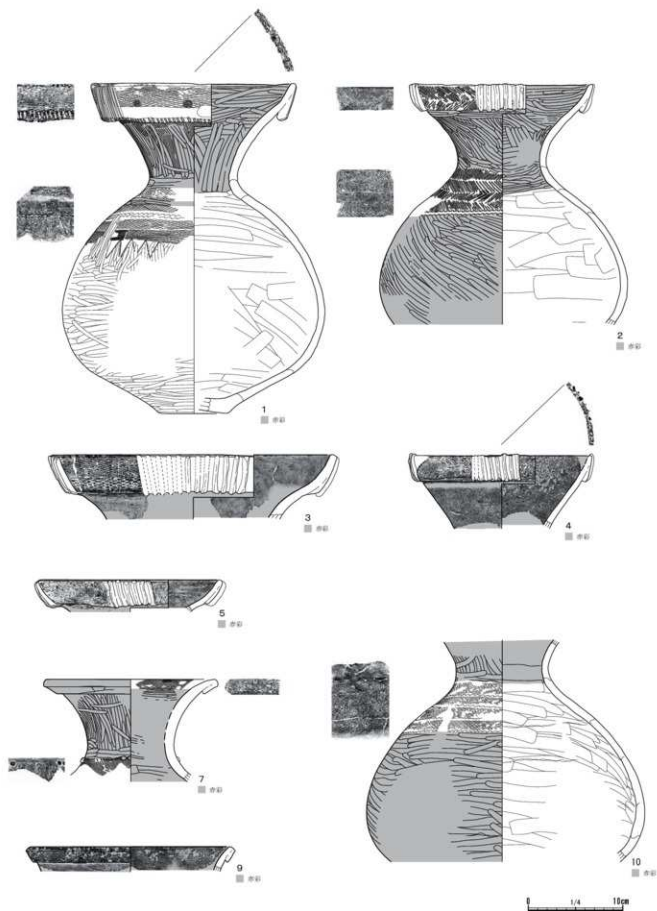
第85図 58号溝跡遺物出土状態 分割図4 (1/40)



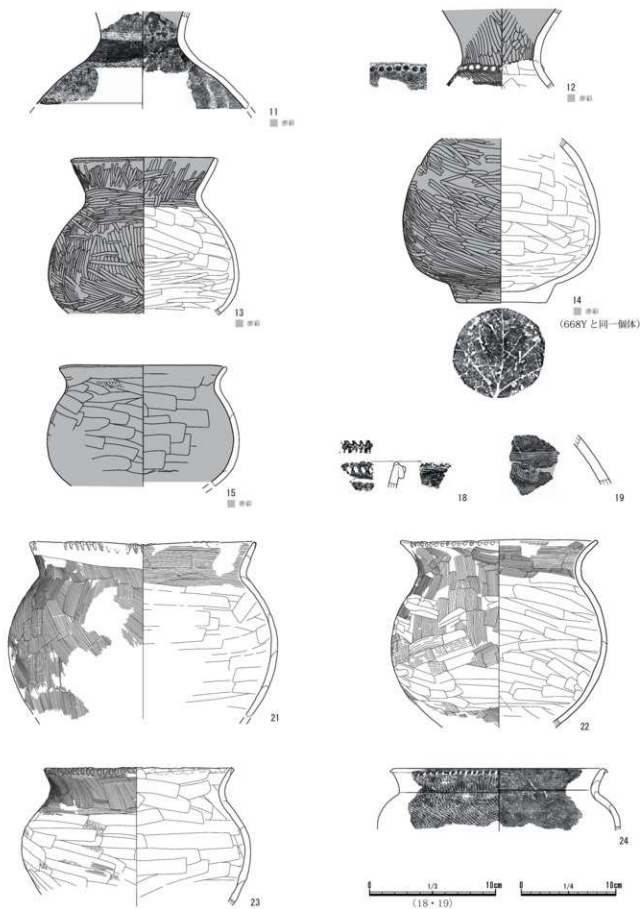
第86図 58号溝跡遺物出土状態 分割図5 (1/40)



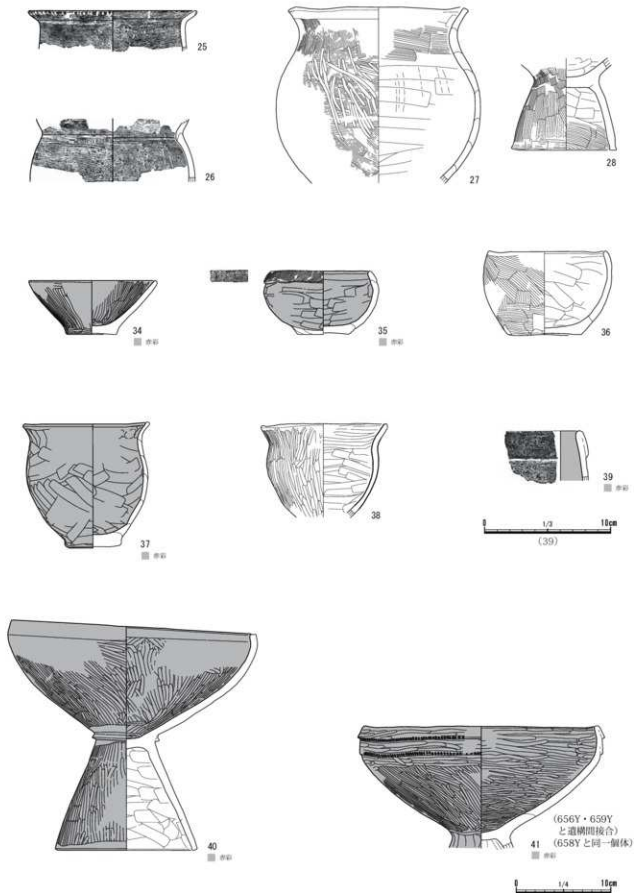
第87図 58号溝跡遺物出土状態分割図6 (1/40)



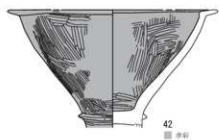
第88図 58号溝跡出土遺物1 (1/4)



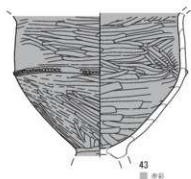
第89図 58号溝跡出土遺物2 (1/4・1/3)



第90図 58号溝跡出土遺物3 (1/4・1/3)



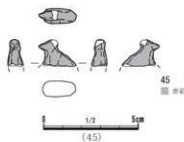
42
図 42



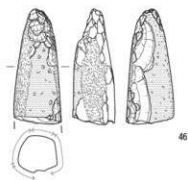
43
図 43



44



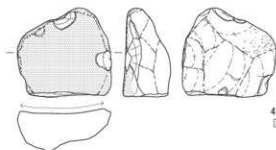
45
図 45



46



48



47
□ 砂面



(46・48)

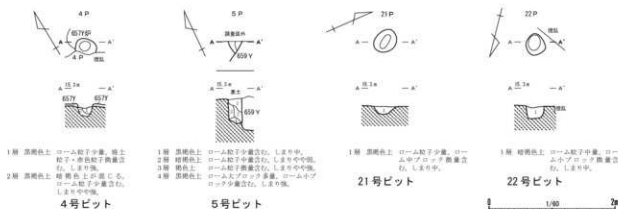
第91図 58号溝跡出土遺物4 (1/4・1/3・1/2)

探検番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法 第 (cm)	器形・形態	文様・調整等	胎土	出土位置	
第91図42 図版38-42	高杯	杯部 30%	□222 高[12.5]	口縁部は強く外反し、 体部は中や内湾しな がら直線的に窄まる	内面：口縁部はヨコナテ、体部は縦・横方向のミガキ、 接合部はヘラナテ/外面：口縁部はヨコナテ、体部は縦 方向のミガキ手後、部分的に横方向のミガキ、接合部は凸 縁が付く、その後横方向のミガキ/内面杯部と外面は赤 彩	赤い褐色/土器胎 子・白色粒子・赤色粒 子少量、砂粒・小石粒 少量	東側上～下層	
第91図43 図版38-43	高杯	杯部+ 接合部 80%	高[15.1]	口縁部は欠損し、上半は やや内湾し、下半は内 湾する	内面：縦・横方向のヘラナテ+上半は横・斜方向のミガ キ、接合部は横方向のヘラナテ/外面：上半は横方向の ミガキ手、下半は斜方向のミガキ手、胎土部に別々の凸 縁が付く/内外面は赤彩	赤い褐色/土器胎 子少量、砂粒・小石粒 少量	中央西上 層・上層・ B-3G表土	
第91図44 図版38-44	ミニチュア 壺	頸部～ 底部 75%	高[5.6] 底4.6	平底/胴部は内湾す	内面：横方向のヘラナテ、胴部中央に微細押圧痕が残る/外 面：縦方向のヘラナテ後、横方向のヘラナテ	赤い褐色/白色粒 子少量、赤色粒子・褐 色粒子・砂粒少量	中央東中層	
探検番号 図版番号	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第91図45 図版38-45	土製品	不明	1.5	2.0	0.8	1.5	下部欠損/ヘラナテ工具による調整、下面以外赤い/色調は灰 褐色	覆土中
探検番号 図版番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
第91図46 図版39-1-46	磨製石斧	緑色岩	9.1	3.7	3.4	169.4	刃部削欠損、整形加工の跡と敲打痕が全体的に残る。	中央中層
第91図47 図版39-1-47	砥石	砂岩	9.3	9.8	5	510.8	素材は礫片、表面に中や出人跡面が残る。	東側中層
第91図48 図版39-1-48	砥石	砂岩	12.2	8.6	6.3	657.1	素材は平面形と横断面が三角形の準角錐、尖端に敲打痕とそ れに伴う割傷面が残る。	東側上層
探検番号 図版番号	石材	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
図版39-1-49	滑	穿孔貝果穴 跡敷貫花釘	2.0	1.9	1.5	1.8	木質通孔1カ所/孔径は2.5mm/色調は淡水褐色	上層
図版39-1-50	滑	穿孔貝果穴 跡敷貫花釘	1.7	1.1	1.2	1.0	木質通孔2カ所/孔径はいずれも2.0mm/色調は淡水褐色	覆土中
図版39-1-51	滑	穿孔貝果穴 跡敷貫花釘	1.4	0.9	0.6	0.5	孔なし/色調は淡水褐色	覆土中

第22表 58号溝跡出土遺物一覧(3)

(5) ピット (第92図)

本調査区では4本のピット(4・5・21・22P)が確認された。それぞれ出土遺物は確認できなかったため、詳細な時期は不明であるが、覆土の観察から時期は弥生時代～古墳時代であると考えた。ピットの基本構造については、第23表を参照されたい。



第92図 弥生時代後期～古墳時代前期のピット(1/60)

遺構番号	グリッド	平面形	規模(m)			方位	出土遺物	遺構関係
			長軸	短軸	深さ			
4P	D-3	不明	0.3	0.3	0.2	N-44°-W	なし	657Yを切る
5P	D-2	不明	0.2	0.2	0.4	N-14°-W	なし	659Yに切られる
21P	C-3	円形	0.4	0.3	0.1	N-35°-W	なし	
22P	C-3	円形	0.3	0.3	0.2	N-40°-W	なし	

第23表 弥生時代後期～古墳時代前期のピット一覧

第4節 中世以降の遺構・遺物

(1) 概要

中世以降の遺構は、土坑 14 基 (978～981・984～988・990～992・993・995・998 D)・溝跡 1 本 (57 M)・ピット 22 本 (1～3・6～13・15・16・19・20・30・31・33～37 P) が確認された。

出土遺物は破片で近世から近代に比定されるが、遺構の帰属時期を示す遺物としては乏しい。このため、各遺構の時期設定は、遺物が出土した場合は陶磁器や土器などの年代を中心に詳細年代を明示したが、それ以外は中世以降と表記した。

(2) 土坑

平面形及び細部の形態的な特徴を城山遺跡第 42 地点で報告された分類基準に当てはめて説明することにする(尾形・深井・青木 2005)。なお、E 群は城山遺跡第 101 地点(徳留・大久保・尾形・木村・遠竹・坂下・遠藤 2023)を参考にし、今回 3 類を加えた。F 群は中野遺跡第 95 地点(徳留・尾形・青木 2017)、G 群は中野遺跡第 102 地点(尾形・大久保・深井・青木 2019)を参考にした。

分類は A 群 2 類、B 群 1・2 類、C 群、D 群、E 群 1・3 類が該当する。

A 群 方形の土坑 1 基

- 1 類 袋状の構造を呈する 0 基
- 2 類 袋状の構造ではなく、単純構造を呈する 1 基 (984 D)

B 群 長方形の土坑 6 基

- 1 類 溝状土坑 3 基 (980・986・987 D)
- 2 類 幅狭の長方形土坑 3 基 (978・979・985 D)
- 3 類 幅広の長方形土坑 0 基
- 4 類 火床部を有する土坑 0 基

C 群 円形・楕円形の土坑 2 基 (993・995 D)

D 群 不整形の土坑 3 基 (981・990・992 D)

E 群 地下室・地下坑、地下式坑 2 基

- 1 類 1 竪坑 1 主体部タイプ 1 基 (988 D)
- 2 類 1 竪坑複数主体部タイプ (特殊タイプ) 0 基
- 3 類 竪坑が直接主体部にとり付くタイプ 1 基 (998 D)

F 群 T 字形の土坑 0 基

G 群 その他 0 基



第93図 中世以降の遺構分布図(1/200)

A群 方形の土坑 (第94図)

984 Dの1基のみで2類に該当する。

984号土坑

遺構 (第94図)

位置 (A-3) グリッド。

検出状況 987・997 Dを切る。

構造 平面形：隅丸方形。規模：長軸0.7m/短軸0.6m/深さ0.5m。断面形：ほぼ垂直に立ち上がり、底面は凸凹の形状を呈する。工具痕と思われる4か所の掘り込みを有し、長さ20～40cm/幅7～23cmを測る。長軸方位：N-33°-E。

覆土 4層に分層され、黒褐色土・暗褐色土を主体とする。

遺物 覆土中から磁器1点が出土し、写真図版に示した。

時期 近世(19世紀後半)以降。

遺物 (図版39-2、第24表)

磁器 (図版39-2-1、第24表)

1は中碗で、19世紀後半の所産である。



- 1層 埋積土 コーム・ブロッコチ少量、コム
殻子・コム中ブロッコチ少量含
む。しまりや中塊。
- 2層 埋積土 コーム殻子・コム心・中ブロッ
コチ少量含む。しまりや中塊。
- 3層 埋積土 コーム殻子・コム中ブロッコチ
少量含む。しまりや中塊。
- 4層 埋積土 コーム殻子・コム大ブロッコチ
少量含む。しまりや中塊。



第94図 土坑 A群(984号土坑) (1/60)

検出番号 図版番号	材質	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	形状・調類	文様・輪葉・裝飾等	胎土	製作地	製作年代	出土位置
図版39-2-1	磁器	中碗	胴部一底部 15%	高2.9 底3.6	口ケロ成形 削り高台	染付/透明釉/費付無釉 内面：紅込茶碗 外面：高台内側縁	灰白色/緻密	関西系?	近代 (19世紀後半)	覆土中

第24表 984号土坑出土遺物一覧

B群 長方形の土坑 (第95図)

1・2類とも3基あり、計6基が該当する。長軸方位N-23～29°-EとN-66°-Wの2方向に分かれる。

B群1類 溝状土坑 (第95図)

980・986・987 Dの3基が該当する。

980号土坑

遺構 (第95図)

位置 (C・D-2) グリッド。

[検出状況] 659・660 Y、6 Tを切り、西側の一部は攪乱される。

[構造] 平面形：溝状の長方形。規模：長軸 5.8 m / 短軸 0.7 m / 深さ 0.5 m。断面形：ほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。長軸方位：N-66°-W。

[覆土] 5層に分層され、暗褐色土を主体とする。

[遺物] 覆土中から磁器1点、陶器3点が出土した。このうち、磁器1点を写真図版に示した。

[時期] 近代（19世紀後葉）以降。

[遺物] (図版 39-2、第25表)

[磁器] (図版 39-2-2、第25表)

1は近代の急須である。

図版番号 図版番号	材質	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	成形・調製	文様・釉薬・裝飾等	胎土	製作地	製作年代	出土位置
図版 39-2-2	磁器	急須	胴部一部 10%	高 (3.6) 底 (5.8)	ロクロ成形	染付 / 透明釉 外面：草花文 / 底面無釉	灰白色 / 緻密	関西系?	近代 (19世紀後葉)	下層

第25表 980号土坑出土遺物一覧

986号土坑

[遺構] (第95図)

[位置] (B-1・2) グリッド。

[検出状況] 662 Y、58 Mを切り、西側の一部は攪乱され、985 Dと並走する。

[構造] 平面形：溝状の長方形。規模：長軸 8.5 m / 短軸 0.8 m / 深さ 0.6 m。断面形：ほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦であり、北側に長さ 0.8 m / 幅 0.5 m / 底面からの深さ 0.3 m の掘り込みを伴う。長軸方位：N-25°-E。

[覆土] 北側は6層に、南側は7層に分層され、いずれも暗褐色土を主体とする。南側は全体的にロームブロックが多く含まれる。

[遺物] 覆土中から磁器2点、土器1点、金属製品1点が出土した。このうち、磁器1点と金属製品1点を写真図版に示した。

[時期] 近代（19世紀後葉）以降。

[遺物] (図版 39-2、第26表)

[磁器] (図版 39-2-3、第26表)

1はコバルト染付の施された近代の蓋物蓋である。

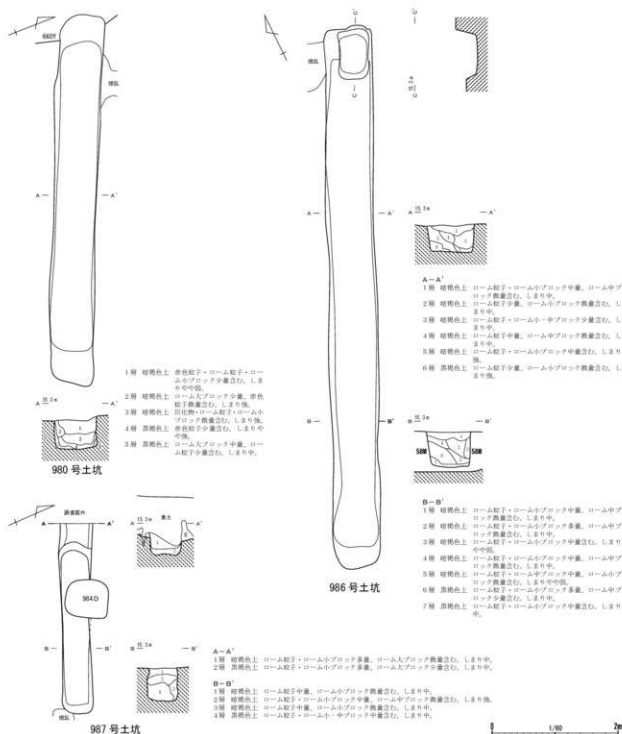
[その他] (図版 39-2-4、第26表)

2は鉄製の釘で、頭部径 1.3cm / 残存長さ 15.5cmを測る。

図版番号 図版番号	材質	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	成形・調製	文様・釉薬・裝飾等	胎土	製作地	製作年代	出土位置
図版 39-2-3	磁器	蓋物蓋	口縁部 破片	高 (0.7) 厚 0.4	ロクロ成形	コバルト染付 / 透明釉 外面：草花文? / 底面無釉	灰白色 / 緻密	関西系?	近代 (19世紀後葉)	覆土中

図版番号 図版番号	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置
図版 39-2-4	鉄製品	釘	15.5	0.5	0.2	14.8	頭部径 1.3cm・平面、先端部欠損 近代 (19世紀後葉)	覆土中

第26表 986号土坑出土遺物一覧



第95図 土坑 B群1類(980・986・987号土坑)(1/60)

987号土坑

遺構 (第95図)

[位置] (A-3)グリッド。

[検出状況] 984 Dに切られ、664 Y、997 Dを切る。西側は調査区外へ延びる。

[構造] 平面形：溝状の長方形か。規模：長軸3.0m/短軸0.4m/深さ0.5m。断面形：ほぼ垂直に立ち上がり、東壁の一部は僅かに袋状を呈する。底面はほぼ平坦である。長軸方位：N-66°-W。

[覆 土] 西側は2層に東側は4層に分層され、暗褐色土を主体とする。東側の中層から下層にかけてはロームブロックが多く含まれる。

[遺 物] 覆土中から陶器1点、土器1点が出土した。このうち、土器1点を写真図版に示した。

[時 期] 近世(1800～1867年)以降。

[遺 物] (図版39-2、第27表)

[土 器] (図版39-2-5、第27表)

1は鉛透明軸の灯明皿で、製作年代は1800～1860年代と考えられる。

詳細番号 図版番号	材質	器種	部位 遺存状態	法 量 (cm)	成形・調整	文様・輪葉・裝飾等	胎 土	製作地	製作年代	出土位置
図版 39-2-5	土器	灯明皿	口縁部～底面	口 (4.8) 高 1.4 底 (3.8)	ロクロ成形	鉛透明軸	褐色/織布	江戸在 地系	近世 (1800～ 1867年)	覆土中

第27表 987号土坑出土遺物一覧

B群2類 幅狭の長方形土坑(第96図)

978・979・985 Dの3基が該当する。

978号土坑

[遺 構] (第96図)

[位 置] (D-3) グリッド。

[検出状況] 663 Yを切り、979 Dと並走する。上部は東西方向に走る現代の耕作痕(トレンチャー)により削平される。

[構 造] 平面形: 隅丸長方形。規模: 長軸 2.3 m/短軸 0.7 m/深さ 0.1 m。断面形: 約40°の角度で緩やかに立ち上がり、底面は凸凹を有する。長軸方位: N-29°-E。

[覆 土] 2層に分層され、黒褐色土を主体とする。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 中世以降。

979号土坑

[遺 構] (第96図)

[位 置] (C・D-3) グリッド。

[検出状況] 663 Yを切り、978 Dと並走する。上部は東西方向に走る現代の耕作痕(トレンチャー)により削平される。

[構 造] 平面形: 隅丸長方形。規模: 長軸 1.8 m/短軸 0.6 m/深さ 0.1 m。断面形: 約60°の角度でやや緩やかに立ち上がる。底面は凸凹を有し、南側は0.3 m程度深くなる。長軸方位: N-23°-E。

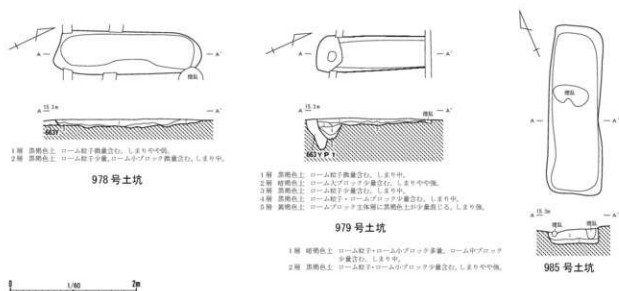
[覆 土] 5層に分層され、黒褐色土を主体とする。

[遺 物] 出土しなかった。

[時 期] 中世以降。

985号土坑

[遺 構] (第96図)



第96図 土坑 B群2類 (978・979・985号土坑) (1/100)

〔位置〕(B-2)グリッド。

〔検出状況〕58 Mを切り、986 Dと並走する。底面の一部は根痕により攪乱される。

〔構造〕平面形：隅丸長方形。規模：長軸2.7 m/短軸0.8 m/深さ0.3 m。壁：西壁は約60°の角度で立ち上がり、東壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。長軸方位：N-25°-E。

〔覆土〕2層に分層され、上層は暗褐色土、下層は黒褐色土を主体とする。

〔遺物〕覆土中から磁器3点、土器1点、金属製品1点が出土した。このうち、磁器1点を写真図版に示した。

〔時期〕近代(20世紀)以降。

〔遺物〕(図版39-2、第28表)

〔磁器〕(図版39-2-6、第28表)

1は口受部に錆化粧の施された近代の蓋物蓋である。

図版番号 図版番号	材質	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	成形・調製	文様・軸葉・裝飾等	胎土	製作地	製作年代	出土位置
図版 39-2-6	磁器	蓋物蓋	天井部~口縁部 10%	口(11.0) 高 1.5	ロクロ成形 削り揃済	透明釉 口受部に錆化粧	灰白色/磨面	瀬戸・ 美濃系	近代 (20世紀代)	覆土中

第28表 985号土坑出土遺物一覧

C群 円形・楕円形の土坑 (第97図)

993・995 Dの2基が該当する。

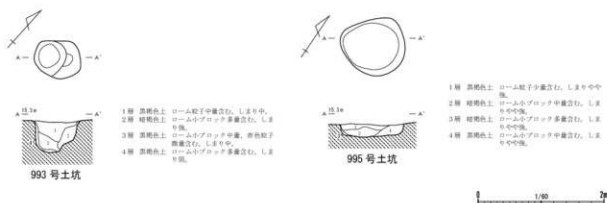
993号土坑

〔遺構〕(第97図)

〔位置〕(B-3)グリッド。

〔検出状況〕切り合い関係はなく単独で検出された。

〔構造〕平面形：楕円形。規模：長軸0.7 m/短軸0.6 m/深さ0.5 m。断面形：東壁は約70°の角度で立ち上がり、西壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面が凸凹を有し、西側は一段深くなる。長軸方位：



第97図 土坑 C群(993・995号土坑) (1/60)

N-55°-E。

〔覆 土〕4層に分層され、黒褐色土を主体とする。

〔遺 物〕出土しなかった。

〔時 期〕中世以降。

995号土坑

〔遺 構〕(第97図)

〔位 置〕(B-2)グリッド。

〔検出状況〕南側は58Mに近接して検出された。

〔構 造〕平面形：楕円形。規模：長軸1.0m/短軸0.9m/深さ0.2m。断面形：底部は緩やかな湾曲を有し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。長軸方位：N-46°-E。

〔覆 土〕4層に分層され、黒褐色土と暗褐色土を主体とする。

〔遺 物〕出土しなかった。

〔時 期〕中世以降。

D群 不整形の土坑(第98図)

981・990・992Dの3基が該当する。

981号土坑

〔遺 構〕(第98図)

〔位 置〕(C-2・3)グリッド。

〔検出状況〕上部は東西方向に走る現代の耕作痕(トレンチャー)により削平される。

〔構 造〕平面形：不整形。規模：長軸1.0m/短軸0.6m/深さ0.4m。断面形：南壁は約20°の角度で、北壁は約70°の角度で立ち上がる。底面は凸凹を有する。長軸方位：N-34°-W。

〔覆 土〕5層に分層され、暗褐色土と黒褐色土を主体とする。

〔遺 物〕覆土中から陶器片1点が出土した。陶器片は京・信楽焼系の碗で、近世の所産である。小片のため写真掲載するには至らなかった。

〔時 期〕近世以降。

990号土坑

遺構 (第98図)

位置 (A・B-2) グリッド。

検出状況 南側は攪乱される。

構造 平面形：不整形。規模：長軸 1.3 m / 短軸 1.2 m / 深さ 0.2 m。断面形：北壁は約 40° の角度で、東西壁は約 50 ~ 60° の角度でやや緩やかに立ち上がる。底面は凸凹が著しい。長軸方位：N - 47° - E。

覆土 3層に分層され、ロームブロックを含む。検出面から獣骨が横臥せの状態で出土した。

遺物 獣骨は犬の骨格と思われる北側に頭骨、南側に胸椎、東側に尺骨や橈骨などが認められる (写真図版 26 - 5)。そのほかの遺物は出土しなかった。

時期 覆土の観察や検出状況から近代以降と考えられる。

992号土坑

遺構 (第98図)

位置 (C-2・3) グリッド。

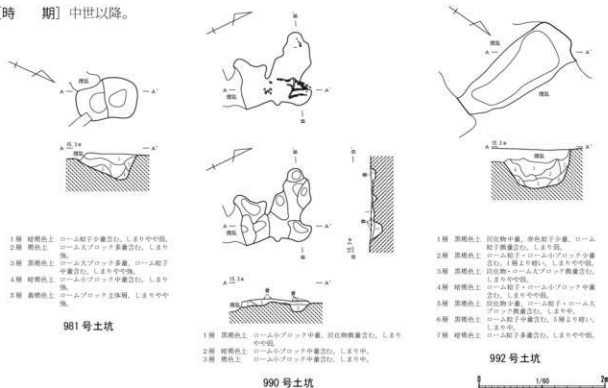
検出状況 58 Mを切り、上層は植栽痕などにより攪乱される。

構造 平面形：不整形。規模：長軸 2.0 m / 短軸 0.7 m / 深さ 0.8 m。断面形：東壁は約 50° の角度で立ち上がり、西壁は底面から緩やかに傾斜し、上部はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。長軸方位：N - 71° - W。

覆土 7層に分層され、黒褐色土を主体とする。

遺物 出土しなかった。

時期 中世以降。



第98図 土坑 D群 (981・990・992号土坑) (1/60)

E群 地下室・地下坑、地下式坑（第99図）

988 Dが1類・998 Dが3類に該当する。

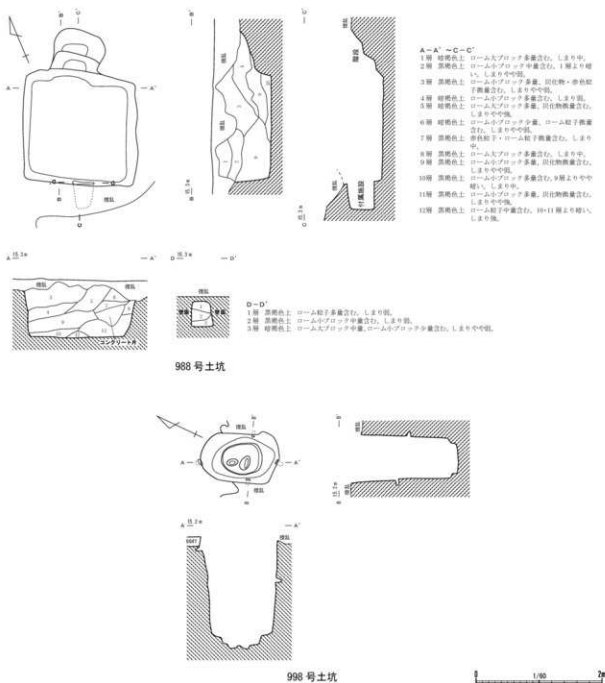
988号土坑

遺構（第99図）

[位置] (B-1・2) グリッド。

[検出状況] 上部は植栽痕などにより攪乱される。北側は階段、南側の奥壁に小さな空間を有する付属施設がある。

[構造] 平面形：北側に階段を有し、主体部は略方形を呈する。主体部規模：長軸 1.9 m / 短軸 1.8



第99図 土坑 E群1類(988号土坑)・E群3類(998号土坑) (1/60)

m/深さ 0.9 m。階段部規模：現存 2 段確認できた。幅 0.8 m/奥行 0.7 m以上/踏面幅 0.4 m/奥行 0.2 m/蹴上げ 0.2 m。付属施設規模：長軸 0.4 m/短軸 0.3 m/高さ 0.4 m。断面形：西壁はほぼ垂直に立ち上がり、東壁は約 70°の角度で立ち上がる。底面はほぼ平坦である。長軸方位：N-27°-E。

[覆 土] 12 層に分層され、黒褐色土を主体とする。中層から幅 30cm 程度のコンクリートの破片が出土した。

[遺 物] 覆土中から磁器 3 点、陶器 1 点が出土したが、小片のため図示するには至らなかった。

[時 期] 近代以降。

[所 見] 本遺構はコンクリート片や近代の磁器が出土していることから、近代以降に比定される。奥壁の付属施設は明かり採りなどに使用された可能性があり、遺構の形態から自家用簡易防空壕と考えられる。

998 号土坑

遺 構 (第 99 図)

[位 置] (A-3) グリッド。

[検出状況] 664 Y を切り、上部は攪乱される。発掘作業当初は覆土の堆積状況から攪乱と判断して掘削を進めたが、完掘状況や壁面の凹みなどから土坑と判断した。

[構 造] 平面形：楕円形。規模：長軸 1.3 m/短軸 0.8 m/深さ 1.8 m。断面形：ほぼ垂直に立ち上がる。壁面は平滑に調整され、足掛けと思われる 4 か所の凹みを有する。幅 4 ~ 10cm/奥行 9 ~ 13cm を測る。底面は外周が 1 段高く、中央部は深く凹む。底面中央部には工具痕と思われる幅 11 ~ 15cm/長さ 18 ~ 23cm の掘り込みを有する。長軸方位：N-25°-W。

[覆 土] ボソボソとした締まりの弱い黒褐色土主体の堆積で、下層からはモルタルの大形片や鉄片、磁器、ガラス片が出土した。

[時 期] 近代以降。

[所 見] 本遺構は、遺構の形状や足掛けと思われる凹みがあることから、近代以降に構築された地下式の貯蔵施設であると考えられる。

(3) 溝 跡

57 号溝跡

遺 構 (第 100 図)

[位 置] (B・C-3・4、D-3) グリッド。

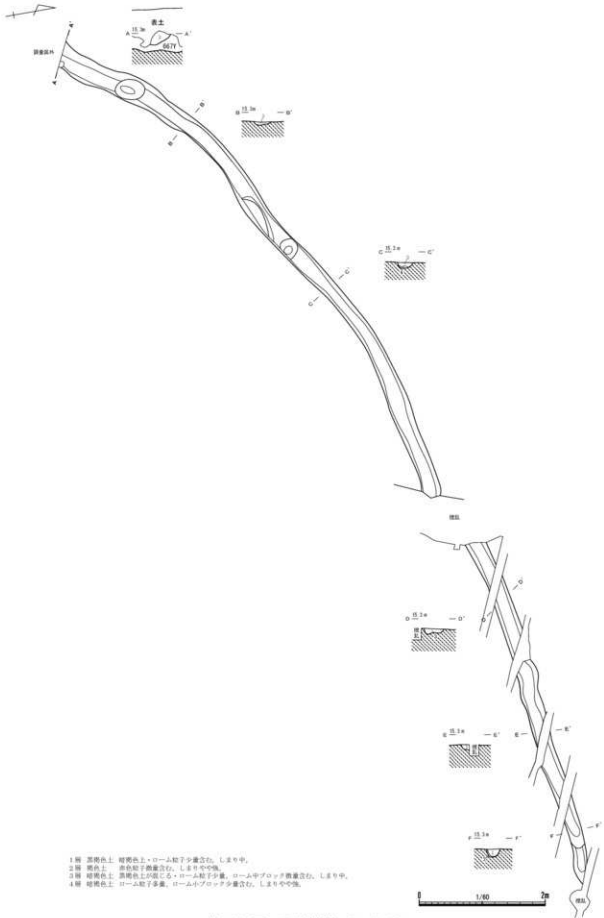
[検出状況] 663・665・667 Y、58 M、1000 D を切る。上部は東西方向に走る現代の耕作痕（トレンチャー）により削平される。

[構 造] 段面形：U 字形・皿形。規模：長軸 16.2 m/短軸 0.3 ~ 0.4 m/深さ 0.1 m。壁：概ね 60 ~ 70°の角度で立ち上がる。走行方位：N-43 ~ 82°-E。

[覆 土] 4 層に分層され、黒褐色土と暗褐色土を主体とする。

[遺 物] 出土しなかった。

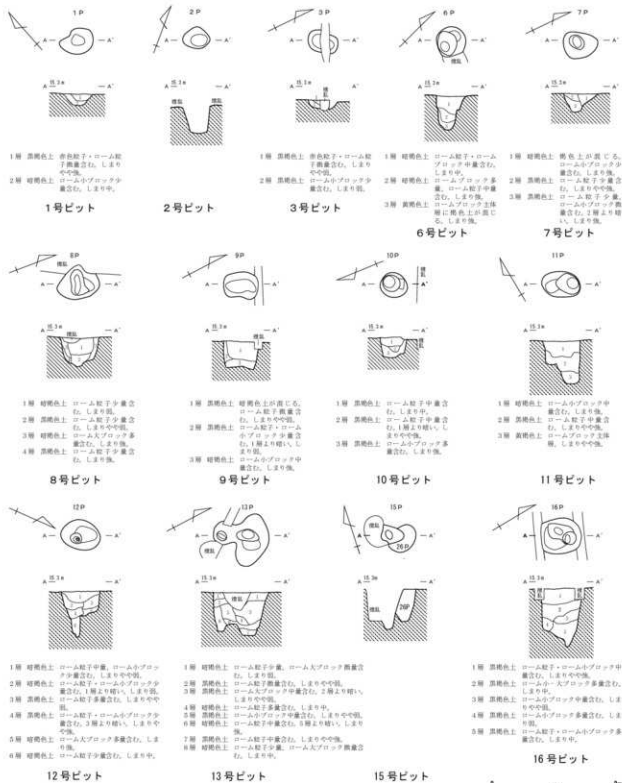
[時 期] 中世以降。



第100図 57号溝跡 (1/60)

(4) ピット (第101・102図)

本調査区では22本(1~3・6~13・15・16・19・20・30・31・33~37P)のピットを検出した。これらのピットは、調査区中央部から北東部を中心に確認できた。また、7P以外は、出土遺物を確認できなかったため、詳細な時期は不明であるが覆土の観察から中世以降であると考えられる。ピットの基本構造については、第29表を参照されたい。



第101図 中世以降のピット1 (1/60)



第102図 中世以降のピット2 (1/60)

遺構番号	グリッド	平面形	規模 (m)			方位	出土遺物	重複関係
			長軸	短軸	深さ			
1P	C-3	不整形	0.5	0.4	0.2	N-56°-W	なし	
2P	C-2	不整形	0.4	0.4	0.4	N-64°-E	なし	
3P	D-3	楕円形	0.5	0.4	0.1	N-41°-E	なし	
6P	C-2	円形	4.6	4.6	0.6	N-18°-E	なし	
7P	C-3	楕円形	0.6	0.4	0.3	N-30°-E	陶器 (碗)	
8P	C-3	不整形	0.7	0.5	0.5	N-19°-E	なし	
9P	C-3	楕円形	0.6	0.4	0.5	N-33°-E	なし	
10P	C-2・3	円形	0.4	0.4	0.3	N-37°-E	なし	
11P	C-2	楕円形	0.6	0.4	0.7	N-51°-W	なし	
12P	C-2	楕円形	0.6	0.5	0.7	N-42°-W	なし	
13P	C-2	不整形	0.9	0.9	0.7	N-12°-E	なし	
15P	C-2	不明	0.4	0.3	0.6	N-60°-W	なし	26Pを切る
16P	C-3	楕円形か	0.6	0.6	0.9	N-34°-E	なし	23Pを切る
19P	D-3	不明	0.2	0.2	0.3	N-3°-W	なし	
20P	D-3	楕円形	0.3	0.3	0.2	N-75°-E	なし	
30P	A-3	不整形	0.2	0.2	0.4	N-44°-E	なし	664Yを切る
31P	A-3	楕円形か	0.5	0.4	0.5	N-29°-E	なし	997Dを切る
33P	B-3	不整形	0.6	0.6	0.7	N-44°-W	なし	
34P	C-3	不整形	0.6	0.5	0.5	N-70°-W	なし	
35P	B-3	楕円形	0.6	0.5	0.4	N-25°-E	なし	999Dを切る
36P	B-3	楕円形	0.5	0.4	0.4	N-14°-W	なし	999Dを切る
37P	D-4	不明	0.3	0.2	0.5	N-24°-W	なし	668Yを切る

第29表 中世以降のピット一覧

第5節 遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

遺構外出土遺物は旧石器時代の石器、縄文時代の土器・石器、弥生時代後期～古墳時代前期の土器・石器、平安時代の須恵器、近世・近代の遺物に分類する。

(1) 旧石器時代の石器

黒曜石製の剥片が出土したが、小片のため図示するに至らなかった。

(2) 縄文時代の土器・石器 (第103～106図、図版40～42-1、第30表)

調査区全体に早期に晩期までの土器が満遍なく出土し、概ね調査区中央部から南側にかけて多く分布する。

[土器] (第103～106図1～38、図版40・41-1～38、第30表)

1～3は早期条痕文系の深鉢形土器である。

4～8は前期深鉢形土器で、4は黒浜式、5・6は諸磯a式、7は諸磯b式、8は諸磯c式に比定される。

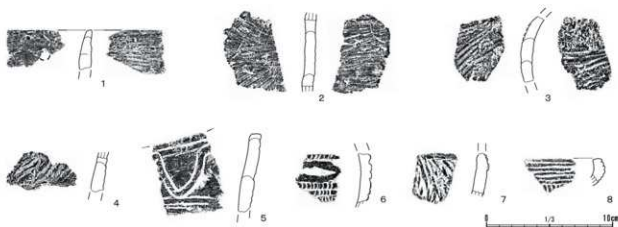
9～12・14～19は中期深鉢形土器、13は浅鉢形土器である。9は五領ヶ台式、10・11は阿玉台Ib式、12・13は勝坂式、14は加曾利EⅠ式、15～19は加曾利Ⅳ式に比定される。

20～33は後期に比定され、20～24・27～31は深鉢形土器、25は浅鉢形土器、26・32は鉢形土器で、33は注口土器である。20・21は称名寺Ⅰ式、22・23は堀之内Ⅰ式、24・25堀之内Ⅱ式、26～33は加曾利B式に比定される。

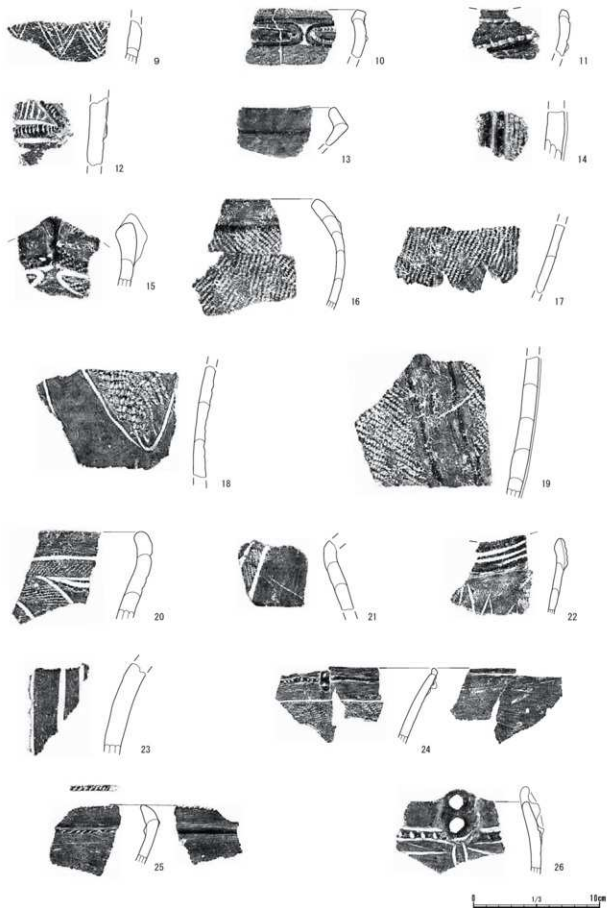
34～37は晩期に比定され、34は鉢形土器、35～37は深鉢形土器である。34・35は安行3a式、36・37は安行3c式に比定される。38は無文の深鉢形土器で、後期末葉～晩期に比定される。

[石器] (第106図39～41、図版42-1-39～41、第30表)

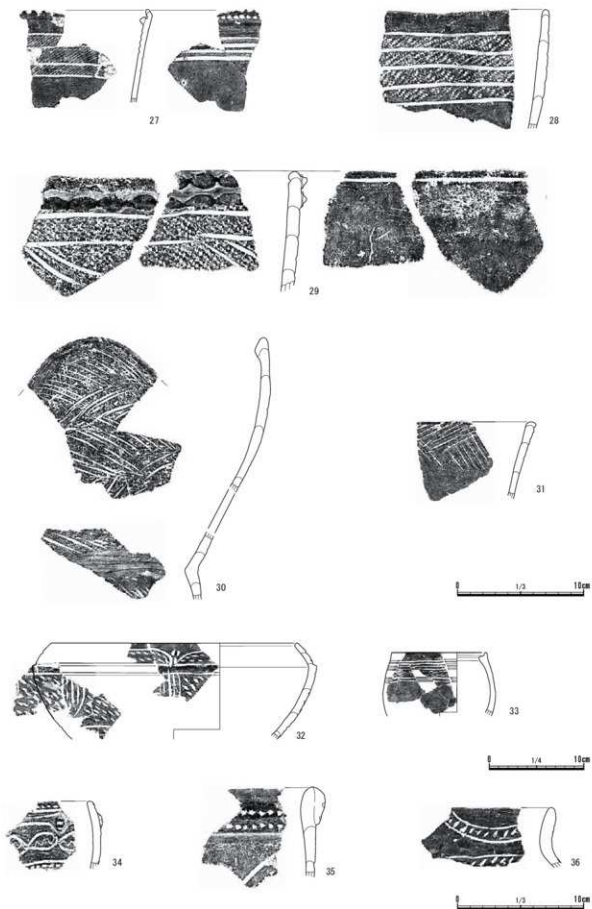
39～41は石鏃で、39・40はチャート製、41は黒曜石製である。



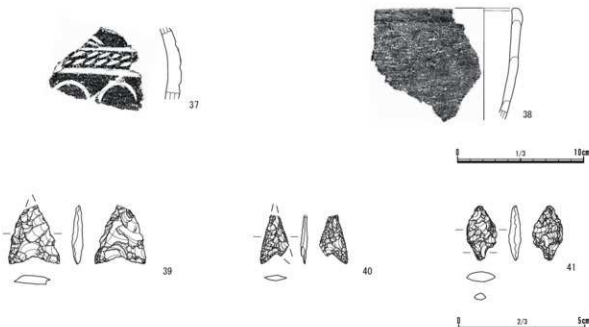
第103図 遺構外出土縄文時代遺物1 (1/3)



第104図 遺構外出土縄文時代遺物2(1/3)



第105図 遺構外出土縄文時代遺物3 (1/4・1/3)



第106図 遺構外出土縄文時代遺物4 (1/4・1/3・2/3)

標記番号 図版番号	器種	部位 保存状態	法量 (cm)	器形・形態	文様・特徴	胎土	時期 型式等	出土位置 出土層様
第103図1 図版40-1	深鉢	口縁部 破片	高 [3.2] 厚 1.0	外縁する	外面：円形刺突文／内面：貝殻複線文	灰黄褐色／繊維・砂粒 中量、石灰質量	早期後葉 委文系	650Y
第103図2 図版40-2	深鉢	胴部 破片	高 [6.4] 厚 0.9	僅かに外縁する	内外面：貝殻複線文	黄褐色／繊維やや多 量、砂粒中量、石灰少 量	早期後葉 委文系	58M
第103図3 図版40-3	深鉢	胴部 破片	高 [5.0] 厚 0.9	外縁する	内外面：貝殻複線文	灰黄褐色／繊維・砂粒 中量、褐色粒子・黄褐 色粘土質量	早期後葉 委文系	660Y
第103図4 図版40-4	深鉢	胴部 破片	高 [3.2] 厚 1.0	外縁する	無彫L縄文地文	黄褐色／繊維・砂粒中 量、石灰質褐色粒子 微量	前期中葉 黒式	(C-2)G Ⅱ瓦
第103図5 図版40-5	深鉢	口縁部 破片	高 [6.1] 厚 1.0	波状口縁／外縁する	平截竹管状工具による平行沈線文間に 波状文	黄褐色／繊維やや多 量、砂粒中量、石灰質 量	前期後葉 諸磯a式	(B-3)G
第103図6 図版40-6	深鉢	胴部 破片	高 [4.3] 厚 0.9	やや内縁する	平截竹管状工具による平行沈線文、深彫 線状の木葉文、波線文間は斜線・C字 の爪形文を充満	灰黄褐色／砂粒中量、 繊維少量、石灰質量	前期後葉 諸磯a式	664Y
第103図7 図版40-7	深鉢	胴部 破片	高 [3.5] 厚 0.9	僅かに外縁する	斜行する浮線文・沈線文	に濃い黄褐色／砂粒 やや多量、白色粒子少 量	前期後葉 諸磯b式	(D-2)G 表土
第103図8 図版40-8	深鉢	口縁部 破片	高 [2.1] 厚 0.9	内縁する	平行沈線文以下は縦位区画文	に濃い褐色／砂粒や や多量、石灰・白色粒 子・黄褐色粒子少量	前期後葉 諸磯c式	58M
第104図9 図版40-9	深鉢	胴部 破片	高 [3.4] 厚 1.0	僅かに外縁する	集合沈線による山形文	灰黄褐色／砂粒多量、 石灰少量、赤色粒子少 量	中期初葉 五領ヶ台Ⅱ式	660Y
第104図10 図版40-10	深鉢	口縁部 破片	高 [3.7] 厚 0.8	内縁し、口縁端部は外 方向に開く	隆帯による楕円形区画文、隆帯幅は単列 の有界沈線文・角押文	灰黄褐色／金雲母多 量、石灰・砂粒中量、 黒雲母少量、角閃石微 量	中期中葉 阿玉台Ⅰb式	58M・ (B-2)G 表土
第104図11 図版40-11	深鉢	口縁部 破片	高 [4.1] 厚 0.8	波状口縁／内縁し、口 縁端部は上方方向に開 く	隆帯幅に単列の角押文	褐色／砂粒やや多量、 金雲母中量、石灰少 量、小石微量	中期中葉 阿玉台Ⅰb式	662Y
第104図12 図版40-12	深鉢	胴部 破片	高 [5.5] 厚 1.3	外縁する	隆帯による重三角区画文、隆帯幅は沈線 文が短い区画内は集合沈線文が充満、隆 帯上は逆巻U形文	灰黄褐色／砂粒やや 多量、石灰・砂粒中量、 褐色粒子少量、小石微 量	中期中葉 諸磯2式	58M
第104図13 図版40-13	浅鉢	口縁部 破片	高 [3.0] 厚 1.1	口縁部は内縁し、体部 は僅かに内縁しながら広 がる	斜文／内外面ともに丁寧に磨かれる	に濃い褐色／砂粒中 量、石灰質量	中期中葉 諸磯式	35P
第104図14 図版40-14	深鉢	胴部 破片	高 [4.0] 厚 1.4	僅かに外縁する	L形刺突文、垂下する隆帯刻付	灰黄褐色／砂粒中量、白 色粒子少量、石灰・小 石微量	中期後葉 加賀野Ⅰ式	660Y

第30表 遺構外出土縄文時代遺物一覧(1)

第3章 検出された遺構と遺物

探検番号 図版番号	階層	部位 遺存状態	法量 (cm)	形状・形態	文様・特徴	胎土	時期 層等	出土位置 出土遺構
第104図15 図版40-15	深鉢	口縁部 破片	高 [5.7] 厚 1.0	段状口縁／若干内湾する	口縁部は無文、下部は隆起帯による文様中盤、胴部はLR 縄文地文・沈凹による区画文、区画外は滑潤	にぶい黄褐色／砂粒中盤、赤褐色粒子・黒色粒子・小石微量	中期後葉 加賀利E IV式	58M
第104図16 図版40-16	深鉢	口縁部 胴部 破片	高 [8.7] 厚 0.7	内湾する	口縁部は無文、下部は隆起帯による文様中盤、胴部はLR 縄文地文／19と同一体か	にぶい黄褐色／砂粒中盤、小石微量	中期後葉 加賀利E IV式	1区表土・ (C-3)G表土・ 58M
第104図17 図版40-17	深鉢	胴部 破片	高 [5.5] 厚 0.7	外縁する	LR 縄文地文／18と同一体か	にぶい黄褐色／砂粒中盤、小石微量	中期後葉 加賀利E IV式	1区表土・ (C-3)G表土・ 58M
第104図18 図版40-18	深鉢	胴部 破片	高 [8.8] 厚 0.9	外縁する	沈凹による最狭文区画内は1L 縄文を充填	灰褐色／砂粒・黄褐色粒子少量	中期後葉 加賀利E IV式	(C-3)G表土
第104図19 図版40-19	深鉢	胴部 破片	高 [10.9] 厚 1.2	外縁する	LR 縄文地文、隆起帯による縦位の区画文、隆起帯内にはナデラレ、区画内は滑潤	灰黄褐色／砂粒中盤、黄褐色粒子少量、石膏・小石微量	中期後葉 加賀利E IV式	58M
第104図20 図版40-20	深鉢	口縁部 胴部 破片	高 [6.0] 厚 1.2	胴部は外縁し、口縁部は内湾する	口縁部は無文、胴部はLRの帯縄文による帯状文	にぶい褐色／砂粒中盤、石膏・赤褐色粒子少量	後期前葉 初名寺1式	58M
第104図21 図版40-21	深鉢	胴部 破片	高 [5.5] 厚 1.0	やや内湾する	斜行するLRの帯縄文	にぶい黄褐色／砂粒少量、石膏微量	後期前葉 初名寺1式	58M
第104図22 図版40-22	深鉢	口縁部 胴部 破片	高 [5.9] 厚 0.8	段状口縁部／胴部は外縁し、口縁部は僅かに内湾する	口縁部に沿う3条1筋の沈凹文、胴部は無文地に連続する三角文	にぶい黄褐色／砂粒中盤、白色粒子少量、小石微量	後期前葉 堀之内1式	(C-3)G表土
第104図23 図版40-23	深鉢	胴部 破片	高 [5.9] 厚 0.8	外反する	沈凹による懸垂文	にぶい褐色／砂粒中盤、黄褐色粒子・赤色粒子少量、石膏微量	後期前葉 堀之内1式	667Y
第104図24 図版40-24	深鉢	口縁部 胴部 破片	高 [6.0] 厚 0.7	胴部形／外縁し、口縁部は僅かに内湾する	外面：口縁部は隆起帯隆起縁文、隆起帯上は部分的に凸凹目付／8) 字形貼付文、胴部は斜行帯状文の沈凹と斜の帯縄文による帯状文／内面：口縁部直下に一条の横位比縄文	にぶい褐色／砂粒少量、石膏・小石微量	後期前葉 堀之内2式	665Y
第104図25 図版41-25	浅鉢	口縁部 胴部 破片	高 [4.5] 厚 0.7	胴部は外縁し、口縁部は内湾する	外面：口縁部と胴部間に斜線文／内面：平行沈凹による一条の隆起帯／内外面とも丁寧に磨かれられる	褐色／石膏・赤褐色粒子・砂粒少量	後期前葉 堀之内2式	58M
第104図26 図版41-26	鉢	口縁部 破片	高 [6.9] 厚 0.7	内湾する	外面：口縁部は「8」字形貼付文による突起がつく、3条の横位比縄文・部分的な凸凹目付／区切り縦線文／内外面とも丁寧に磨かれられる	にぶい褐色／砂粒中盤、石膏・赤褐色粒子少量	後期中葉 加賀利1式	666Y
第105図27 図版41-27	深鉢	口縁部 破片	高 [7.3] 厚 0.7	小段状口縁／外縁し、胴部は僅かに内湾する	外面：3段の横帯文に、縦文充填・区切り縦線文／内面：口縁部直下は一条の横位比隆起帯付付、凸凹目付、以下2段の平行沈凹文・区切り縦線文／内外面とも丁寧に磨かれる	にぶい褐色／砂粒中盤、黄褐色粒子少量	後期中葉 加賀利1式	666Y
第105図28 図版41-28	深鉢	口縁部 破片	高 [9.4] 厚 0.8	外縁する	4段の横帯文に、縦文充填	灰黄褐色／砂粒やや多量、白色粒子少量、石膏・黒色粒子微量	後期中葉 加賀利B 1式	58M
第105図29 図版41-29	深鉢	口縁部 胴部 破片	高 [9.5] 厚 1.0	僅かに外縁する	外面：口縁部直下は隆起帯による2段の凸凹文、胴部はLR 縄文地文、2本1筋の平行沈凹文・区切り縦線文／内面：口縁部直下に一条の横位比縄文	灰黄褐色／砂粒中盤、石膏・小石少量	後期中葉 加賀利B 1式	58M・ (D-4)G表土
第105図30 図版41-30	深鉢	口縁部 胴部 破片	高 [20.4] 厚 0.8	段状口縁／口縁部は内湾する	複数段の矢羽根状比縄文、括弧部は滑潤	灰黄褐色／砂粒中盤、石膏・褐色粒子少量、赤褐色粒子微量	後期中葉 加賀利B 2式	58M
第105図31 図版41-31	深鉢	口縁部 破片	高 [6.1] 厚 0.6	外縁する	口縁部直下は上下がり・右下がりのそれぞれ斜線幅の異なる縦沈凹文／内外面とも丁寧に磨かれる	にぶい褐色／砂粒中盤、白色粒子少量、赤褐色粒子微量	後期中葉 加賀利B 2式	58M
第105図32 図版41-32	鉢	口縁部 胴部 15%	口 [26.0] 高 [10.1]	内湾する	口縁部は区切り縦線文・連続する弧状の区画内は凸凹目付が充填、以下沈凹による横位比区画文、胴部区画内は短距離文が充填、外弧状区画文内は短距離文が充填、内面は丁寧に磨かれ滑潤	にぶい褐色／砂粒中盤、石膏・赤褐色粒子少量	後期中葉 加賀利B 2～3式	58M・ 1区表土
第105図33 図版41-33	注口土器	口縁部 15%	口 [9.8] 高 [6.8]	内湾する	集合線文・人頭語文／内外面磨かれる	灰黄褐色／砂粒少量・褐色粒子微量	後期中葉 加賀利B 3式	666Y
第105図34 図版41-34	鉢	口縁部 破片	高 [5.3] 厚 0.6	内湾する	刺突列の磨かれた平行沈凹区画文内は横位比縄文・懸垂帯貼付文・対弧文・狭い縦線による弧状文	灰黄褐色／砂粒中盤、褐色粒子少量	後期中葉 安行3a式	660Y
第105図35 図版41-35	深鉢	口縁部 胴部 破片	高 [7.1] 厚 0.8	僅かに内湾する	口縁部直下は2条の刺突列を有する懸垂文、胴部は弧線区画内に刺突文を充填	灰褐色／白色粒子・砂粒やや多量、白色粒子少量、石膏・赤褐色粒子少量、角閃石微量	後期中葉 安行3a式	58M
第105図36 図版41-36	深鉢	口縁部 破片	高 [4.6] 厚 0.8	外反する	沈凹による弧線文・横帯文内は1列の凸凹文を充填	にぶい褐色／砂粒中盤、石膏微量	後期中葉 安行3c式	58M
第106図37 図版41-37	深鉢	胴部 破片	高 [5.6] 厚 1.1	内湾する	沈凹による帯文内は2列の別列点文を充填、以下連続する弧線文	にぶい褐色／砂粒中盤、赤褐色粒子・黄褐色粒子少量、石膏微量	後期中葉 安行3c式	58M
第106図38 図版41-38	深鉢	口縁部 破片	高 [8.9] 厚 0.7	口縁部は水平、口縁部は外縁する	無文、口縁部直下は、胴部へつながり	にぶい褐色／砂粒中盤、白色粒子・赤褐色粒子少量	後期中葉～晩期前葉	(C-2)G 堀内

第30表 遺構外出土縄文時代遺物一覧(2)

探検番号 図版番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴	出土位置 出土遺構
第106図 39 図版 42-1-39	石鏡	チャート	2.3	2.0	0.4	1.7	凹基石鏡／先端部欠損／鏡身部形状は斜辺がやや外湾した三角形形状	664Y
第106図 40 図版 42-1-40	石鏡	チャート	1.9	1.1	0.3	0.4	凹基石鏡／先端部・片側部欠損／鏡身部形状は三角形形状、斜辺は細かな加工によって鋸歯状を呈す	656Y
第106図 41 図版 42-1-41	石鏡	黒曜石	2.1	1.1	0.5	1.0	凸基有茎石鏡／光面／鏡身部形状は木葉形状	660Y

第30表 遺構外出土縄文時代遺物一覧(3)

(3) 弥生時代後期～古墳時代前期の土器・石器(第107図、図版46-2、第31表)

土器は壺形・甕形土器が大半を占め、高环形・器台形・ミニチュア土器がある。大半は小片であるが、本地点で検出された住居跡の時期と同様である。ここでは、埴形土器の個体資料1点を図示し、甕形土器の破片4点と穿孔貝穴痕跡軟質泥岩1点を写真図版に示した。

[土器](第107図1、図版42-2-1～5、第31表)

1～4はS字状口縁裏の口縁部破片で、5は埴形土器である。

[その他](図版42-2-6、第31表)

6は製塩関連遺物と考えられる穿孔貝穴痕跡軟質泥岩である。



第107図 遺構外出土弥生時代後期～古墳時代前期遺物(1/4)

探検番号 図版番号	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	器形・形状	文様・調整等	胎土	出土位置 出土遺構
図版 42-2-1	甕	口縁部 破片	高 [2.6] 厚 0.7	S字状口縁裏	内外面:ヨコナデ	灰黄褐色／砂粒中量、 赤色粒子微量	(C-3)G表土
図版 42-2-2	甕	口縁部～ 肩部 破片	高 [2.8] 厚 0.5	S字状口縁裏	内面:口縁部はヨコナデ、肩部は縦方向のヘラナデ／外 面:口縁部はヨコナデ、肩部は縦方向のハケメ	に白い黄褐色／砂粒 中量、白色粒子・褐色 粒子微量	(C-2)G表土
図版 42-2-3	甕	口縁部 破片	高 [2.1] 厚 0.7	S字状口縁裏	内面:ヨコナデ／外面:ヨコナデ、以下縦方向のハケメ	に白い黄褐色／砂粒 中量、白色粒子微量	(BC-2)G表土
図版 42-2-4	甕	口縁部 破片	高 [2.0] 厚 0.7	S字状口縁裏	内面:ヨコナデ／外面:ヨコナデ、以下縦方向のハケメ	灰黄褐色／砂粒中量、 白色粒子・褐色粒子微量	(BC-2)G表土
第107図 5 図版 42-2-5	埴	口縁部～ 底部 60%	口 (11.3) 高 7.6 底 3.7	口縁部はやや内湾し、 内面は横・斜方向のヘラナデ／外面:側部はハケメ後、口縁 部はヨコナデ、胴部は多方向の丁寧なヘラナデにより滑 沢／内面体部は縦痕跡の残存	内面:口縁部はヨコナデ後、斜・横方向のミガキ、体部 側部は横・斜方向のヘラナデ／外面:側部はハケメ後、口縁 部はヨコナデ、胴部は多方向の丁寧なヘラナデにより滑 沢／内面体部は縦痕跡の残存	に白い褐色／砂粒中 量、褐色粒子少量、 金雲母・赤色粒子・小 石微量	試掘坑

第31表 遺構外出土弥生時代後期～古墳時代前期遺物一覧

(4) 平安時代の須恵器

東金子窯産と思われる埴と産地不明の壺の破片が各1点出土した。いずれも小片のため、図示するに至らなかった。

(5) 中世以降の遺物 (図版42-3、第32表)

磁器・陶器・妬器・土器のほか土製品・金属製品、板碑など様々な種類の遺物が出土した。表土から中世の板碑が出土したが、そのほかは概ね17世紀後半から20世紀代に位置づけられる。いずれも小片のため、9点を写真図版に示した。

[磁器] (図版42-3-1・2・5、第32表)

1は肥前系の中碗、2は半筒碗で17～18世紀代の所産で、5は近代の中皿である。

[陶器] (図版42-3-3・6・7、第32表)

3は肥前系の刷毛目碗で1670～1740年代の所産で、6・7は近代の土瓶である。

[土器] (図版42-3-4、第32表)

4は江戸在地系の土器皿である。

[石製品] (図版42-3-8、第32表)

8は板碑の武蔵型板碑の基部破片と思われる。小型で厚みがあることから、14世紀後半～15世紀代に比定されるものと考えられる。

[ガラス製品] (図版42-3-9、第32表)

9は完形の小型瓶で、気泡が少なく20世紀代の所産と思われる。

図版番号 図版番号	材質	器種	部位 遺存状態	法量 (cm)	成形・調整	文様・輪・装飾等	胎土	製作地	製作年代	出土位置 出土遺構
図版42-3-1	磁器	中碗	口縁部～体部 破片	高 [2.0] 厚 0.4	ロケロ成形	染付/透明釉 外面:輪文	灰白色/緻密	肥前	近世 (1600～ 1800年代)	(B-2)G 雑瓦
図版42-3-2	磁器	半筒碗	口縁部～体部 破片	高 [2.5] 厚 0.4	ロケロ成形	染付/透明釉 内面:縁内線文 外面:一重扇目文	灰白色/緻密	肥前	近世 (1750～ 1820年代)	(B-2)G 雑瓦
図版42-3-3	陶器	刷毛目 中碗	体部 破片	高 [1.9] 厚 0.4	ロケロ成形	鉄軸/白泥/透明釉 内外面:刷毛目	にぶい黄褐色 /緻密	肥前	近世 (1670～ 1740年代)	(D-3)G 雑瓦
図版42-3-4	土器	土器皿	底面 25%	高 [0.6] 径 (7.0)	ロケロ成形	回転糸切り底	褐色/緻密	江戸 在地系	近世 (1800～ 1867年)	(C-2)G 表土
図版42-3-5	磁器	中皿	体部～底面 10%	高 [0.6] 径 (5.0)	ロケロ成形 削り高台	染付/透明釉/青付無輪 底面	灰白色/緻密	不明	近代 (1890年代～)	(D-3)G 雑瓦
図版42-3-6	陶器	土瓶	口縁部 10%	口 (6.8) 高 (2.1)	ロケロ成形	染付/白泥/灰釉 外面:紅文	灰黄色/緻密	北関東系	近代 (19世紀後半)	(B-2)G 雑瓦
図版42-3-7	陶器	土瓶	底面 10%	高 [2.0] 径 (8.4)	ロケロ成形	灰釉/底面無輪	灰黄色/緻密	北関東系	近代 (19世紀後半)	(B-2)G 表土
図版番号 図版番号	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特 徴		出土位置 出土遺構	
図版42-3-8	石製品	板碑	[22.5]	[13.8]	2.9	1,594	武蔵型板碑の基部破片/緑色片岩製 中世 (14世紀後半～15世紀)		1区表土	
図版42-3-9	ガラス製品	瓶類	口 1.2	高 9.5	径 1.9	32.8	完形/透明 近代 (20世紀代)		58M 内雑瓦	

第32表 遺構外出土中世以降遺物一覧

第4章 自然科学分析

第1節 西原大塚遺跡第239地点から出した炭化材の樹種と年輪構造

志木市西原大塚遺跡第239地点の調査において、弥生時代後期後葉～末葉の環濠と弥生時代後期末葉～古墳時代前期中葉の住居跡（Y）から炭化材が出土した。ここではこれらの樹種を同定した結果について報告する。

（1）試料と方法

調査対象とした試料は西原大塚遺跡から出土した炭化材13点である。それぞれの出土位置は各遺構図に示されている。

樹種同定：炭化材の横断面と接線断面、放射断面を徒手または片刃剃刀を用いて割り出し、これらを走査型電子顕微鏡（JEOL JSMIT500；東京都立埋蔵文化財調査センター）下で観察して樹種を同定した。管電圧は1.0kVである。

年輪計測：樹種同定をおこなった資料のうち664Y No.1・3・7は出土時の土塊が付着した状態で回収され、良好な遺存状態が予想されたため、その年輪構造を調べるべくX線CT（島津製作所 inspeXio SMX-225CT FPD HR；東京都立埋蔵文化財調査センター）によって木材の横断面画像を撮像した。X線管電圧は150kV、管電流は140 μ Aで、ビュー数は600である。X線CT撮像によって得られた横断面画像上の年輪幅を計測した。計測にはCybis社のCoorecorder9.8.1を用い、0.01mmオーダーの年輪幅データを得た。

（2）結果

樹種同定：西原大塚遺跡から出土した炭化材13点には広葉樹2分類群が認められた。個別の試料ごとの同定結果を第33表に示した。以下にそれぞれの分類群の木材解剖学的な記載と各標本の横断面の電子顕微鏡画像を示し、同定の根拠を明らかにする。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科（図版43・44：664Y No.1～8、656Y 貯蔵穴、666Y No.1・2）

大型で丸い道管が年輪のはじめに1～3列ほど並び、晩材では小型で厚壁の道管が放射状に配列する環孔材。木部柔細胞は短接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、単列で小型のものと、大型で複合状のものとなる。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科（図版43：666Y No.3、58M No.479）

大型で丸い道管が年輪のはじめに1～3列ほど並び、晩材では小型で薄壁の道管が放射状に配列する環孔材。木部柔細胞は短接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、単列で小型のものと、大型で複合状のものとなる。

年輪計測：664Yから出土した炭化材No.1とNo.3、No.7の横断面画像を撮像し、年輪計測をおこなった。それぞれの資料の横断面画像を図版44に示す。観察の結果、いずれの木材にも樹木の髓及び樹皮

は認められなかった。心材と辺材との区別は難しく、また最終形成年輪が遺存していると判断できるものはなかった。No.1とNo.3は髓に近い部分から放射方向に遺存しており、みかん割りによって製材されたものと見られる。No.7は髓から離れた部分が放射方向・接線方向に遺存しており、みかん割りまたは板目に製材されたものと見られる。

各資料の年輪計測の結果を第34表に示す。664Y No.1には25層、No.3には14層、No.7には18層の年輪が認められた。平均年輪幅はNo.1とNo.7が1.5mm前後、No.3が3.0mmであった。

(3) 考察

弥生時代後期末葉に比定される住居跡664Yでは8点の炭化材はいずれもコナラ垂属クヌギ節に同定された。古墳時代前期前葉に比定される666Yや656Yでも同様にクヌギ節が多くを占めた。664Yから出土したクヌギ節の木材のうちの、No.1とNo.3、No.7には14～25層の年輪が認められた。これらの木材の遺存しなかった部分を含めると、推定樹齢15～30年程度の個体がい用いられたものと推定される。

南関東の弥生時代には竪穴住居の用材にコナラ垂属（コナラ節・クヌギ節が含まれる）が多用される傾向が知られている（高橋・植木 1994、伊東・山田編 2012）。本遺跡における傾向もこれに調和的である。今後、用いられた木材の樹齢や成長速度についての情報も加え、当時の木材利用の様相を詳細に検討していく余地がある。

遺構	遺構	No.	樹種
664Y	住居跡 弥生後期末葉	1	コナラ垂属クヌギ節
664Y	住居跡 弥生後期末葉	2	コナラ垂属クヌギ節
664Y	住居跡 弥生後期末葉	3	コナラ垂属クヌギ節
664Y	住居跡 弥生後期末葉	4	コナラ垂属クヌギ節
664Y	住居跡 弥生後期末葉	5	コナラ垂属クヌギ節
664Y	住居跡 弥生後期末葉	6	コナラ垂属クヌギ節
664Y	住居跡 弥生後期末葉	7	コナラ垂属クヌギ節
664Y	住居跡 弥生後期末葉	8	コナラ垂属クヌギ節
656Y	住居跡 古墳前期前葉	貯蔵穴	コナラ垂属クヌギ節
666Y	住居跡 古墳前期中葉	1	コナラ垂属クヌギ節
666Y	住居跡 古墳前期中葉	2	コナラ垂属クヌギ節
666Y	住居跡 古墳前期中葉	3	コナラ垂属クヌギ節
58M	溝跡 弥生後期中葉～末葉	479	コナラ垂属コナラ節

第33表 樹種同定結果

資料	年輪数	年輪幅 (mm)			
		平均	最小	最大	標準偏差
664Y No.1	25	1.45	0.53	2.93	0.60
664Y No.3	14	3.06	1.40	4.07	0.83
664Y No.7	18	1.62	0.97	2.69	0.52

第34表 年輪計測結果

[引用文献]

- 高橋 教・植木真吾 1994「樹種同定からみた住居構築材の用材選択」『PALYNO』2
 伊東隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社

第2節 西原大塚遺跡第239地点の放射性炭素年代測定

(1) はじめに

志木市の西原大塚遺跡から出土した炭化材について、ウィグルマッチング法を用いた加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

(2) 試料と方法

試料は、664 Y 住居跡から出土した炭化材（No.1）である。年輪数は24年で、最終形成年輪は残っていない。試料の採取位置は、外側から1年輪目（PLD-51601）と13年輪目（PLD-51602）、24年輪目（PLD-51603）の3か所である。なお、X線CT撮影では年輪数は25年確認されたが、試料採取に際して分割した面で確認できたのは外側の24年であった。

測定試料の情報、調製データは第35表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

測定番号	遺跡・試料データ	採取位置	前処理
PLD-51601	遺構：664Y 試料 No.1 種類：炭化材（コナラ炭クヌギ部） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	外側から1年目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51602		外側から13年目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51603		外側から24年目	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L、水酸化ナトリウム：1.0 mol/L、塩酸：1.2 mol/L）

第35表 ウィグルマッチング測定試料及び処理

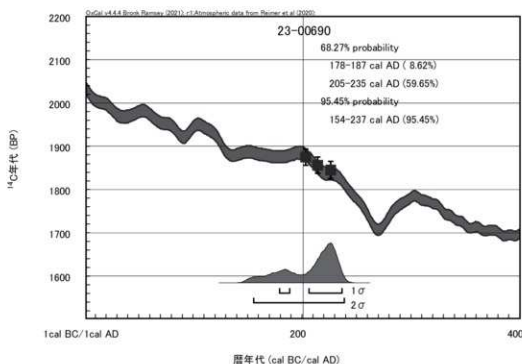
(3) 結果

第36表、図版45に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、ウィグルマッチング結果を、第108図にウィグルマッチング結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{13}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{13}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-51601	-27.70 \pm 0.31	1845 \pm 20	1845 \pm 20	133 - 137 cal AD (2.20%) 166 - 187 cal AD (15.96%) 203 - 238 cal AD (50.11%)	129 - 147 cal AD (10.33%) 152 - 240 cal AD (85.12%)
PLD-51602	-28.15 \pm 0.18	1856 \pm 19	1855 \pm 20	132 - 139 cal AD (6.69%) 159 - 189 cal AD (28.16%) 201 - 231 cal AD (33.42%)	128 - 234 cal AD (95.45%)
PLD-51603	-28.03 \pm 0.18	1875 \pm 19	1875 \pm 20	129 - 144 cal AD (16.10%) 154 - 194 cal AD (42.96%) 199 - 208 cal AD (9.21%)	122 - 226 cal AD (95.45%)
最外試料年代				178 - 187 cal AD (8.62%) 205 - 235 cal AD (59.65%)	154 - 237 cal AD (95.45%)

第 36 表 放射性炭素年代測定、暦年較正、ウィグルマッチングの結果



第 108 図 ウィグルマッチング結果

なお、暦年較正、ウィグルマッチング法の詳細は以下のとおりである。

〔暦年較正〕

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期5730 \pm 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.4(較正曲線データ: IntCal20)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

【ウィグルマッチング法】

ウィグルマッチング法とは、複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって、高精度で年代値を求める方法である。測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1年毎或いは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の測定値から暦年較正を行い、得られた確率分布を最外試料と当該試料の中心値の差だけずらしてすべてを掛け合わせるにより最外試料の確率分布を算出し、年代範囲を求める。なお、得られた最外試料の年代範囲は、まとめた試料の中心の年代を表している。そのため試料となった木材の最外年輪年代を得るためには、最外試料の中心よりも外側にある年輪数を考慮する必要がある。

(4) 考察

試料の暦年較正結果のうち2σ暦年代範囲(確率95.45%)に着目すると、154 - 237 cal AD (95.45%)の暦年代範囲を示した。これは2世紀中頃～3世紀前半で、藤尾(2013)によると弥生時代後期～終末期に相当する。

なお、木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の試料は、最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

【引用・参考文献】

- Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J., and Weninger, B. 2001 「Wiggle matching」 『Radiocarbon dates. Radiocarbon, 43 (2 A)』 p 381-389
- Bronk Ramsey, C. 2009 『Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1)』 p 337-360
- 藤尾慎一郎 2013 『弥生文化像の新構築』 p 275 吉川弘文館
- 中村俊夫 2000 『日本先史時代の¹⁴C年代』 『放射性炭素年代測定法の基礎 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編』 p 3-20 日本第四紀学会
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann - Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0 - 55 cal kBP). Radiocarbon, 62 (4), 725-757, doi:10.1017/RDC.2020.41, <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

第5章 調査のまとめ

本調査から縄文時代では炉穴1基・土坑9基・ピット11本、弥生時代後期～古墳時代前期では住居跡13軒・掘立柱建築遺構1棟・溝跡1本・ピット4本、中世以降では土坑14基・溝跡1本、ピット22本が検出された。このほかには調査区西側と中央部から南側にかけて縄文時代の倒木痕・植物の根痕などが広がる。南壁付近の倒木痕からは五領ヶ台式の土器が良好な状態で出土した。

第1節では縄文時代早期の炉穴と後期の土坑、第2節では弥生時代後期～古墳時代前期の本地点における各遺構の時期変遷のほか、本遺跡の環濠と集落について、第3節では本地点における近代以降の様相について、まとめることとする。

第1節 縄文時代

(1) 早期

本遺跡内で22基の炉穴が報告されており、このうち早期の炉穴は特定土地区画整理事業に伴う発掘調査（以下、区画整理）第34地点で10基（5～14 F P）、第113地点で1基（15 F P）、本地点で1基（23 F P）の合計12基が検出されている（第37表）。炉穴は遺跡の北側と東側に点在しており、早期の炉穴は遺跡の北側に集中する。概ね条痕文期に比定され、足場をもたない2～5基の炉床部を有する複合形態が多い。炉穴に伴う条痕文土器はいずれも小片が多く、9 F Pと12 F Pでは刺突文が口唇端部に施された破片資料があるものの詳細時期については明記されていない。

荒川流域では多数の炉穴が発見されており、上田 寛氏によって集成され、炉穴の変遷などがまとめられている。それによると炉穴は燃糸文期から出現し、複数の遺跡で確認されている。さいたま市(旧浦和市)駒前遺跡で発見された稲荷台式期の炉穴は、足場を有しない円形を呈する。早期前半の炉穴の発見数は少ないが、後半に入ると炉穴は多数確認され、炉部と足場を有する楕円形の炉穴がアメーバ状または樹枝状に重複する。早期末葉（打越式～下吉井式期）になると炉穴の構築は衰退し、足場の設定が確認できない炉部中心の単独の炉穴が圧倒的に多くなり、炉穴は前期花積下層式期まで残る（上田 1990・2010）。本遺跡の炉穴は足場を有していないものの、炉部を作り直して連続で構築していることから早期後葉（城ノ台北式～野川式期）に相当するものと考えられる。

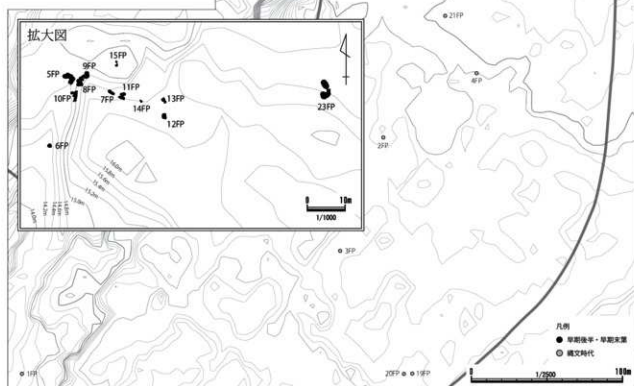
また、早期の遺構は炉穴以外、本地点の944 Dのみで住居跡や竪穴状遺構、集石土坑や陥穴などは発見されていない。これまでの調査では、炉穴は区画整理第34・113地点に集中していたが、本地点23 F Pの発見により東側に広がることが判明した。なお、炉穴は標高15.0 mより西側の緩斜面地と標高15.6 m前後の等高線に沿って分布する（第109図）。

(2) 後期

本遺跡内の後期の遺構は本地点を含めて、住居跡3軒（堀之内1式期2・加曾利B1式期1）、土坑32基（堀之内1式期19・堀之内2式期5・加曾利B1式期1・後期7）が報告されている（第38表）。遺構の分布状況を見ると、堀之内1式期は遺跡の北半分に点在しており、堀之内2式期は第216地点、

FP	時期	調査地点
1	縄文時代か	区画整理第9地点
2	縄文時代か	区画整理第22地点
3	縄文時代か	第43地点
4	縄文時代か	区画整理36地点
5	早期後半	区画整理第34Ⅱ地点
6	早期後半	区画整理第34Ⅱ地点
7	早期後半	区画整理第34Ⅲ地点
8	早期後半	区画整理第34Ⅲ地点
9	早期後半	区画整理第34Ⅲ地点
10	早期後半	区画整理第34Ⅲ地点
11	早期後半	区画整理第34Ⅲ地点
12	早期後半	区画整理第34Ⅳ地点
13	早期後半	区画整理第34Ⅳ地点
14	早期後半	区画整理第34Ⅳ地点
15	早期末葉	第113地点
16	欠番	第179地点
17	縄文時代	第216地点
18	縄文時代	第216地点
19	縄文時代	第227地点
20	縄文時代	第227地点
21	縄文時代	第223地点
22	縄文時代	第235地点
23	早期後半	本地点

第37表 早期の遺構一覽



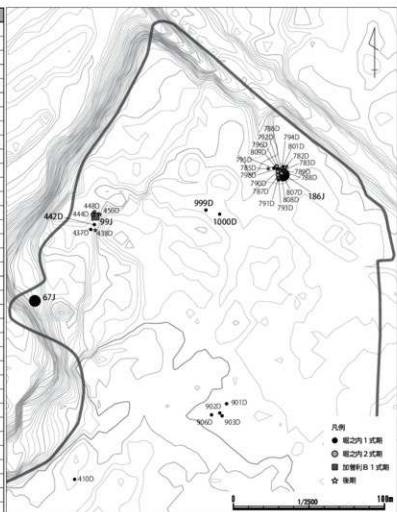
第109図 早期の遺構分布図 (1/2,500・1/1,000)

加曾利B1式期は区画整理第34Ⅱ地点のみで確認されている。

本地点の2基の土坑(999・1000 D)は、いずれも径2 m・深さ2 m前後を測る円形を基調とする大型土坑である。断面形は開口部より底部が広がり、中層より下層にかけて一部に袋状を呈する。999 Dは坑底中央に径0.7 m・深さ0.3 mのピット、1000 Dは径1.2 m・深さ0.4 mの小土坑の付帯施設を伴

遺構名	時期	調査地点
67 J	堀之内1式期	区画整理第33Ⅰ地点
99 J	加曾利B 1式期	区画整理第34Ⅱ地点
186 J	堀之内1式期	第216地点
410 D	堀之内1式期	第54地点
437 D	堀之内1式期	区画整理第34Ⅱ地点
438 D	後期	区画整理第34Ⅱ地点
442 D	堀之内1式期	区画整理第34Ⅱ地点
444 D	加曾利B 1式期	区画整理第34Ⅱ地点
448 D	後期	区画整理第34Ⅱ地点
450 D	後期	区画整理第34Ⅱ地点
782 D	後期	第216地点
783 D	堀之内1式期	第216地点
785 D	後期	第216地点
786 D	堀之内1式期	第216地点
787 D	堀之内2式期	第216地点
788 D	堀之内1式期	第216地点
789 D	後期	第216地点
790 D	堀之内2式期	第216地点
791 D	堀之内1式期	第216地点
792 D	堀之内1式期	第216地点
793 D	堀之内1式期	第216地点
794 D	堀之内1式期	第216地点
795 D	堀之内1式期	第216地点
796 D	堀之内2式期	第216地点
798 D	堀之内1式期	第216地点
801 D	堀之内1式期	第216地点
807 D	堀之内2式期	第216地点
808 D	堀之内2式期	第216地点
809 D	堀之内1式期	第216地点
901 D	堀之内1式期	第223地点
902 D	堀之内1式期	第223地点
903 D	堀之内1式期	第223地点
906 D	堀之内1式期	第223地点
999 D	堀之内1式期	本地点
10000 D	堀之内1式期	本地点

第38表 後期の遺構一覧

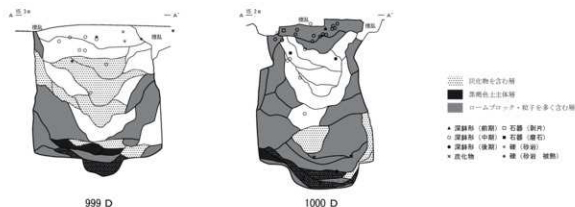


第110図 後期の遺構分布図(1/2,500)

う。覆土中には焼土や炭化物を含み、999 Dはピット開口部より外側にロームブロックと粘土が輪状に、1000 Dでは小土坑開口部よりやや少し上の土坑本体の壁際沿いに粘土の堆積が確認できた。下層から付帯施設にかけては、いずれも黒褐色土主体の層とロームを含む層が互層に堆積する(第111図)。一連の堆積であることから、土坑使用時において付帯施設はいずれも開口しており、意図的な埋め戻しの可能性が高い。中層から下層の壁際ではロームブロックを多量に含む層が堆積しており、今より開口部の狭いフラスコ形土坑(註1)であった可能性を考慮すれば、上部の壁が崩落した可能性がある。999 Dの中央部中層には炭化物を含む層が堆積しており、僅かであるがその上面で焼土の存在も確認されている。埋没過程で断面が凹形になった際に新たな土坑が形成され、二次的な利用があった可能性も述べておきたい。遺構上部に集中する時期の異なる土器は、その後に堆積した際に混入したものと考えられる。

大型の袋状土坑は大宮台地や武蔵野台地の台地部において称名寺式期に出現し、堀之内式期～加曾利B式期に最盛期を迎え、曾谷～安行1式には急激に衰退し晩期にはほとんどみられなくなる(渡辺2013)。1000 Dの小土坑上面からは堀之内1式の口縁部破片が出土し、999 Dは上層ではあるが堀之内1式の深鉢形土器が含まれる。

後期的大型土坑は本地点のほかに、区画整理第34Ⅱ地点の442 Dがあげられる。442 Dは2m前後



第111図 999・1000号土坑土層断面(1/60)

の楕円形で、深さは1.3mほどあり、坑底中央に深さ0.3mのピットを伴う。断面形は袋状を呈し、覆土中に焼土や炭化物を含む。出土遺物には堀之内1式の土器片が含まれており、深さは後世によって削られた可能性を考慮すれば、本地点の土坑との類似性が非常に高いといえる。よって、442・999・1000 Dは、土坑の形態や出土遺物から堀之内1式期に位置づけられよう。

和光市丸山台遺跡では後期前葉を代表する集落跡が発見されている。竪穴住居跡や掘立柱建物跡(註2)のほかフラスコ形土坑などの土坑が多数検出されている。この遺跡は71号大型土坑を中心とした外側に掘立柱建物群(内帯)、その外側に竪穴住居群(外帯)の二重の弧状帯を有する集落が想定されている(野中 1993)。しかし、この調査地西側に隣接する調査を埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した発掘調査報告書では、掘立柱建物群と竪穴住居群の間の空白地や地形的な制約などにより、集落は谷戸川へ向かう斜面の低地帯に帯状に広がることが指摘されている(新屋 1994)。

本遺跡における後期前葉の集落様相は遺構の発見数が少ないため不明である。186 Jは遺跡北東部に67 Jは西端部の斜面地にあり、今回の調査から住居間に3基の大型土坑(442・999・1000 D)が点在することが判明した。丸山台遺跡のフラスコ形土坑は掘立柱建物跡や竪穴住居跡の建物跡に近接するものと、建物跡から離れて群在する二形態があり、3基程度を1単位とし、後者は2～3単位にまとまって群在し、集団で管理するものとして位置づけられている(野中 1993)。この分析結果を本遺跡にあてはめると、大型土坑は建物跡と離れて存在する。検出された遺構数は少ないものの、これらのことから、住居跡と大型土坑は関連する集落跡として検討していく必要があろう。

第2節 弥生時代後期～古墳時代前期

(1) 本地点における各遺構の変遷

今回の調査では該期の住居跡13軒(656～668 Y)、掘立柱建築遺構1棟(6 T)、環濠と思われる溝跡1本(58 M)が検出された。遺構は各所で重複しており、切り合い関係は次のとおりである。

(旧) 657 Y	658 Y	660 B Y	662 Y	668 Y	659 Y
↓	↓	↓	↓	↓	(重複)
(新) 656 Y	659 Y	660 A Y	661 Y	58 M	6 T

各遺構から出土した遺物とともに、遺構の帰属時期について簡単にまとめることとする。なお、土器器種名の「形土器」はこれ以降、省略して述べることにする。

時期設定については、比田井克仁氏の編年案を基本とし、他地域との併行関係は第39表に案を示した。表内の各研究者の時期区分の文献は引用・参考文献にまとめて記載した。

地域	畿内		尾張		東遠江	東駿河	南武蔵			北武蔵	兎玉地方	北関東										
	寺沢 1986	米田 1990 他	赤塚 1990 他	鈴木 2021	藤原 2006	古屋 2015	比田井 2001 他	尾形 2023 他	志木	柿沼 2015 他	松本 2023 他	若狭 2007 他										
弥生後期	中葉	畿内V	V様式	山中	後期	菊川Ⅲ (新)	難鹿塚 (後)	北川谷 3期新	Ⅱ段階 新相		吉ヶ谷 1式新	樽式2期										
		庄内0									北川谷 4期古		Ⅲ段階 古相	1期	吉ヶ谷 2式古							
	庄内1	庄内I	廻間 Ⅰ	0	菊川Ⅳ (最新)	北川谷 4期新		Ⅲ段階 新相	2期	吉ヶ谷 2式新	樽式3期											
				1																		
2																						
3																						
古墳前期	初頭	庄内2	庄内Ⅱ	廻間 Ⅱ	4	三沢 西原Ⅰ	大塚Ⅰ	北川谷 5期古	Ⅰ段階 古相	3期	吉ヶ谷系	弥生時代 終末期	古墳前期 古段階									
		庄内3	庄内Ⅲ		1			大塚Ⅱ	北川谷 5期新	Ⅰ段階 新相		4期		前期前葉								
	2																					
	3																					
	4																					
	前葉	布留0	庄内Ⅳ	廻間 Ⅲ	1	三沢 西原Ⅱ	大塚Ⅲ	北川谷 6期	Ⅱ段階	5期			前期中葉	古墳前期 中段階								
		庄内V 布留Ⅰ	2																			
	3																					
4																						
中葉	布留1	庄内V 布留Ⅰ	廻間 Ⅲ	1	三沢 西原Ⅱ	大塚Ⅲ	北川谷 6期	Ⅱ段階	5期			前期後葉	古墳前期 新段階									
	布留2	布留Ⅱ		2								三沢 西原Ⅲ				Ⅲ段階	6期			前期末葉		
3																						
4																						
前平 期	松河 戸Ⅰ																					

第39表 弥生時代後期後半～古墳時代前期 編年(案)

【656号住居跡】

器種組成は壺・甕・鉢・小型高環・小型器台・埴である。第27図1の壺は幅広の複合口縁部が器面に密着する無文壺である。5・6のS字状口縁甕は頸部内面の刷毛調整がなく、外面肩部に横線が僅かに残るA系統C類(赤塚 1986)に該当し、廻間編年Ⅲ式期(赤塚 1990)に相当する。12・13の高環はいずれも口縁部を欠損するが、扁平に丸く立ち上がる坏部に有段部を持った口縁部がつく北陸系の高環(比田井 1987)と思われる。時期は古墳時代前期前葉に位置づけられる。

【657号住居跡】

器種組成は壺・甕・高環である。遺物はいずれも小片であるため図示できなかったが、小型高環の脚部破片が含まれる。656 Yに切られるため、時期は古墳時代前期初頭に位置づけたい。

【658号住居跡】

器種組成は壺・甕・高環である。口縁端部に刻みを有する第31図1の甕と、2の高環はそれぞれ58 M出土土器と同一個体である。いずれも弥生時代後期後葉～末葉に比定され、本住居跡廃絶の際に58 Mの覆土を利用したため、混入したものと思われる(第112図)。3は小型高環の脚部で、小片には幅狭の複合口縁を有する無文壺や、刷毛調整の施された甕などが含まれる。全体的な様相から、古墳時代前期初頭に位置づけたい。

【659号住居跡】

器種組成は壺・鉢・壺・小型高環・小型器台・埴である。壺はいずれも頸部が、くの字に屈曲する単口縁壺である。器面は刷毛調整が施され、胴部は球形を呈する。比田井編年古墳前期Ⅰ段階新相（比田井 2001・2004）に相当する。第36図8・9は坏部が欠損するが、接合部には横方向のミガキが施され、古い様相が残る。10の器台は器高が9.6cm、脚部径が10.0cmを測り、器高と脚部径が1対1に近いことから廻間編年Ⅱ～Ⅲ式期に、11の器台は器受部下半に稜を有し、口縁部が開くことから廻間編年Ⅲ式期に相当する。全体の様相から時期は古墳時代前期中葉に位置づけられる。

【660号住居跡】

器種組成は壺・壺・小型高環・小型器台である。第43図1の二重口縁壺は頸部が僅かに逆ハの字を呈する二重口縁壺BまたはC類（比田井 2004）に該当する。660Y-A炉に伴う2～4は、いずれも小型壺B1類（比田井 2001）にあてはまり、3・4は胴部下半に最大径を有する東海東部（東遠江の菊川式・東駿河の鹿鹿塚式）の影響を受ける。刷毛調整された壺の口縁部は直立気みで、頸部は強く屈曲する。器台はやや内湾する脚部に多孔の透孔を有する（第45図10・11）。小型壺や壺は比田井編年古墳前期Ⅰ段階、器台は脚部内湾が喪失傾向にある廻間編年Ⅱ式期に相当する。よって時期は、古墳時代前期前葉に位置づけられる。

【661号住居跡】

器種組成は壺・壺・小型高環・小型器台である。第49図1の壺は口縁部が内湾し、口縁端部がごく僅かに外反する。廻間編年壺C類のヒサゴ壺を模倣したと思われ、Ⅱ式期に相当する。3は幅狭の複合口縁部を有する無文壺である。5の高環は坏部が半球状を呈し、南関東地方出土高環B類（比田井 2001）に酷似しており、庄内式期～布留式期（寺沢編年）に相当する。時期は古墳時代前期前葉に位置づけられる。

【662号住居跡】

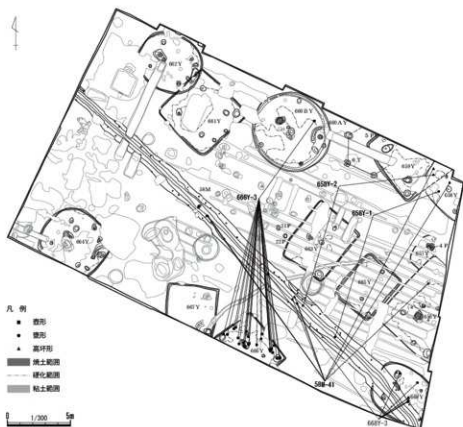
器種組成は壺・壺・高環である。第54図1の壺は複合口縁部に羽状縄文と、竹管状工具による刺突の円形浮文が施される。3の壺は口縁端部に刻みが施され、5の高環の接合部には凸帯がつく。4の小型高環は坏部が碗状を呈し、畿内地方の影響がうかがえる。時期は弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭に位置づけられる。

【663号住居跡】

器種組成は壺・壺・埴である。壺や壺は小片で、第58図1は刷毛調整の施された壺で、底部はやや丸底を呈する。2は器壁が薄く精製され、体部は扁平な球形を呈する埴である。口縁は体部に比してやや大きく、米田編年E類にあてはまり、布留Ⅱ式期（米田 1990）に相当する。本住居跡は遺物量が少ないため、時期は古墳時代前期中葉～後葉に位置づけたい。

【664号住居跡】

器種組成は壺・壺・鉢である。壺は器面に密着する幅狭の複合口縁を有する無文壺、羽状縄文やS字状結節文の施された胴部破片が含まれ、壺は頸部が緩やかに屈曲し、口縁端部には刻みが施される。鉢は折返し口縁部に羽状縄文が施文され、下端部には刻みを有する。壺や壺は比田井編年弥生後期Ⅲ段階新相に相当し、時期は弥生時代後期末葉に位置づけられる。なお、本住居跡は焼失住居で出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行ったところ、154 - 237 cal AD の暦年代範囲を示し、分析結果とも一致する。



第112図 本地点における同一個体を含む遺構間接合関係図（1／300）

【665号住居跡】

器種組成は壺・甕・小型高坏・埴である。いずれも小片で、図示できた第67図1の埴は底部が欠損するが、器壁は薄く精製されたつくりである。口縁部は体部に比して大きいと推測でき、米田編年E類、布留Ⅱ式期に相当する。本住居跡は遺物量が少ないため、時期は古墳時代前期中葉～後葉に位置づけたい。

【666号住居跡】

器種組成は壺・甕・鉢・高坏である。第72図1の口縁部は僅かに内湾しながら開く単口縁壺で、2は二重口縁壺である。2の頸部は僅かに逆ハの字を呈し、有段部は粘土がごく僅かに垂下するものきれいに接合される。口縁部は僅かに外反し、口唇端部は外方向につまみだされる。3は在地化し変容したパレススタイル文様壺である。肩部には数条一単位の横線文が上下に施され、その間に断続する鋸歯文が描かれる。円形浮文は1か所のみ確認できたが、いくつか割られた痕があり、おそらく鋸歯文の頂部に貼付されていたと思われる。胴部は球形を呈し、赤彩は施されていない。この壺は炉、貯蔵穴及び住居跡全体での接合に加えて、660Y上層との接合関係も特筆される（第112図）。

甕はいずれも刷毛調整された単口縁甕である。6は口縁部が短く頸部はく字に屈曲し、器壁は厚い。7は胴部中位より上に最大径を有し、胴部下半の開きは直線的である。比田井編年古墳前期Ⅱ段階に相当する。9・10は口縁部が短く、体部はやや扁平な球形を呈する鉢である。10は丁寧なつくりであるのに対し、9はやや粗い。時期は古墳時代前期前中葉に位置づけられる。

【667号住居跡】

器種組成は壺・甕・小型高環・小型器台である。第75図1の甕は刷毛調整にミガキが加えられる関東北西部（榛名山東南麓・妻沼低地周辺）の影響を受ける。2の小型高環は脚部を欠損するが、環部は塊状を呈する。比田井編年小型高環A類にあてはまり、Ⅰ～Ⅱ段階に相当する（比田井 2001）。3の器台は器壁が厚く、内面は刷毛調整されるなど粗雑なつくりである。甕・高環の時期判別が難しく、時期は古墳時代前期に位置づけておく。

【668号住居跡】

器種組成は壺・甕である。第79図1の壺は破片ではあるものの幅狭の複合口縁部が垂下し、器面からやや離れることから、比田井編年弥生後期Ⅲ段階古相にあてはまる。3の甕は口縁端部に刷毛状工具による刻みが施される。58Mに切られるため、時期は弥生後期後葉に位置づけられる。

【6号掘立柱建築遺構】

本遺構から遺物は出土しなかったが、建物の平面形は六角形に想定され、南関東では弥生時代後期末葉から古墳時代前期初頭にかけて特徴的な掘立柱建物跡である（及川 2009）。このことから、時期は弥生時代後期末葉～古墳時代前期初頭に位置づけたい。

【58号溝跡】

器種組成は壺・甕・鉢・高環である。壺は装飾壺を主体に単口縁壺と広口壺で構成され、パレススタイル文様壺の胴部片が含まれる。装飾壺は口縁部がやや開き気みで、複合部が器面から離れるものと密着するものがある。文様は縄文や網目状燃糸文、S字状結節文などが施され、複合部に棒状浮文や円形朱文、頸部に円形浮文が貼付されるものもある。単口縁壺は頸部に一条の沈線がめぐり、胴部下半に最大径を有する東海東部の影響を受けた壺も含まれる。甕は口縁端部に刻みを有する刷毛調整甕が多く、頸部は緩やかな屈曲とくの字に屈曲する二形態がある。単口縁の刷毛調整甕は頸部の屈曲が緩やかで、調整にミガキが加えられる関東北西部の影響がみられる。壺・甕類は、概ね比田井編年弥生後期Ⅲ段階に相当する。

鉢は様々な器形がみられ、第90図38は外面に丁寧なミガキが施されており、底部は欠損するが有孔鉢の可能性が有る。高環はいずれも大型で、40は環部が塊状を呈する高環A類、第91図43は口縁部が欠損するものの環部は箱形を呈する高環C類（比田井 2001）にあてはまり、C類は中部高地箱清水式の特徴を有する。42は口縁部が跨状に広がる高環で、菊川式に由来し口縁部や接合部の縄文・刺突などは省略され、在地化したものと考えられる。なお、第90図37のやや長胴の鉢や、41の高環は吉ヶ谷式に系譜を有する。41の口縁部は2段の折り返しで、端部に刷毛状工具による刻みを有する、吉ヶ谷2式期（柿沼 2015）に相当する。この高環は656Y中層・659Y上層と遺構間接合し、658Y中層と659Y下層の遺構間接合と同一個体でもある（第112図）。時期は弥生時代後期後葉～末葉に位置づけられる。

以上のような結果をもとに、各遺構の変遷を検討すると第40表のようになる。遺構間接合では調査区東半分に偏りがみられ（第112図）、住居構築ないしは廃絶過程で付近の土を利用したことによるものと考えられる。

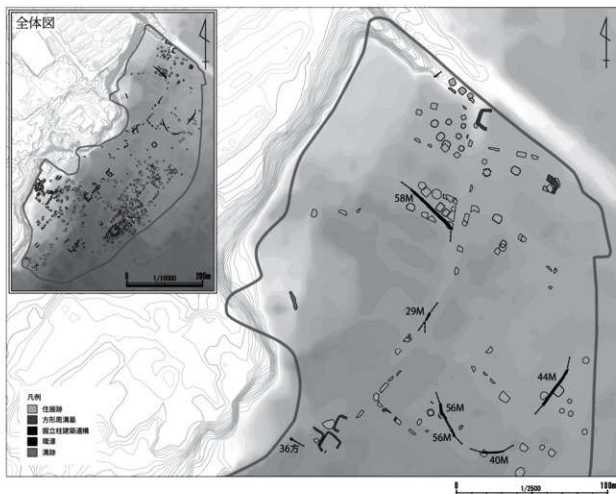


第40表 本地点における各遺構の時期変遷

(2) 本遺跡の環濠について

本地点から調査区を東西に横切り、南東隅部に南に曲がる 58 M が検出された。規模は長さ 38 m・幅 1.0～1.9 m・深さ 0.5～0.9 m を測り、底面標高は南西から南東に傾斜する。西側を除いた上層～中層にかけては満遍なく遺物が出土し、断面形はV字形ないしは逆台形を呈することなどから、環濠の一部と考えられる。

本遺跡の環濠は本地点から東側で部分的に確認されており、29 M (区画整理第 49 II 地点)・40 M (第 138 地点・区画整理第 56 I 地点)・44 M (第 231 地点・区画整理第 56 II 地点)・56 M (第 223 地点) が該当し、一連の遺構として詳細は第 231 地点の報告(大久保・尾形 2021)にまとめられて



第113図 本遺跡の地形と弥生時代後期後半の環濠分布図 (1/10,000・1/2,500)

いる。遺構底面の標高は58 Mの西側：14.2 m、東側：13.9 m、56・40 M：14.6 m、44 M：14.3 mであり、比高差は最大で約0.7 mである。本地点東側の環濠の時期は弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられているが、44 M出土の裏は口縁端部に刻みを有し、頸部は緩やかに屈曲する。幅広い複合口縁壺の複合部は縄文地に棒状の沈線文が施され、幅狭の複合口縁壺は複合部が器面からやや離れる。全体的に58 M出土土器に類似しており、弥生時代後期後葉～末葉に位置づけられる。そうすると、29・40・44・56・58 Mは同一遺構の可能性があり、検出標高は環濠西側15.2～15.4 m/東側15.4～15.6 mの等高線に位置し、地形に沿って構築された可能性がある。また、本地点南側の36方断面形はV字形を呈し、規模は44 Mと類似することから環濠の可能性もある。遺構底面の標高は14.3 mを測り、44 Mや58 Mとも一致する。

埼玉県における該期の環濠について、菊地有希子氏は次のようにまとめている(菊地 2007)。①覆土は自然堆積が多い。②土器は覆土中層からまとめて出土する。③環濠は1条が多い。④断面形はV字形が多い。⑤平面形態は集落を完全に囲んでいなくても、舌状台地の基部を濠で切断する場合や、台地縁辺部の一部をとり囲む例が多い。⑥土塁や柵の痕跡はない。⑦環濠の継続性は短く、一時的なものである。本遺跡の環濠に類似点が多く、②～⑤、⑦が当てはまる。⑥については、58 Mの壁面から径6～10cm程度の浅い小穴が上層から中層で部分的に確認できた点で異なるが、性格・用途は不明である。

環濠の機能については昨今、防御施設以外に①土地の境界としての区画、農耕社会における「土地」の占有意識。②集落内を区切る「街区」・「区割り」。③精神的な結界としての区画。④集団の内的結束を図るため。⑤湧水や排水のための流路。などこのほかにも様々な見解があり、杉山和徳氏がまとめている(杉山 2020)。本環濠の機能については言及できないが、幅が狭く容易に飛び越えることができる。本地点58 Mの発見によって、環濠の存在を追認する資料となった。環濠は遺跡北部に集中して確認されているが、どのようにめぐるかは今後の発見に期したい。

(3) 本遺跡の集落について

本地点を含めたこれまでの調査では、該期の住居跡668軒、方形周溝墓36基、掘立柱建築遺構5棟が検出されている。未報告や欠番を除いた住居跡657軒、方形周溝墓34基、掘立柱建築遺構5棟、溝跡9本を遺構の種類ごとに分けて、遺構分布図(付図)を作成した。住居跡は遺跡北部、南東部、南西部にそれぞれに集中してみられ、遺跡中央西部には方形周溝墓が南北に広がる。

なお、本報告では集落の時期変遷については行わず、資料紹介にとどめた。各遺構一覧表(第41表)の時期については、参考のために報告書に記載されている内容を基にし、方形周溝墓については宮川幸佳氏がまとめたものを参照した(宮川 2003・2008)。また、焼失住居の分布は第114図に示し、遺物図面は報告書に掲載されている個体土器を中心に抽出し、個体・破片資料ともに縮尺を揃えて遺構種類ごとにまとめた。以上、今回は西原大塚遺跡の集落時期変遷研究の基礎資料として提示しておく。

第5章 調査のまとめ

図：近畿圏(西)・南(東)後期・白(前)期
● 赤木直樹

【北(前期)】	遺構地点	当区明遺構の		時期	報告書シリーズ名 番号	遺構名	遺構地点	当区明遺構の		時期	報告書シリーズ名 番号	
		目	新					目	新			
1Y	堀池48年度		新	五塚式	●	志木市の文化財 4			新	古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E 遺跡調査公開報告書 13E	
2Y	堀池55年度		新	弥生期式		志木市史				古前(前半) 古前(前半)	遺跡調査公開報告書 13E 遺跡調査公開報告書 13E	
3Y	堀池55年度		新	弥生期式		志木市史			77Y	古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E 志木市の文化財 56	
4Y	堀池55年度		新	弥生(未築)～古前		志木市史				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E 遺跡調査公開報告書 13E	
5Y	3		新	弥生(未築)～古前(約頭)		遺跡調査公開報告書 1				古前	遺跡調査公開報告書 13E 志木市の文化財 56	
6Y	3		新	弥生(未築)～古前(約頭)		遺跡調査公開報告書 1				古前	遺跡調査公開報告書 13E	
7Y	4		新	弥生(未築)～古前(約頭)		遺跡調査公開報告書 3				古前(前半)	遺跡調査公開報告書 13E	
8Y	4		新	弥生(未築)～古前(約頭)		遺跡調査公開報告書 3				古前(前半)	遺跡調査公開報告書 13E	
9Y	4		新	弥生(未築)～古前(約頭)		遺跡調査公開報告書 3				古前(前半)	遺跡調査公開報告書 13E	
10Y	6		新	弥生(未築)～古前(約頭)		志木市の文化財 13				古前(前半)	遺跡調査公開報告書 13E	
11Y	8		新	弥生(未築)～古前(約頭)		志木市の文化財 14				古前(前半)	遺跡調査公開報告書 13E	
12Y	8		新	弥生(未築)～古前(約頭)		志木市の文化財 14**				古前	遺跡調査公開報告書 13E	
13Y	8		新	弥生(未築)～古前(約頭)		志木市の文化財 14				古前	遺跡調査公開報告書 13E	
14Y	8		新	弥生(未築)～古前(約頭)	●	志木市の文化財 14				古前	遺跡調査公開報告書 13E	
15Y	8		新	弥生(未築)～古前(約頭)		志木市の文化財 14				古前	遺跡調査公開報告書 13E	
16Y	8		新	弥生(未築)～古前(約頭)		志木市の文化財 14**				古前	遺跡調査公開報告書 13E	
17Y	8	18Y		弥生(未築)～古前(約頭)		志木市の文化財 14			92AY	古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
18Y	8	17Y		弥生(未築)～古前(約頭)		志木市の文化財 14			92AY	古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
19Y	8			弥生(未築)～古前(約頭)		志木市の文化財 14				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
20Y	8			弥生～古前		志木市の文化財 14				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
21Y	8	1方		弥生(未築)～古前(約頭)		志木市の文化財 14				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
22Y	8	1方		弥生(未築)～古前(約頭)		志木市の文化財 14				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
23Y	8			弥生～古前		志木市の文化財 14				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
24Y	9			弥生(未築)～古前(約頭)		志木市の文化財 14				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
25Y	10			弥生(未築)～古前(約頭)		志木市の文化財 14				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
26Y	IS1			古前(約頭)		遺跡調査公開報告書 13E				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
27Y	IS1			弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
28Y	IS1			弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
29Y	IS1			弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
30Y	IS1			古前(前半)		遺跡調査公開報告書 13E				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
31Y	IS1			弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
32Y	IS1, 100Y(21)			弥生(未築)～古前(約頭)		遺跡調査公開報告書 13E				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E*	
33Y	IS1, 110			弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E*	
34Y	14	35Y		弥生(未築)～古前(約頭)		志木市の文化財 24				古前	遺跡調査公開報告書 13E	
35Y	14	34Y		弥生(未築)～古前(約頭)		志木市の文化財 24				古前	遺跡調査公開報告書 13E	
36Y	14			弥生(未築)～古前(約頭)		志木市の文化財 24				古前	遺跡調査公開報告書 13E	
37Y	14			弥生(未築)～古前(約頭)	●	志木市の文化財 24				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
38Y	IS3			弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
39Y	IS3			弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
40Y	IS3			弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
41Y	IS4.1			弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E			117Y	古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
42Y	IS4.1			弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E				古前(前半)	遺跡調査公開報告書 13E	
43Y	IS4.1, 12.1			弥生	●	遺跡調査公開報告書 13E			119Y	古前(前半)	遺跡調査公開報告書 13E	
44Y	IS4.1			弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E			118Y	古前(前半)	遺跡調査公開報告書 13E	
45Y	IS4.1			弥生～古前		志木市の文化財 23				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
46Y	IS4.8			古前(後半)		遺跡調査公開報告書 13E				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
47Y	32	45Y		弥生		志木市の文化財 23				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
48Y	IS4.8			古前		遺跡調査公開報告書 13E				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
49Y	IS6.1, 12.1			51Y		遺跡調査公開報告書 13E				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
50Y	IS6.1, 12.1			古前		遺跡調査公開報告書 13E				古前(約頭)	遺跡調査公開報告書 13E 志木市の文化財 64	
51Y	IS6.1, 12.1	49Y	52Y	古前	●	遺跡調査公開報告書 13E				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
52Y	IS6.1, 12.1	51* 350Y	54Y	古前(後半)		遺跡調査公開報告書 13E				古前(後半)	遺跡調査公開報告書 13E	
53Y	IS6.1 + 8日, 180	55* 578Y		古前(古)		遺跡調査公開報告書 13E*				古前(前半)	遺跡調査公開報告書 13E	
54Y	IS6.1, 12.0	52Y	56Y	古前(前半)	●	遺跡調査公開報告書 13E				古前(後半)	遺跡調査公開報告書 13E*	
55Y	IS6.1, 180		57Y	弥生(後半)		遺跡調査公開報告書 13E				古前(後半)	遺跡調査公開報告書 13E*	
56Y	IS6.1, 180	54Y	57Y	弥生(未築)～古前(約頭)		志木市の文化財 70				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
57Y	IS8.1			弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E*				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
58Y	IS8.1	1方		弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E				古前～古前	遺跡調査公開報告書 13E	
59Y	IS8.1			弥生(前半)		遺跡調査公開報告書 13E				古前(後半)	遺跡調査公開報告書 13E	
60Y	IS9	61Y		古前(後半)	●	遺跡調査公開報告書 13E				古前(後半)	遺跡調査公開報告書 13E	
61Y	IS9	60Y		弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E				古前(後半)	遺跡調査公開報告書 13E	
62Y	IS9			古前(前半)		遺跡調査公開報告書 13E				古前(後半)	遺跡調査公開報告書 13E	
63Y	IS9	64Y		古前(前半)		遺跡調査公開報告書 13E				古前(後半)	遺跡調査公開報告書 13E	
64Y	IS9	63Y		弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E			143Y	弥生(未築)～古前(約頭)	●	志木市の文化財 27
65Y	IS9			弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E			141* 142Y	弥生(未築)～古前(約頭)	●	志木市の文化財 27
66Y	IS10	67Y		古前(後半)		遺跡調査公開報告書 13E				弥生(未築)～古前(約頭)	●	志木市の文化財 27
67Y	IS10	66Y	421Y	弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E				弥生(未築)～古前(約頭)	●	志木市の文化財 27
68Y	IS4.1	69Y		古前(前半)		遺跡調査公開報告書 13E				古前(後半)	遺跡調査公開報告書 13E	
69Y	IS4.1	68Y		古前		遺跡調査公開報告書 13E				古前	遺跡調査公開報告書 13E	
70Y	IS9	27方		古前		遺跡調査公開報告書 13E				古前	遺跡調査公開報告書 13E	
71Y	IS9	27方		古前(前半)	●	遺跡調査公開報告書 13E				古前(後半)	遺跡調査公開報告書 13E	
72Y	IS9			古前(前半)		遺跡調査公開報告書 13E				古前(後半)	遺跡調査公開報告書 13E	
73Y	IS8.8			古前(前半)		遺跡調査公開報告書 13E				古前(後半)	遺跡調査公開報告書 13E	
74Y	IS8.8		75Y	弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E				古前(後半)	遺跡調査公開報告書 13E	
75Y	IS8.8	74Y		弥生～古前		遺跡調査公開報告書 13E				古前	遺跡調査公開報告書 13E	

第 41 表 弥生時代後期後半～古墳時代前期 遺構一覧表(1)

第2節 弥生時代後期～古墳時代前期

区：江田郡(弥生-古墳後期)・白土(古墳前期) ● 弥生後期

遺構No.	調査地点	当該区画の種別		時期	報告書シリーズ名・番号	遺構No.	調査地点	当該区画の種別		時期	報告書シリーズ名・番号
		種別	新					種別	新		
1533	区10	1501		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 13.1	2313	45		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1544	区6	155～156Y	155Y	古前(前平)	遺跡調査公開報告書 13.1	2320	45		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1545	区6	154Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 13.1	2330	45		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1546	区6	154Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 13.1	2340	45	233Y	弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1571	区11	158Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 13.1	2350	45	234Y	弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1581	区6	157Y		古前(前平)	遺跡調査公開報告書 13.1	2360	45		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1599	区10	160Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 13.1	2370	45		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1600	区6	159～162Y		古前(後平)	遺跡調査公開報告書 13.1	2380	45	349～350D	弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1611	区6	158Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 13.1	2390	45		古前(前道)	遺跡調査公開報告書 6	
1622	区6	160Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 13.1	2400	45	247Y	弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1634	区25			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 13.1	2410	45	241Y	弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1643	区25	8F		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 13.1	2413	45	240Y	古前(前道)	遺跡調査公開報告書 6	
1667	37			弥生(後集)	志木の文化財 28	2420	45	240Y	弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1673	37	171Y		古前(後)	志木の文化財 28	2430	45	197Y	弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1683	37			弥生(後集)	志木の文化財 28	2440	45	245～246Y	古前(前道)	遺跡調査公開報告書 6	
1699	37			弥生(後集)	志木の文化財 28	2450	45	246Y	弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1707	37			古前(古)	志木の文化財 28	2460	45		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1711	37	169Y		古前(古)	志木の文化財 28	2470	45	247Y	弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1722	区25	10F		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 13.1	2480	45	215Y	弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1734	区25	8F		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 13.1	2490	45	215Y	弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1743	区25			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 13.1	2495	45	215Y	弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1751	39			弥生(後集)	志木の文化財 28	2500	45	219Y	弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	
1765	区29			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 13.1	2509	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1774	区30			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 13.1	2510	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1788	区28	231		弥生(前平)	遺跡調査公開報告書 13.1	2520	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1799	区28			弥生(前平)	遺跡調査公開報告書 13.1	2530	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1801	45			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2540	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1811	45			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2550	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1821	45	17F		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2560	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1831	45	17F		古前(前道)	遺跡調査公開報告書 6	2570	43	257Y・重集	弥生(前平)	志木の文化財 30	
1841	45	17F		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2580	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1851	45	17F		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2590	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1861	45			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2600	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1871	45			古前(前道)	遺跡調査公開報告書 6	2610	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1881	45			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2620	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1891	45			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2630	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1901	45			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2640	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1911	45	348D		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2650	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1921	45			古前(前道)	遺跡調査公開報告書 6	2660	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1931	45			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2670	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1941	45			古前(前道)	遺跡調査公開報告書 6	2680	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1957	45・108			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2690	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1961	45	201Y		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2700	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1971	45	843Y	17F	弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2710	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1981	45	17F		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2720	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
1991	45	223Y	17F	弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2730	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2001	45			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2740	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2011	45	196Y		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2750	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2021	45	204Y		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2760	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2031	45	17F		古前(前道)	遺跡調査公開報告書 6	2770	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2041	45			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2780	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2051	45	206Y		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2790	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2061	45	209Y		古前(前道)	遺跡調査公開報告書 6	2800	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2071	45	17F		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2810	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2081	45	209Y	205Y	弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2820	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2091	45	208Y		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2830	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2101	45			古前(前道)	遺跡調査公開報告書 6	2840	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2111	45	17F		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2850	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2121	45			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2860	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2131	45			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2870	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2141	45			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2880	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2151	45			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2890	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2161	45			古前(前道)	遺跡調査公開報告書 6	2900	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2171	45	248Y		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2910	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2181	45	233Y		古前(前道)	遺跡調査公開報告書 6	2920	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2191	45	249Y		古前(前道)	遺跡調査公開報告書 6	2930	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2201	45	221Y		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2940	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2211	45	220Y		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2950	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2221	45	224～244～245～246Y		古前(前道)	遺跡調査公開報告書 6	2960	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2231	45	224Y		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2970	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2241	45	223Y	17F	弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2980	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2251	45			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	2990	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2261	45			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	3000	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2271	45			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	3010	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2281	45			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	3020	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2291	45			弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	3030	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	
2301	45	232Y		弥生(本郷)	遺跡調査公開報告書 6	3040	43		弥生(後集)	志木の文化財 30	

第14表 弥生時代後期後半～古墳時代前期 遺構一覧表(2)

遺構名	調査地点	当該調査の 目 新		時期	報告書シリーズ名・番号	遺構名	調査地点	当該調査の 目 新		時期	報告書シリーズ名・番号
		目	新					目	新		
302Z	K513W			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131	317W	K5171			古前	遺跡調査公開報告書 131
302Y	K513W			弥生(末葉)～古前(初葉)	遺跡調査公開報告書 131B	3171	65			弥生(末葉)～古前(初葉)	遺跡調査公開報告書 131B
303Y	K518Z			古前(初葉)	志木市の文化財 70	317Z	65			古前(初葉)	志木市の文化財 70
304Y	K513W	305Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131	317Y	65	317Z	65	弥生(末葉)	志木市の文化財 36
305Y	K13R			古前(初葉)	遺跡調査公開報告書 131B	317X				古前	志木市の文化財 30
305Y	R170	304Y		弥生(末葉)～古前(初葉)	志木市の文化財 91	317Y	4571			古前	遺跡調査公開報告書 131B
306Y	K513W	285・297Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	317Z	4572			古前	遺跡調査公開報告書 131B
307Y	K513W			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	317Z	4573			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
308Y	K539E			弥生(後葉)	遺跡調査公開報告書 131B	317Z	4574			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
308Y	K539E			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	380Y	4559			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
310Y	K539E			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	380Y	4559			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
311Y	K539E			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	381Y	4640V			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
312Y	K539E			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	382Y	4640V			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
313Y	K5401・227			弥生(末葉)～古前(初葉)	遺跡調査公開報告書 131B	383Y	4640V			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
313Y	K5401・227			弥生(末葉)～古前(初葉)	志木市の文化財 75	385Y	4660			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
314Y	K5401・183			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	387・389Y		388Y		古前(初葉)	志木市の文化財 91
315Y	K5401・183			弥生(末葉)～古前(初葉)	志木市の文化財 75	389Y	70	389Y	390Y	弥生(末葉)	志木市の文化財 91
319Y	K5401・184			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	390Y	70	388・389・396Y		古前(中葉)	志木市の文化財 91
318Y	K5401・183			弥生(末葉)～古前(初葉)	遺跡調査公開報告書 131B	391Y	67			弥生(末葉)～古前	志木市の文化財 37
319Y	K5401・183			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	392Y	67	21		弥生(末葉)～古前	志木市の文化財 37
320Y	K5401・183			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	393Y	67	394Y		弥生(末葉)～古前	志木市の文化財 37
321Y	K5401・183			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	394Y	67	393Y		弥生(末葉)～古前	志木市の文化財 37
322Y	K543	324Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	395Y	K130L	67		弥生(末葉)～古前	遺跡調査公開報告書 131B
323Y	K543	322Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	396Y	70	270Y	390Y	弥生(末葉)	志木市の文化財 91
324Y	K543	322・326Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	397Y	70	398・399Y		弥生(末葉)	志木市の文化財 91
325Y	K543			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	398Y	70	397Y	399Yの 復元図	古前(初葉)	志木市の文化財 91
326Y	K543			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	399Y	70	397Y	398Yの 復元図	古前(初葉)	志木市の文化財 91
327Y	K543			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	400Y	70	401・403Y		古前(初葉)	志木市の文化財 91
328Y	K543			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	401Y	70	400Y		弥生(後葉)	志木市の文化財 91
329Y	K543			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	402Y	70	400Y		古前(初葉)	志木市の文化財 91
330Y	K543			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	403Y	70	400Y		弥生(末葉)	志木市の文化財 91
331Y	K543			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	404Y	72	406・408Y		古前(初葉)	志木市の文化財 95
332Y	K543			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	405Y	72	410Y	408Y	古前(中葉)	志木市の文化財 95
333Y	K543			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	406Y	72	404・405Y		古前(後葉)	志木市の文化財 95
334Y	K543			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	407Y	72	409・408Y		古前(中葉)	志木市の文化財 95
335Y	K543			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	408Y	72	404・407Y		古前(後葉)	志木市の文化財 95
336Y	K543			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	409Y	72	407・415Y		弥生(末葉)	志木市の文化財 95
337Y	K540E			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	410Y	K574.72			古前(初葉)	遺跡調査公開報告書 131B
338Y	K540E			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	411Y	K574.72			古前(初葉)	遺跡調査公開報告書 131B
339Y	K540E			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	412Y	K534E			古前	遺跡調査公開報告書 131B
340Y	K542E			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	413Y	K574.72			弥生(末葉)	志木市の文化財 95
341Y	K542E	342・343Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	414Y	K565Y			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
342Y	K542E	343Y	341Y	弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	415Y	72	409Y	407Y	古前(初葉)	志木市の文化財 95
343Y	K542E		341・342Y	弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	416Y	72	418Y	361・419Y	古前(初葉)	志木市の文化財 95
344Y	K547E			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	417Y	72	365Y		古前(初葉)	志木市の文化財 95
345Y	K547E		20Y	弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	418Y	72	416・419Y		弥生(末葉)	志木市の文化財 95
346Y	K512E		347Y	弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	419Y	72	416・418Y		古前(後葉)	志木市の文化財 95
347Y	K512E	346Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	420Y	72			古前(初葉)	志木市の文化財 95
348Y	K512E			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	421Y	K510E	67Y		弥生(末葉)～古前(初葉)	遺跡調査公開報告書 131B
349Y	K512E	352Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	422Y	K564			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
350Y	K512E	52Y	54Y	弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	423Y	K564			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
351Y	K512E			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	424Y	K566			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
352Y	K512E	349Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	425Y	K566		44M	弥生(末葉)～古前(初葉)	遺跡調査公開報告書 131B
353Y	K512E			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	426Y	K566			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
354Y	K550E	357Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	427Y	K5651			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
355Y	K550E			弥生(後葉)	遺跡調査公開報告書 131B	428Y	K5651			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
356Y	K550E	417Y		弥生(後葉)	志木市の文化財 95	429Y	K534E・34V			古前	遺跡調査公開報告書 131B
357Y	K550E	358Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	430Y	K534E・34V			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
358Y	K550E	356Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	431Y	K5671			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
359Y	K550E	360Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	432Y	K5671			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
360Y	K550E	359Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B	433Y	K5671	403Y		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
361Y	K550E	362・363Y		古前(中葉)	志木市の文化財 95	434Y	K5671			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B
362Y	K550E		361・363Y	弥生(後葉)	志木市の文化財 95						
363Y	K550E	362Y		古前	遺跡調査公開報告書 131B						
364Y	K550E	363Y		遺跡調査公開報告書 131B							
365Y	K550E	364・365Y		古前(後葉)	志木市の文化財 95						
366Y	K525V			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B						
367Y	K526V			弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B						
368Y	K527V	40M		古前	遺跡調査公開報告書 131B						
369Y	K527V	39M		弥生～古前	遺跡調査公開報告書 131B						

第 41 表 弥生時代後期後半～古墳時代前期 遺構一覧表(3)

第2節 弥生時代後期～古墳時代前期

図1 弥生後半(弥生後期)～古墳前期(●) 出土品別

遺構名	調査地点	当該区画の 目 新		時期	報告書シリーズ名 番号	遺構名	調査地点	当該区画の 目 新		時期	報告書シリーズ名 番号
		目	新					目	新		
4333	167F			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5105	165B			古前	遺跡調査公開報告書 131
4360	167F			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131*	5171	110			古前	遺跡調査公開報告書 9
4371	167F			古前	● 遺跡調査公開報告書 131	5188	110			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 9
4385	167F			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5199	110			弥生(後半)→古前(前半)	遺跡調査公開報告書 9
4397	164AE			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131*	5209	110			古前	● 遺跡調査公開報告書 9
4409	1643E			古前	● 遺跡調査公開報告書 131	5212	110			古前	遺跡調査公開報告書 9
4411	1643E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5223	120			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 15
4429	167E	274Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5230	124			弥生(大量)→古前	志木の文化財 39
4438	167E	274Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5243	124	525Yと重層		弥生(大量)→古前	志木の文化財 39
4447	167E			古前	遺跡調査公開報告書 131	5253	124	524Yと重層		弥生(大量)→古前	志木の文化財 39
4455	167E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5269	120			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 15
4465	167E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5275	120			弥生→古前	● 遺跡調査公開報告書 15
4471	167E	455Y	448Y	弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5280	120			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 15
4483	167E	447-450Y		弥生→古前	● 遺跡調査公開報告書 131	5299	131			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 15
4499	167E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5309	131	353Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 15
4507	167E	456Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5319	16130			遺跡調査公開報告書 131	遺跡調査公開報告書 131
4511	1643E	452Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5325	137			弥生(大量)→古前	遺跡調査公開報告書 131
4528	1643E	457Y	451Y	弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5338	16130			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131
4539	1643E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5345	16130			弥生→古前	● 遺跡調査公開報告書 131
4545	1643E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5355	16130	2T		古前	遺跡調査公開報告書 131
4551	167E			弥生→古前	● 遺跡調査公開報告書 131	5367	16130			古前	遺跡調査公開報告書 131
4560	167E	455Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131*	5371	164-155			弥生(大量)→古前	遺跡調査公開報告書 14
4571	1643E	452Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5388	108	542Y	545Y	弥生	● 志木の文化財 42
4583	167E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5399	108	541Y		弥生	● 志木の文化財 42
4597	167E	461Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5409	108			古前	● 志木の文化財 42
4601	167E	460Y	460Y	古前	遺跡調査公開報告書 131	5413	108	539Y		弥生	● 志木の文化財 42
4628	167E	461Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5428	108	538Y		弥生	● 志木の文化財 42
4639	167E	433Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5438	108			古前	● 志木の文化財 42
4644	167E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5443	108	545Y		弥生	● 志木の文化財 42
4655	167E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5458	108	538*	544Y	古前	● 志木の文化財 42
4660	167E			古前	遺跡調査公開報告書 131	5460	108			古前	● 志木の文化財 42
4671	1622W	16F		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131*	5479	108	548Y		古前	● 志木の文化財 42
4681	1625	23F		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5485	108	547Y		弥生	● 志木の文化財 42
4689	167E	470Y		古前	遺跡調査公開報告書 131	5499	108			古前	● 志木の文化財 42
4709	167E	460Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131*	5508	108			弥生	● 志木の文化財 42
4711	167E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5513	108			古前	● 志木の文化財 42
4728	167E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5529	159			弥生(大量)→古前	志木の文化財 51
4731	167E	474Y		古前	遺跡調査公開報告書 131	5539	159			弥生→古前	志木の文化財 51
4741	167E	473Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5543	159	555Y		弥生(大量)→古前	志木の文化財 51
4753	167E	476Y		弥生→古前	● 遺跡調査公開報告書 131	5559	159	554Y		弥生→古前	志木の文化財 51
4767	167E	469Y-475Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5560	159	559Yと重層		弥生→古前	● 志木の文化財 51
4771	167E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5578	159	558Y		古前	● 志木の文化財 51
4785	167E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5599	159	556Yと重層		弥生(少量)	志木の文化財 51
4788	1623E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5609	165-166	49M		弥生(大量)→古前(初頭)	志木の文化財 58
4799	167E	480Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5613	171			弥生(大量)→古前(初頭)	志木の文化財 58
4809	167E	479Y-487Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5620	172			弥生(大量)→古前(初頭)	志木の文化財 64
4811	167E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5630	172			弥生→古前	● 志木の文化財 64
4824	167E			古前	遺跡調査公開報告書 131	5649	172			弥生→古前	● 志木の文化財 64
4833	167E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5663	174.0			弥生(大量)→古前(初頭)	志木の文化財 85
4844	167E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5669	174.0			弥生→古前	● 志木の文化財 85
4855	167E	486Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5673	174.0			弥生→古前	志木の文化財 55
4867	167E	485Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5681	174.0	560Y		弥生→古前	志木の文化財 55
4871	167E	480Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5697	174.0	568Y		弥生→古前	志木の文化財 55
4883	167E	489*	493Y	弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5709	180	571-574-576Y		古前(古)	● 志木の文化財 70
4899	167E	488Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131						
4909	167E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131						
4915	167E			弥生→古前	● 遺跡調査公開報告書 131						
4924	167E			古前	遺跡調査公開報告書 131	5711	180	572-573Y	570Y	弥生(大量)→古前(初頭)	志木の文化財 70
4935	167E	488Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5729	180	571Y	576Y	弥生(大量)→古前(初頭)	志木の文化財 70
4945	不明		拠点不明	—	—	5738	180	570-571Y		弥生(大量)→古前(初頭)	志木の文化財 70
4955	167E	16-24F		遺跡調査公開報告書 131		5748	180	570-578Y		弥生(少量)	志木の文化財 70
4969	165E	365Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131						
4973	165E	498Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5753	180	576-577Y		古前(新)	志木の文化財 70
4989	165E	497-500-501Y	499	古前	遺跡調査公開報告書 131	5767	180	570-575Y		弥生(少量)	志木の文化財 70
4999	165E	498Y		古前	遺跡調査公開報告書 131	5771	180	56Y	575Y	弥生(大量)→古前(初頭)	志木の文化財 70
5000	165E	498Y		古前	遺跡調査公開報告書 131	5783	180	574Y	53Y	弥生(大量)→古前(初頭)	志木の文化財 70
5011	165E	498Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5791	179			弥生→古前	● 志木の文化財 56
5023	165E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5809	179			弥生→古前	● 志木の文化財 56
5035	166F	504Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5811	179			弥生→古前	● 志木の文化財 56
5041	166F	503Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5823	179			弥生	● 志木の文化財 56
5055	166F			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5833	179			弥生	● 志木の文化財 56
5067	166F	507Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5845	179	585Y		弥生	● 志木の文化財 56
5071	166F	506Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5853	179	584Y		弥生	● 志木の文化財 56
5088	166E	509Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5869	179			弥生	● 志木の文化財 56
5099	166E	508Y		弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5873	179			弥生→古前	● 志木の文化財 56
5101	166F			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5883	179			古前	● 志木の文化財 56
5111	166F			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5899	179			弥生(後半)	● 志木の文化財 56
5129	1665E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5909	184			弥生→古前	● 志木の文化財 56
5139	1665E			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5915	182			弥生(大量)→古前(初頭)	志木の文化財 70
5141	111			弥生→古前	遺跡調査公開報告書 131	5920	182			弥生→古前	● 志木の文化財 70
5145	110			古前	● 遺跡調査公開報告書 9	5939	200			本報告	

第 41 表 弥生時代後期後半～古墳時代前期 遺構一覧表(4)

第5章 調査のまとめ

区：区画整理/築後・築後後期/古墳(古墳群) ● 築後(古)

遺構名	調査地点	当該調査時の		時期	報告書シリーズ名	番号
		目	新			
394Y	203			本報告		—
395Y	204			本報告		—
396Y	204			本報告		—
397Y	207	599Y	35方	築後(築後)	志木市の文化財 68	—
398Y	207	599Y		築後(築後)	志木市の文化財 68	●
399Y	207	59Y・596Y・35方		築後(築後)	志木市の文化財 68	●
600Y	211			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 69	—
601Y	216			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 76	—
602Y	216			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 76	—
603Y	227			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 75	●
604Y	227			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 75	—
605Y	228			築後(築後)	志木市の文化財 79	●
606Y	228			築後(築後)	志木市の文化財 79	—
607Y	228			築後(築後)	志木市の文化財 79	—
608Y	228			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 79	—
609Y	228			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 79	—
610Y	228			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 79	—
611Y	228			築後(築後)	志木市の文化財 79	—
612Y	228			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 79	—
613Y	228			築後(築後)	志木市の文化財 79	—
614Y	228			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 79	—
615Y	228			築後(築後)	志木市の文化財 79	—
616Y	228			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 79	—
617Y	228	619Y	上層	築後(築後)	志木市の文化財 79	—
618Y	228	618Y	北側	築後(築後)	志木市の文化財 79	—
618Y	228	618Y	北側	築後(築後)	志木市の文化財 80	—
619Y	228	617Y上層		築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 79	—
620Y	228	627Y上層		築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 79	—
621Y	228			築後(築後)	志木市の文化財 79	—
622Y	228			築後(築後)	志木市の文化財 79	—
623Y	228	626Y上層		築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 79	—
624Y	228	626Y		築後(築後)	志木市の文化財 79	—
625Y	228			築後(築後)	志木市の文化財 79	—
626Y	228	623Y	624Y	築後(築後)	志木市の文化財 79	—
627Y	228	620Y上層		築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 79	—
628Y	223			築後(築後)	志木市の文化財 83	—
629Y	223			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 83	—
630Y	223	56M		築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 83	—
631Y	223	634Y		築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 83	—
632Y	223			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 83	—
633Y	223			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 83	—
634Y	223	631Y		築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 83	—
635Y	231			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 80	—
636Y	231			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 80	—
637Y	231			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 80	—
638Y	255-3			本報告		—
639Y	255-3			本報告		—
640Y	235			古前(新築)	志木市の文化財 89	—
641Y	235			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 89	—
642Y	235			築後～古前	志木市の文化財 89	—
643Y	235			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 89	—
644Y	235			築後(築後)～本築	志木市の文化財 89	—
645Y	235			古前(新築)～前築	志木市の文化財 89	—
646Y	235			古前(新築)～前築	志木市の文化財 89	—
647Y	235			築後～古前	志木市の文化財 89	—
648Y	235			築後(築後)～本築	志木市の文化財 89	—
649Y	235			築後(築後)	志木市の文化財 89	—
650Y	235			古前(新築)～前築	志木市の文化財 89	—
651Y	235	652Y		古前(新築)	志木市の文化財 89	●
652Y	235	651Y		築後(築後)～本築	志木市の文化財 89	—
653Y	235			築後(築後)	志木市の文化財 89	—
654Y	235			築後(築後)	志木市の文化財 89	—
655Y	235			築後(築後)～本築	志木市の文化財 89	●
656Y	239	657Y		築後(築後)	本報告	—
657Y	239	656Y		古前(新築)	本報告	—
658Y	239	659Y		古前(新築)	本報告	—
659Y	239	658Y		古前(新築)	本報告	—
660AY	239	661BY		古前(新築)～前築	本報告	—
660BY	239	661AY		古前(新築)～前築	本報告	—
661Y	239	662Y		古前(新築)	本報告	—
662Y	239	661Y		築後(築後)～古前(新築)	本報告	—
663Y	239			築後(築後)	本報告	—
664Y	239			築後(築後)	本報告	—
665Y	239			古前(新築)	本報告	—
666Y	239			古前(新築)～中築	本報告	—
667Y	239			古前	本報告	—
668Y	239	58M		築後(築後)	本報告	—

*2020年4月～11月の調査結果
*2020年12月～2021年3月の調査結果
*2021年4月～2021年6月の調査結果
*2021年7月～2021年9月の調査結果
*2021年10月～2021年12月の調査結果

〔方形周溝墓〕

区：区画整理/築後・築後後期/古前(古墳群)

遺構名	調査地点	当該調査時の		時期	報告書シリーズ名	番号
		目	新			
1方	K7Y・81・B	219・58Y	1T	古前	遺跡調査調査報告 13	1
2方	11			古前(中築)	志木市の文化財 16	—
3方	21			築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 24	—
4方	15・22			古前(新築)	遺跡調査調査報告 13	8
5方	35			本報告	—	—
6方	35			本報告	—	—
7方	K24			築後～古前	遺跡調査調査報告 13	8
8方	K23・164・173Y			築後～古前	遺跡調査調査報告 13	13
9方	K23			古前	遺跡調査調査報告 13	15
10方	B・39	172Y		古前(前築)	遺跡調査調査報告 13	8
11方	K25B・25V			築後(築後)	遺跡調査調査報告 13	8
12方	K25B			築後～古前	遺跡調査調査報告 13	15
13方	K26			築後～古前	遺跡調査調査報告 13	15
14方	K26			築後～古前	遺跡調査調査報告 13	15
15方	K26			築後～古前	遺跡調査調査報告 13	15
16方	K25B・30・71	467・495Y		古前(新築)	遺跡調査調査報告 13	8
17方	45	182・183・197・199		古前(前築)	遺跡調査調査報告 6	—
		200・203・206・207				
		211・223・224・227				
18方	K36	263Y		築後～古前	遺跡調査調査報告 13	8
19方	54			築後～古前	志木市の文化財 35	—
20方	K46・47	345Y		築後～古前	遺跡調査調査報告 13	8
21方	K12B			古前	遺跡調査調査報告 13	15
22方	K25V			築後(築後)～古前(新築)	遺跡調査調査報告 13	15
23方	K25B	468Y		古前	遺跡調査調査報告 13	15
24方	K71	492Y		古前	遺跡調査調査報告 13	15
25方	K79	26方		古前	遺跡調査調査報告 13	15
26方	120	25方		古前	遺跡調査調査報告 15	—
27方	39	70・71Y		築後～古前	遺跡調査調査報告 13	15
28方	K57			築後～古前	遺跡調査調査報告 13	15
29方	131			古前(新築)	遺跡調査調査報告 15	—
30方	131	33方		古前(新築)	遺跡調査調査報告 15	—
31方	131	—32方と共有		古前	遺跡調査調査報告 15	—
32方	131	—31方と共有		古前(新築)	遺跡調査調査報告 15	—
33方	131	300Y	30方	古前(新築)	遺跡調査調査報告 15	—
34方	172-0			築後～古前	志木市の文化財 64	—
35方	207	597・599Y		古前(新築)	志木市の文化財 68	—
36方	222			築後～古前	志木市の文化財 75	—

〔掘立柱建築構〕

区：区画整理/築後・築後後期/古前(古墳群)

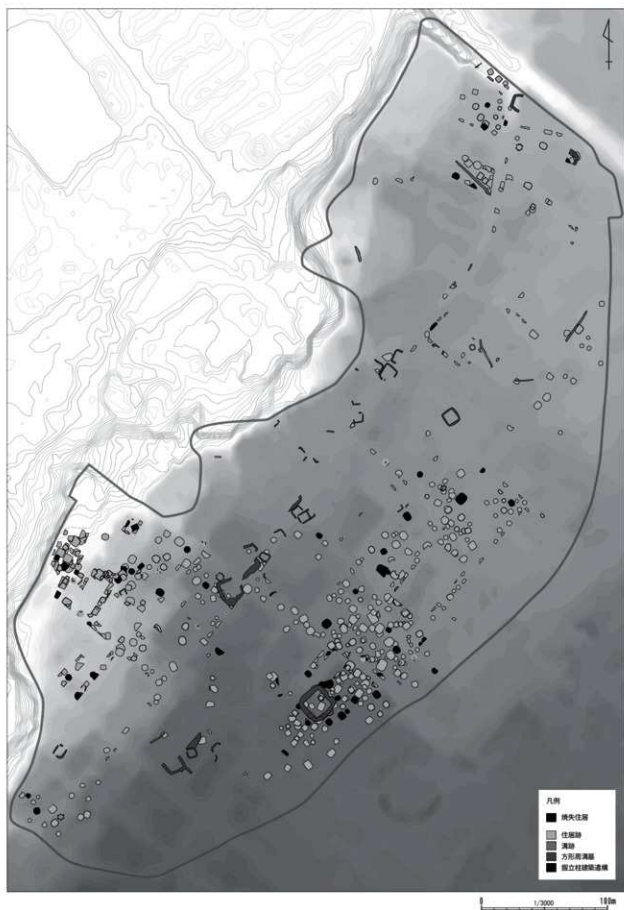
遺構名	調査地点	当該調査時の		時期	報告書シリーズ名	番号
		目	新			
1T	8	1方		築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 14	1
2T	K130	392・535Y		築後(築後)～古前	遺跡調査調査報告 13	8
3T	169			築後(築後)～古前	志木市の文化財 47	—
4T	216			古前(新築)	志木市の文化財 76	—
6T	239	659Y上層		築後(築後)～古前(新築)	本報告	—

〔溝跡〕

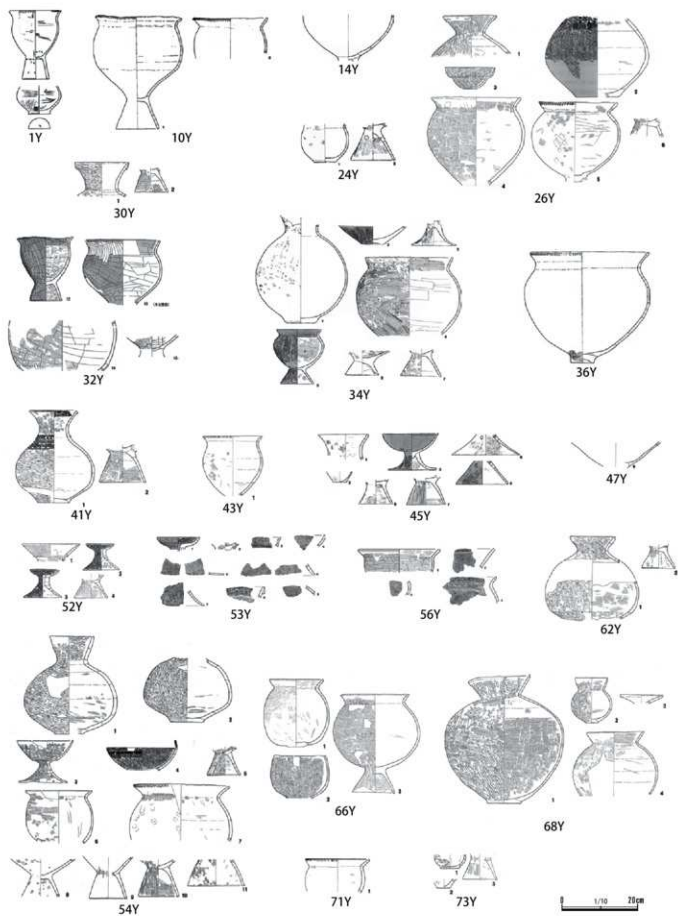
区：区画整理/築後・築後後期/古前(古墳群)

遺構名	調査地点	当該調査時の		時期	報告書シリーズ名	番号
		目	新			
24M	K34	1		古前	遺跡調査調査報告 13	15
25M	47			古前(前築)	志木市の文化財 32	—
29M	K49	1		報告書記載なし	遺跡調査調査報告 13	8
4M	138			築後(築後)～古前	志木市の文化財 14	1
40M	K56B・367Y			築後(築後)～古前(新築)	遺跡調査調査報告 13	15
44M	231	325Y		築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 80	—
49M	165・166	560Y		築後(築後)～古前	志木市の文化財 58	—
50M	223	630Y		築後(築後)～古前(新築)	志木市の文化財 83	—
58M	239	668Y		築後(築後)～本築	本報告	—

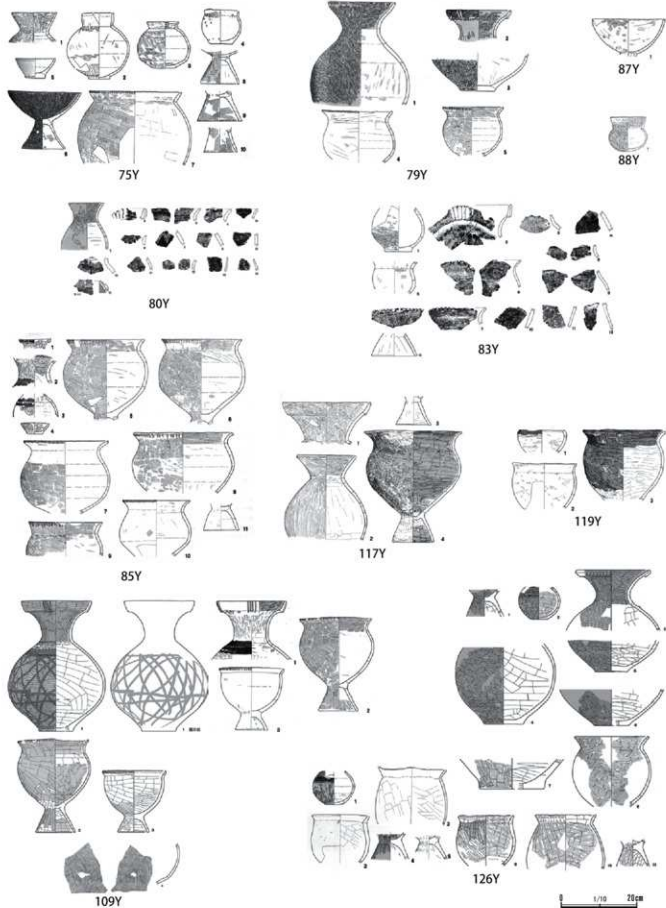
第41表 弥生時代後期後半～古墳時代前期 遺構一覧表(5)



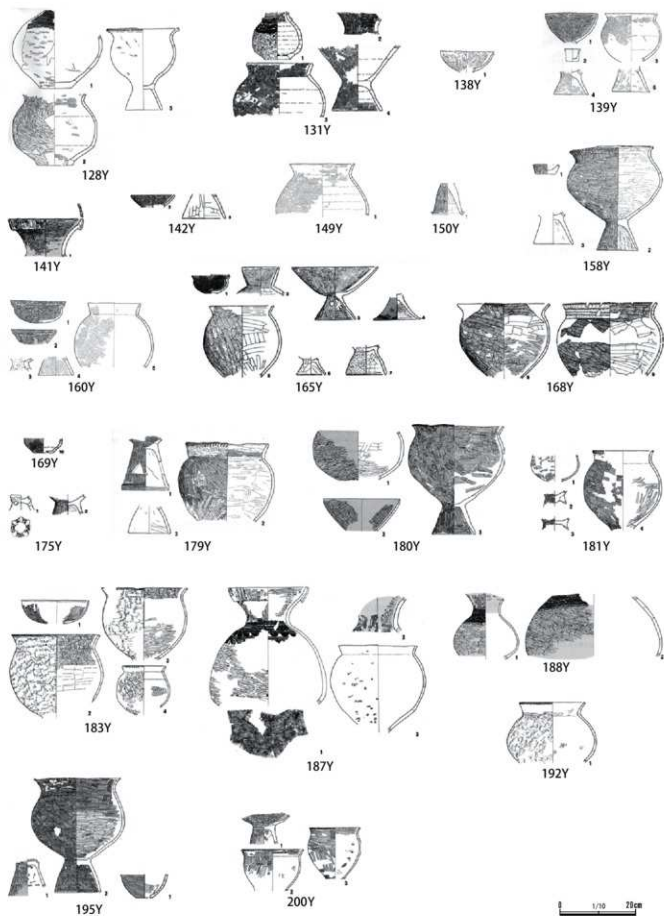
第114圖 焼失住居分布図(1/3,000)



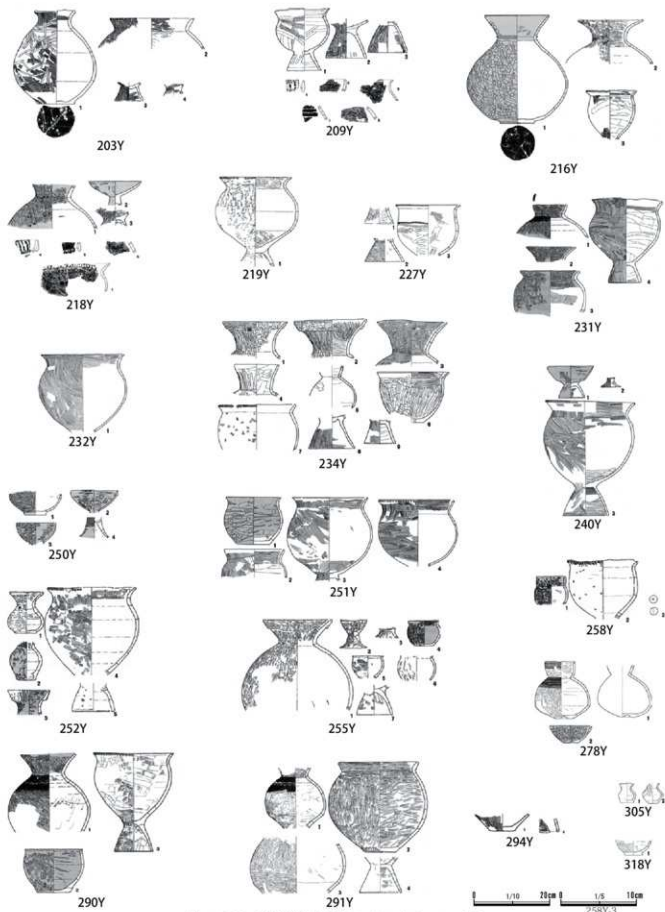
第115図 住居跡出土遺物1 (1/10)



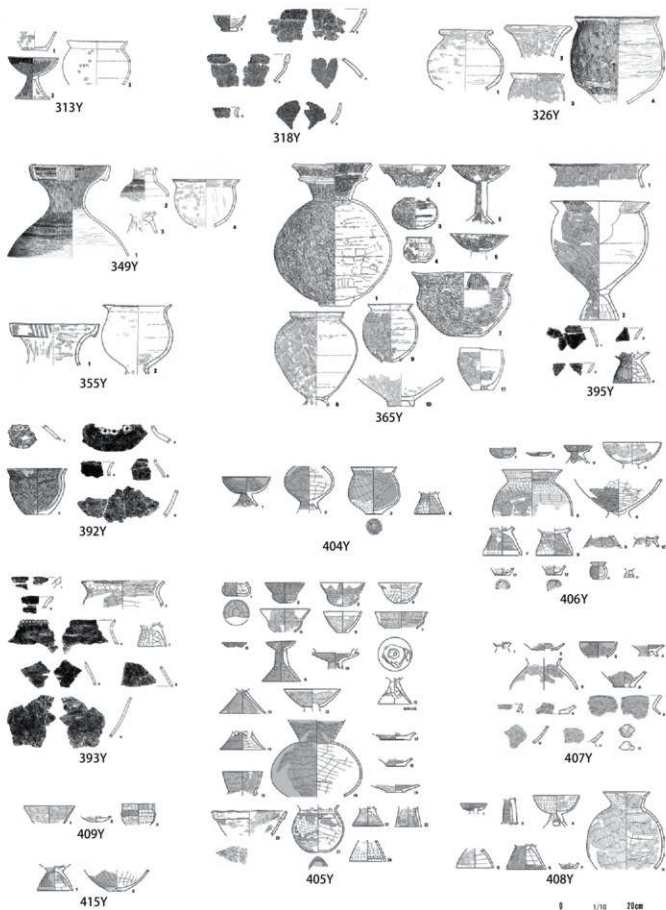
第116図 住居跡出土遺物2 (1/10)



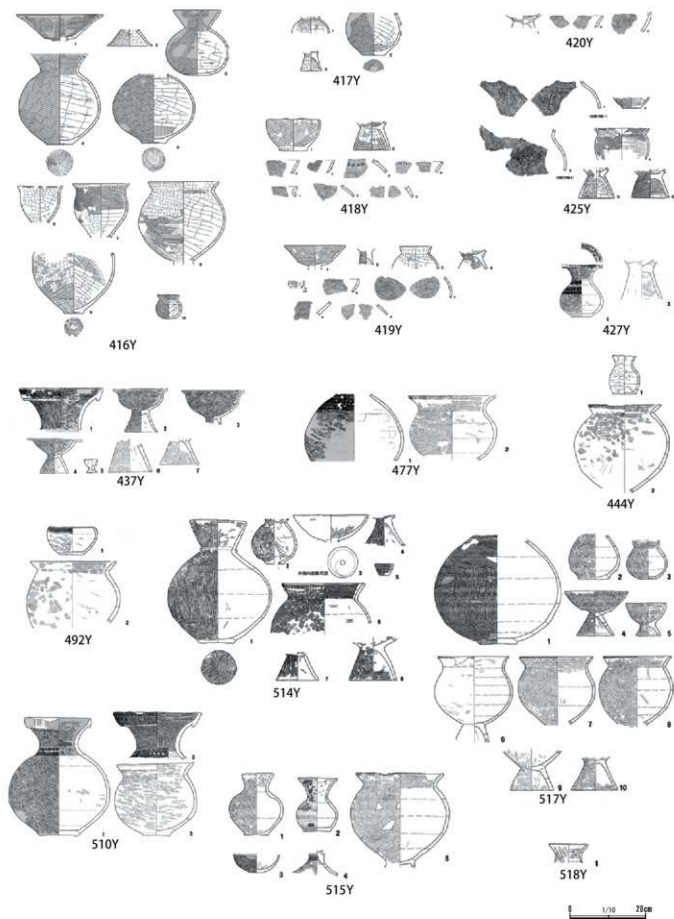
第117図 住居跡出土遺物3 (1/10)



第118圖 住居跡出土遺物4 (1/10・1/5)

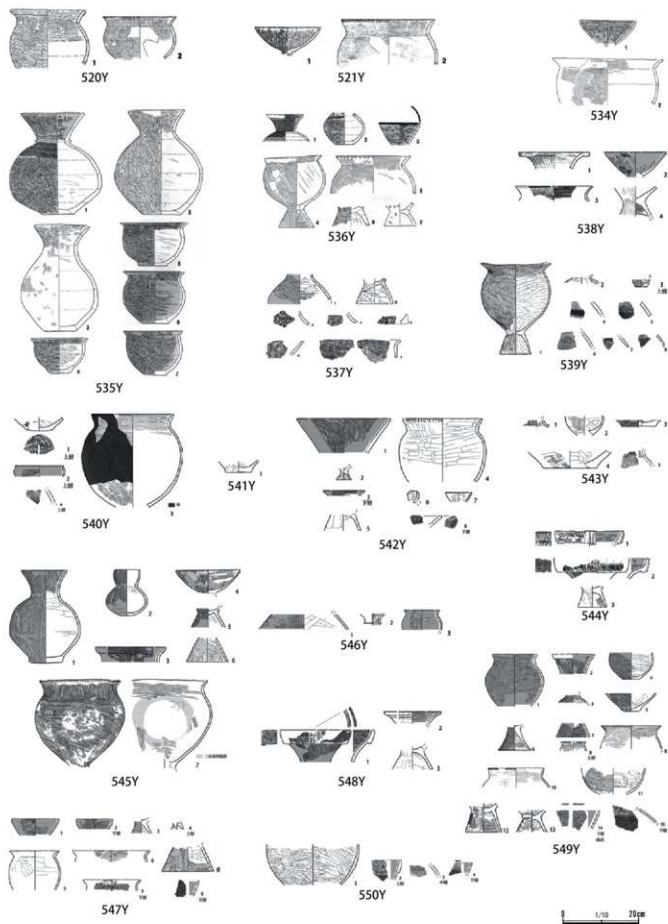


第119図 住居跡出土遺物5 (1/10)

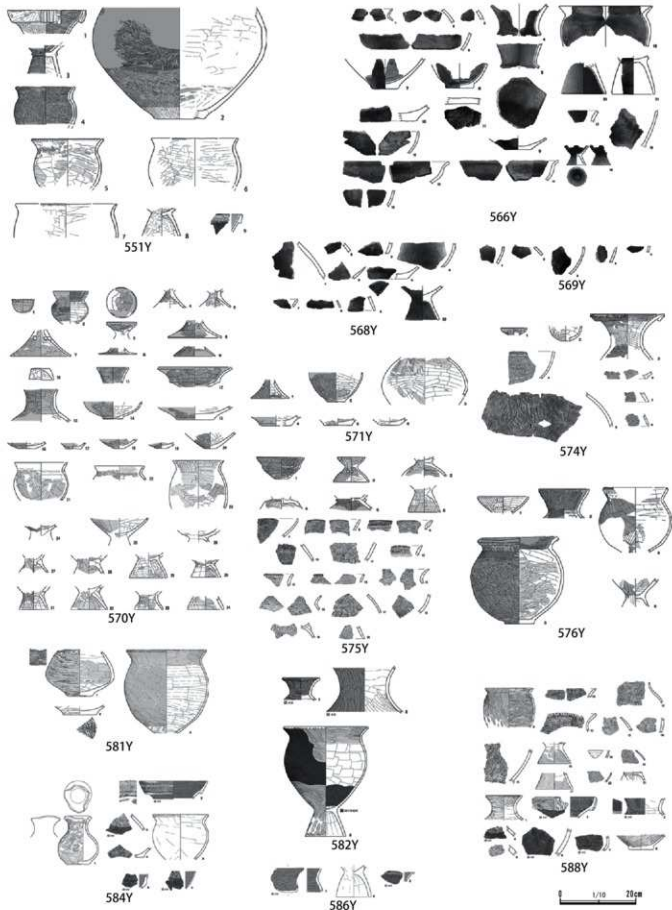


第120图 住居跡出土遺物6 (1 / 10)

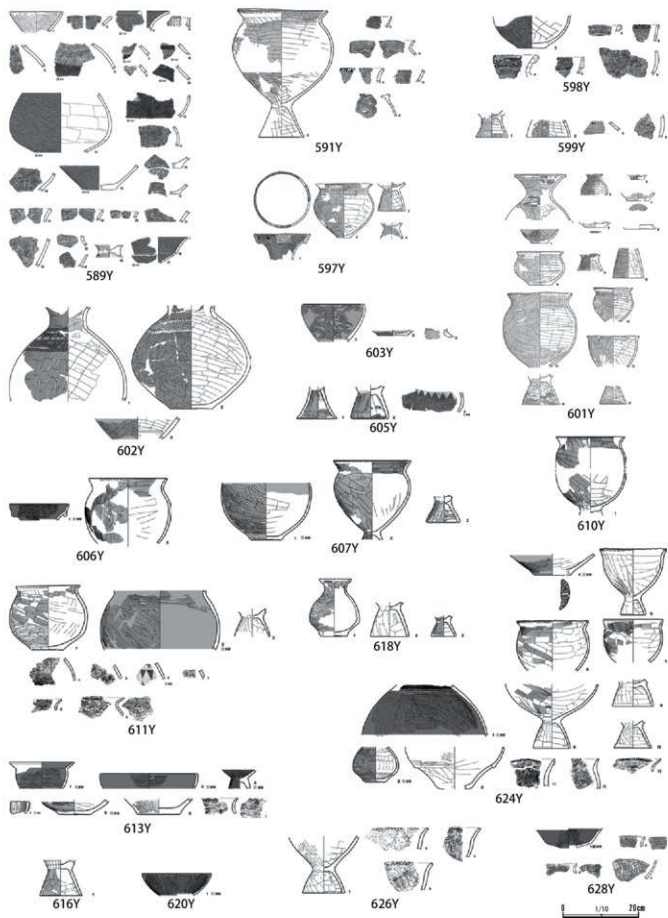
第5章 調査のまとめ



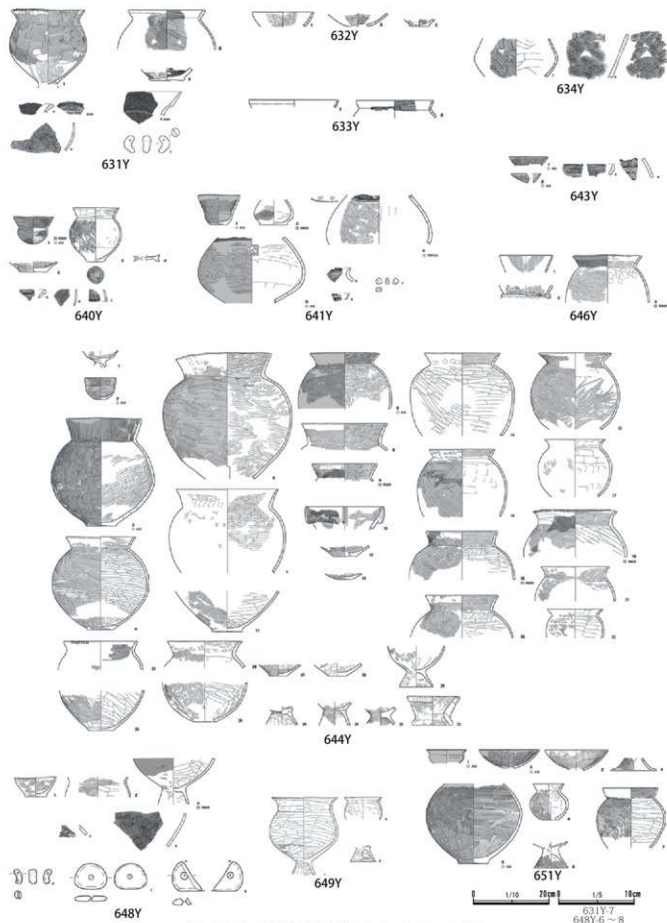
第121図 住居跡出土遺物7 (1/10)



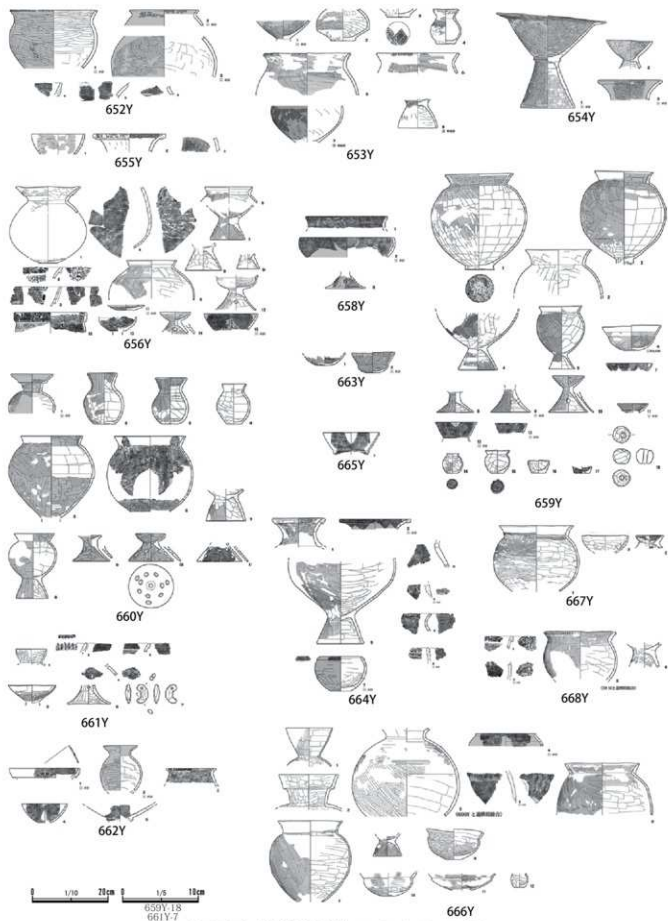
第122图 住居跡出土遺物8 (1/10)



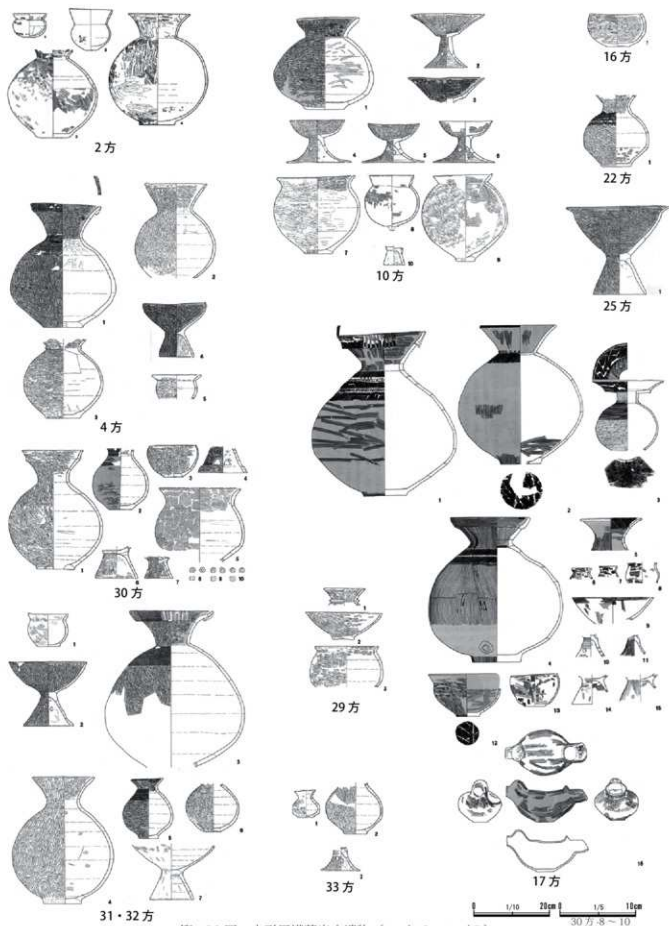
第123図 住居跡出土遺物9 (1/10)



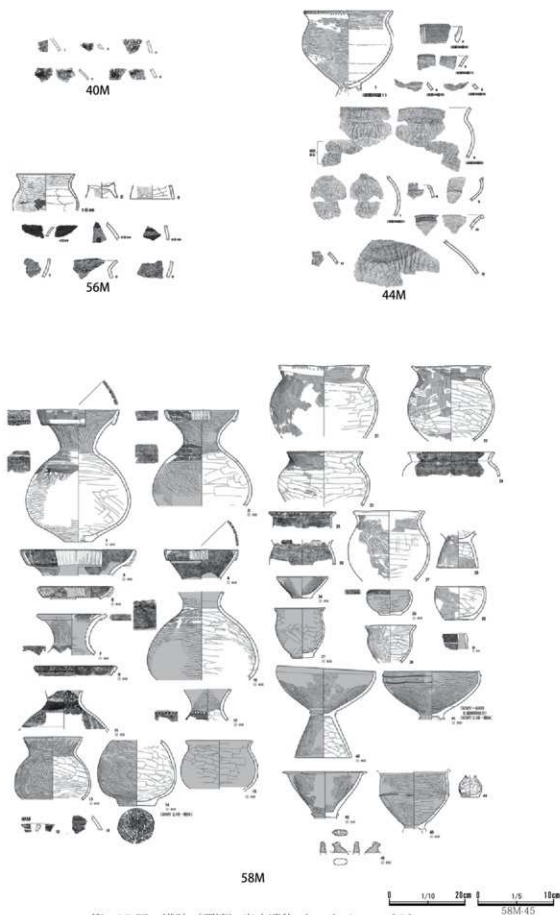
第124図 住居跡出土遺物 10 (1/10・1/5)



第125図 住居跡出土遺物 11 (1/10・1/5)



第126図 方形周溝墓出土遺物 (1/10・1/5)



第127図 溝跡(環濠)出土遺物(1/10・1/5)

第3節 近代以降

(1) 概観

中世以降の遺構は土坑14基(978~998 D)、溝跡1本(57 M)、ピット22本(1~3・6~13・15・16・19・20・30・31・33~37 P)が検出された。このうち、調査区西側の近代以降に比定された988 Dは、階段を有する地下室で良好な検出状況であった。ここでは、B群の長方形土坑を含めて本地点の近代以降の様相について述べることにする。



第128図 1881(明治14)年 1:15,000
(二万分の一迅速測図・大和田町 陸地測量部)



第129図 1932(昭和7)年 1:15,000
(二万五千分の一地形図・志木 陸地測量部)



第130図 1966(昭和41)年 1:15,000
(二万五千分の一地形図・志木 国土地理院)



空中写真(1961~1969年)



空中写真(2007年)

(出典)

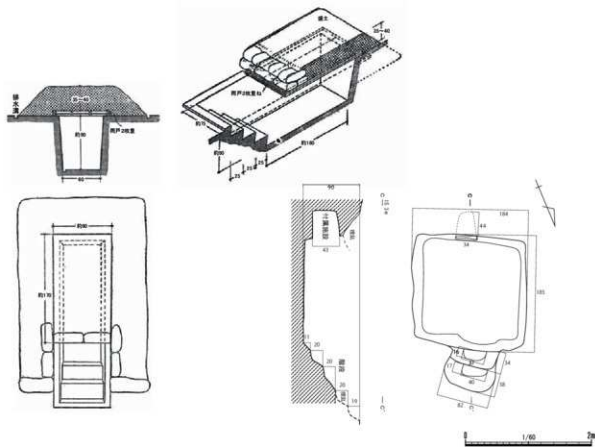
第128~130図『明治前期・昭和前期 東京都市地図2
(東京北部)』柏書房より転載・加筆
空中写真 国土地理院ウェブサイト

第128～130図の地図や空中写真をみると、本調査区は1881年には畑地であることが確認でき、2007年の空中写真から駐車場に変わったことがわかる。本地点東側の南北に走る道路（市道1570号線）は1881年から現在までほぼかわらない。調査区内の西側部分には1881年には馬が通れる道があったが、1932年以降には樹木に囲まれた居住地として変化している。1961～1969年の空中写真では、旧道路に樹木が植えられている様相がみられる。なお、発掘調査中に近隣住民から調査区西側は昔、道路が通っていたことを教えていただき、1881年の地図と合致する。

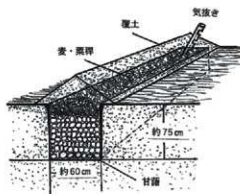
本地点周辺では、西側から北東部には集落が点在し、柳瀬川沿いに水田が、南東部には畑地が広がり麦類・野菜類・芋類が作られていたようである。大塚地区の農家では1953年に「志木丸大出荷組合」を作り、長根ニンジンの特産品とし、ほかの野菜全般を含めて神田市場等に出荷していた（志木市史1985）。

（2）土坑

988 Dは調査区西側に位置する階段を有する地下室である。主体部は長軸185cm・短軸184cm・高さ90cmの略方形を呈する。階段は2段が残存し、最大幅82cm・奥行1段目34cm・2段目38cmである。蹴上げは11～20cmで、5段が想定される。奥壁中央部には長軸44cm・短軸34cm・高さ43cmの付属施設を有する。覆土上部は植栽による攪乱が著しく、中層からコンクリートの破片が出土したことから、本遺構は近代以降に比定される。植栽による攪乱は上述したように1961年以降の樹木による可能性が



第131図 左／最も簡単な防空壕（『自家用簡易防空壕及待避所の築造要綱』より転載・加筆）
右／988号土坑



第132図 長溝式貯蔵（「甘藷貯蔵方法の変遷（1）」より転載）

あることから、1960年以前に構築されたものと考えられる。1960年以前は本地点より西側には居住地が広がっており、1940年に発行された「自家用簡易防空壕及待避所の築造要領」（建築學會 1940）には最も簡単な防空壕の作り方（第131図）が掲載されている。本遺構図と照らし合わせると主体部がやや大きいものの概ね同様のつくりである。これらのことから、988 Dは簡易的な自家用防空壕であったと考えられる。

980・985・986 Dはいずれも長方形を呈し、深さ26～58cm・幅67～79cm・長さ266cm～853cmを測る。関東地方では畑の高燥な場所に深さ90～100cm・幅60～90cm・長さ適宜の穴を掘り甘藷を保存する「長溝式貯蔵」（中馬 2004）が行われており、志木市では白菜の保存に30cm程度の穴を掘り、立て並べて藁や笹をかけていた（志木市史 1985）。このことから、これらの土坑は芋類や野菜類の貯蔵に利用されていた可能性がある。なお、大根・にんじん・ごぼうなどは凍らないように深い穴に藁や笹をかぶせて保存していた（新編埼玉県史 1988）。また、998 Dは深さ178cmと深く、志木市でもにんじんやごぼう作りを行っていたことから、野菜類の貯蔵に利用されていたと考えられる。

以上から、近代以降の本地点は戦時中に周辺集落の居住者が利用したと思われる簡易的な防空壕や、芋類や野菜類の栽培のほか貯蔵も行ってた様相が読みとれよう。

【註】

註1 999・1000 Dは断面形が僅かに裾広がりを呈すること、後述する丸山台遺跡のフラスコ形土坑を分析した野中和夫氏は「…開口部に比して底部の規模が大きい、所謂、フラスコ形（袋状）土坑が出現し…」とあり（野中 1993）、本土坑はこれに類似し、フラスコ形土坑は後期に多くみられる形態であることなどから、ここではフラスコ形土坑の可能性に触れながら考察した。

註2 丸山台遺跡で呼称する竪穴住居跡は志木市でいう「住居跡」、掘立柱建物跡は「掘立柱建築遺構」と同義語である。

【引用・参考文献】

赤熊浩一・福田聖 2011 「Ⅶ 調査のまとめ」『反町遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第380集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

第5章 調査のまとめ

- 赤塚次郎 1986 『S字葉』について『次山式土器とその前後』第3回東海埋蔵文化財研究会 愛知考古学談話会
 1990 『V考察』『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第10集 愛知県埋蔵文化財センター
 1992 『第V章 第3節 山中式土器について』『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第40集 愛知県埋蔵文化財センター
 1994 『付論1 松戸の様式設定』『松戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第48集 愛知県埋蔵文化財センター
 1997 『付論2 廻間1・Ⅱ式再論』『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第73集 愛知県埋蔵文化財センター
- 阿部芳郎 1989 『縄文早期末葉における生産構造と集落構成について』『半蔵窪遺跡調査報告書』東京純心女子学園
- 新屋雅明 1994 『花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台 東北縦貫自動車道路(東京外環自動車道)関係埋蔵文化財発掘調査報告(第2分冊)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第134集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 安藤雅之 2010 『縄文時代早期を中心とした煙道付炉穴の研究』弘報印刷製本費出版センター
- 飯島克巳・若狭 徹 1988 『樽式土器編年の再構成』『信濃』第40巻第9号 信濃史学会
- 井上国夫・落合静男・谷井 彪・宮野和明 1975 『西原・大塚遺跡発掘調査報告』志木市の文化財第4集 志木市教育委員会
- 岩本 貴 2010 『離籠塚式の壺の型式変化について』『静岡埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第16号 静岡埋蔵文化財調査研究所
- 上田 寛 1990 『荒川流域における「炉穴」の様相』『研究紀要』6 富士見市遺跡調査会
 2010 『縄文早期後半の「炉穴」を考える 一荒川流域における「炉穴」の様相 その後—』『あらかわ』第12号 あらかわ考古学談話会
- 大久保聡・尾形剛敏 2020 『西原大塚遺跡第220地点 西原大塚遺跡第222地点 西原大塚遺跡第227地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第75集 志木市教育委員会
 2021 『西原大塚遺跡第231地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第80集 志木市教育委員会
- 大久保聡・尾形剛敏・徳留彰紀 2021 『志木市遺跡群24(市場裏遺跡第21地点 西原大塚遺跡第199地点 城山遺跡第79地点)』志木市の文化財第81集 志木市教育委員会
- 大久保聡・尾形剛敏・深井恵子 2018 『志木市遺跡群23(西原大塚遺跡第180地点 西原大塚遺跡第182地点 西原大塚遺跡第183地点 西原大塚遺跡第184地点)』志木市の文化財第70集 志木市教育委員会
- 尾形剛敏 1996 『志木市遺跡群Ⅶ(西原大塚遺跡第32地点 中道遺跡第33地点 城山遺跡第25地点 田子山遺跡第32地点 田子山遺跡第37地点)』志木市の文化財第23集 志木市教育委員会
 2023 『第4章 第1節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物について』『埋蔵文化財調査報告書9(西原大塚遺跡第70地点)』志木市の文化財第91集 志木市教育委員会
 2024 『第4章 調査のまとめ』『埋蔵文化財調査報告書10(西原大塚遺跡第72地点)』志木市の文化財第95集 志木市教育委員会
- 尾形剛敏・大久保聡・青木 修 2020 『西原大塚遺跡第216地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第76集 志木市教育委員会
- 尾形剛敏・大久保聡・成島一成・西川忠春 2020 『西原大塚遺跡第224地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第74集 志木市教育委員会
- 尾形剛敏・大久保聡・二瓶秀幸・本山直子 2014 『西原大塚遺跡第179地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第56集 志木市教育委員会
- 尾形剛敏・大久保聡・深井恵子・青木 修 2014 『志木市遺跡群21(城山遺跡第62①～④地点 西原大塚遺跡第165地点 西原大塚遺跡第166地点 西原大塚遺跡第171地点)』志木市の文化財第58集 志木市教育委員会
 2018 『中道遺跡第76地点 城山遺跡第91①地点 西原大塚遺跡第211地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第69集 志木市教育委員会
 2019 『西原大塚遺跡第213地点 中野遺跡第102地点 中野遺跡第104地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第72集 志木市教育委員会

- 尾形剛敏・佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳 2001『志木市遺跡群 11 (中野遺跡第 50 地点 西原大塚遺跡第 43 地点)』志木市の文化財第 30 集 志木市教育委員会
- 尾形剛敏・佐々木保俊・深井恵子 2002『志木市遺跡群 12 (田子山遺跡第 69 地点 西原大塚遺跡第 47 地点)』志木市の文化財第 32 集 志木市教育委員会
- 尾形剛敏・徳留彰紀・大久保聡・小林陽子・福泉 藍・石川安司 2022『西原大塚遺跡第 234 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第 86 集 志木市教育委員会
- 尾形剛敏・徳留彰紀・大久保聡・坂下貴則・遠藤知成・小森暁生 2021『西原大塚遺跡第 223 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第 83 集 志木市教育委員会
- 尾形剛敏・徳留彰紀・大久保聡・日間清公・小森暁生 2021『西原大塚遺跡第 228 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第 79 集 志木市教育委員会
- 尾形剛敏・徳留彰紀・大久保聡・深井恵子 2023『埋蔵文化財調査報告書 9 (西原大塚遺跡第 70 地点)』志木市の文化財第 91 集 志木市教育委員会
- 尾形剛敏・徳留彰紀・深井恵子・青木 修 2013『志木市遺跡群 20 (田子山遺跡第 107 地点 新高遺跡第 10 地点 西原大塚遺跡第 159 地点)』志木市の文化財第 51 集 志木市教育委員会
- 尾形剛敏・徳留彰紀・藤波啓吾・松木綾子 2013『西原大塚遺跡第 174 ①地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第 55 集 志木市教育委員会
- 尾形剛敏・深井恵子 1999『志木市遺跡群 9 (中野遺跡第 43 地点 富士前遺跡第 15 地点 田子山遺跡第 47 地点 田子山遺跡第 48 地点 田子山遺跡第 49 地点 中道遺跡第 41 地点 城山遺跡第 34 地点 城山遺跡第 35 地点 西原大塚遺跡第 36 地点)』志木市の文化財第 27 集 志木市教育委員会
- 2000『志木市遺跡群 10 (西原大塚遺跡第 37 地点 西原大塚遺跡第 39 地点 中道遺跡第 44 地点)』志木市の文化財第 28 集 志木市教育委員会
- 2003『志木市遺跡群 13 (田子山遺跡第 78 地点 西原大塚遺跡第 54 地点)』志木市の文化財第 35 集 志木市教育委員会
- 2007『志木市遺跡群 15 (西原大塚遺跡第 67 地点)』志木市の文化財第 37 集 志木市教育委員会
- 尾形剛敏・深井恵子・青木 修 2004『志木市遺跡群 14 (田子山遺跡第 81 地点 西原大塚遺跡第 65 地点)』志木市の文化財第 36 集 志木市教育委員会
- 2008『志木市遺跡群 17 (城山遺跡第 49 地点 城山遺跡第 57 地点 西原大塚遺跡第 113 地点 西原大塚遺跡第 124 地点)』志木市の文化財第 39 集 志木市教育委員会
- 2008『西原大塚遺跡第 138 地点 西原大塚遺跡第 154 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第 14 集 志木市遺跡調査会
- 2009『志木市遺跡群 18 (田子山遺跡第 93 地点 田子山遺跡第 96 地点 西原大塚遺跡第 137 地点 西原大塚遺跡第 155 地点)』志木市の文化財第 41 集 志木市教育委員会
- 尾形剛敏・深井恵子・青木 修・野沢 均 2005『城山遺跡第 42 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第 10 集 志木市遺跡調査会
- 小野正照 1959「弥生時代の開拓村落の諸問題」『地理学評論』第 32 卷第 6 号 日本地理学会
- 及川良彦 2009「掘立柱建物跡概観—亀甲形をどう見るか— (弥生時代の東京都事例を中心に)」『扶桑：田村晃一先生喜寿記念論文集 (青山考古第 25・26 号合併号)』青山考古学会
- 貝塚爽平監修・清水靖夫編 1996『明治前期・昭和前期 東京都地図 2 (東京北部)』柏書房
- 柿沼幹夫 2015「コメント 北川谷遺跡群編年と岩鼻式・吉ヶ谷式土器との編年比較対照」『列島東部における弥生後期の変革—久ヶ原・弥生町期の現在と未来—』考古学リーダー 24 西相模考古学研究会 西川修一・古屋紀之編 六一書房
- 2015「吉ヶ谷式・吉ヶ谷系土器の移動」『ゆくものくるもの—北関東の後期弥生文化—』第 24 回特別展 かみつけの里博物館
- 菊地有希子 2007『住居と集落 3 環濠集落の評価』『埼玉の弥生時代』埼玉弥生土器観会編 六一書房
- 隈本健一 2015『北道遺跡第 69 地点発掘調査報告書』富士見市遺跡調査会調査報告 第 67 集 富士見市遺跡調査会
- 建築学会編 1940『最も簡単な防空壕』『自家用簡易防空壕及待避所の築造要領』
- 小出輝雄 2007『環濠の性格についての再考察—埼玉県内の例を中心として—』埼玉弥生土器観会編『埼玉の弥生時代』六一書

第5章 調査のまとめ

序

- 小林義典 1999「遺構研究 伊六」『縄文時代』第10号〔第3分冊〕縄文時代文化研究会
- 小林謙一 1991「縄文早期後葉の南関東における居住活動」『縄文時代』第2号 縄文時代文化研究会
- 埼玉県 1988『新編 埼玉県史 別編1 民俗1』
- 坂本和俊 2015「古墳時代東国の土器を使わない製塩と塩の流通痕跡」『埼玉考古』第50号 埼玉考古学会
- 佐々木保俊 1998『西原大塚の遺跡 西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査概報』志木市遺跡調査会・西原特定土地区画整理組合
- 佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳 2005『西原大塚遺跡第111地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第8集 志木市遺跡調査会
- 2005『西原大塚遺跡第110地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第9集 志木市遺跡調査会
- 2009『西原大塚遺跡 1～Ⅲ 西原特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第13集 志木市遺跡調査会・西原特定土地区画整理組合
- 2008『西原大塚遺跡第120地点 西原大塚遺跡第131地点 田子山遺跡第97地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第15集 志木市遺跡調査会
- 佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳・上田 寛・関根正明 2000『西原大塚遺跡第45地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第6集 志木市遺跡調査会・小松フオークリフト㈱
- 佐々木保俊・尾形剛敏 1985『西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点 発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第1集 志木市遺跡調査会
- 1987『新部遺跡第2地点 西原大塚遺跡第4地点 発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第3集 志木市遺跡調査会
- 1989『志木市遺跡群Ⅰ(城山遺跡第4地点 中野遺跡第6a・6b地点 中道遺跡第6地点 西原大塚遺跡第6地点)』志木市の文化財第13集 志木市教育委員会
- 1990『志木市遺跡群Ⅱ(西原大塚遺跡第8地点 田子山遺跡第1地点 西原大塚遺跡第9地点 西原大塚遺跡第10地点 中野遺跡第9地点)』志木市の文化財第14集 志木市教育委員会
- 1991『西原大塚遺跡第7地点 新部遺跡第3地点 中野遺跡第7地点 中野遺跡第8地点 城山遺跡第6地点 発掘調査報告書』志木市の文化財第15集 志木市教育委員会
- 1991『志木市遺跡群Ⅲ(西原大塚遺跡第11地点 城山遺跡第7・9地点)』志木市の文化財第16集 志木市教育委員会
- 1996『城山遺跡第12地点 城山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第14地点 中野遺跡第11地点 中野遺跡第16地点 市場裏遺跡第1地点 田子山遺跡第10地点 中道遺跡第21地点 田子山遺跡第13地点 西原大塚遺跡第21地点 市場裏遺跡第2地点 中道遺跡第26地点 発掘調査報告書』志木市の文化財第24集 志木市教育委員会
- 1997『志木市遺跡群Ⅳ(城山遺跡第29地点 城山遺跡第32地点 田子山遺跡第39地点 田子山遺跡第41地点 田子山遺跡第42地点 中道遺跡第36地点 中道遺跡第37地点 西原大塚遺跡第34地点 中野遺跡第41地点)』志木市の文化財第25集 志木市教育委員会
- 佐々木保俊・尾形剛敏・坂上直嗣・青池紀子・高瀬克範・鈴木伸哉・能城修一 2009『西原大塚遺跡第108地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第42集 志木市教育委員会
- 志木市 1985『志木市史 民俗資料編1』
- 藤原和大 2002「地域の様相2 駿河」『弥生時代のヒトの移動～相模湾から考える～』考古学リサーチ1 西相模考古学研究会 六一書房
- 2006「登呂式土器と難塚塚式土器—駿河湾周辺地域における弥生時代後期の地域色に関する予察—」『静岡県考古学研究会』第38 静岡県考古学会

- 杉山和徳 2020「関東地方における鉄製武器の普及と環濠集落の性格」『古代武器研究』Vol.16 古代武器研究会
- 鈴木一郎ほか 2019『午江山道跡総括報告書』和光市埋蔵文化財調査報告書 第66集 和光市教育委員会
- 鈴木敏則 2021『東海と関東の後期弥生社会と交流—遠江・駿河から広がる世界—(1)』地域と考古学の会
- 高橋龍三ほか 2010『千葉県印西市(旧印旛郡印旛村)戸ノ内貝塚第6次発掘調査概報』早稲田大学大学院文学研究科紀要
第4分冊 早稲田大学大学院文学研究科
- 地域と考古学の会編 2021『東海と関東の後期弥生社会と交流—遠江・駿河から広がる世界—(1)・(2)・(3)』地域と考古学の会
- 寺沢 薫 1986『論考 畿内古式土師器の編年と二、三の問題』『矢部遺跡—国道24号線榎原バイパス建設に伴う遺跡調査報告(Ⅱ)—』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県教育委員会
- 徳留彰紀・大久保聡・尾形剛敏・木村結香・市川康弘 2023『西原大塚遺跡第235地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第89集 志木市教育委員会
- 徳留彰紀・大久保聡・尾形剛敏・木村 結香・遠藤知成 2023『城山遺跡第101地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第93集 志木市教育委員会
- 徳留彰紀・尾形剛敏 2012『西原大塚遺跡第169地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第47集 志木市教育委員会
- 徳留彰紀・尾形剛敏・青木 修 2017『市場裏遺跡第23地点 城山遺跡第87地点 西原大塚遺跡第207地点 中野遺跡第95地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第68集 志木市教育委員会
- 徳留彰紀・尾形剛敏・大久保聡・木村結香 2022『志木市遺跡群25(西原大塚遺跡第174②~⑤地点)』志木市の文化財第85集 志木市教育委員会
- 徳留彰紀・尾形剛敏・深井恵子 2015『志木市遺跡群22(西原大塚遺跡第172①~④地点)』志木市の文化財第64集 志木市教育委員会
- 利根川章彦 1993「二重口緑壺小考(上)」『調査研究報告』第6号 埼玉県立さきたま資料館
1994「二重口緑壺小考(下)」『調査研究報告』第7号 埼玉県立さきたま資料館
- 長岡史起 1999『遺構研究 貯蔵穴』『縄文時代』第10号 [第3分冊] 縄文時代文化研究会
- 中嶋郁夫 1988「いわゆる「菊川式」と「飯田式」の再検討」『転機』第2号 転機同好会
- 中馬克己 2004「甘藷貯蔵方法の変遷(1)」『いも類振興情報』第81号 いも類振興会
- 中村宜弘 2005「飛ノ台貝塚検出のが穴について—第1・2次調査の検出が穴を中心に—(上)」『飛ノ台史跡公園博物館紀要』第2号 船橋市飛ノ台史跡公園博物館
2006「飛ノ台貝塚検出のが穴について—第1・2次調査の検出が穴を中心に—(下)」『飛ノ台史跡公園博物館紀要』第3号 船橋市飛ノ台史跡公園博物館
- 西相模考古学研究会 西川修一・古屋紀之編 2015『列島東部における弥生後期の変革—久ヶ原・弥生時期の現在と未来—』考古学リーダー24 六一書房
- 野中和夫 1993「フラスコ形土坑に関する一試論—埼玉県丸山台遺跡の集落復原から—」『史叢』第51号 日本大学史学会
- 浜田晋介・高川和也 2003「吉ヶ谷式土器の拡散と変容—東京都・神奈川県内の集成—」『埼玉考古』第38号 埼玉考古学会
- 比田井克仁 1987「南関東出土の北陸系土器について—弥生〜古墳時代—」『古代』第83号 早稲田大学考古学会
1991「住居形態の変遷とその画期—弥生〜古墳時代の南関東—」『古代探叢Ⅰ—早稲田大学考古学会創立40周年記念考古学論集—』早稲田大学出版部
2001『関東における古墳出現期の変革』樋山園
2004『古墳出現期の土器交流とその原理』樋山園
- 深澤敦仁 2015「北関東北西部における様相と動態」『列島東部における弥生後期の変革—久ヶ原・弥生時期の現在と未来—』考古学リーダー24 西相模考古学研究会 西川修一・古屋紀之編 六一書房
- 富士見市遺跡調査会 1983『針ヶ谷遺跡群—南通遺跡第3地点の調査—』富士見市遺跡調査会調査報告 第21集 富士見市教育委員会
1991『南通遺跡第11地点発掘調査報告書』富士見市遺跡調査会調査報告 第37集 富士見市教育委員会
- 藤原 哲 2011「弥生社会における環濠集落の成立と展開」『総研大文化科学研究』第7号 総合研究大学院大学文化科学研究科
- 古屋紀之 2015「南武蔵地域における弥生時代後期の小地域とその動態」『列島東部における弥生後期の変革—久ヶ原・弥生時期

第5章 調査のまとめ

- の現在と未来—』考古学リーダー 24 西相模考古学研究会 西川修一・古原紀之編 六一書房
- 梶田博之・青木義徳・駒見佳奈子 2015『馬場小室山遺跡(第32次)』さいたま市遺跡調査会
- 松本 完 1988「南関東地方における中期環濠集落の終焉前後」『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』第23 埋蔵文化財研究集会 第4 回東海埋蔵文化財研究会 愛知考古学談話会
- 2005「久々原式」『考古学リーダー 5 南関東の弥生土器』シンポジウム南関東の弥生土器実行委員会編 六一書房
- 2022「児玉地域における古墳時代前期の土器様相(上)一女塚川・旧赤根川流域の古墳時代前期の土器の分析を中心として」『調査研究報告』第1号 本庄早稲田の杜ミュージアム
- 2023「児玉地域における古墳時代前期の土器様相(中)一女塚川・旧赤根川流域の古墳時代前期の土器の分析を中心として」『調査研究報告』第2号 本庄早稲田の杜ミュージアム
- 宮川幸佳 2003「西原大塚遺跡における方形周溝墓出土土器」『埼玉考古』第38号 埼玉考古学会
- 2008「第3節 小括」『西原大塚遺跡第120地点 西原大塚遺跡第131地点 田子山遺跡第97地点 埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第15集 志木市遺跡調査会
- 宮野和明・井上国夫・小久保徹・肥沼正和 1984『志木市史 原始・古代 資料編』志木市
- 山岸良二 1996『関東の方形周溝墓』同成社
- 米田敏幸 1991「土師器の編年 1 近畿」『古墳時代の研究(土師器と須恵器)』第6巻 雄山閣
- 1990「中南河内の『布留系』土器群について」『考古学論集』第3集 考古学を学ぶ会
- 若狭 徹 2007『古墳時代の水利社会研究』学生社
- 2022「北西関東における弥生後期の遺跡動態と環境変動」『国立歴史民俗博物館研究報告』第231集 国立歴史民俗博物館
- 若狭 徹・深澤敦仁 2005「北関東西部における古墳出現期の社会」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
- 渡辺清志 2013「環状盛土が現れるまで」『縄文晩期～ムラとまつりの景色～』平成25年度 東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業公開セミナー

图 版



1. 2区全景
(東から)



2. 1区全景
(東から)



3. 3区全景
(西から)



1. 4号試掘坑断面[北壁](南から)



2. 3号試掘坑断面[北壁](南から)



3. 2号試掘坑断面[南壁](北から)



4. 1号試掘坑断面[南壁](北から)



5. 5号試掘坑断面[北壁](南から)



6. 8号試掘坑断面[南壁](北から)



7. 6号試掘坑断面[南壁](北から)



8. 7号試掘坑断面[北壁](南から)



1. 5号試掘坑遺物出土状態(南から)



2. 23号炉穴(南から)



3. 23号炉穴A炉穴・B炉穴断面1(東から)



4. 23号炉穴A炉穴・B炉穴断面2(南から)



1. 23号炉穴A 炉穴断面(南から)



2. 23号炉穴A 炉穴(南から)



3. 23号炉穴B 炉穴断面(南から)



4. 23号炉穴B 炉穴(東から)



5. 23号炉穴C 炉穴断面(南から)



6. 23号炉穴C 炉穴(南から)



7. 982号土坑(西から)



8. 983号土坑(東から)



1. 989号土坑(東から)



2. 991号土坑(南から)



3. 994号土坑(東から)



4. 996号土坑(東から)



5. 997号土坑断面(北から)



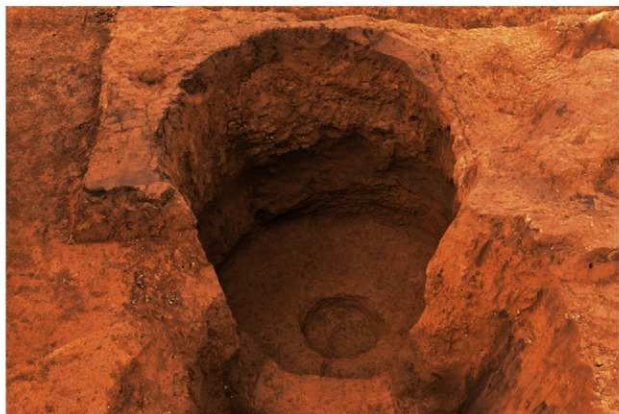
6. 997号土坑(西から)



7. 倒木痕遺物出土状態(北から)



8. 倒木痕遺物出土状態(南から)



1. 999号土坑1 (南から)



2. 999号土坑断面(南から)



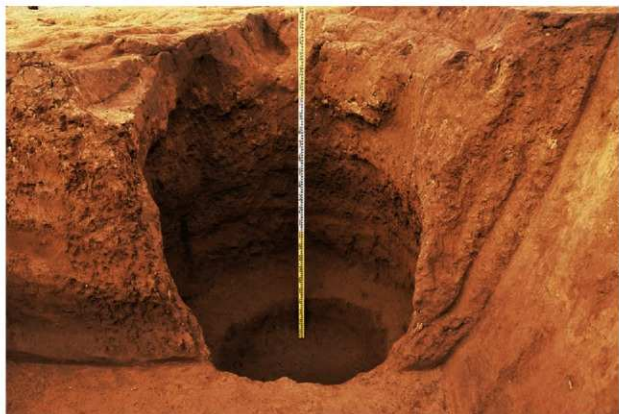
3. 999号土坑2 (南西から)



4. 999号土坑P 1 断面(南から)



5. 999号土坑P 1 (南から)



1. 1000号土坑 1 (南から)



2. 1000号土坑断面(南から)



3. 1000号土坑 2 (西から)



4. 1000号土坑小土坑断面(南から)



5. 1000号土坑小土坑(南から)



1. 656号住居跡遺物出土状態[1区](南から)



2. 656号住居跡遺物出土状態[3区](南から)



3. 656号住居跡[1区](西から)



4. 656号住居跡[3区](北から)



5. 656号住居跡炉A[3区](西から)



6. 656号住居跡炉B[1区](北から)



7. 657号住居跡貯蔵穴遺物出土状態[3区](西から)



8. 657号住居跡(南から)



1. 658号住居跡遺物出土状態(南西から)



2. 658号住居跡(西から)



3. 659号住居跡遺物出土状態(東から)



4. 659号住居跡遺物出土状態近景1(西から)



5. 659号住居跡遺物出土状態近景2(西から)



6. 659号住居跡遺物出土状態近景3(西から)



7. 上/659号住居跡粘土断面(南から)
下/659号住居跡粘土・ロームブロック断面(西から)



8. 659号住居跡(東から)



1. 660号住居跡遺物出土状態(北西から)



2. 660号住居跡遺物出土状態近景1



3. 660号住居跡遺物出土状態近景2



4. 660号住居跡遺物出土状態近景3



5. 660号住居跡遺物出土状態近景4



1. 660号住居跡断面(南から)



2. 660A号住居跡(南東から)



3. 660A号住居跡炉(南から)



4. 660B号住居跡(北西から)



5. 660B号住居跡炉(東から)



6. 660B号住居跡貯蔵穴(南東から)



7. 660号住居跡P4・660B号住居跡P3(南東から)



8. 660B号住居跡掘り方(南東から)



1. 661号住居跡遺物出土状態(南東から)



2. 661号住居跡(北から)



3. 661号住居跡貯蔵穴断面(東から)



4. 661号住居跡貯蔵穴(東から)



5. 662号住居跡遺物出土状態(北東から)



6. 662号住居跡遺物出土状態近景(北から)



7. 662号住居跡(東から)



8. 662号住居跡炉(南から)



1. 662号住居跡貯蔵穴(東から)



2. 662号住居跡赤色砂利層断面(西から)



3. 662号住居跡焼土範囲断面(南から)



4. 662号住居跡掘り方(北東から)



5. 663号住居跡[3区](東から)



6. 663号住居跡[1区](東から)



7. 663号住居跡貯蔵穴断面[3区](東から)



8. 663号住居跡貯蔵穴遺物出土状態[3区](東から)



1. 664号住居跡遺物出土状態 1 (北から)



2. 664号住居跡遺物出土状態 2 (北東から)



3. 664号住居跡 (東から)



4. 664号住居跡炉断面 (北から)



5. 664号住居跡貯蔵穴 (南から)



1. 665号住居跡(南から)



2. 665号住居跡貯蔵穴遺物出土状態(北から)



3. 666号住居跡遺物出土状態1(北から)



4. 666号住居跡遺物出土状態2(東から)



5. 666号住居跡(北から)



1. 666号住居跡が(北から)



2. 666号住居跡貯蔵穴断面(南から)



3. 666号住居跡貯蔵穴遺物出土状態(南から)



4. 666号住居跡掘り方(北から)



5. 667号住居跡(西から)



6. 667号住居跡貯蔵穴断面(北から)



7. 667号住居跡貯蔵穴(北から)



8. 667号住居跡掘り方(北から)



1. 668号住居跡遺物出土状態(東から)



2. 668号住居跡(東から)



3. 668号住居跡炉(北から)



4. 668号住居跡掘り方(東から)



5. 6号掘立柱建築遺構(上から)



6. 6号掘立柱建築遺構
P1断面1(南から)



7. 6号掘立柱建築遺構
P1断面2(南から)



8. 6号掘立柱建築遺構
P2断面(南から)



9. 6号掘立柱建築遺構
P3柱座検出状態(北から)



10. 6号掘立柱建築遺構
P3柱座断面(北から)



58号溝跡遺物出土状態 1 [3区上層]

西から



① 東から



② 東から



③ 西から



④ 東から



⑤ 東から



⑥ 東から

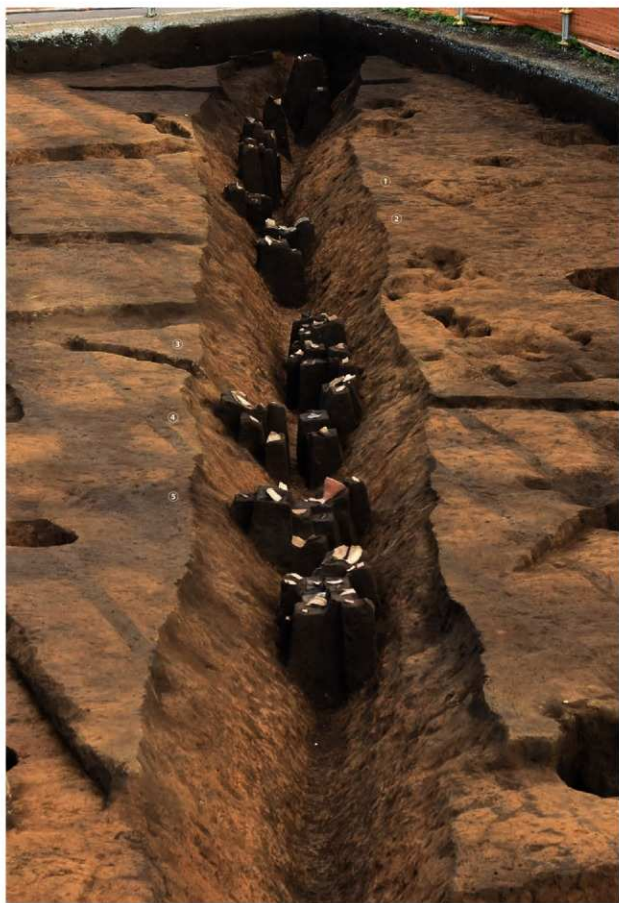


⑦ 西から



⑧ 東から

58号溝跡遺物出土状態2〔3区上層〕



58号溝跡遺物出土状態3〔3区〕

東から



① 南から



② 南から



③ 北から



④ 北から



⑤ 北から

58号溝跡遺物出土状態 4 [3区]



① 南から



② 北から



③ 北から



④ 北から

58号溝跡遺物出土状態5[2・3区]



1. 58号溝跡断面A [2区] (東から)



2. 58号溝跡断面C [2区] (東から)



3. 58号溝跡断面E [2区] (西から)



4. 58号溝跡断面G [3区焼土範囲] (西から)



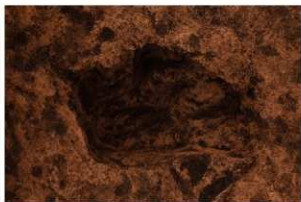
5. 58号溝跡断面H [3区] (西から)



6. 58号溝跡断面J [3区] (北から)



7. 58号溝跡P1断面 [2区] (東から)



8. 58号溝跡P1 [2区] (東から)



1.58号溝跡[2・3区](東から)



2.58号溝跡[3区](西から)



1. 980号土坑
(西から)



2. 986号土坑
(北から)



3. 978号土坑・979号土坑(北から)



4. 987号土坑(東から)



5. 985号土坑(南から)



6. 992号土坑(東から)



1. 984号土坑(東から)



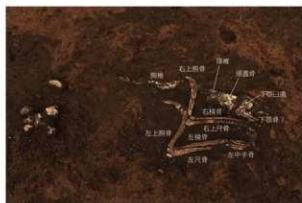
2. 993号土坑(東から)



3. 995号土坑(東から)



4. 981号土坑(北東から)



5. 990号土坑獣骨出土状態(東から)



6. 988号土坑断面(東から)



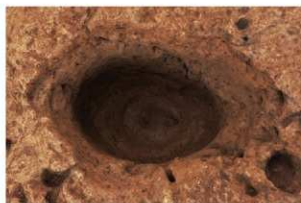
7. 988号土坑(北から)



8. 988号土坑付属施設(北から)



1.988号土坑遠景(東から)



2.998号土坑(北から)



3.998号土坑南東壁凹み部分(北から)



4.57号溝跡(東から)



1. 5号試掘坑出土遺物



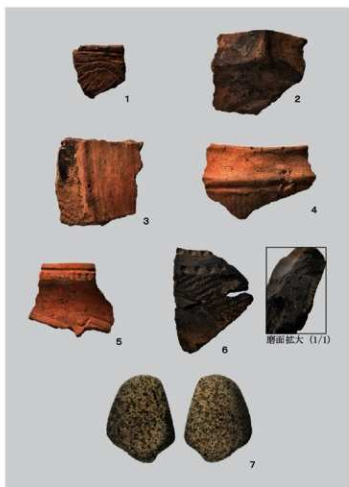
2. 23号炉穴出土遺物



3. 994号土坑出土遺物



4. 999号土坑出土遺物



5. 1000号土坑出土遺物



6. 倒木痕出土遺物



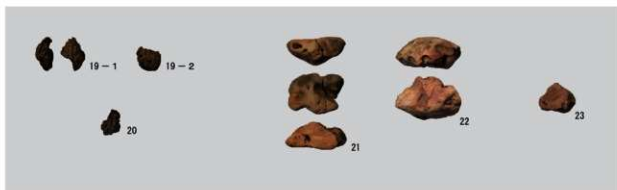
1. 656号住居跡出土遺物



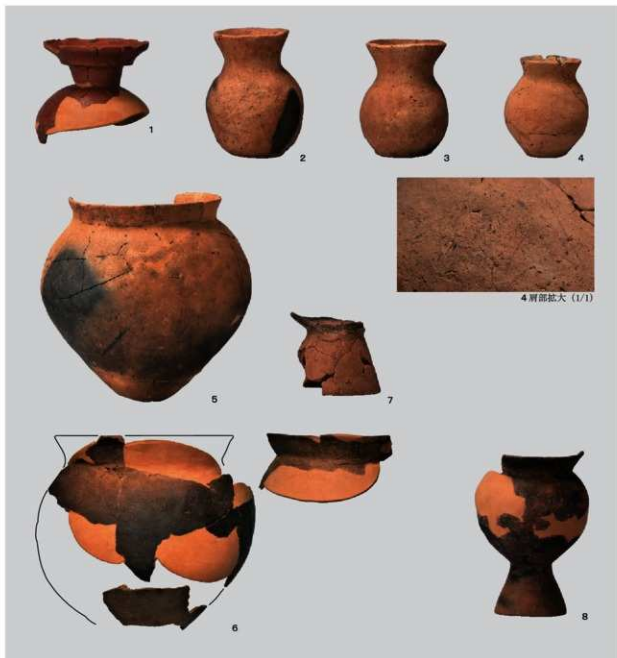
2. 658号住居跡出土遺物



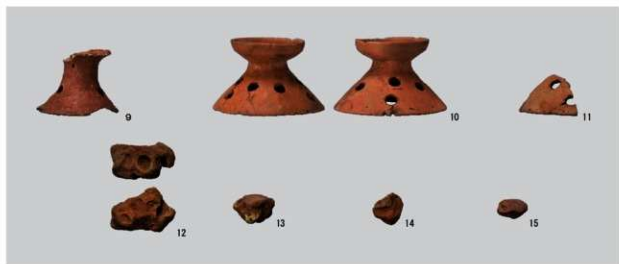
659号住居跡出土遺物1



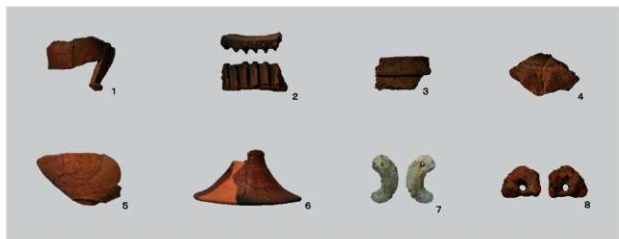
1. 659号住居跡出土遺物 2



2. 660号住居跡出土遺物 1



1. 660号住居跡出土遺物 2



2. 661号住居跡出土遺物



3. 662号住居跡出土遺物



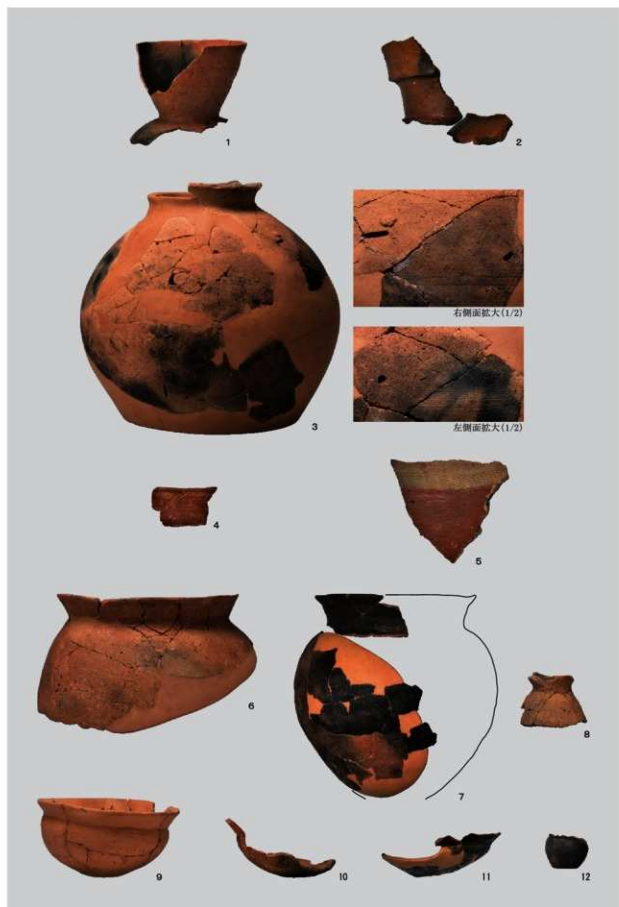
1. 663号住居跡出土遺物



2. 664号住居跡出土遺物



3. 665号住居跡出土遺物



666号住居跡出土遺物



1. 667号住居跡出土遺物



2. 668号住居跡出土遺物



3. 58号溝跡出土遺物 1





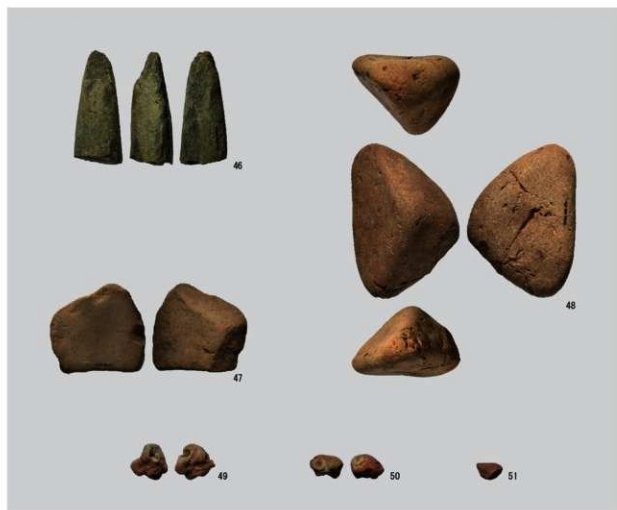
58号溝跡出土遺物 2



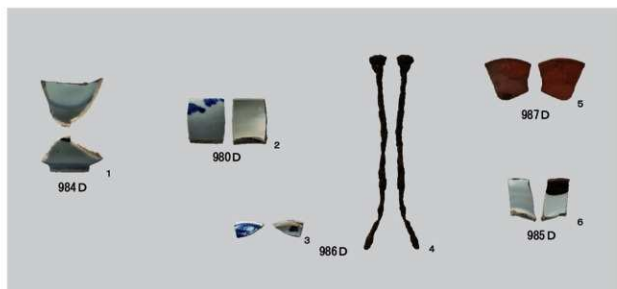
58号溝跡出土遺物 3



58号溝跡出土遺物 4



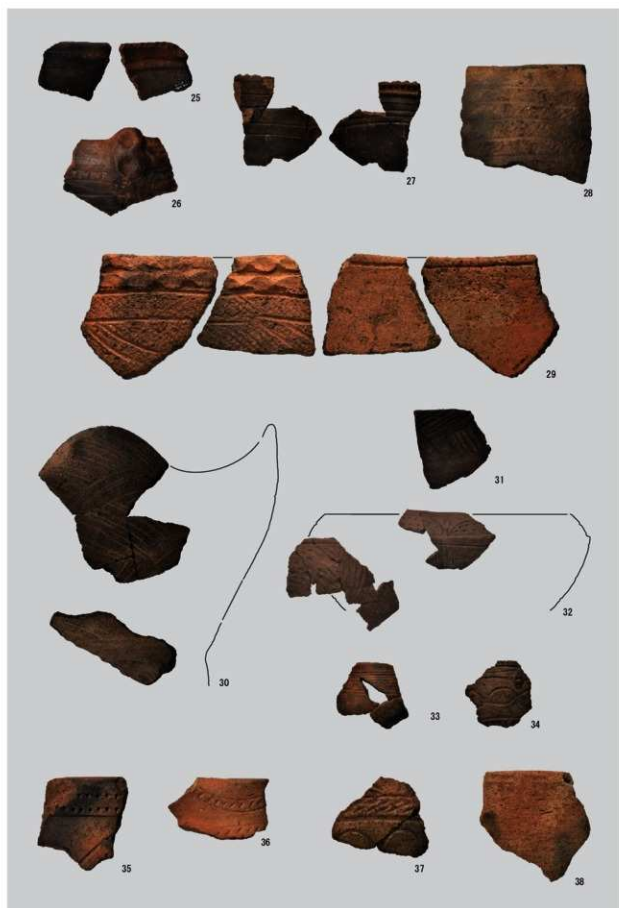
1. 58号溝跡出土遺物 5



2. 中世以降の土坑出土遺物



遺構外出土縄文時代遺物 1



遺構外出土縄文時代遺物 2



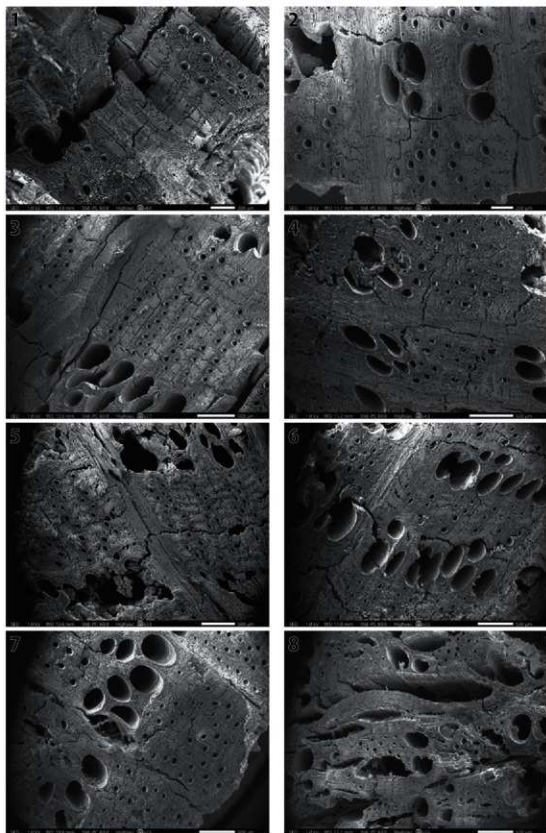
1. 遺構外出土縄文時代遺物 3



2. 遺構外出土弥生時代～古墳時代前期遺物

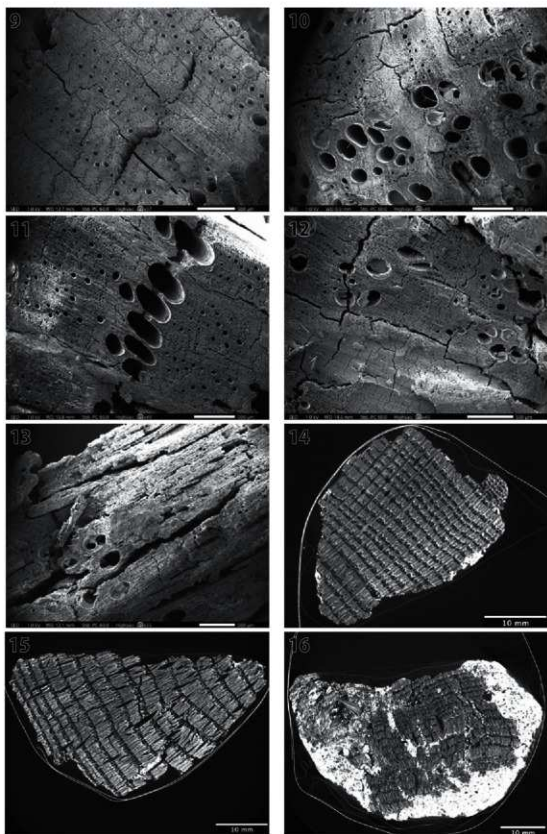


3. 遺構外出土中世以降遺物



西原大塚遺跡から出土した炭化材の走査型電子顕微鏡画像(1)

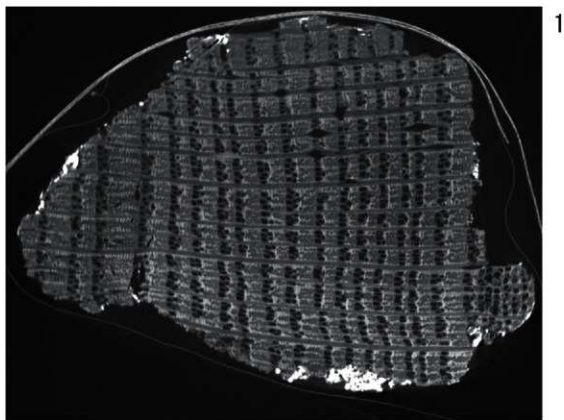
1:664 Y No.1, 2:664 Y No.2, 3:664 Y No.3, 4:664 Y No.4,
5:664 Y No.5, 6:664 Y No.6, 7:664 Y No.7, 8:664 Y No.8.



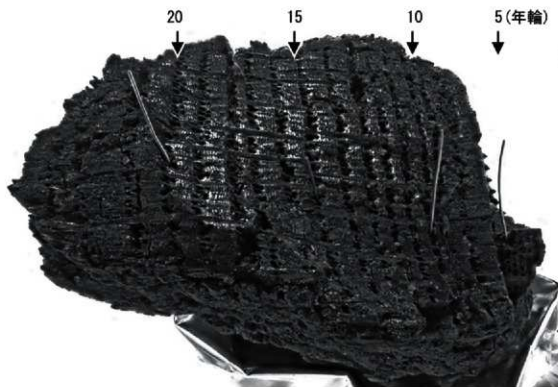
西原大塚遺跡から出土した炭化材の走査型電子顕微鏡画像(2)・CT画像

9 : 656 Y 貯蔵穴, 10 : 666 Y No.1, 11 : 666 Y No.2, 12 : 666 Y No.3.

13 : 58 M No.479, 14 : 664 Y No.1 (CT), 15 : 664 Y No.3 (CT), 16 : 664 Y No.7 (CT) .



1



2

試料写真と年輪計測結果

1. 664 Y住居跡出土炭化材 No.1 X線CT画像 (PLD-51601~51603)
2. 664 Y住居跡出土炭化材 No.1 年輪計測結果 (PLD-51601~51603).

報告書抄録

ふりがな	にしはらおおつがいせきだい 239 ちてん まいぞうふんかざいはくつちょうさほうこくしょ							
書名	西原大塚遺跡第 239 地点 埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	志木市の文化財							
シリーズ番号	第 99 集							
編著者	大久保聡 尾形剛敏 木村結香 青池紀子 尾崎愛斗 鈴木伸哉 黒沼保子 伊藤 茂 加藤和浩 佐藤正教 廣田正史 山形秀樹 Zaur Lomtatzidze							
編集機関	埼玉県志木市教育委員会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗園 1 丁目 1 番 1 号 TEL.048 (473) 1111							
発行年月日	令和 6 (2024) 年 4 月 30 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	(°′″)	(°′″)		(全体面積)	
にしはらおおつがいせきだい 西原大塚遺跡 (第 239 地点)	しきしちやうだい2丁目 6230 番 2、6231 番 2	11228	09-007	35° 49′ 37″	139° 33′ 59″	20230104 ～ 20230428	756.22 (765.22)	分譲住宅建設 及び 道路新設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西原大塚遺跡 (第 239 地点)	集落跡・ 墓跡	縄文時代	炉穴	1 基	土器	縄文時代後期の大型土坑(999・1000D)が 2 基検出された。 弥生時代後期後葉～末葉の溝跡(58M)は環濠の一部と想定され、上層～中層にかけて多量の遺物が出土した。		
		弥生時代後期 ～古墳時代前期	土坑	9 基	土器・土製品・石器			
			ピット	11 本	なし			
			住居跡	13 軒	土器・土製品・石製品・石器			
		中世以降	掘立柱建築遺構	1 棟	なし			
			溝跡	1 本	土器・土製品・石器			
ピット	4 本		なし					
土坑	14 基	磁器・陶器・土器・鉄製品						
溝跡	1 本	なし						
ピット	22 本	陶器						
要約	<p>西原大塚遺跡は柳瀬川の南東、武蔵野台地北東端部に所在する縄文時代中期の環状集落や弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡を主体とする遺跡である。今回は遺跡北部に位置する第 239 地点の調査成果を収録している。</p> <p>縄文時代では、早期の炉穴 1 基 (23 F P) と後期の大型土坑 2 基 (999・1000 D) などが検出された。炉穴は 3 基の炉からなる複合形態で、条痕文系土器の小片が出土した。大型土坑は直径・深さともに約 2 m の大きさと、底面にピットないしは小土坑を有する。断面形はいずれも袋状を呈し、覆土中には炭化物の混入が認められる。</p> <p>弥生時代後期～古墳時代前期では、住居跡 13 軒 (656～668 Y) と掘立柱建築遺構 1 棟 (6 T)、環濠と思われる溝跡 1 本 (58 M) が検出された。660 Y は略円形を呈し、上下に 2 枚の床面と炉が確認できたことから、建て替えられた可能性がある。664 Y と 666 Y は床面上から炭化材や焼土が確認できたことから、焼失住居と考えられる。666 Y は同一個体と思われる壺形土器の破片が住居全体から出土しており、660 Y との遺構間接合も特筆される。58 M は調査区東西を横断し、調査区南東隅部で南側に曲がる。1.0～1.9m 幅で、断面は Y 字形を基本とし深さ 0.5～0.9m を測る。遺物は上層～中層にかけて多量に出土しており、環濠の一部と考えられ、時期は弥生時代後期後葉～末葉に位置づけられる。</p> <p>中世以降では、土坑 14 基 (978～981・984～988・990～992・993・995・998D) と溝跡 1 本 (57 M) が検出され、遺物は概ね 17 世紀後半から近代の所産である。調査区西側からは階段を有する地下室 (988 D) や深さ 1.8m の楕円形土坑 (998 D) が確認され、覆土からモルタル片やコンクリート片などが出土し、いずれも近代以降に比定される。地下室は自家用防空壕の可能性があり、1881 年の迅速図と照合すると本地点は畑地で西側に家屋が広がる様相がみられる。</p>							

志木市の文化財 第99集

西原大塚遺跡 第239地点
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発行日 令和6（2024）年4月30日
印刷 能登印刷株式会社